国立国語研究所学術情報リポジトリ

日本言語地図 第6集：別冊 日本言語地図解説：各図の説明 6 および300面の地図の総目次

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001556

国立国語研究所報告　30—6（別冊）

日本言語地図解説

各図の説明　6
および
300面の地図の総目次

国立国語研究所

1974

ま　え　が　き

この別冊には，各図の説明とともに，6集にわたって公表した地図300面の総目次を載せた。総目次については，まず冒頭の＜総目次について＞を見てほしい。

本集に収めた各分布図は，各調査項目に関する地理的な言語差の展望をおもな目的としている。したがって，この説明でも，各分布図を理解するための作図の基準，凡例の補足的説明，地図の注目点，その他の参考事項などを簡単に述べるにとどめた。

各項目を調査した際に使った質問文(および絵)は，各分布図の左下の欄に示してあるので，原則として説明文中では触れない。実際の調査に際して使った調査票には，各質問について，被調査者に示す質問文のほかに，注意すべき点を補注の形式で加えたものがあった。これは，第1集の別冊『日本言語地図解説—方法—』103ページ以下に，調査票全文として示してある。

説明の中で，語形を表わす場合，とくに音声の詳細を示す必要のあるもののほかは，凡例にかかげた大文字のローマ字表記を使った。また，それらの語形のいくつかを同類と認めて一括して示す場合は，カタカナで表記した。

資料の整理，地図の編集一般に関する概略的な解説は，第1集の別冊『日本言語地図解説—方法—』31ページ以下に示した。詳しい解説は，機会を改めて公表する所存である。

この第6集では，自然現象・日時などの項目（第251図ないし第288図—計38面）を中心とし，全巻にわたる補遺図（第289図ないし第300図—計12面）をとりあげた。補遺のうち，第289，290，291，292，293図までは第1集に載せてよかったもの，第294，295，296図は第2集に載せてよかったもの，第297図は，第4集に載せてよかったもの，第298，299，300図は，第5集に載せてよかったものである。以上をもって，調査項目285に対する地図300面が，いちおう完結することになる。

なお，各分布地図をいっそう深く理解するためには，見出し語形の各地点での具体的内容や，調査者・被調査者などが各語形に加えた注記などを記録した『日本言語地図資料』，ないしは原資料(ともに国立国語研究所に保存してある)を参照することが必要となろう。また，語の歴史を推定するにあたっては，各種文献とのつき合わせも必要となろうが，この点についても，今回多く触れることができなかった。いくつかの項目についての徹底的な言語地理学的解釈は，機会を改めて公表したいものと思う。さらに，全分布図を展望した上での総合的研究も，今後に期待される。

この解説執筆を分担したのは，第1研究部長の野元菊雄，および地方言語研究室の徳川宗賢・本堂寛・佐藤亮一・高田誠である。

1974年3月

「日本言語地図」第6集編集・作図・資料整理の関係者

国立国語研究所第一研究部長

野元菊雄

国立国語研究所地方言語研究室

徳川宗賢(室長)	本堂　寛	佐藤亮一	高田　誠
W・A・グロータース(非常勤)	白沢宏枝(研究補助員)	山田千枝子*(研究補助員)	

このほか，研究所以外の方々にも協力していただいた。仕事の時期や内容や量はそれぞれ違うが，以下列記して(五十音順)感謝の意を表する。

芦沢(旧小野沢)祝子	石丸久美子	井村克子	大沢京子
木村敏恵	黒沢鏡子	小島洋子	五条啓三
小谷雅子	坂本真理子	佐藤律子	鈴木宏美
野中春江	林　純子	稗田禮子	藤原伸介
湊　豊子	山本直美		

*昭和48年1月31日まで

目　　次

はじめに…… 1
251. たいよう(太陽) …… 2
252. つき(月) …… 4
253. あめ(雨) …… 7
254. つゆ(梅雨) …… 7
255. ゆうだち(夕立雨) ……10
256. かみなり(雷) ……15
257. 敬称語尾(さん・さまなど)—第251・252・256図の総合図……20
258. いなずま(稲妻・電光) ……23
259. にじ(虹) ……26
260. ゆき(雪) ……29
261. こおり(氷) ……31
262. つらら(氷柱) ……32
263. じしん(地震) ……34
264. つむじかぜ(旋風) ……35
265. けむり(煙) ……39
266. ゆげ(蒸気—湯の場合) ……41
267. ゆげ(蒸気—飯の場合) ……41
268. におい(芳香) ……44
269. におい(悪臭) ……44
270. はい(灰) ……47
271. ほこり(埃) ……51
272. ごみ(目にはいるもの—塵) ……51
273. ごみ(掃除の対象—塵芥) ……51
274. ごみ(川のごみ—塵芥) ……51
275. さきおととい(一昨昨日) ……61
276. おととい(一昨日) ……61
277. おとといのばん(一昨晩) ……63
278. きのう(昨日) ……65
279. さくばん(昨晩) ……66
280. きょう(今日) ……67
281. こんばん(今晩) ……68

282. あした(明日) ……69
283. あしたのばん(明晩) ……70
284. あさって(明後日) ……71
285. しあさって(明明後日) ……72
286. やのあさって(明明明後日) ……72
287. なのか(七日) ……76
288. ここのか(九日) ……77
289.「おおきい」(第17図)と「ふとい」(第20図)と「あらい」(第21図)との総合図……78
290.「ちいさい」(第22図)と「ほそい」(第24図)と「こまかい」(第25図)との総合図……78
291. おいしい(美味しい) ……86
292. ケチダを“不思議だ，不都合だ”などの意味で使うか ……88
293. いくつ(何歳) ……89
294. かつぐ(片方の肩で包を担ぐ) ……90
295. かつぐ(担ぐ)—第66，67，68図の総合図……91
296. かぞえる(お金を数える) ……96
297. カドの意味 …… 100
298. ほうほう(梟の鳴き声)—その1 …… 104
299. ほうほう(梟の鳴き声)—その2 …… 111
300. ちゅんちゅん(雀の鳴き声) …… 122

総目次

総目次について…… 129
目次通覧…… 130
五十音順改編目次…… 135
調査項目からひく地図番号索引…… 146

はじめに

▶この『日本言語地図』第6集を見るにあたっては，まず本地図集巻頭の＜概説＞や，本『解説』の＜まえがき＞が参考になる。調査の方法などについて，さらに詳しく知りたい場合は，第1集付載の別冊『日本言語地図解説—方法—』を見なければならない。

▶各図凡例の見出しにおいて，＜概説＞に示したもの以外で使う特殊な表記については，第3集付載の別冊『解説』の＜はじめに＞を見られたい。

▶ある調査地点から2個（以上）の回答が得られた場合は，地図に2個（以上）の符号を並べて，⌒印でくくって示した。このことは＜概説＞で示したとおりである。ただし，その2個以上の回答のうち一つが標準語形と一致し，しかもその語形に＜新しい言い方である・上品な表現・共通語的な言い方・まれにしか使わない＞などの注記がある場合は，その語形を地図から削った。この手続きを本解説の中で＜併用処理＞と言うことがある。これは，＜標準語形も上品な表現としてなら使う＞といった回答は，この種の報告のなかった地点でも，実はありうる，しかも全国的にありうると考えたためである。そのような回答が現実にどこで得られたかは，国立国語研究所に保存されている『日本言語地図資料』に記録してある。

▶以上の説明以外の取り扱いをした地図については，地図ごとの説明でのべる。

▶凡例に「その他」と示したものは，その地点での回答が個別的で，地理的な意味を持たないと考えたものである。その内容は『日本言語地図資料』に記録してある。なお，ある調査地点から2個の回答が得られ，一方が「その他」に繰り入れられるべき回答であった場合は，地図には1個の符号しか示さず，原則として「その他」を示す符号を省略した。2個（以上）の符号を⌒印でくくって示す場合も，その中に「その他」を示す符号が含まれることは原則としてない。この場合の地図に示さなかった回答も，もちろん『日本言語地図資料』には記録してある。

▶解説の中で具体的な地点番号を示す場合，以下に示す左欄があった場合は右欄のように読み替えていただきたい。できるだけ正したつもりであるが，カード上の誤記がそのまま残っている場合がありうる。

誤	正
5558.08	5558.09
6389.32	6389.22
6389.66	6389.56
6434.62	6434.52
6539.50	6539.60
6613.87	6613.97
7303.28	7303.38
1148.57	1148.59
2068.28	2068.08
2095.62	2095.60

251. たいよう(太陽)

本図には，252図「つき(月)」および256図「かみなり(雷)」と共通の語形が一部に見られるが，それらの語形に関して，語形の分類のしかた，および，符号の形を統一してある。また，251図・252図・256図には，サマ・サンなどの敬称語尾を伴った語形がとくに多く見られるが，これらの敬称語尾については，257図「敬称語尾(さん・さまなど)の総合図」の解説で一括して説明する。さらに，上記の3図には，「こどもに対して使う」と注記された語形が多かった(実際のカードには，調査センターで指定した略号「子」と記してあるものが多い)ので，それらの図で，この種の注記のある語形には，凡例に示したような補助符号を付けて示した。この場合，「幼児語」とか「こどもが多く使う」などの注記も「こどもに対して使う」に準ずるものとして，その語形に補助符号を付けたが，「こどもの頃使った」の注記は，「古」(「今は使わないが，自分＝被調査者が昔使った」の意味の略号)に準ずるものとして扱い，これには，補助符号を付けなかった。なお，補助符号を付けるかどうかの判断は，3図に共通の一貫した原則によって行った。

この補助符号を付けた語形は，本図では，NONNOSAMA, NONNOSAN, MANMAISAN などの類のほか，OTENTOSAMA, OTENTOSAN, OHISAMA などの語形に多く，これらは，幼児語的な響きをも有する語形と言えようが，5633.81，6418.75の TAIYOO の場合は，幼児語というより，むしろ，現在こどもにこの天体の名称を教えるときなど特定の場面に使うことばという意味で付けられた注記かもしれない。

全国的に見て語形の種類はそれほど多くはなく，空を与えた OHISAMA, OHIISAN などの類，茶を与えた OTENTOSAMA などの類，橙を与えた TIDA などの類，赤を与えた TAIYOO 類，それに紺を与えた，NONNOSAMA, MANMAISAN, TOTOSAMA, ANATASAN などの類や NICIRIN, NITTEN, KONNICI～などの類に大別されよう。NONO～, MANMAI～, TOTO～, ANATA～などの類を除いて，そのほかの語類は，それぞれが一定の地域性を有するとはいうものの，実は2種類以上の語類が重なり合って分布している地域が多く，単一の語類で占められている地域は，橙の類に覆われた琉球全域のほかは，福島を中心とする地域や山梨付近などの茶の類の地域や，北陸の一部とか四国の一部などに見られる空の類の地域など，それほど広くない。これは，それぞれの地域で，複数の語形が，敬意差・場面差・文体差などを伴いつつ併存している場合が多いことを示すものと言えよう。

全国的に見て，空のオヒサマ類が本州の西半と東北北部など最も広い地域に分布し，次いで関東を中心とする地域などに茶のテントオ類や赤のタイヨオ類が勢力を占めている。琉球は橙の類1色であり，これに対して，北海道は，空・茶・赤の混用地域と言えよう。

和語である空のオヒサマ類が琉球を除いた全国に最初に広がり，次いで各種の漢語系の語形が各地に勢力を伸ばしたのであろうが，おそらく使用当初は文章語的性格が強かったと思われる漢語類のうち，とくに「天道」に由来する茶の類が関東から中部各地，あるいは東北南部にかけての広い地域，あるいは九州中央部などで空の類を席巻している事実の背景については，他の項目にも見られる字音語に由来する語形の分布などと合わせ，さらに考察の対象とすべきものであろう。琉球を占有している橙の類も「天道」に由来するという説があるが，これについては後に述べる。

この項で「新」「上」「共」「希」の注記のある語形は TAIYOO が最も多く全部で80例余りあったので，これを＜併用処理＞の対象語形とした。この事実，あるいは分布の様相などから見て，本図のタイヨオ類は漢語類の中でも比較的新しい勢力であると思われる。TAIYOO に次いで「新」「上」「共」「希」の注記の多かった語形は，OHISAMA であり，全国で約20例ほどあった。

茶の類の大部分はサマ・サンやオなどの敬称接辞を伴う語形であるのに対し，赤の類の大部分は TAIYOO である。このことは，赤の類は依然として文章語的性格が強く，話しことばとしては，特定の場面・文体で用いる傾向が強いことを意味するのかもしれない。また赤の類はおおむね茶の類の領域中に茶の類と併存する傾向が見られ，これも漢語を好んでとり入れやすい地域というものが存在することを示唆する材料のひとつと言えようか。

なお「天道」を「太陽」の意に用いるのは，この語がわが国に輸入されてから後のことらしいが，本来天体そのものを意味した「太陽」よりも，「天道」類の語が本図でより広い地域に用いられる事情については，太陽を神格化する傾向との関連などさらに検討すべきであろう。

次に，それぞれの類(色)の中で，一定の分布が見られ

る語形あるいは語形群について説明しよう。

空の類は和語の「ヒ」にもとづく語形を中心にまとめたものであるが，この類の中では，東北北部や山口から九州東部にかけて集中する OHISAMA，本州西部や四国などの OHIISAN と OHISAN の語がもっとも多く，そのほか，OHIISAMA(富山・石川，愛媛西部など)，HIISAMA(富山・石川，熊本の天草など)，HISAMA (長崎の島原，鹿児島の西北端など)，OHISAA (鹿児島)，HIDON (鹿児島) などの分布が比較的目だつ。このうち，OHIISAMA, OHIISAN, HIISAMA, HIISAN などのように「日」にあたる部分が長音の語形は，大部分が，本州西部と四国に見られる。これと，他の一音節語を長音に発音する地域との関係については，たとえば，110 図「め」の MEE の分布と比較できる。本図で HII～が多い岡山・広島に 110 図では MEE がまったくなく，逆に本図では HI～が比較的多い滋賀は 110 図では大部分 MEE であることなど，両図の長音形の分布が必ずしも一致しているとは言えない点面白い。

なお，空の類における見出しの HI の部分は，〔çi〕〔çi̤〕のほか，〔çï〕〔ɕi〕〔ɕı〕〔Φi〕〔Φï〕〔Φɕi〕〔Φɕï〕〔Φu〕〔Φ〕〔sï〕〔su〕〔ʃi〕などをまとめたものであるが，このうち〔ʃi〕〔sï〕〔su〕のものは，青森・岩手・秋田など東北に多く見られ，これらは OSSAMA 3714.74, 3764.86, 3783.58, 4704.96, 4724.28 や OSAMA 3754.13 につながる語形と言える。OHISSAMA のような促音形は岩手に集中するほか岐阜 6507.72 にも見られるが，これも岩手のものは〔oʃissama〕〔osussama〕が多い。OHHISAMA 3786.44 の内容も〔ossusama〕であった。また，〔Φu〕〔Φ〕のものは，新潟 4638.43 に〔Φusama〕，島根 6402.53, 6411.66, 6411.80 に〔oΦusaN〕，島根 6412.91 に〔oΦsaN〕であった。

ONISAMA 7501.68 は付近に分布するニッテン類との混交形かと思われる。テントオとニッテンとの混交形と言える NITTENTOOSAMA との併用であることが面白い。

茶の類は漢語「天道」に由来する語形をまとめた。「道」は漢音タウ，呉音ダウであるが，本図では「道」部分の子音が T のもの(これらには小符号を与えた)が多く，D のもの(大符号を与えた)は，関東東部から東北南部にかけての地域と九州南部などで，T のものと混在するにすぎない。しかも，関東東部から東北にかけての ～D～ は語中尾の有声化によって生じたものであると考えられる（そうでないものも当然含みうるが，東日本における ～D～ の領域は有声化地域と完全に一致しているから，その可能性は少ないと見てよい。なお，語中尾の T の有声化地域については，153 図「いと」などを参照されたい)から，九州南部のものとは性格が異なる。なお，〔oṭen～〕〔oden～〕など「天」にあたる部分が有声化しているものは，本図ではこれを分出せず TEN～に含めてある。また，TENTOO～，TENDOO～ のように「道」部分の母音が長音～OO～ の語形にはべた符号を，TENTO～，TENDO～ のように ～O～ の語形にはぬき符号を与えてあるが，新潟中部，栃木，山梨などに ～OO～ の語形の集中する傾向が見られるほかは，～OO～ と ～O～ の分布が概して入り乱れている。なお，〔tentɔ:～〕〔tentɔ～〕のように「道」部分の母音が開音の〔ɔ:〕〔ɔ〕のものは，ここでは OO，O に含めてあるが，これらは新潟に集中的に見られた。

琉球諸島を占有する TIDA を中心とする語形は，語源を「天道」に求める説(亀井孝・上村孝二)があるので，これらに，テントオ類と類似の色として橙を与え，見出しの位置を茶の類の次に置いた。TIDA の語源が「天道」であるとすれば，茶の類のうち九州南部の ～D～ の語形と TIDA の～D～とが，地域的にもつながりをもつことになる。

この類のうち，見出しが TI～，TII～ のものには，その内容が〔ti～〕〔ti:～〕のもののほか，〔tï～〕〔tï:～〕などを含めてある。TIRA には，〔tira〕1233.61，〔tʻira〕1241.05，〔tïra〕0248.00 のほか〔θira〕(注記に，θ=l̤ とあり)1271.05 を含めた。SINA 2095.60 の内容は〔ʃi̤na〕であった。なお，TIDAN 0228.96, 2072.20 および TIDANGANASI 2072.20 の DAN は，鹿児島などに見られる敬称語尾の DON と，一見類似しているが，本図および 257 図「敬称語尾の総合図」では，これを敬称語尾とは認めなかった。また，TIDANGANASI の GANASI の内容は〔ganatʃi〕であったが，他図と統一して，これを GANASI に含めた。

赤を与えたタイヨオ類は，先に述べたように，ほとんどが敬称を伴わない TAIYOO であり，ほかには，TAIYOOSAN, TAIYOOSAMA, TAIYO などが比較的多い。新潟には，TAIYO, TAIYOSAMA のような「陽」部分の短音形にややまとまりが見られる。タイヨオ類の TAI 部分の内容は大部分〔tai〕であるが，そのほか〔taï〕〔taı〕〔taę〕〔tae〕を含む。また，YOO あ

るいは YO 部分には〔jo:〕4637.20, 4666.17,〔jo〕5613.48 を含めた。なお TAIYOI は 7360.47 に見られる。

紺を与えた語形のうち，NONOSAN から ANATASAN までは，宗教的尊崇などの心情の発露に由来する語形と思われるものをまとめた。この種の語形は 252 図「つき」に多くあらわれ，本図では比較的少ない。このうち，NONO～，NONNO～，MAMA～，MANMA～ などは，「南無阿弥陀仏」に由来するとも言われ，神仏など礼拝の対象を指す幼児語として多く用いられる。KANKASAN 6591.02 の KAN は，「神」あるいは「観音」の「観」であろうか。TOTOSAMA 3715.51, TOOTOKOSAMA 3757.32 は，252 図「つき」に多く見られる AATOOSAMA などの類の変種と考えられ，これは，あるいは「あな尊と(し)」に由来するものかもしれない。ANATA 6587.42, ANATASAN 6402.53 も TOTOSAMA などとの関連を考えて，凡例の位置を決めたが，これは「彼方」との関係をも考慮すべきかもしれない。

NICIRIN 以下は，「日」の字音にもとづく語形を並べた。このうち，NICIRIN(日輪)の類は岐阜付近と，中国西部から九州にかけて集中し，近畿にも点在する。「日天」(仏語で「日天子」の略という)に由来する NITTEN 類は近畿から四国にかけて集中するほか，北海道，岩手，佐渡，静岡，大分・宮崎の広い範囲に点在する。NITTENGATTENSAN 7249.35 は「月」の「月天」と混同しているという点で，また，NITTENBOSI 7501.72 は「太陽」を「星」の一種と見なしているという点で，それぞれ面白い表現である。NIKKOO 6429.15 は4者併用の地点であり，この語形は，あるいは被調査者の誤解によるものかもしれない。

KONNICCAN 以下は「今日」にもとづくと思われるもので，「今日様」とは「その日その日を守り照らすもの」の意と言われる。これらは岐阜から福井北東にかけてと兵庫に多く，そのほか，山形 4619.29，長野 5633.45，5641.99，島根 6411.33，山口 6397.24，7308.33，愛媛 7450.44にも見られる。この類の語形に，～CCAN，～CCYAN，～TTAN，～CCAMA，～SSAMA のような促音形，とくに～CC～が多いことについては，257 図「敬称語尾の総合図」で述べるところがある。なお『全国方言辞典』によれば，群馬・埼玉，富山などにも分布したらしい(このうち，埼玉，富山では「老人」とある)が，本図にはあらわれていない。

ニチリン類，ニッテン類，コンニチ類の語形には，本図に登載したものの中にも「古」「老人」「希」の注記のあるものが多く，この種の語が廃語となりつつあることがうかがわれるが，これは太陽を神としてあがめる感情あるいは風習の衰退とも並行する現象かと思われる。

252. つき(月)

大部分が和語ツキにもとづく語形であって，分布は単純である。そこで，音声の変種をかなり詳しく示した。また，ツキにもとづく語形のうち，ツキヨおよびその変化形と考えられる形を要素にもつ語形は，ひとつの類としてまとめた。なお凡例の NONOSAN 以下の語形は，251 図「たいよう(太陽)」にも一部現われる(わずかではあるが 256 図「かみなり(雷)」にも)が，これらについては，語形の分類のしかたや，符号の形を統一してある。サマ・サン・ドンなどの敬称語尾についても同じ配慮をしているが，この点については，257 図「敬称語尾(さん・さまなど)の総合図」の解説を参照してほしい。

「太陽」(251 図)，「雷」(256 図)とともにこの項目にも，「こどもに対して使う」という意味の注記のある語形が多かったので，この種の注記のある語形には補助符号を付けて示した。補助符号を付けると認めた注記の範囲については，251 図「たいよう」の解説を見てほしい。この図で補助符号を付けた語形は，凡例の NONOSAN から TOOTOOMEE までの類がもっとも多く計 110，ほかには，OCUKISAN と OCIKISAN を合わせて 5，OCCUKISAN 2，OCUKISAMA 8，TAITAISAMA と ONENNESAN が各 1 である。

また，この図では「満月」や「三日月」など特定の状態をあらわす名称は採らなかったが，それは，3722.90 の〔odosama〕(十五夜)，3740.82 の〔otsügïsama〕(同)，6358.43 の〔manmansaN〕(満月)，6630.82 の〔otsukisama〕(同)，7359.78 の〔mikadzukisaN〕(半月形)の 5 例である。

＜併用処理の原則＞は CUKI の語形について行ったが，これは全部で 32 あった。

橙の類は，ツキあるいはツキに敬称接辞の付いた語形，および，その変種をまとめたものである。一部の茶の類の占有地域を除いて，これらは全国をくまなく覆っている。この類の中では OCUKISAN と OCUKISAMA の 2

つの語形がもっとも多かったので，そのほかの変種を目だたせるため，この語形には極小の符号を使った。この2つの語形はほぼ全国に分布しているが，北海道西部，青森，島根東部，高知，鹿児島，琉球各地などでは，まったくないか，あってもきわめて少ない。ただし，青森，島根東部，高知の場合は，OCIKISAMA, OCIKISAN, OCU〔tˢu〕KISANなど，オツキサマ，オツキサンの音声変種が分布するためであることに注意してほしい。また，OCUKISANと OCUKISAMA との間に，ある程度の地域差が認められるが，これは，むしろ～SANと ～SAMA との地域差であり，これについては257図の解説で述べる。

CUKI, CIKIなどのような接辞の付かない語形は，ほとんどの地域で接辞の付いた語形と併存しているが，これらは，おそらく，それぞれの地域で，敬意差・場面差などによって使い分けられているものと思われる。ただし，北海道西部，徳島，琉球各地などでは，接辞を伴わない語形の占有地域が目だつ。

次に，橙の類のうち，主な語形あるいは語形群についてその分布や音声内容などを述べよう（ツキ部分の変種について述べるときには茶の類の分布にも触れる）。

まず，CIKI, TIKI, OZIKI～, OZIGI～, SIKIなどツキのツの部分の母音がIの語形(本図では，べた符号で示した)は，青森全域と島根の出雲地方，琉球各地に集中するほか，東北各地や，富山・石川に点在し，鹿児島南部にも見られる。これらの具体的な内容は，大部分が〔tʃi〕〔tsi〕〔dzi〕など，中舌の〔i〕であり，そのほか〔tʃi〕〔tsi〕も少しあった。TIKIは琉球の計4地点に見られるが，その内容は，〔tiki〕1271.05,〔tïki〕0246.48, 0246.97,〔tïki･〕0257.43であった。なお，茶の類の中にもCI～，TI～，SI～の語形があり，琉球各地に分布する。

ツキのツ部分が破裂音のTU，あるいはそれに準ずるCU〔tˢu〕，CYU〔tˢju〕のもの（それらには三角形系統の符号を与えた）は，高知，大分付近に集中するほか，伊豆の利島 6667.81，同三宅島 6698.20，千葉 6702.21，静岡 6631.05，奈良 6593.30，壱岐 7218.26 にCU〔tˢu〕，北海道 0724.58，1715.53，2703.18，新潟 4665.87，福井 5585.09，長野 5641.13，静岡 6652.06，奈良 6583.93，和歌山 7522.94，長崎 7361.82，奄美 0256.89 に TU が見られる。また，TIKI, TIT, TII, TIIGANASI のようなTI～の語形は，いずれも琉球に分布する。また，茶の類の中にもTUCINUI 0340.00，TIKYO 0257.12, TIKKYO 0246.97，0256.08 のようなTU～，TI～の語形が奄美各地に見られ，またTOKKYO 0256.76 という形もある。なお，TU の内容はすべて〔tu〕であり，TIには〔ti〕〔tï〕を含めた。

ツキのツ部分がCYU，ZYU，CYU〔tˢju〕のように口蓋化した語形（それらには大符号を与えた）は，福岡 7312.11，7332.46，7351.09 と大分 7344.30 のほか，福島 4679.65，4689.14，4780.64 にも見られる。

ツキのツ部分の子音がSの語形は，八重山に多く，さらに沖縄本島 1270.26 と岩手 3774.61 にも見られる。岩手のものは語頭の子音が一時的に弱まって発音されたものであろう。S～の語形は茶の類の中にも多く，沖縄本島付近に集中している。

OZUKI～, OCUGI～, CIGI～, OZUGI～, OZIGI～など，ツキのツまたはキの部分，あるいはその両方が有声化している語形(これは，符号の関係で一目しただけでは見えないが，ツの子音のみが有声化した語形には両側に棒の付いた円形，キの子音のみが有声化した語形には，片側に棒の付いた正四角形，ツとキの両方が有声化した語形には，両側に棒の付いた正四角形を与えてある)は，おもに東北から関東北東部にかけて分布し，この領域は語中尾のK・Tが一般的有声化する地域とおおまかには一致するが，青森および北海道では北海道西南部の有声化地域を含めて，この図では有声化語形が少なく，たとえば，136「おとこ」の～D～の分布と著しく異なる。136図では北海道西南部から関東北東部にかけては大部分がODOGOであるのに比べて，この図では，ツとキのいずれか一方のみが有声化した語形が著しく多く，また，岩手・宮城・秋田・福島・茨城などでも，～CUKI～などの非有声化語形が136図のOTOKOよりかなり多い。両図におけるこの有声化語形の分布の違いは，おそらく，オトコ(のトコ)とツキとの母音の広狭の違いによるところが大きいと思われるが，それにしても，この図で北海道西南部から青森にかけて有声化語形が著しく少ないことには，何か別の理由もありそうである。

ツキのキ部分をKIと表示したものの内容は，大部分が〔ki〕〔kị〕であるが，ほかに〔kɯ〕〔kçi〕〔kçi〕〔kçï〕〔kˢi〕など，さらに〔cï〕5772.00を含めた。〔ozɯ̈çsama〕5742.65,〔odzɯ̈csama〕5731.13もOZUKISAMAに含めた。またGIと表示したものの内容は〔gi〕〔gị〕〔ɣi〕〔gɯ〕〔gï〕などのほか，〔ʝi〕4742.95も含めた。これらのうち，母音

が中舌の〔i〕であるものは，青森•宮城•秋田に集中し，ほかに茨城西南，福井，島根・鳥取県境，琉球の先島にもある程度のまとまりが見られる。なお，キ部分の子音が破擦化した〔kç〕〔kʑ〕〔kˢ〕のものは，〔i〕の領域中に〔i〕を伴って見られる場合が多い。また，ツキのキ部分がCIの語形(それらには極小の円形を伴う符号を与えた)は，OZUCISANとOZUCISAMAが宮城に，CICIが琉球の沖縄本島付近と宮古に，TUCIが喜界0249.17にそれぞれ見られる。CIは〔tʃi〕〔tʂi〕〔tsĭ〕をまとめた。ツキのキ部分の母音がUの語形(これらには水滴形の符号を与えた)は,CUKUが福岡7331.27と長崎7380.26に，OCUKUSANが長崎(対馬)6267.84と熊本7354.23に，OCUKUSAMAが長崎の対馬6286.68，五島7246.45，平戸7247.86，鹿児島8322.43に，CIKUが琉球の宮古2151.64に，CUHUが鹿児島8320.59にそれぞれ見られる。これらのうち，6267.84の内容は〔otsuksaN〕，6286.68，7246.45，8322.43のものは〔otsuksama〕，7247.86のものは〔otsuk$^{(u)}$sama〕であった。そのほか，茶の類の中にもツク～の語形として，CUKUNENSAMA，CUKUNONSAMAがいずれも天草に見られる。これらのCUKU(～)の語形と，上代の文献などにあらわれるツキの交替形ツクとの関係については，ツキ＞ツクの変化が広く母音〔i〕と〔u〕との交替現象とも関係しつつ各地で個別に起こりうることも考えられるから，両者をただちに結びつけることは避けるべきであろう。なお，凡例のCUTからTITまでの促音形(ツキのキの母音が無声化ないし脱落したもの)は主として鹿児島に集中するほか五島にもやや多く見られるが，これらの中にもツクからの変化形が含まれている可能性がある。

OCCUKISAN，OCCUKISAMA，OCCUHISAMA，OCCUGISAMAのような，オとツキの間が促音の語形(これらには中に点のある符号を与えた)は，岐阜南部から愛知にかけて集中するほか，兵庫北部，広島にもまとまりが見られ，そのほかの全国各地にも散在するが，新潟，千葉などにも比較的多い。

次に，敬称接頭辞のオにあたる部分がUの語形(これらには極小の三角形を伴う符号を与えた)としては，UCUKISANが新潟5612.39に，UZUKISAMAが奄美0247.31に，UCIKIIが沖縄本島1251.04に，UZIKISAMAが奄美0247.31にそれぞれ見られる。このうち，琉球各地のUは本土のOとの規則的な対応としてあらわれるものである。

6482.04，6504.01にはOOCUKISAN，5585.09にはOOTUKISANが見られるが，このOO～は，〔o:～〕6504.01と〔o'～〕5585.09，6482.04とをまとめたものである。これらのOO～は，敬称接頭辞のオが何らかの事情(話者の意識にのぼらない臨時的なものなどとして)で長めに発音されたもので，「大月」の意味ではなかろうが，6504.01の場合，〔otsukisaN〕と〔o：tsukisaN〕の併用であって，これは話者自身がこの2つの表現の違いを意識しているのかもしれない(ただし両者の区別に関する注記はなかった)。

茶の類は，最初に述べたように，ツキヨおよびその変化形と判断した形を要素にもつ語形をまとめたものである。これらは琉球に集中するほか，本土でも，長野北部のOCUKIYOSANなど，山梨のOCUKYOOSAMAなど，九州中西部のCUKINOISAN，CUKINOESAMA，CUKINOYOSANなどにもまとまった領域が見られ，また，伊豆大島にCUKIYOSAMA，淡路島にCUKKYOSANが見られ，隠岐にもCUKIYOSANが見られる。ただし，琉球に分布するものは，茶を与えた語形のすべてがツキヨの変化形であるかどうかについて疑問もあり，今後の検討が望まれる。とくに，宮古に見られるCIKISUおよびCIKISYUのSU，SYUは，あるいは敬称語尾などであってツキヨ類とは無関係であるかもしれないので，凡例における見出しの位置を橙類の中に置いた。ただし確証がないので，257図「敬称語尾の総合図」では，SU，SYUを敬称語尾として扱わなかった。

これらの茶の類の語形は，『万葉集』など上代の文献に見られる「月」あるいは「月の光」の意味の「つくよ」「月夜」の残存(さらに，「月の神」「月」を意味する「月読」との関係も考えられる)であると考えられ，一昔前には，橙の類と茶の類とは現在よりも広い地域で，両者に何らかの用法差を伴いつつ共存していたのではないかと思われる。ただし，この図で茶の類が見られる地点で，その意味•用法に関する注記があるものは少なく，6603.52のOTUKYOOSAMAに「子どもに対して言うことば？」，6560.40のCUKKYOSANに「古」，7391.94のCUKINOESAMAに「月夜のことにも言う」，8302.19のCUKIYOSANに「希。老」，0246.97のTIKKYOに「古」，2076.98のCIKINUYUUに「月の意にも，月夜の意にも」，2151.51のCIKIYU(内容は〔tsĭkĭju〕)に

「月の夜のことは〔tsïkïnuju:〕」とある程度で，両類の意味差，敬意差などに触れた注記は見られなかった。なお，6603.52の注記内容には疑問符が付いているので，これには「こどもに対して使う」の補助符号を付けなかった。

紺を与えたNONOSAN以下の語形は「こどもに対して使う」の注記のあるものが多く，また，その中でノノサン，ノンノサン，マンマサンなどの類，アトオサマ，アットサマ，アットオメエ，トトサマなどの類などが大半を占める。これらの語形の由来については251図「たいよう」の解説で考えの一端を述べておいた。これらは琉球の先島を除いてほぼ全国に散在するが，一部の地域にはまったくあらわれず，また分布密度にも地域差らしきものが見える。ただし，この点に関しては，調査者の「児童語」に対する配慮が必ずしも全国一様ではなかったかもしれないということに注意すべきであろう。なお，紺の類の中で，アトオサマなどの類には「こどもに対して使う」の注記のあるものが比較的少なく，また，西日本各地に点在するガッテン～(仏語の「月天子」に由来するものであろう)に，この注記のあるものはない。また，現在児童語としての性格が強い語形も，古くからそうであったとは限らず，昔は月あるいは太陽などの天体を神格化した表現として成人の間でも用いていたものが，それらに対する宗教的心情が薄らぐにつれて，児童語の世界に限定されたと見るべきかもしれない。TENTOOSAMAは八丈7659.31，7659.53に見られるが，251図「たいよう」を見ると，7659.31は同じくTENTOOSAMA，7659.53はHINOKAMISANである。このように太陽と月とを同一視する傾向の背景については，テントオの語源意識に関する八丈の特殊性も働いているのかもしれないが，また，5635.48でNONOSAMA，6446.05でNOONOOSAMA，5687.32，6700.25でNONNOSAMA，5576.60でNANAHAN，6494.08，7510.18でMANMAISAN，6561.49でMANMANCYAN，6591.02でKANKASANが「太陽」と「月」の両方の名称として使われるという現象とも並行するものとして，考えるべきであろう。

253. あめ(雨)

音声変種をできるだけ細かく分出しても，なおかつ非常に単純な地図になったので，紺1色で示した。調査を前期で打ち切ったため，地点数が少ない。<併用処理の原則>は適用しなかった。

凡例に示した語形は全部アメの音変種であって，別類の語形はない。地図に載せなかった語形としては，6566.51（三重）の，<2～3才の時言った>という〔goNgo〕があったのみである。

AMEは琉球を除く全国に広く分布している。〔ame〕のほか，〔amę〕(1859.84，山形13地点，4780.64，4792.43，5624.85，6700.48，7417.79，7418.33)，〔amë〕(5792.02)，〔ʔame〕(5698.91)，〔a̋me〕(7335.34，7377.27)，〔ãme〕(3761.74)，〔amɛ〕(3774.61)の変種を含んでいる。AMEEは4733.35，6458.40，6489.27，6504.01，6530.58，6553.47，6563.43，6564.51，6572.97，6573.17，6574.06に見られるものであるが，MEの部分にアクセントの下降が見られるために長音化したもの(を含む)かもしれない。そうであるとすれば，同様のことはAMII 0294.93，1211.69，1221.47，1231.88，1242.00，AAMII 1251.04，1251.27などについても言えよう。AAME 5517.24，5548.58も，この長音化には，アクセントがかかわっているのかもしれない。AMIは〔ami〕が主として先島に分布しているほか，奄美・沖縄本島およびその周辺にわずかずつ見られ，〔ʔami〕が沖縄本島のみに分布している。AAMIは2076.25，2076.96，2076.97，2076.98の4地点である。AM̃Iは奄美にまとまって分布し，AW̃Iも奄美に2地点（0228.96，0256.76）見られるものである。AMA 6657.96については，もともと単独語形ではなく，たとえば，アマダレなどの複合語形前部分が独立したものとも，あるいは，助詞ガを伴うアメガが約まってできたものとも考えられよう。

この項目は，「竹」，「耳」などとともに，分布の点からも，歴史的にも，日本語の基本語彙であると言えよう。なお，雨をめぐっては（この地図は雨の一般称を示すが），いろいろな種類の雨についての表現(注として報告されていてもこの図からは省いた)，あるいは幼児語などを，本地図集に収めた254図「つゆ」，255図「ゆうだち」などとともに，考える必要があろう。

254. つゆ(梅雨)

この項目は，質問文にあるように，その時期に降る「雨」そのものの名称を求めたものである。しかし，回答された語形について，<時期のことを言うが，その時期

の雨の名はない＞(6559.67)，＜時期にも雨にも言う＞(8335.48)，＜〔ɲɯ:bai〕は季節，〔ɲɯ:baiame〕は雨＞(6711.16)，＜雨自体はやはりアメとしか言わない＞(7308.48)などの地点が全国にかなりあったので，「時期」と「雨」の区別を立てず，すべての語形を採った。したがって，併用の場合，一方の語形が「時期」を指し，もう一方の語形が「雨」を指す場合があり得るわけである。ただし，単独語形〔ame〕については，「無回答」扱いとした。なお，＜併用処理の原則＞はCUYUに適用した。

橙の符号を与えたものがツユ類である。北陸から近畿・中国を経て九州中北部までの連続した広い地域に分布し，また，北海道，宮古諸島にもまとまった分布が見られる。さらに，東北・関東，四国にも散在している。語形としてはCUYUがもっとも広い分布を示している。この中には，助詞「の」もしくはその音転形を介してアメ，ジキ，トキ，ウチなどにつづけた〔tsɯjɯnoame〕(地点多数)，〔tsɯ̈jɯnoame〕(6423.75, 6424.20)，〔tsɯ̈jɯ̈noame〕(3782.71)，〔tˢujunoame〕(7333.29, 7355.22, 7355.81, 7367.25)，〔tujunoame〕(6583.93)，〔stujuName〕(7345.98)，〔tˢujuName〕(7345.47, 7346.63)，〔tsujunoʒiki〕(6430.53)，〔tsujunotoki〕(5623.85)，〔tsɯjɯnoɯtʃi〕(4672.19)，〔tsɯ̈jɯ̈noɯtsï〕(4700.78)が含まれている。他の語形についても同様の扱いをした。CUYURIからCURYUまでとCUIRIAME, CUYURIDOKI, CUIRIDOKIは，ニュウバイ類に接した岐阜・静岡・愛知に分布しているほか，これらの地域に連続した福井，三重，和歌山南部などにも分布しているので，ニュウバイが，「梅雨に入る」意味にもとづいた語形だとすれば，それに意味の上で触発された語形と考えられる。CUYUAMEからCUIRIDOKIまでは，語形の後部分に「雨」，「降り」，「時」の意の語をもつものである。いずれも，雨そのものやその状態・時期を明示しようとする意識からできた語形であろう。これらはほとんどまとまった地域をもたず単独語形と混在して見られる。CUYUSITAは8342.51に，CUISIAは7375.30に1地点ずつ見られるものである。この語形の後部分のSITA, SIAについては，よくわからない。AMASITAが鹿児島に見られ，関連がありそうに思われる。『全国方言辞典』に「したけ」「したげ」が主として東日本で「春風」「春から夏にかけて吹く東風南風」「東風」の意味で使われるとの記載がある。地域はへだたっているが，「風」の意味のSITAまたはSIAである可能性がある。後述する，九州に分布しているナガシも「風」とつながりをもつ語であるらしい。SAZUINOCUYU 5605.70, CUYUNONAGAAME 6375.08, CUINONAGAAME 7323.84は，それぞれサンズイ類，ナガアメ類とも通じる語形であるので，符号の形を合わせた。

赤の符号はサンズイ類とズリ類に与えた。サンズイ類は，SANZUIが富山に分布し，それ以外の語形が新潟，長野北部にだけ分布しているので(北海道に1地点例外)，この地域独特の表現と考えられる。ツユ類の分布に接した地域なので，「さみだれ」「さのぼり」「さつき」などのサとツユの熟合した語とも考えられる。とすれば，大きくはツユ類に含めるべき語形だとすることもできよう。

ズリ類は，北海道南部にのみまとまって分布しているものである。『日本言語地図』の中で，北海道にだけ特有の語形分布は少ない。ことに，北海道は「梅雨」という気象現象の顕著でない地域なので，なおさら注目される。ズリ類を回答した被調査者の両親の出身地を見たところ，父の出身地では，青森2人，秋田1人，新潟1人，富山1人，石川2人となっており，母の出身地では，北海道1人，青森3人，新潟1人，石川2人となっている。したがって，大ざっぱにまとめて，青森方言か北陸方言とのつながりが考えられる。『全国方言辞典』によると，青森で，動詞「じりける」が「小雨がながく降る」意味に使われているので，おそらくその名詞形と関係があろう。ただし，北陸方言とのつながりを考えた場合，サンズイ類の中に，SAZURI 5624.85という語形もあるのだから，この地域の方言とかならずしも無縁とは言い切れないだろう。

空の符号を与えたニュウバイ類は，北海道から関東・中部にいたる東日本に広く分布し，西日本のツユ類に対立する大勢力語である。西日本では，淡路島，島根・山口，香川，熊本・大分などにも少数地点点在している程度できわめてわずかである。NYUUBAIの中に，原カードの注記にあった漢字表記の「入梅」も採用して含めてある。次の地点がそれである。4689.10, 4698.21, 4699.07, 4761.93, 4780.26, 4783.38, 4791.12, 5607.17, 5608.16, 5617.28, 5701.73, 5703.03, 5712.17, 5721.26, 5723.02。また〔njɯ:bae〕などのように，語末子音がeとなるものもこれに入れた。ニュウバイ類の最後に示した見出し語形HAEは，ニュウバイ類の分布に連続した地点(6577.86, 6586.27)に見られるし，ニュウバイのバ

イと通じる語形ということで空の符号を与えたが,『全国方言辞典』によると,「南風」の意味として島根,大分,佐賀,長崎,熊本,鹿児島で,「西南風」の意味として静岡,隠岐,大分などで使われているし,『沖縄語辞典』にもフェーが「南」あるいは「南から吹く風」とあり,『八重山語彙』には,パイ,フェー,ペーが「南風」としてあるので,これらとつながりがあるとすれば,そしてニュウバイが入梅であれば,別語類となりそうである。

茶を与えたNAGAAMEからNAGACUZUKIまでのものは,分布の仕方から見ると,東日本に広く分布しているNAGAAME, NAGABURI,東北中北部に分布しているNAGAARE,琉球に広く分布しているNAGAAMI,奄美・沖縄本島に分布しているNAGAMIと大別することができる。それ以外の語形やそのほかの地域に分布しているものもあるが,ごくわずかである。分布を一見すると,かつての国の中央から遠隔の地域に分かれて見られることから,歴史的に古い語の残存であって,かつては連続していたもののようにも考えられるが,茶で示した諸語形はいずれも,地域ごとに独自発生してもいいようなごく普通の発想による語形であること,また,「季節に関係のない長雨」とする地点が,青森2地点,岩手12地点,宮城1地点,秋田1地点,山形3地点,福島1地点,長野2地点,岐阜1地点,三重1地点とあり,『沖縄語辞典』でナガアミは単なる「長雨」であり,『八重山語彙』でも,ナガアミが梅雨・長雨・霖雨」となっているように,もともと「梅雨」そのものを意味する語ではなかったらしいこと,などから,「梅雨」の意味の語としては,古い連続分布ではなかったろうと考えられる。

緑を与えたナガシ類は,四国・九州・奄美に分布している。語形としては,NAGASI, NAASI, NAGAZIのように,語末部分の母音がIとなるものが高知中部,長崎・熊本,宮崎中南部,鹿児島・奄美などに,NAGASEのように語末部分の母音がEとなるものが香川・徳島,高知東部・南部,愛媛,福岡・佐賀・大分,宮崎北部などにそれぞれ分布している。混在地域はあるが,分布地域の違いが見られる。この語類について,他語形――主としてツユ類――と併用されている地点で,「季節に関係のない長雨」(大分2地点,長崎2地点),「夏時分に長く降る雨」(香川1地点)として「梅雨」そのものを意味する他語形と区別している場合があった。『全国方言辞典』でも,ナガシ・ナガセについて,「梅雨」の意味のほかに,愛知県大野町,鳥取の「晩夏初秋の頃に降りつづく雨」の意味を載せている。とすると,「梅雨」そのものを指すツユ,ニュウバイ,サズイなどとはやや性格が違うようにも思われる。『増補風位考資料』には,ナガシ・ナガセが「風」の意味に使われる地域がかなり多く載せてある。「風」と「雨」とは相伴うことの多い現象なので,密接な関連があるのも当然であろう。なお,『日葡辞書』には,「下(しも)の地方」の「梅雨」を意味する語として採録してある。

草を与えたシケ類は,ほとんど東日本にだけ分布しているものであるが,九州の3地点(7257.94, 7258.82, 7352.14)にも見られる。他語類―主としてツユ・ニュウバイ類―との併用地点で,シケについて,山形,埼玉,神奈川,長野・愛知などで「季節に関係のない長雨」としている。『全国方言辞典』ではナガシケ,ナガジケに「梅雨」の意味はなく,「長雨,霖雨」の地域として宮城,山形県米沢,茨城,千葉,江戸,兵庫,熊本県玉名郡を挙げてある。文献では,『日本書紀』に「天陰(ひしけ)て雨氷(ひさめ)ふる」(北野本室町時代訓)とあり,『日葡辞典』には「てんきがしけた」とあるが,いずれも「梅雨」とは直接関係はなさそうである。名詞形シケはいまのところ江戸時代のものからしか見つけることができないが,やはり「梅雨」そのものの意味では使われてはいない。このようにシケは,単なる「長雨」の意から「梅雨」をもさすようになったものと思われる。

紺を与えたものは,さまざまの語類・語形を含んでいる。BAIU, BAIUZIKI, BAIUKI, BAIKIは,「梅雨」または「黴雨」の字音語バイウを語源にしていると考えたものである。「梅の実の熟する頃に降る雨」とか,「黴が生える頃の雨」の意味の語とかの説がある。これはまとまった分布をもたないが,比較的東日本に多く見られるので,ニュウバイの分布と関連がありそうにも見える。「新しい語」,「共通語」という注記もかなりあった。

SECU, SECUAMEは,三重に小さくまとまっているほか和歌山にも1地点見える。「節」であろうか。『綜合日本民俗語彙』によると,三重に「セツの西風雨でそろ。」という諺があって,田植えの季節の西風は雨をもたらすものとして喜ばれているという。田植え時期ということで関連がありそうである。

SAMIDARE, SAMEDARI, SAMIDAREDOKIは,全国に20数地点点在しており,そのほとんどが,他語形との併用になっている。「被調査者は俳人であ

る」という注記が5686.31, 7401.11にあり，それ以外の地点のいくつかでも，＜希＞・＜上品＞の注記があった。とすれば，古来の語の残存というより文章語的，雅語的性格の語の可能性がある。

ZIAME 7393.62, 8303.70, ZISAME 6630.82, ZIBURI 5652.37については，ジサメに＜雷を伴わない雨＞，ジブリに＜ツユどきでなくとも長く降る雨＞の注記があり，『全国方言辞典』でも，ジアメについて「①主として夕立に対して長続きする雨。岡山市。②長雨。霖雨。京都府竹野郡」としているので，それぞれ本来は「梅雨」そのものの語ではなかったのであろう。

SACUKIAME 4760.98, 5793.74, 7323.02, GOGACUSAME 5567.46, GOGACUDON 7391.94, HARUAME 7373.23, HARUSAME 6634.32は，降る時期に注目した語形である。KIRISAAME, KIRISABURUについて，＜特に霧が多くて小雨がまじって降るような時期を言う＞(6626.71)や，＜梅雨時以外でも細雨の時は言う＞(6655.87)の注記があった。SIGURE, SIGUREDOKIは，宮城，八丈島，宮崎に1，2地点ずつしか見られない語形である。ところがこのシグレは255図「ゆうだち」では，茨城・栃木・千葉などにまとまって分布している。注記には，＜季節を特に限定しないがその時に降る雨はすべてこのように呼んでいる＞(4713.60)，＜雨自体ならばこうしか言わない。ただし，この語は必ずしも梅雨だけではなく一年中使う＞(4734.20)というものがある。『綜合日本民俗語彙』には，「田植終りの日の祝いを，茨城県の稲敷郡，北相馬郡でシグレまたはシグレ祝……という。」とある。『全国方言辞典』によれば，茨城県鹿島郡で「雷」として，島根県大原郡で「吹雪」として，鹿児島県肝属郡ではウメシグレを「梅雨」として使っているという。いずれも参考になろう。TOROAME 4714.22については，＜必ずしも季節に関係しない。toroは「長い」「始終」の意の接頭辞か＞の注があった。KIMUYAAMI 2074.69のキムヤについては，『八重山語彙』には「細雨・煙るものの義」とあった。そのものであろう。YUSYU 2095.60については，『八重山語彙』に「ユー・スー　露・よつゆの義」とあり，YUDUN 2086.03, YUDUN'AMI 2085.69については，『八重山語彙』に「ユドゥン　道草を食ふこと。渋滞の義」とある。それぞれ関連があろうか。HASSEN 5641.73, HASSENBURI 5652.81には，いずれも，＜暦にある＞と言う注記があった。陰暦壬子（みずのえね）の日から癸亥（みずのとい）の日までの12日間を指す「八専」であろう。

「その他語形」としたものは次のとおりである。アレァツグ(3745.62)，ウットオシイアメ(6604.15)，ヨヨオワリイ(3797.32)，アメフイチジギ(4659.50)，シケル(5697.86)，アレル(3724.96, 3754.13)，ナガグフル(3727.81)。

以上，大観した分布のうち，西日本と東日本にそれぞれ分かれて広い領域をもつツユ類とニュウバイ類の歴史関係にふれてみる。ツユについては，もともと西日本の方言であったものが，ニュウバイの地域である東日本に輸入され，共通語という力を背景に広がり始めたものだと考えられる。東日本のうちツユとニュウバイの併用地点で，ツユを＜新＞・＜共＞と意識し，ニュウバイを＜古＞と意識している地点が多いことでも裏付けられる。国立国語研究所では，昭和41年1月から同年12月までの朝日・毎日・読売の3新聞を，60分の1サンプリング調査したが，その結果で見ても，ツユが圧倒的に多く使われていて，それにバイウが多少あって，ニュウバイはまったく使われていない。現代語としてのツユとニュウバイの勢力の消長を示していると言えよう。古い文献としては，『源氏物語』などには「露」以外のツユは見あたらないが，『運歩色葉集』に「霖ツユ」とあり，『日葡辞書』にもツユが「夏の，ある時期に降る長雨」と訳されている。これに対してニュウバイは，『日本歳時記』(1688年)に，「梅雨出入の説，紛々として一決し難し。堺雅にいはく，閏人立夏の後，庚にあふ日を入梅とし，芒種の後，壬に当る日を出梅とす。」とあって，ニュウバイを「出梅」に対する語として使っている。江戸時代のほかの文献でも同じ意味に使っている。『南部めくらごよみ』も，絵によってニュウバイと読ませ「梅雨入り」の月日を記している。ただし，『和英語林集成』(初版本)ではニュウバイを「The rainy season (in the 5th month)」と訳している。とすれば，あるいは暦で「梅雨入りの日」の意味として用いられていたニュウバイが，しだいに一般語として広がり，意味としても「梅雨」そのもの，あるいはその時期に用いられるようになったのではないか，という推測が出てくる。文献との詳細な照合が，今後の課題であろう。それとともに，「梅雨の季節」の名称についての調査およびその地図化も必要であろう。

255. ゆうだち(夕立雨)

地図下欄に示した質問文によって語形を求めたもので

あるが，「夏に限らない」「季節に関係ない」「通り雨」「日照雨」「一時的に降る雨」「俄雨のことで夕立とは違う」「昼の俄雨」「晩に降る場合」「風の変りめに降る雨」「雷の有無に関係なく使う」など，降雨時期や降雨状態に関する注記が非常に多く，採否の範囲を決めかねる場合もあった。そこで，上の例のような「夏(頃，初秋も含む)を含み，急に降り出す雨」の条件に反しない(その条件に触れていないものも含む)注のある語形はすべて採用することにした。したがって，本図に登載した語形の中には，夏の午後から夕方にかけて雷を伴って降ることの多い，いわゆる，夕立の特称とは限らない比較的広い意味分野のものや，夕立とは意味分野がやや異なる通り雨的なものなども含まれることになり，注意を要する。特殊な注については，解説中に記すことにする。

なお，本図は256図「かみなり」と関係する部分が大きく，両図に共通に現われる語形，語類については，符号の色や形を統一してある。また，一部の語形については，254図「つゆ」，258図「いなずま」などともかかわりをもつ。

＜併用処理の原則＞は YUUDACI の語形について行ったが，これによって本図から削除された YUUDACI は計94個であった。

全国を見渡すと，見出し語形の数が多いわりに，分布はそれほど複雑ではない。比較的目立つ分布を示すものは，茶を与えたユウダチ類，赤を与えたサダチ類，橙を与えたカンダチ類，緑を与えたライアメ類，さらに，紺を与えたもののうちのニワカアメ類などであり，そのほか，関東東部付近と宮城北部付近などにシグレ類，青森・秋田，千葉，石川，島根などにムラサメ類，瀬戸内海沿岸地域などにソバエ類，和歌山などにザブリ類，伊勢湾沿岸地域などにハヤテ類が，それぞれややまとまって分布する。琉球では種々の語形が，ある程度の領域をもちつつ分布する。そのほかの語形には，少数の地点にのみ現われる孤例的なものが多い。

全国の大部分を占めるものは，ユウダチ，サダチ，カンダチのような～タチの語形であるが，この中ではユウダチ類が近畿を中心に東西に勢力を伸ばし，もっとも広い領域を占めている。柳田国男はユウダチ，カンダチなどのタチは，天から降ること，神が降臨することの意であると述べている(『雷神信仰の変遷』など)が，さらに，「雲たつ」「霧たつ」などと関連させ，自然現象が現われる意としてとらえることもできよう。カンダチは「神だち」であろうが，この「神(が)たつ」に対して，ユウダチは「夕(に)たつ」であるとすれば，両者は語構成を異にしていることになる。サダチのサは未詳であるが，これについては，「さつき」「さなえ」「さぎり」などのサ，あるいは，281図「こんばん」に見られるコイサ(＜コヨサリ)のサなどとの関連の有無について検討すべきであろう。

ユウダチ類の変種については，YOODACI, YODACI などの YO～の語形(これらには大符号を与えた)や，YUDACI, YODACIなど，「夕」の部分が短音化している語形(これらにはべた符号を与えた)に，ある程度地域性が認められるようである。279図「さくばん」を見ると，近畿から北陸，中国・四国・九州にかけて YONBE が分布しており，両図の YO～の分布は，近畿，中国の一部，四国などでは一致する部分が多いが，本図では九州や岐阜・富山などに YO～がほとんど見られないこと，279図で岡山・広島に YO～がほとんどないことなど，相違も見られる。なお，本図に YO～の形が多く現われる背景には「夜」への類推も働いているのかもしれない。

ユウダチ類，カンダチ類，ライ～類は256図「かみなり」にも広く現われるものである。ユのうち，ユウダチ類とカンダチ類は本図に，ライ～類は256図により多く見られる。カンダチ類は関東をとりまく形で分布しているが，これらは，かつては関東を含めた地域に連続した領域があり，その後，ユウダチ類やライ～類によって分断され，現在の形になったのではないかと思われる。なお，ユウダチ類とカンダチ類が両図に現われる事情，その歴史的背景については，256図の解説にいくつかの考えかたを述べておいた。ライ～類は，「雷」の意味のライ～が広がった後，あるいはその時期と並行して，その一部が，～アメの形で「夕立」の意味にも用いられるようになったものであろう。

サダチの類は，ユウダチやカンダチと違って「雷」の図にはまったく現われないが，『日本国語大辞典』によれば，「ゆうだち」のほかに「にわか雨」や「しぐれ」の意味でサダチを用いる地域(それらは，ほぼ本図のサダチの領域内にある)があり，本図の7395.09の SADACI でも「二，三日そのような状態が続いた時に言うようである。したがってこの項目の回答としては少し外れているように思う」との注があった。また，7382.93では「朝昼をかまわず突風を伴って降る雨」，7368.32では「海上用語。船乗り，漁師が主に使う」とあり，サダチ類とユウ

ダチ類が併用の地点のうち，6497.41，6498.61，7258.82，7407.24，8315.42では，サダチ類に「朝（あるいは昼）の雨」，ユウダチ類に「夕（あるいは晩）の雨」の注記（ただし，7258.82では「この区別は被調査者のみのもので，一般には夕方降ってもサダチと言う」とあった），7386.55ではSADACI——「雷を伴わない烈しい降雨」，YUDACI——「雷を伴う烈しい降雨」とあり，7411.61ではHADACIに「雷が鳴ることはない」とあった。以上の注記などから，サダチは「夏の夕立」とはやや意味分野が異なるかとも思われるが，大部分の地点では，特に注記もなく，質問文にあたる語形としてサダチを答えていることから，サダチは「夏の夕立」を中心とする「にわか雨一般」を意味する地域が多いとみるべきであろう。サダチ——朝・昼，ユウダチ——夕の区別は，ユウダチ類が進出した後に生じたものかもしれない。なお，サダチが「夏の夕立」とは違うとする注記のある地点は，サダチの領域の外側付近に多いことにも注意すべきである。

ニワカアメ類は北海道西部，東北・関東の一部に比較的多く，そのほか全国各地に点在する。ただし琉球にはまったく見られない。この語形は「にわか雨一般」の意味では，おそらく全国的に存在するもので，「夕立」の特称が存在する地域では，それが現われにくいということなのであろう。青森から秋田北部にかけては，ほぼこの語形の占有地域と言えそうである。ニワカアメと他の語形とが併用の地点では，ニワカアメに「季節にかかわらず」「雷を伴わない雨に対して」の注，その相手の語（ユウダチ類・カンダチ類・ライ～類）に「雷を伴う雨」の注のあるものが多かった。

シグレは標準的には「晩秋から初冬にかけて降ったりやんだりする小雨」の意味であり，上代の文献例もその意味であるとされ，それが地域的に意味変化を起こして本図に現われているという見方もあろうが，シグレの本来の意味，あるいはその後の意味変化については，なお検討の余地があろう。『全国方言辞典』や『日本国語大辞典』によれば，「雷」「吹雪」「小雪」「みぞれ」の意味のシグレが全国各地に見られ，たま，鹿児島県肝属郡では「梅雨」をウメシグレと言うとある。『日本言語地図』でも254図「つゆ」にシグレが宮城，八丈，宮崎に点在し，256図「かみなり」にも茨城5782.79にオシグレとシグレサマが見られる（この地点は本図ではシグレアメである）。なお，本図では，北海道0789.95（この被調査者の両親は福島県信夫郡の出身である）と愛媛7403.86にもSIGUREが見られる。

ムラサメ類はいくつかの地域に分かれて分布するが，日常の話しことばとは別の文体の中では，より多くの地域に存在する可能性があろう。東北にはMURASAMEのほかにMURAAME，MURASIAMEが，YUUDACIとの混交形としてMURADACIが見られる。島根のものはMURASA，MIRASAであるが，これはムラサメの下略形と考えてムラサメ類の符号を与えておいた。

なお～サメの語形にはムラサメのほか，YUUDACISAME，YUUDASSAME，YODACISAMEが，岐阜南部に集中するほか新潟4675.45に，YOODACISAMEが愛知6630.43に，KAMINARISAMEが佐渡4663.92と福井5574.42に，NIWAKASAMEが山形4609.54，4609.68，4619.63，4628.28，佐渡4663.92，石川4597.72，福井5584.37に，HIRAKISAMEが秋田3699.25に，TOKISAMEが長野5671.94に，ARASAMEが北海道2800.52，石川4598.33，5507.20に，OOSAMEが山形4618.87にそれぞれ見られる。青森，千葉，利島のムラサメや，岐阜南部のものなどを除けば，概して石川以東の日本海側の地域に多いと言えよう。

ソバエ類は瀬戸内海沿岸に集中するほか，壱岐7208.97にも見られる。これらの中には，「季節にかかわらないにわか雨のこと。ユキソバエということばもある」6484.43，「にわか雨の小粒で短く降るもの」6486.50，「夏に限らぬにわか雨」6488.48，「風を伴うもの」6560.22，「通り雨または日照り雨程度の短時間のもの」7400.15のような注のあるものがあった。この語の意味分野の一端を示すものと言えよう。『全国方言辞典』によれば，「むらしぐれ」「夕立」の意のソバエが，本図の分布地域のほか，和歌山県海草郡や島根県鹿足郡にも，「小雨」の意では福岡や対馬にも，また，動詞ソバエルは「雨が少し降りはじめる」の意で対馬にもあるという。『中国地方五県言語地図』の「にわか雨」の図に見られるソバエ類の領域は本図とほぼ一致する（一部の語形については，かなり分布が異なるが，これは質問内容の違いによるものと思われる。同図の解説によれば，「急に降ってくる雨ということで聞いたが種々な雨があって統一できなかったうらみがある」という）。古い文献では，『万代和歌集』—冬—1248年に「嵐吹く時雨の雨のそばへには」とあり，『俚言集覧』には「船頭詞に曰，日和にて小々雨のハラツクをそばへると云」とある。

ザブリ類(凡例のZAABURIからDABURIまで)は和歌山南部付近に集中するほか，高知7442.39, 7446.26, 岡山6475.27，さらに鹿児島8352.40，奄美0238.55，静岡6645.62，埼玉5677.28，千葉5792.18，茨城5793.20にも見られる。『日本国語大辞典』によれば，「短時間の大雨」「にわか雨」として，京都府竹野郡，岡山県邑久郡，宮崎県東諸県郡，「日に何回となく繰り返して降る大雨」として，淡路島，鹿児島県肝属郡で使われるという。『中国地方五県言語地図』の「にわか雨」の図では，岡山・広島の県境地域に多数分布し，本図と相違する。

ハヤテ類は伊勢湾沿岸のほか，岐阜・滋賀，千葉，広島，高知にも見られる。このうち，広島のものには「雨と風が同時のとき」，高知のものには「海上のにわか雨。風も伴う」との注があった。この語は風の名称としては全国各地に分布するものであり，本図の分布もそれと関係があろう。なお，『中国地方五県言語地図』の「にわか雨」の図にこの語は現われていない。

以上，比較的まとまった分布を示す語類について説明した。以下，そのほかの語形，語類について，その分布地点・地域と，雨の状態などに関して注のあるものはその内容，さらに，気づいたことの若干を記しておく。

KAMINARIAME 2781.34, 4750.32, 6411.66, 7659.31, KAMINARISAME 4663.92, 5574.42, KAMINARIGOCI 4629.43

KAMINARIZIKI 6677.70, KAMINARIZIKEAME 6686.75 (この～ZIKI, ～ZIKEは「海が荒れること」の「しけ(時化)」と同源であろう。この語は254図「つゆ」にSIKE, NAGAZIKEその他の形で主として東日本に多数現われる。そのほか「長雨」の意味で，シケ・ナガシケを使う地域も多いが，これについては254図の解説を見てほしい。)

KAMINARI 6408.15, 6408.88 (256図「かみなり」と対照するとわかるように，この地域は「雷」と「夕立」を区別せずYOODACI, YODACIと言っている。両地点のKAMINARIには「共」の注記があるから，従来の方言形YOODACI, YODACIの意味のまま共通語形KAMINARIをとりいれたことになる。なお，256図では両地点ともKAMINARIはないが，このうち6408.15ではカミナリ「共」とあったものを<併用処理の原則>によって削除してある。この地域で雷を伴わない夕立の時にも「カミナリ(ダ)」と言うのか，あるいは「カミナリガ降ッタ」のような表現も可能なのか，その辺の事情は不明である。)

GOROGOROSAMA 4703.88, 4742.37 (両地点とも「子」の注記。256図「かみなり」のこの地点にはこの語形がない。)

TOTOAME 3704.42(256図でこの地域にTOTOSAMAなどが分布。)

NAGASI 1156.89, 1232.29, 1250.59, 1260.78, NAGASIAMI 1223.91, NAGASII 1211.69, NAGAASII 1231.88(この類は254図「つゆ」で四国・九州に大量に分布し，奄美まで伸びている。本図とは領域が重ならない。)

NAARIAMI 1231.72

NACYAMI 2140.96, 2150.06(「夏雨」か。)

NACIGURI, NACUGURI, NACIGURE, NACIGURUAMI —以上は奄美から沖縄にかけて分布，NACIAAMOOREE 2076.25, AMIGURI 1242.72, AMAGURI 2086.03, 2140.49, 2150.06, 2150.07, 2150.17, 2151.20, AMORE 2067.52, 2076.97, AAMORE 2067.52, AMOREE 2076.96, AMOOREE 2076.98, 2076.99, AMORI 2085.69 (これらのうち，NACU～，NACI～は「夏」，AMOREからAMORIまでは「アマオリ(天《雨》降)」に由来するか。「天から地上に降りる」意のアモルは『万葉集』などにも見られる語形である。～GURI, ～GURE, ～GURUは，あるいはシグレのグレと関係があろう。)

KATAGURI 1221.47, KATABUI 1148.59, 1251.04(『沖縄語辞典』にkatabuiの見出しで「片方は晴れていながら片方で降る夏の雨」とある。)

KURIGAKI 1167.01(「老人が用いる」と注記。)

ATAAMI 0340.00, 2068.08, 2151.64, 2151.67, ATTAAMI 1167.01, 1261.01, 1261.32, 2075.22, ATADAAMI 0249.17, ATABUI 1242.00, 1270.29, ATTABUI 1241.49, 1242.26, 1251.27, 1251.73, 1261.70, ATTABUIAMI 1270.26 (ATA～は「急な」の意。『沖縄語辞典』に ʔatagahuu「突然の果報」とあり，『八重山語彙』にアタ・キシ《断崖・急切の義》《石垣・鳩間》，アタ・ヤン《急病》などの例が見られる。急病の意のアタユマヒは『万葉集』4382にも見られるものである。なお，この類には「にわか雨の意で夕立とは違うらしい」の注がいくつかあった。)

SITAKI, SITAKIAME, SITAKE, HITAKI,

HITAKE——以上は北海道の海岸沿いに5地点と秋田の男鹿半島付近に。(いずれも海岸沿いに分布することが注目される。「秋口に」1942.03,「特に秋に多い」2649.79,「にわか雨の意。秋に多い」3639.49,「夏から秋にかけて」3649.16,「秋に西から風が吹く時」3740.82,「風の変り目に急に降る雨」3648.28の注記に見られるように,「夕立」とも趣の異なる雨を指すようである。『全国方言辞典』によると,「春風」「東風」「南風」など風の名称としての「したけ」が各地にあり,これと関係があろう。)

HIRAKI, HIRAKISAME—— 3699.25に併用で。(分布および語形の類似からシタキ類との関係を考えて符号を与えた。)

SIMAKE 6459.87, SIKAKE 6402.94 (『中国地方五県言語地図』の「にわか雨」の図では,兵庫・岡山の県境付近にもシマケ・シマキが数地点に見られ,また,シカケブリ・シカケなどが出雲全域と鳥取の大部分に広がっている。したがって本図には,「にわか雨」の意のシカケの一部がにじみ出していると言える。同書の解説によれば,出雲を中心とするシカケブリは「シカケて来る雨」の意で,年中言い,朝夕を問わないという。また,SIMAKI, SIMAKEは264図「つむじかぜ」で北海道・青森,宮崎,その他の地域に多数分布する。シマケ,シカケのシを含め,シタキ,シグレ,シケ,アラシ,ツムジなど,雨や風の名称に共通に現われるシについては,方角名のニシ・ヒガシのシとともにさらに考えたいところである。なお,『中国地方五県言語地図』の「にわか雨」には,キタケが岡山・広島に大量に分布するが,本図にはまったく現われていない。『全国方言辞典』ではこの語は「時雨」の意で登載してあり,「夏の雨」について調査した本図に見られないのは,そのためかと思われる。)

KAKEBURI, KAKEBUR, KAKEBUI—いずれも対馬に分布。(「通り雨のことで夕立に限らない」6287.71の注記。)

HUKKAKE, HUKKAKEAME, OHUKAKE—茨城から埼玉・千葉にかけて集中。(「台風のくる一日前くらいに降る雨。通り雨らしい」5688.01,「土用の頃,南から東に向けて降る通り雨」5699.89の注記。)

IKKAKE 8345.18, ITTATEAME 2773.13

SANZOKU(AME)1754.16・5665.46 (これは「サンゾク」1754.16と「ヤツカヤマノサンゾクアメ」5665.46の回答をまとめたものである。このうち,5665.46の注に被調査者が「ムギサンゾクマルクウチニフル」と説明したとあった。かな書きなので意味はよくわからないが「麦を三束たばねるうちに降る」であろうか。とすれば,サンゾクは「山賊」ではないことになるが,両方の意味あいを含めていると見るべきかもしれない。「突然の雨」ないし「通り雨」のたぐいであろう。)

ODOSIAME 4687.37, 7659.62(「突然の雨」4687.37,「夏に限らず驟雨一般」7659.62の注記。), ODOKASIAME 6653.30(「夏に限らない」の注。), MAZĬMUNUNUAMI 2141.71(「子どもが言う」とあったが,特に採用したもの。「魔物の雨」の意という。), OKKAKEAME 2750.43, DAMASIAME 2741.46 (「子どもに対して使う」の注記。), HASIRIAME 7218.09, 7266.60, BOOZUHASIRAKASI 7471.38, HARYAAMI 0256.89(「走り雨の義」の注記。), ITAZURAAME 3700.19, TOORIAME 4736.63, 5793.74, PEESYUGA 2095.60 (『八重山語彙』に,「ペー・シュラ」の見出しで「驟雨。夕立。早く過ぎゆくものの義《波照》」とある。), HAKOBIAME 6649.55 (「夏,降っては止み,降っては止みする」と注記。), TANPARAAME 3702.24(「短腹雨の意」と注記。), TOKISAME 5671.94, URINUAMI 0247.31 (「折々の雨の義であろう」と注記。なお,この内容は〔wurinuamï〕であった。), UNNYUAMI 0237.84 (内容は〔wuɲɲuamï〕。「折々の雨の義」の注記。), YUNURYAAMI 2074.69 (「夏の頃,ほぼ同じ時間にふる雨と注記。なお,URINUAMI, UNNYUAMI, YUNURYAAMIなどはスコール的なものを指すのかもしれない。), BARA 6446.43

YOOZU 7367.49, 7368.32, YOZU 7352.14 (「晩の夕立」7352.14の注記。『全国方言辞典』によれば「春の南風」の意の「よーず」が西日本各地で使われ,また,143図「たこ」では,中国西部にYOOZUがある。風の名称とかかわり,本図にも現われるものであろう。なお,259図「にじ」では,熊本南部にYUUZI,沖縄本島にYOOZIが見られる。)

DASIARE 4694.95(「季節を問わず,突然に降る大雨」の注記。「夕立」とはかなり性格の違うものか。なお,『全国方言辞典』に「だしあれ—俄か雨。長野県上水内郡」とある。), OCIARE 4663.06, 4675.45 (『全国方言辞典』にも「時ならぬ風雨。驟雨。佐渡」とある。),

ARATEAME 3725.72, ARASAME 2800.52, 4598.33, 5507.20, ARASIAME 5612.22, KASAYARI 0275.97(「傘を破るような雨の義」と注記。), DOOCUKIAME 6410.77(「胴突雨」の注。), ZARAKU 4618.87 OOZARAKU 4618.87(『全国方言辞典』に「ざらく①大雨。暴風雨。新潟県蒲原地方。②夏季の驟雨。千葉県東葛飾郡」とある。なお，同書「ざらく<副>①濫費のさま。『ザラクに使う』常陸《常陸補遺》。②夥多のさま。『ザラクにある』。同」なども関係あるか。)

TENKIAME 4752.11, HIDERIAME 3619.58(いずれも注記がなく，質問内容にあたる回答として報告されたものである。TIDAAMI 1261.01, 1261.16, TIDAN'AMI 2072.20(いずれも前部分は「太陽」の意である。251図「たいよう」を参照。), ITATNOSYUUGEN 7275.24, AGEAME 5657.73, GAPPAAME 7275.07(「河童雨の意」の注。), HOKORIZIMESI 6649.13, KAWASIAMI 0257.12(「逆かわし雨の意」の注。), KAZEGAASI 6649.55, HEECI 6286.68, YAMA 8343.06, CYUUCYAN'AMIHUI 1260.87, MIAMI 0237.84(「新雨の義。新雨とは梅雨が終ってから次にひでりが来て雨が降るので言う」の注。), SYUUU 6479.95

OOAME 3720.71, 4637.20, 4720.17, 5626.99, OAME 3609.47, OOSAME 4618.87(これらは「夕立」にあたる語ではないから採らないと注記した地点もあるが，無注記のまま報告したものもあるので統一的に一応全部採用しておいた。)

AMEKAZE 6481.15(「昔はヒドイ『雨風(アメカゼ)』ジャといって夕立とは言わなんだ」とあったものを，オオアメ，アメなどと統一的に採用したもの。), AME 2782.16, 4644.10(「無回答」に含めてもよかったが，オオアメなどに準ずる扱いをしておいた。)

無回答——青森に6地点，琉球に11地点と多く，そのほか，八丈，福岡7322.81にも。(琉球に特に多いが，この地では「夕立」にぴったりする現象が少ないことによるのかもしれない。青森西部の場合はどうなのであろうか。なお，質問内容をより限定した調査，あるいは，今回の質問のままでも，その採用基準を厳しくするならば，「無回答」の地点はかなり増えるであろう。)

以上のように，この図に現われる語形には，雨の種類に関する種々の性格のものを含んでおり，それが，この図の見出しの数が多くなった理由の一つである。『中国地方五県言語地図』の「にわか雨」の解説でも述べられているように，この種の語彙の調査が困難な所似でもあるが，一方，降雨時期，降雨状態などに関する各種の雨の名称や，さらに，風，雪，嵐，雷，霧，霞など種々の気象現象の名称に関する綿密な調査をそれぞれの地域の地勢・気象との関連に注意しつつ各地で行うことによって，本図に現われる語種の性格がしだいに明らかになることが期待される。

256. かみなり(雷)

この図のサマ・サンなどの敬称語尾，および「こどもに対して使う」という注記のある場合に与えた補助符号の扱いに関して，251図「たいよう」，252図「つき」と統一的な処理が施してあり，その内容については，251図および257図「敬称語尾の総合図」の解説を見てほしい。また，この図は255図「ゆうだち」と密接な関係があり，さらに一部には251図「たいよう」，252図「つき」とも共通の語形が見られるが，それらの語形に関して，語形の分類のしかた，符号の色・形を統一してある。

この図は，地図下欄に示した質問文のように「雷が鳴っている」という文脈での「雷」部分の名称を求めたものであり，ほかに，この図に関係をもつものとして，「雷が落ちる」(項目番号123。その動詞部分については95図が，助詞部分については98図が刊行ずみである)の項目があるが，両項目を対照すると，「雷」部分の語形が一致しない地点が多数見られたので，その場合には原則として123の項目の回答もこの図に採用した。たとえば，3733.88では，項目番号120の回答が〔kaminari〕，123が〔oresama otʃida〕と〔raiwa togeda〕との併用であったが，この図ではこれらをKAMINARI, ORESAMA, RAIの3者併用として登載してあり，3765.74では120が〔raisama〕，123が〔resama odogeta〕であったが，このような変種の違いについても，RAISAMA, RESAMAの併用として両者を採用してある。ただし1744.60などの120—〔kaminarisama〕，123—〔kaminari odʒiruɯ〕のように，123の項目にのみカミナリの語形が見られる場合(両項目の差がこの種のものである地点はかなりあった)には，このカミナリを採用しないことにした。これは，123が動詞部分に着目した

調査項目であるため，この項目にのみ現われるカミナリの語形の中には，日常の話しことばの中で使うことがまれである，すなわち120の項目で要求したものとは使用場面・文体の異なるものが含まれている可能性が強いと判断したためである。もっともこの原則を適用したのはKAMINARI（〔kaminari〕のほか〔kamïnarï〕〔kamɨnarɨ〕などの音声変種を含む）の語形だけであって，KAMINARISAMA, KAMINARISAN, KANNARIなどの語形はそれが123の項目にのみ現われた場合にも，これを本図に採用してある。また，0789.95では，123の項目に〔kaminariŋa otʃiru〕のほかに〔raidɜu·ni sakareru〕という表現が見られ，同じ項目で，5750.84では〔raisamaŋa otʃiru〕と〔raidɜinsamaŋa iraʃʃaru〕，5733.02では〔rɛ:samaŋa okkotʃiru〕と〔rɛ:ʒu:ŋa çikkɛ:teiɻu〕であったが，これらの〔raidɜu·〕〔rɛ:ʒu:〕〔raidɜinsama〕は，文脈などから見て，雷の一般称とはやや性格が異なると思われたので，これを本図に採用しなかった。

このように，作図にあたって，質問文の異なる123の項目の回答をも採用した主な理由は，120と123との回答の差の大部分は，音声や語形がゆれている場合に，その一部分がたまたま120あるいは123の回答となって現われているとみるべき地点が多いと判断したためであるが，しかし，中には，両項目間で「雷」部分の名称を意識的に使い分けているケースもないわけではない。たとえば6464.90では，120が〔kaminari〕と〔dondoro〕，123が〔dondorogamiga otʃiru〕と〔dondorogamega otʃiru〕であって，123の項目の注記に「落ちる時は〔dondorogami, dondorogame〕，落ちない時は〔dondoro〕」とあった（本図ではKAMINARI, DONDORO, DONDOROGAMI, DONDOROGAMEの4者併用としてある）。これは，雷に強い畏怖の念をおぼえた時には～カミと言うとの意味にも受け取れるが，このように，120と123とを意識的・無意識的に言い換えるという地点は（具体的な注記はなくとも）ほかにもありえよう。

本図ではKAMINARIに対して＜併用処理の原則＞を適用したが，この原則によって削除したものは全部で94あった。なお，この原則を適用するにあたっては，120の項目の注記（新・上・共・希）のみを対象とし，123の注記は無視した。

さて，本図の語形は，空を与えたカミナリ・ナルカミなどの類，緑を与えたライの類，茶を与えたユウダチ類，橙を与えたカンダチ類，赤を与えたドンドロ・ゴロゴロなどの類，その他に大別できる。

空の類は，動詞「鳴る」「鳴らす」およびそれと意味的に関連のある「とよむ」にもとづく形を要素にもつ語形をまとめた。その大半はカミナリ・ナルカミのようなカミ（神）との複合形である。これらは北海道から琉球南端までの広い地域に分布するが，東北東半から関東にかけてなど，他の類が領域を占める地域では概して分布がまばらである。この類の中ではKAMINARIの語形がもっとも多く，近畿から中国東部，四国，九州北部にかけて集中し，東北ではカミナリにサマ・サンなどの敬称語尾が付いた語形が比較的多いが，北海道はほぼKAMINARIの占有地域と言える。「太陽」や「月」の項目に比べてこの項目では敬称語尾の付かないKAMINARIの語形が多く，これはひとつには，これらの天体・自然現象に対する敬意の差によるのかもしれないが，あるいは，ヒ・ツキのような音節数の少ない語形は敬称語尾などを付けることによって安定した表現とすることが多いという事情があるかもしれない。あるいは，カミということば自体が敬称であるためという見方もできようか。以下，ある程度の分布領域をもつ語形（群）について見ると，KAN～・KAM～・HAN～・HAM～のようにカミナリのミの部分の母音が脱落したもの（これらには，べた符号，もしくはそれに準ずる符号を与えた）は全国各地に小領域をもつが，とくに鹿児島から琉球にかけてはこの種の語形で占められている。この，～N～，～M～の語形の中には，橙を与えた類の中のKAN～の語形（この分布については255図「ゆうだち」も見るべきである）や，後に述べるカムナリなどを含めて，上代の文献に見られるカミ（神）の交替形カム（神）と関係のあるものが含まれている可能性もあるが，一方，中央から伝播したカム・カンとは無関係に，各地で独自にカミナリ＞カンナリの変化が起こる場合もあろう。

なお，KAMNALÏ（〔kamnaᶻi〕2150.07・2150.17，〔kamnalï〕2150.06，〔kamnaɾ〕2068.08をまとめたもの），KAMNYARI（内容は〔kamɲari〕0256.76，KAMNARESAA（内容は〔kamnaresa:〕8353.68）のような～M～の語形は～N～の見出しに含めてもよかったが，KAM(U)NA(A)RI（〔kamunari〕6591.57，6593.30，7381.97，〔kamnari〕6296.27，7266.60，0256.08，0256.89，〔kamna·ri〕0246.97，0257.43をまとめたもの），KAM(U)NARISAN（〔kamunarisaN〕7372.03，7381.97，

7382.58, 7390.70, 7392.33, 8303.84, [kamnarisaN] 7371.93 をまとめたもの), KAM(U)NA(A)R(U) ([kamᵘnaɾᵘ]6286.68, [kamnaɾ]6267.84, [kamn·r] 0257.12 をまとめたもの), KAMUNARUSAN 7391.44 の中のカム～の語形との関連も考慮して, この～M～を分出しておいた。

KAMINAI(～), KANNAI(～), H(W)ANNAI, HANNYA(A)I, HANMYAI のようにカミナリのリ部分の子音が脱落している語形（それらには二等辺三角形の符号を与えた）は, 九州南部から琉球にかけて集中するほか, 佐賀と長崎の五島さらに, 京都 6511.85, 新潟 4678.71, 山形 4659.50 にも見られる。このうち, 8333.03, 9312.42 の KANNAI の内容は[kannae] であるが, これは付近に分布する KANNARE(～) の変化形であろう。また, [kaminaji] 6511.85, [kaminajisama] 4678.71, [haŋŋaji] [haŋŋa:ji] いずれも 1213.76 の[ji] もIに含めてあるが, この[ji] は[ri]と[i]の中間的な発音であるかもしれない。

HANNARI, HANNAR(U), HAMMYAARI, H(W)ANNAI, HANNYA(A)I, HAMMYAI, HANNAMI(I), HANNAMMII, HANNUMI のようなH～の語形(これらには半ぬきの符号を与えた) はいずれも琉球に分布し, とくに沖縄本島の北部付近に多い。KANNA(A)MI(I), GANNAMI, HANNAMI(I), HANNAMMII, HANNUMI のような～MI(I) の語形も沖縄本島に集中する。

そのほか, 凡例の KAMINARI から HANNUMI までの語形の中で, 多少ともまとまった領域をもつ語形を記しておこう。

OKAMINARI(～), OKANNARI(～) 山形南部と山梨などにまとまりが見られる。

KAMINARE, KANNARE(～), KAMNARE～, KANDARE 富山から石川にかけてと宮崎南部から鹿児島にかけて多く, そのほか, 兵庫 6449.19 と宮崎北部 7375.96 にも。なお KANDARE は鹿児島の 8312.75, 8351.65 に。

KANNAT, KANNASSAN, KANNADDON のような促音形は長崎の五島に集中。なお, KAMINAT は熊本 7362.67, 7383.83 に, KAMINASSAN は長崎 7289.31 に, KAMINASSAMA は茨城 5732.73, 5742.32, 長崎 7259.98, 宮崎 8325.03 に見られる。

KANNAN(～) 熊本の天草に集中するほか長崎の五島, 沖縄本島南部にも数地点ずつ見られ, さらに, 熊本北部 7361.17 にも。これと近い関係にある語形としては KANRANSAMA 7347.93, GANNAN 1251.98, KANNONSAMA 8300.80 がある。

KANNASAMA 千葉北部の3地点に。KANNASAA 鹿児島 8331.12 に。これらの KANNA はいずれも隣接する KANNARI または KANNAI の末尾音節が脱落したものであろう。

凡例の NARIKAMI から NAIKANGANASI までは要素の結合順序が「神鳴」の逆「鳴神」の語形である(これらには大符号を与えた)。これらは中国西部から四国の一部にかけて集中するほか青森の下北半島, 秋田北部, 佐賀, 宮崎北部付近にもまとまりがあり, さらに, 石川 4588.98, 5555.09, 長崎の五島 7246.45, 奄美の徳之島 0265.96 にも見られる。これらは分布から見て上代の文献に見られるナルカミの残存である蓋然性が高く, カミナリ類が広がる以前にナルカミ類がほぼ全国を覆っていた時代があるのではないかと思われるが, カミナリの語形もかなり古い時代からナルカミと共存しつつ全国に広がり, しだいにカミナリの方が優性になってナルカミが衰退していったと考えたほうがよいかもしれない。ナリカミという語形については各地で独自にカミナリの転倒によって生ずる可能性もあるが, しかし, この図で NARIKAMI(～) が分布する地域の周辺には概して NARUKAMI(～)の語形が見られるから, NARIKAMI(～)は NARUKAMI(～)からの変化形と考えたほうがよさそうである。その場合ナルカミ＞ナリカミ＞カミナリという変化と,「神鳴る」などの表現からカミナリが生まれ, そのカミナリに牽かれてナルカミがナリカミに変化するケースの両方の可能性が考えられる。なお『時代別国語大辞典上代編』によれば, 万葉集などに見られるナルカミは「ナルという語が上の語句を叙述する役を持っていて, ナルとカミが十分熟合していない例も多い」という。カミナリの古い例としては『和名抄』に「加美奈利乃豆保」(雷の壺),『枕草子』に「神のいたう鳴るをりに, 雷なりのぢん(陣)こそいみじうおそろしけれ」,『狭衣物語』に「神なり」の例が見られる(『日本国語大辞典』による)。

NARAKAMI(～) およびその変化形とも考えられる NAAKAMI は, 佐賀に集中するほか, 中国のナルカミ類の領域内 6348.63, 6413.29, 6423.23, 6452.83 にも

点在する。ナラカミは，一見四段動詞の未然形に名詞が付いた形であるかのごとく見える点に特色があるが，このような語構成の背景については，他動詞「鳴らす」や四段動詞ハル(墾)と同源と言われるハラ(原・腹)の存在(類例として，もぐる——もぐら《土龍》，つく《築》——つか《塚》，なう《綯》——なわ《縄》などが思いあたる)などとの関連について考慮すべきであろう。ほかにナラカミとの関連が考えられる語形には，6423.23 に KAMINAA が NAAKAMI との併用で，また，隠岐 5471.59 に KANNARA がある。なお，NAAKAMI と KAMINAA については，それぞれ NARIKAMI, KAMINARI の R が脱落した形から生じたものである可能性もある(AI が AA になる地域については 37 図「あまい」などが参考になる)。

NARIKAME, NARUKAME のように～KAME の語形は，島根西部，広島西部から山口にかけて見られ，また，KAMENARI は香川 6485.30 と同小豆島 6476.17 にある。そのほか，赤の類の中で DONDOROGAME が岡山 6464.90 と広島 6462.59 に見られ，紺の類の中で HATAGAME が京都北部から福井西部にかけて集中する。カミがカメとなる理由はよくわからないが，『綜合日本民俗語彙』によると神の乗用の亀が石と化したという亀石の伝説が各地にあり，また落雷した大石を雷石と呼ぶ例も多いので，このカメは，あるいは亀と関係があるかもしれない。

NARI は兵庫 6408.15 (注によれば「ナリガナル」のように用いるという)に，ONARI は高知の 6 地点に，NARASI は秋田 3639.49, 3732.73, NARASARI は青森 2772.74 に見られる。NARASARI は尊敬表現ナラサル(＜ナラシアル)の名詞化したものであろう。

KANTUMEE から KANTUYAN までは後部分が動詞トヨムに由来すると考えられる語形である。これらは琉球の宮古に集中するほか八重山の波照間 2095.60 にも KANTUMEE が見られる。この～MEE は沖縄本島に分布する敬称語尾の MEE とは無関係と認めて 257 図「敬称語尾の総合図」では扱わなかった。

緑の類は漢語「雷」に由来すると判断した語形をまとめた。これらは関東から東北にかけての主として太平洋側寄りの地域に集中し，ほかに北海道に RAISAMA，岐阜，福岡・熊本に RAI，熊本 7373.56 に DAI，大阪 6571.15 に HIKODAI，伊豆の三宅島に SINDOORAI と KAMINARISINDOORAI が見られる。『日本国語大辞典』によれば，「しんどうらいでん(震動雷電)」という語(これは「地震と地鳴りと雷と稲妻とが同時に起ったような騒々しさになること」であるという)が浄瑠璃にあり，興味深い。

緑の類のうち，本州の東部に分布するものは RAISAMA, RESAMA, ORESAMA, REESAMA, OREESAMA などのように敬称語尾を伴った語形が多く，RAI などは西日本に分布するものを含めて大部分が併用として現われる。このことは本州東部のライ類は大部分が話しことばとして定着しているが，西日本のものは(東日本の RAI も含めて)文章語的性格が強いことを意味するものかもしれない。現在ライ類が占めている本州東部にも，かつては空のカミナリ・ナルカミ類が分布していたかもしれないが，あるいは 255 図「ゆうだち」の解説や本図の解説の後の方でも述べてあるように，この地域にはかつて「雷雨」ないし「雷鳴」を意味するカンダチ類が広く分布しており，「雷鳴」ないし「雷」の特称として，より限定された意味をもつナルカミ・カミナリ類はこの地域に及んでいなかったために，ライ類が広がりやすかったとも考えられるが，あるいは現在ライ類が分布する地域にかつてはカミナリ類があって，カンダチ——夕立，カミナリ——雷であったが，夕立と雷とをより明瞭な形で区別するために雷はライ類にとりかえたのかもしれない。

緑の類のうち，東北から関東の茨城にかけてのものには RESAMA, ORESAMA, REESAMA, OREESAMA など(～)RE(E)～の語形が多いが，この分布は，28 図「あかい」における～E(E)の分布とほぼ一致する。なお，見出しの RE(E) 部分の内容は大部分が〔rɛ(:)〕または〔ræ(:)〕であるが，ほかに少数の〔re(:)〕〔rẹ:〕を含み，また，〔rɛæ〕〔ræa〕なども REE に含めた。また RAI には，〔rai〕のほか，〔raï〕〔raɪ〕〔raẹ〕〔rae〕〔ræe〕などを含めた。

DAI および HIKODAI は DAI を RAI の変化形と考えて緑の類に含めたが，HIKODAI の場合は付近に緑の類が分布しない点に難がある。この HIKODAI については，太陽を意味するヒコ(「日子」→「彦」に由来するといわれ，251 図「たいよう」にはこの種の語形は現われていないが，『全国方言辞典』によれば伊豆大島にヒゴーサマがあり，『近世上方言語辞典』によれば『鬼一法眼三略』享保16年に見られるヒコサもこの意味の語かという)，夏雲を意味するヒコタロオ(『物類称呼』所載。九州で

用い，当地の彦山に由来するという），甑（こしき）の一種であるヒコまたはヒコダイ（『綜合日本民俗語彙』によれば新潟で用いられる），「彦山」「彦島」「彦根」などの地名は「甑」と由来するとの説（鏡味完二『日本の地名』），あるいは，「光る」のヒカなどとの関連について検討したい。

秋田北部の4地点に見られるRANPUは外来語のランプ（洋燈）との関連も考えられるが，一方，分布および語頭音の類似からライ類とのつながりも考慮して，紺を与えたまま，見出しの位置を緑の類の次に置いた。なお3722.90の注によれば〔rampua odogærɯ̈〕（雷が落ちる）のように用いるという。

茶の類は「夕立」にもとづく語形を，橙の類は「神立」に由来する語形をまとめた。これらは255図「ゆうだち」の方により多く見られる語形であり，いわば255図に分布するものの一部が本図に現われているとも言える。これについては，本来は雷雨の名称であったユウダチ・カンダチが一部の地域で意味・用法を広げたために現在の分布を示すに至ったという見方も可能であるが，あるいは，ユウダチ・カンダチは雷雨から雷鳴（ないし電光）までを含む比較的広い意味・用法を有していたもので，後に雷鳴（ないし電光）の特称としてのナルカミ・カミナリ類あるいはライ類が進出してくるにつれて多くの地域では雷雨と雷鳴とを区別して呼ぶようになったが，一部の地域では両者を区別しない古来の用法を保存しているとみたほうがよいかもしれない。そのほか，ユウダチ・カンダチは本来は雷鳴（ないし電光）現象をもっぱら指したもの（すなわち，ナルカミ・カミナリ類などと同じ性格のもの）であって，その後夕立（雷雨）の方に意味がずれていったという見方についても検討してみる必要はあろう。なお，255図と本図とを対照すればわかるように，夕立と雷とをまったく区別しない地点はそれほど多くはなく，実際には，カンダチアメ（夕立）—カンダチ（雷），ユウダチサメ（夕立）—ユウダチ（雷），ユウダチ（夕立）—ユウダチサマ・ユウダッツァマ（雷），ユウダチサメ（夕立）—ユウダッツァマ（雷）などのように夕立にアメ（サメ）を，雷に敬称語尾を付けるなどして両者を区別する地点が多い。ただし兵庫一帯では両者を区別せずYOODACI，YODACIと呼ぶ地点が多く，具体的には「雷」（あるいは「雷が落ちる」）の項目で「ヨオダチガナル」「ヨオダチガオチル」のように表現すると答えたものが多い。

なお，見出しのKANDACI部分の内容には，〔kandatʃi〕などのほか，〔kad̃atsï〕〔kād̃adzï〕〔kandadzï〕など鼻音化，有声化のあるものを含む。OKANDACI，OKADACI部分にも〔ogad̃adzɯ̈〕〔ogadadzï〕のようなKA部分が有声化したものを含めてある。

OSIGURE，SIGURESAMAはともに茨城南端5782.79にある。これは225図「ゆうだち」の一部が本図に現われているという点で茶や橙の類と性格が似ているので凡例の位置を橙の類の次に置いた。この語形が本図に現われるのは1地点だけであり，たまたまこの地点の話者がシグレの意味を拡大しているという，いわば孤例的なものかもしれない。しかし，その背景には隣接地域に分布するカンダチ（この語形の分布領域はかつてはもっと広かったであろう）が雷雨から雷鳴までの広い意味を有する（あるいは有した）という事情があろう。

赤の類はドロドロ・ゴロゴロなど擬音語にもとづく語形をまとめた。これらは北海道から奄美までの広い地域に分布するが，東北の日本海岸，関東の中・北西部，中国の中央部，九州の北西部などに比較的多く，逆に，この類がまったく分布しない地域もある。この類はドンドロなどD～の語形（それらには原則としてくさび形の符号を与えた）とゴロゴロなどG～の語形（それらには原則としていちょう形の符号を与えた）とに大別されるが，前者は大部分が中国中央部に集中し後者は東日本全域と西日本の岡山以東の地域および九州などに分布するというふうに，比較的明瞭な地域性が認められる。また，G～の語形の多くは併用として現われ，しかも「こどもに対して使う」の注記のあるものが多いが，これに対してD～の語形は単用の地点も多く，「こどもに対して使う」の注記のあるものは少ない。すなわちゴロゴロ類とドンドロ類とは使用場面・使用対象が異なり，前者は幼児語的であり後者は雷の一般称としての性格を有するといえる。D～の語形のうち鳥取付近に分布するものはドンドロケが中心である。鹿児島8330.58のDOROMET，DOROMEDDONの～METの部分は258図「いなずま」で九州南部に点在するHIKAMEKIなどの～MEKIと関係があると思われるが，これについては258図の解説を見てほしい。なお，北海道1719.38にもDONDOROSANが見られるが，この地点の被調査者の両親は愛媛県宇摩郡の出身である。

この図に関連する項目として項目番号121「〔カミナリ〕の音をまねて言うとき，どう言い表わしますか」があるが，結果は全国の大部分がゴロゴロであったので，この項目の地図化は割愛した。121の回答がドロドロなど

〔d～〕の地点は，主として本図でD～の語形が分布する地域のごく一部に見られるにすぎない。

紺を与えた語形のうち凡例の KAMI から KAMSAMA までは「神」を単独で，あるいはそれに敬称語尾を付けて雷の名称とするものである。KAMI は富山から石川・福井にかけての4地点 5557.42, 5566.35, 5566.95, 5576.96 と大分 7368.32 に，KAMISAN は大分 7368.32 に，KAMISAMA は青森 2791.80, 3609.47, 宮崎 7394.14, 熊本 8303.13 に，KAMIDON は宮崎 7394.85 に，KAMU は富山 5557.42 に，KAMSAMA（内容は〔kaṃsama〕は大分 7356.98 に，それぞれ見られる。これらは具体的表現としては文献に例があるように「カミ(ガ)ナル」のように用いるものと思われ，ナルカミ・カミナリなどの語形を生む母体とも言うべきものであるが，現在各地に分布するこの種の語形のすべてがそのような古形の残存とは必ずしも言えないであろう。ナルカミ・カミナリのカミを「神」と意識するならば，それらの語形を母体としてカミ(が鳴る)という表現が生まれうるからである。

HATAGAMI から HATAME までの語形は京都北部から福井にかけて集中し，また NARIHATA が愛媛 7400.11 にある。柳田国男は『方言覚書』の中で「丹波にはたしかハタガメの方言がある。ハタタ神の名残りであって古いと思ふ。秋田の海濱地方で冬雷の鳴る頃に捕られる魚をハタハタといふのも雷から出て居ると思はれる」と記している。

NONOSAMA から TO(O)TOKOSAMA までは主として 251 図「たいよう」や 252 図「つき」に現われる語形である。ただし TO(O)TOSAMA, TO(O)TOKOSAMA はこの図に最も多く，青森南西部から岩手北部にかけて集中する。これらの語形については 251 図の解説も見てほしい。なお，TO(O)TOSAMA は〔todosama〕と〔to:dosama〕を，TO(O)TOKOSAMA は〔to:tokosama〕〔to:dokosama〕〔todogosama〕をまとめたものである。

INAZUMA は北海道 2734.05 に，INAZUMASAMA は岩手 3753.88 に，INABIKARI は岐阜 6517.70, 6610.00 に，HIKARIMON は福岡 7352.14 に見られる。258 図「いなずま」と対照するとわかるようにこれらの地点では「稲妻」と「雷」とを同一表現で呼ぶ場合があり，これは 258 図に KAMINARI, RAI などの語形が見られることと並行する現象である。6517.70 では 258 図が YUUDACI であり，この地域では「夕立」「雷」「稲妻」の表現をめぐる特別の事情があるらしい。なお 3753.88 は本図が INAZUMASAMA, 258 図が ENAZUMASAMA 他であるが，本図の具体的内容は〔enadzumasama〕であり，これは両図の分類の差によるものである。

以上に触れたもののほか，紺を与えた語形としては KAMBARA 5566.51, NEKO 6349.09, TENGOROOZYA 0247.31, HESONUKI 4710.18（これの具体的内容は〔Φɕesonugɯ〕である），ERIKI 4771.92, 5559.51（このうち，4771.92 の内容は〔ɐrïgï〕）がある。このうち NEKO には ＜今は言わない＞，TENGOROOZYA には＜古＞の注記があった。ERIKI は2地点とも 123 の項目（雷が落ちる）から採ったものであり，具体的には 123 の項目で 4771.92 は〔ɐrïgi kagarŭ〕，5559.51 は〔erikiŋa otʃiru〕と報告されたものである。

257. 敬称語尾（さん・さまなど）—第 251（太陽）・252（月）・256（雷）図の総合図

251 図「たいよう（太陽）」，252 図「つき（月）」，256 図「かみなり（雷）」の各図に多く現われる「サマ」「サン」などの敬称語尾をとり出して，その分布を総合図として示したものである。「オ」などの敬称接頭辞や「ノンノンサマ」「アアトオサマ」などの敬意表現を含め，これらの項目に敬意要素が多く見られるのは，天体，自然現象を崇拝，畏敬の対象とする伝統的意識にもとづくものと思われる。なお，本図の分布は，あくまでも上記の3図に現われる敬称語尾の分布であって，たとえば人名や人称代名詞に付いた場合などを含めた，敬称語尾全般の分布と一致するとは限らないという点に注意しなければならない。

本図に見られる見出し語形のうち，特殊な内容を含むものについて説明しておこう。なお，見出し語形のまとめかたは，251 図・252 図・256 図および本図を通じて統一してある。

SAMA には〔sama〕のほか，〔ʃama〕と〔sa·ma〕とを含めた。〔ʃama〕は「太陽」の項目にのみ現われ，岩手東部の計 18 地点（3724.96, 3725.77, 3726.25, 3736.03, 3767.18, 3775.11, 3776.97, 3777.32, 3777.48, 3777.86, 3785.68, 3787.50, 3795.19, 3795.86, 3796.06, 3796.48,

3796.95, 4704.96)に集中的に分布し,〔sa·ma〕は3747.91に見られる。以下特殊な内容を含むものは次のとおり。

CAMA	〔tsɯ̈ma〕4721.36を含む。
SAN	〔ʃaN〕7381.38(具体的には〔mamaʃaN〕〈月〉)を含む。
SAÃ	〔saĩ〕のほか,〔sawã〕7248.15を含む。
SAA	内容はすべて〔sa:〕。
HA	内容は〔hã〕。
GANASI	〔ganaʃi〕のほか,〔ganasĩ〕0276.50, 2067.52, 2068.08,〔ganatʃi〕2072.20,〔ŋanatʃi〕2072.20を含む。
MEE	〔me:〕のほか〔mɛ:〕1271.20,〔mɜ:〕1260.87を含む。

なお,251図・252図・256図で琉球に分布する語の中には,本図で採りあげたもののほかにも,敬称語尾を含むのではないかと疑われるものもあるが,確実でないものは,本図で扱わないことにした。この点については各図の解説を参照されたい。

次に,符号の与えかたについて説明しよう。本図は,それぞれの地点で,どの見出し語形がどの図に現われるかを示したものであり,その見出し語形の前部分がどんな語形であるかを知るためには,251・252・256の各図と対照しなければならない。たとえば,6446.69では251図がOHIISAMAとTAIYOOの併用,252図がOCUKISAN,256図がKAMINARISANとYUUDACIの併用であるが,この場合,本図では,SAMA(251)・SAN(252・256)・敬称語尾なし(251・256)の3者併用として示してある。

符号を与えるにあたって,それぞれの地域にどの敬称語尾(「敬称語尾なし」を含む)が現われるかという点がまず読みとれるよう配慮し,その敬称語尾がどの図のものであるかという点については二次的に扱った。そのため,まず,それぞれの見出し語形に類似の形の符号を与え,それがどの図に現われるかという点については,符号の濃度(半ぬき・ぬき・べた)や符号の向きなどで区別して示すことにした。

次に,それぞれの見出し語形についてその分布の概略を述べ,少数地点にしか見られない語形については,その地点を記しておこう。

全国を見渡して最も目だつのは,SAMAとSANとの地域差であろう。大ざっぱに言えば,SAMAは本州の東半のほか中国西部から九州北部にかけて多く見られ,SANは近畿から中国・四国にかけての地域と九州中央部に独自の領域をもつほか,山梨,静岡東部などにも,ややまとまった領域が見られる。西日本のSANは,岡山,愛媛西部,高知の一部,山口西部から福岡北部にかけて,島根・広島・山口の県境付近,近畿と中部・北陸の県境付近などでSAMAと併存しているほかは,おおむねその地域を独占しており,これに対して,東日本では,SAMAとSANとの併存地域が比較的多いものの,青森,山形・福島・茨城・埼玉・千葉・東京などでは,大部分がSAMAであり,SANはまったくないか,あっても少数である。

SANはSAMAの変化形で,SAMAより後に生まれた語形であろうから,SANが国の中央に分布し,SAMAがその両側に見られるという本図の分布傾向は,SAMAとSANとの歴史的関係を裏付けるものとも言える。ただし,先に述べたように,人名などに付くSAMA,SANの分布が,本図の分布と一致するとは限らないし(おそらく,敬意度の違いや場面差・用法差などを伴いつつ,SAMAもSANもほぼ全国で使用されているのではないか),また,敬称のサマと語源が同じと言われる,方向をあらわす格助詞のサンやサの分布との関連も考慮する必要があろうから,本図の分布だけからSAMAとSANとの歴史的関係を判断することは危険である。もし,SAMAとSANとの分布に関して他に十分な資料が得られるなら,たとえば,SAMAの後を追ってSANも全国に広がったが,東北の大部分や九州の一部などではSANが別の意味・用法に分化し,本図には現われないという見方も可能になるかもしれない。また,中央から伝播したSANとは直接関係をもたず,地方で独自にSAMAがSANに変化することもありうる。

HAMA, HAN, HÃのようなH～の語形は,西日本の一部にややまとまりが見られるほか,各地に点在する。このうちではHANが多く,HAMAは岩手4705.53に,HÃは福島4773.26に1地点ずつ見られるだけである。HANは兵庫と香川に比較的多く,そのほか,山形4619.63,福島4773.15,富山5538.49,5539.43,5547.96,福井5576.60,奈良6563.84, 6572.29,和歌山7500.66,愛媛7402.47,熊本7372.96の各地に点在する。このうち,兵庫のものはTENTOHANまたはOTENTOHAN(いずれも太陽)であり,香川のものは大部分がDONDOROHAN(雷)であった。ハンの本場

と思われる京都・大阪にまったく見られないのは意外であるが，これは，文体差・用法差によるものであろう。なお，東北のものは「ソーダ(然りの意)」をホダ・ホンダと言うような s>h の現象のひとつとして現われるものであろう。

次に，CAMA, CAN, TAN の3語形について述べる。CAMA は本州中央部の長野・岐阜付近（隣接する新潟・群馬，愛知にも）に集中するほか，山形の数地点および岩手 3736.58, 3745.62 と宮城 4714.22 に見られる。CAN は兵庫に集中するほか，山形 4720.17, 長野 5633.45, 愛知 6547.09, 6548.02, 6548.82, 島根 6430.26 に見られる。TAN は大阪 6542.71 と兵庫 6449.84 の計2地点にある。CAMA, CAN, TAN は，251図・252図・256図の凡例を見ればわかるように，前部分との結合部分が，KONNICCAMA, KONNICCAN, KONNITTAN(以上，太陽)，ATOCCAMA (月)，YUUDACCAMA, IDACCAMA, YOODACCAN, KANDACCAMA, KADACCAMA (以上，雷)などのように，すべて促音の ～CC～，～TT～ であることが注目される。これに対して，SAMA, SAA, SAA, SAN については，その結合部分が OHISAMA のような非促音の場合と，OHISSAMA のように促音の場合との両方がある。そして，～CC～，～TT～，～SS～の3種の促音形についてその前部分の語形が何であるかを見ると，～CC～，～TT～ の場合は，コンニチ，ユウダチ，カンダチ，アトのように，末尾音節が「チ」または「ト」の語形であり，これに対して～SS～の場合は，「ヒ」(OHISSAMA, OSSAMA など)，「ツキ」(OCUSSAMA, OCUSSAA, OSSAMA など)，「カミナリ」(KAMINASSAMA, KAMINASSAN, KANNASSANなど) のように，末尾音節が「ヒ」「キ」「リ」の語形が多いという傾向が見られる（「太陽」の OKONNISSAMA,「雷」の YUUDASSAN, YODASSAMA は例外)。このことから，～CC～，～TT～ の促音語尾は，その前部分の末尾音節の性質にひかれて現われるもので，～SS～ の一種の音声変種とも考えられよう（東京方言のオトッツァンやゴッツォオサンなどの〔～tts～〕も同様の事情によるものであろう。)

CYAMA は5683.61に見られるのみであり，具体的語形は256図「かみなり」の OKANDACCYAMA である。CYAN は 5655.41 に NONNOCYAN(月) が，6411.33 に KONNICCYAN(太陽)，6561.49 に MANMANCYAN(太陽・月)，7312.11 に MANMANCYAN(月)がそれぞれ見られる。このうち，NONNOCYANと MANMANCYAN には，いずれにも＜子どもに対して使う＞と注記されているが，OKANDACCYAMAと KONNICCYAN には，この注記はない。後の2者の～CCYA～ は，先に述べた～CCAMA，～CCAN の場合と同様に，前部分の末尾音節〔tʃi〕にひかれて現われたものかもしれない。

SAÃ は長崎 7248.15 と鹿児島 8341.12 に見られ，SAA は鹿児島に集中する。これらは，分布から見て，ASN の転じたものではなく，SAMAからの変化形と考えたい。

DONO および DON は，九州南部，とくに鹿児島に集中し，やや離れて長崎の五島にも見られる。ただし大部分が DON であり，DONO は宮崎の 7395.25 に見られるだけである。甑島の2地点に見られる DONSAMA は珍しい表現だが，その具体的語形はいずれも HIDONSAMA であり，これは，HIDON が多用された結果，DON を敬意表現とする意識が薄れ，そのため新たに敬称 SAMA を付けたものであろう。

GANASI および MEE は琉球に見られる。『沖縄語辞典』には，「ʔaziganasii(按司様)，ʔusjuganasii(国王様)，'waʔujaganasii(わが親御様)」「ʔajaamee(奥様)，'jacimee(ぼっちゃま)」などの例が引かれている。ただし，本図では沖縄本島に GANASI が見られない。MEE は252図「つき」のみに，ATTOOMEE, TOOTOOMEE として現われる。

「敬称語尾なし」は全国に万遍なく見られるが，東北では分布がまばらな地域が目だつ。これに対して，琉球では分布がとくに密であり，しかも，3図ともに敬称語尾のない地点が大部分である。敬意表現が発達しているといわれる琉球で，「太陽」「月」「雷」の敬称に関して本土と対立する傾向を示すのは，何か特別な事情があるのかもしれない。

全国的に見て，「敬称語尾なし」のうち，256図「かみなり」にだけ敬称のない地点が最も多いが，これは，256図で広く分布するカミナリ類の中に，KAMINARI, KANNARI など，敬称のない語形が多いことによるところが大きい。東北地方に「敬称語尾なし」が少ないのも，526図で，この地域にライサマ・オライサマ・ゴロゴロサマなどカミナリ類以外の語形が多いことと関係があ

る。近畿から中国にかけて，さらに四国の一部などでは，SAN (251・252) と「敬称語尾なし」(256) との併用地点が著しく多く，岐阜北部から富山・石川にかけての地域や山口などでは，SAMA(251・252)と「敬称語尾なし」(256)との併用地点が目だつ。

以上，それぞれの見出し語形についてその分布の概略を述べた。このほかにも，各種の敬称語尾(「敬称語尾なし」を含む)の分布，あるいはそれらの組み合わせのパターンに一定の地域性が認められるものがあるが，この点については，各図を対照し，敬称語尾の種類とその前部分にあたる語形との関連を比較考察するなど，一層の検討が必要である。なお，本図では敬称接頭辞「オ」はとりあげていないが，これについても本図と同様の総合図を作成してみれば，項目間，あるいは語形間の敬意表現の違いを，さらに明らかにすることができよう。

258. いなずま(稲妻・電光)

調査票に「雷鳴を伴わないものについても答えた場合は注記」と指定したので，この種の注のある語形が多かった。そこで無音電であることを明記してある語形にはぬき符号を与えて，そのほかの語形との区別を地図に反映させた。たとえば，凡例の最初に INAZUMA の見出しが2度現われるが，このうち，ぬき符号を与えたもの(見出し語形の右肩に*のあるもの)には，この注記があることを示す。ただし，「雷鳴の有無にかかわらず使う」と答えたものや，無音電を指している可能性もあるがそれと明記していないもの(「稲の穂の出る頃に光るもの」「秋の夜に遠方で光るもの」「秋光るもの」「夜光るもの」「遠方のもの」「雨を伴わないもの」など)は，本図で無音電として扱っていないので注意してほしい。言いかえれば，見出し語形の右肩に*印のないものは，「注記のまったくないもの」「雷鳴を伴うものと明記してあるもの」「注記はあるが雷鳴の有無には触れていないもの」の3種類のものを含むことになる。なお，上の例のような，無音電に準ずる注記は，全国で計30例弱あった。その具体的内容を知るためには『日本言語地図資料』を見なければならない。

また，この項目では，ヒカル，ヒカッタ，ヒカラシタなど動詞形のみを回答した地点がかなりあり，名詞形と動詞形の両方を答え，「古くは動詞形しかなかった」と注記した地点も多かった。この項目は「稲妻」にあたる名詞形を求めたものであり，このような動詞形は本来ならば「無回答」ないし「その他」の中に含めるべきものであるが，その分布には地域性があり，また，ヒカリ，ヒカリモンなどの名詞形の分布とも関連するところがあるので，本図ではこれらの動詞形にも符号を与えて地図に登載することにした。ただし，「イナビカリガヒカル」などはその名詞部分イナビカリのみを採用してある。

本図ではイナズマとイナビカリのいずれを標準語形と認めるか決めがたいので<併用処理>は行っていない。なお，「新」「上」「共」「希」の注記のあったものはイナズマ類，イナビカリ類，ともに，それぞれ50個強ずつであった。

凡例の INAZUMA から HINABIKARI までは，イネ(稲)およびその変化形を要素にもつ語形，さらにイナズマのイネまたはツマと意味的につながりをもつ語形を並べた。このうち全国に広く分布するイナズマ類とイナビカリ類にはそれぞれ赤と空を与え，その他のイネ～などの類には紺を与えて，凡例の位置を赤の類と空の類の間に置いた。

赤のイナズマ類と空のイナビカリ類とは分布が錯綜している地域も多いが，イナズマ類は国の東西に分かれて分布する傾向があり，これに対してイナビカリ類は近畿を中心に東西に勢力を伸ばしつつあるようにも見える。この分布はイナズマがイナビカリよりも古いことを示すようにも思われるが，鹿児島や琉球の一部など赤の類の外側にも空の類が見られること，全国的に見て両類の地域差は必ずしも明瞭ではないこと，などから断定はできない。イナズマ類，イナビカリ類が各地で独自に発生する可能性をふまえて，なお検討すべきであろう。イナズマよりもイナビカリの方が独自発生の可能性が強いのではあるまいか。文献例としては『時代別国語大辞典上代編』によると，『金光明最勝王経音義』に「霹靂」の訓としてイナビカリ，『和名抄』に「電」の訓としてイナビカリ・イナツルビ・イナヅマが見られ，『和名抄』には「電之光也」とある。

イナズマ(いなづま)は「稲の配偶者」の意であって，この命名は農民などの間で稲妻によって稲が実る（受胎する）と信じられていたことによると言われる。INAOTOKO 5567.46, INENTONOZO 8352.40, WASENTONOZYO 8314.52, YUMENTONOZO 8342.35, TANAGOTEDON 8300.80, INEHARAMASE 4701.73, INACURUBI 5472.91 の表現も，稲妻に対す

るこのような観念を背景にして生まれたものと言えよう。TANAGOTEDONは「田の御亭主殿」の意と思われる。INENOOBASAN 6456.73のように電光を女性とも見ているらしいものとしては，5651.95のINAZUMAの注記に「稲にチチをくれるため光ると言われる」とあり，また，4696.82の注記には「〔enabikari〕が父，〔enazuma〕が母で光り方もやさしいという」などがある。なお，INEHARAMASEの内容は〔neharamaΦɕe〕であって，注記に「稲孕ませの意」とあったものである。

このようにイナズマ，イナビカリの表現は日本の稲作文化の発達と密接な関係があって，稲作が普及する以前には電光現象に対して特に注目することなく，したがってそれに対する名称も発達していなかったとも考えられる。この項目に，ヒカリ，ヒカリモン，ホデリ，あるいはヒカル，ホテルのような，電光の特称とは言えない漠然とした表現が多いという事実もこのような歴史的・文化的背景と関連させて考えるべきであろう。なお，村山七郎はイナビカリ，イナツルビ，イナヅマのイナは「光」を意味する南島諸語に由来するとし，「イナ・ツルビは稲と関係があるように考えられてきたが，むしろ逆に夏の植物であるイネは「日光」にちなんで名付けられた植物名ではあるまいか」と述べている（国語学82「しなてる・てるしの考」）が，仮にイネの語源を「光」を意味する語と結びつけうるとしても，イナビカリ，イナズマ，イナツルビなどの語が生まれる時点では，そのような語源意識は薄らいでいたかもしれない。

「雷鳴を伴わない」という注記のある語形はイナズマ類とイナビカリ類とに比較的多く見られるが，全体としてそれほど多くはない。この種の注記のある語形は，併用が多く現われる地域の中で，山形・新潟・長野・静岡，山口，さらに九州各地などに比較的多いようである。イナズマ類とイナビカリ類のいずれが「無音電」かという点について明瞭な地域性は認められないが，長野中央部，静岡北東部付近，佐賀から長崎北部にかけて，熊本から宮崎にかけてなどではイナズマ類に，山形北部，山口東部，大分北部などではイナビカリ類にこの注記のあるものがややまとまりを見せている。新潟，福岡南部，鹿児島などでは，イナズマ類の「無音電」とイナビカリ類の「無音電」とが混在するようである。

イナズマ類，イナビカリ類の中でENAZUMA，ENABIKARIなど語頭がEの語形（これらは〔e〕〔ẹ〕などをまとめたものであるが）は，主として福島・茨城，長野北部，富山・石川以北の地域に見られるほか，出雲付近の数地点にも分布する。ただし，北海道・青森・秋田・山形では全くないか，あっても少ない。この分布は，たとえば，153図「いと（糸）」におけるETO，EDOなどのE～の分布とほぼ一致するようである。

イナビカリ類の中で目立つ分布を示す語形について述べると，まず，主に鹿児島から宮崎にかけてINABIKAIが集中する。これは256図「かみなり」でこの地域にKANNAIが分布することと並行するものであるが，256図ではこの地域にKANNAIのほかにKANNAREも多数分布するのに対して，本図でイナビカレのような形の語形は皆無である。INABIKAIに隣接してINABIKAR(U)，INABIKATが見られるが，このうちINABIKAR(U)は〔inabikar〕〔inabikal〕〔inabikaɾ〕のほか，〔inabkaɾ〕6412.91，〔inabikaɾᵘ〕6286.68，〔inabikaru〕7371.54をまとめたものである。

凡例のINAPIKARIからENAPIKAまで，およびNNAPIKALIからNNAPIKARAまでは～PIKA(～)の語形であるが，これらは秋田から青森にかけて，茨城から福島・宮城にかけておよび八丈と琉球の宮古に多く見られるほか，北海道，岩手，新潟にも点在する。

また琉球の宮古に分布するものは，すべてNNA～の語形であるが，その内容は〔nna～〕〔mna～〕〔ʔnna～〕〔ʔmna～〕であった。〔m〕の見られる点，おもしろい。

茶の類のうち凡例のHIKARIからSANMAPIKARIまでは，ヒカリ，ヒカリモノなど，その意味範囲が比較的広く，必ずしも稲妻の特称とは限らないと思われるものを中心にまとめた。また動詞形HIKARUは茶を与えて，見出しの位置を凡例の末尾付近に置いた。

茶の類の中である程度まとまった領域をもつものは，関東に勢力をもち，宮城，愛知，岡山，高知にも見られるOHIKARI(～)の類，九州北部に多く，そのほか，神奈川以西の地域に点在するHIKARIMONO，HIKARIMON，HIKAIMONなどの類，全国各地に点在するが，新潟や九州南部などに比較的多いHIKARIおよびその変種のHIKAI，新潟や中国西部などにやや多く，そのほか全国に点在する動詞形HIKARUなどである。

全国を見渡して，茶の類には「無音電」を指す語形が非常に少なく，また，動詞形HIKARUは「無音電」のイ

ナズマ類またはイナビカリ類と併用である地点が多いことが注目される。HIKARU 以外の茶の類でもそれが併用として現われる地点では，併用の相手が「無音電」のイナズマ・イナビカリ類であることが多い(九州北西部，新潟など)。これは「無音電」はイナズマまたはイナビカリと言い，雷鳴を伴うものはヒカル（ヒカッタ，ヒカラシタなど）としか言わないと回答した地点，あるいは HIKARIMON, HIKAIMON, HIKARI などには注記がなく，それらと併用の INAZUMA, INABIKARI などは「無音電」と回答した地点が多いことによる。なお，5508.19 の INAZUMA, 3619.58, 3740.29, 4628.28, 5556.84, 5792.62, 6480.41, 6504.01 の INABIKARI はいずれも無音電の語形しか回答されていないが，これらの地点を含め，ヒカルのような動詞形の表現はより多くの地点に存在しうることに注意する必要があろう。ただし動詞形 HIKARU がヒカリモン，ヒカリなどの名詞形に隣接して現われる傾向があることにも注目すべきである。

このような茶の類の分布や注記などから判断すると，イナズマ，イナビカリなどの「稲」と関係する語形は，その発生当初はもっぱら「秋の夜空に雷雨や雷鳴を伴わずに光るもの」の名称として用いられ，夏に多い雷雨時の電光に対する名称は古くは存在せず，その傾向が現在でも一部の地域，地点に名残りをとどめているものと思われるが，先に記した上代の文献に見られる用例や本図の分布などから考えると，そのような雷鳴の有無に関する区別は，おそらくかなり古い時代から混乱し，また，地域によっても事情が異なっていたであろう。

PIKARI 2095.60, PIKKARI 7380.74, PIKARU 2067.52, PIKARAA 2067.52, PIKKARISAN 6642.58, PIKKAIDOO 7266.09 のうち琉球に分布するものは別として，本土のものは，BIKKARI 5595.89, 7268.87 や，後に述べるヒカヒカ，ピカピカなどの類とともに，擬容語的な性格をもつものかもしれない。これはイナビカリ類の中に ～P～ の語形が多い事実とも関連して考えるべき現象であろう。なお，PIKKAIDOO の DOO はドノ(殿)の変化形であろう。隣接地点に HIKAIDON があり，257 図「敬称語尾の総合図」でもこの地域に DON が分布することがわかる。

琉球の伊江島 1231.72 の TICCYAYA(内容は〔t'ɨtt'-ʃaja〕)は，本土のヒカリ類に対応するものと判断して茶の類に含めておいた。生塩睦子「琉球伊江島方言の実態」(『方言研究の問題点』所収)によれば，この方言では標準語の語頭の「ヒ」に〔t'i〕，標準語の「i」に先立たれる「カ」に〔t'ʃa〕が対応する例がある。

HIKAMEKI 8393.69, 9303.88, HIKAMIKI 8300.80, HUKAMIKI 8300.80 の後部分は，接尾辞の「めく」に由来するものと思われる。前部分の HIKA などは隣接地点にも見られる HIKAHIKA 6428.91, 6437.94, 6447.08, 6474.50, 7269.51, 8320.98, 8372.87, HIKAHIKASAMA 8360.39, HIKAHIKADON 8341.12 などとも関係をもつものであろう。このような擬容語的表現としては，ほかに PIKA 7257.94, PIKAPIKA 6470.59, 6472.58, 6586.32, 7312.11, 9322.52 があるが，PIKA は，〔pikari〕〔pikai〕などからの変化形かもしれない（PIKA の隣の地点は PIKKAIDOO である)。なお，6586.32 と 7312.11 の PIKAPIKA にはそれぞれ「幼」および「子」の注記があった。

TATEBIKARI 5770.11, 7364.34, TATEBIKAI 7340.74, TACIBIKARI 4750.76, 5508.16, YOKOBIKARI 4750.76 は稲妻の形状を具体的に表現したものである。このうち 5770.11 のものには「落雷の時」の注があった。5741.66 の KACUUPIKARI, SANMAPIKARI も特殊な表現であるが，これは「雷鳴の伴わぬものは，季節により，鰹のとれる時は〔kazɯ̈:pikari〕，秋刀魚のとれる時は〔sammapikari〕という」とあったものを採用したものである。

橙の類は動詞ホテル，ホデルおよびその名詞化したホデリなど，テル，テリおよびその変化形を要素としてもつと考えられるものをまとめた。ホテルの語源が「火照る」であるとすれば，これが「稲妻」に関する表現として使われる理由がうなずかれよう。この類の大部分は琉球に分布するが岩手 3787.45, 3797.32, 宮城 4726.80, 宮崎 7396.16 に HODERI が，また動詞形では HOTERU が大阪 6571.15, 三重 6595.90, 高知 7470.72 に，HODERU が岡山 6475.27 に分布することが注目される。『全国方言辞典』によれば，「稲光がする」の意味のホテル，ホデルは三重県志摩郡のほか淡路島にもあるという。HINADERI 7239.41, 7248.49 の HINA は空を与えた HINABIKARI 6634.32 の HINA とともに「稲」の意であると思われる(なお，このヒナは古い文献に現われるヒネ，シネとの関係も検討すべきか)が，あるいは「火」とのかかわりも考えてみるべきかもしれない。HOTTEN 8248.18 は調査者の注に「ホテリの訛

か」とあったので橙の類に含めておいた。八重山の黒島2085.69に見られるMINAPUTIR(U)のMINAもあるいは「稲」かと思われるが，黒島における「稲」を意味する語は『採訪南島語彙』では〔mai〕，『琉球先島方言の総合的研究』では〔ʔini〕とあるので，なお検討を要する(先に記した村山七郎「しなてる・てるしの考」では，ミナミ—南—のミナとイネ—稲—とを関係づけて考察している)。PICCYAIPUDUI 1213.76のPICCYAIの部分はヒカリ(光)にあたるものであろう。

凡例のKAMIBIKARIからRAIまでは「雷」もしくは「夕立」の名称とかかわりをもつ語形である。なお，本図では〔kaminari〕〔kannare〕〔kannari〕〔kannai〕，あるいは〔kaminarisama〕〔kaminarisaN〕〔kaminaidoN〕などの変種を分出せず，すべてKAMINARIの見出しに含め，同様に，〔ju:datʃi〕〔jo:datʃi〕〔jodatʃi〕などもYUUDACIとしてまとめてあるので注意してほしい。DONDOROについても同様である(RAIはその内容が〔rai〕のみであった)。このうち，KAMINARI, YUUDACI, DONDORO, RAIの語形は主に「雷」あるいは「夕立」の名称として使われるものであって，したがって，これらの語形が分布する地点の中には，「雷」あるいは「夕立」と「稲妻」とを区別しない場合があることになるが，それぞれの地点について255図「ゆうだち」256図「かみなり」258図「いなずま」と対照すると，たとえば本図のRAI 5568.22, 8303.70のように，それが本図にだけ現われる場合がある。このような地点でその語形がはたして「稲妻」の特称であるか，それとも実は「雷」の名称でもありうるがなんらかの理由で256図では回答されなかったものかどうかについては，何とも言えない。また，これらの語形は，「カミナリガヒカル」「ヨダチガヒカル」「ドンドロサンガヒカッタ」などのように動詞形を伴って使うと回答したものを多数含んでおり，このような，必ずしも「稲妻」の特称とは言えない表現は，動詞形のみを回答した地点や「無回答」の地点と類似する性格のものであることに注意すべきである。なお，KAMINARI, YUUDACI, DONDORO, RAIは，動詞形や無回答の地点と隣接して分布する傾向が見られること，そして，このような「稲妻」の特称が未成熟の地点にある程度の地域性が認められることにも注目すべきであろう。

HIKARUからHIGAKAKUまでは動詞形の回答をまとめた。HIGAKAKUは隠岐5471.59に見られるが『島根県方言辞典』には，「ふがかく」の見出しで「稲光りがする。隠岐全域」とある。なお，同辞典によれば「稲妻」の意味の「ふがかり」が隠岐で用いられるというが，本図には現われていない。粟島4637.20のSUKAKIは内容が〔sɯgagi〕とあったものであるが，1図「カガミの-G-の音」，2図「カゲの-G-の音」，4図「スイカのKA-の音」などに見られるこの地点の音声からこの〔-g-〕を有声化と判断して見出しを～K～としておいた。この語の由来は不明であるか，あるいは隠岐のヒガカリと通ずるものかもしれない。

AKKAN 7390.70には「<明(あか)り>が語源か」との注があった。HIBASIRA 6449.20, 6484.78には6449.20に「流下するもの」，6484.78に「光る中の線状の裂けめのような強い光でピカリと光ってそこらを明るくするもの，(イナビカリ)に相当する語はなかった」との注があった。タテビカリ，ヨコビカリなどと同様，「稲妻」の具体的形状に対する名称と思われる。

259. にじ(虹)

これは全地点で調査したものである。

全国広くNIZIである。しかし，どちらかというと，中国地方以西には広がりが遅いように見える。

古い文献では「弩自」(万葉)とある。ヌジであろう。「弩」という文字は，弓という意識があって使ったかどうかはわからないが，関係があるかもしれない。このNUZIは，琉球諸島にも見える(3地点)が，また，千葉に1地点あり，あと東北地方に点々と計4地点ある。NUUZIは沖縄に主として分布し，そのほか宮古，宮崎，伊豆大島にも1地点ずつ分布している。これらの分布からして，この語形は相当古いものではないかと思われる。NUUZYAA, NUUZINなどもこの類であろう。上のNUZIも含めて，東北地方に見られるNUZUは，この系統なのか，〔ï〕～〔ɯ̈〕の混同によるNIZIと見なすべきなのか，ちょっと見当がつかない。

中部地方以北には，これと重なって，もっと濃くNOZIが見られる。これは重なり合って，東日本の残存物として考えられる。NOZIは青森にまとまって分布している。NOOZIは琉球諸島に主として分布している。琉球には，なおNOOZYAA, NOOZINがあり，これはNUUZYAA, NUUZINと平行する。NUUZIRIはないが，NOOZIRIは琉球にある。NOZUが

岩手，山形にまとまって分布するほか宮城にも多少あり，NOOZU は岩手に分布している。また，NONZI は北海道南部，青森・秋田・山形（1地点）に分布しており，NONZU は山形に散在するほか，岩手に2地点ある。琉球の NUZI は，本土の NOZI に対応するものかもしれないが，東北の方では NOZU 以下，ズーズー弁によるなまりであり，この類のことは，この NO～に限らず，多くのものに見られる。なお，本土では重なっているが，琉球では，NO～よりも NU～の方が本土から遠い方にあることは注目していい。NU～の方が古いのであろうか。

NOZI は北から中部地方の東部にまであるが，NEZI は，中部地方の西部や新潟地方にあり，その他にも少しある。NEZI の方が NOZI より新しく都の方から進出しているように見える。岐阜・愛知に相当強固な NEZI の地域があるのは，近畿にも昔は NOZI があったものが，次の NEZI に消されたものではあるまいか。関東地方，近畿地方は NIZI が割に強い。関東地方の NIZI も新興勢力であろう。こうして，NIZI が以上のものよりも比較的新しいことを思わせる。

NIIZI と第1母音が長くなるのは，北海道，八丈島に1地点ずつある外は九州に散在している。（NIZII と第2母音の長いのも兵庫1地点の他，九州2地点である。）

NIIZI のように長い母音を持つものは，北陸，和歌山，山陰から九州北部，四国などに MYOOZI を代表としていくつかある。代表形の MYOOZI は西日本での古い形として考えられそうである。西の方ではこのように長い母音を使っていたものであろう。NUUZI は前にも述べたように琉球が主である。MYOOZI の主として外側（兵庫，広島，高知，長崎など）に MYUUZI があるから，MYUUZI の方が古いと考えられる。ここでも，母音Uの方が O より古いことになる。なお，MYOOZIN は鳥取・兵庫，石川などに計8地点あるが，「明神」と関係づけているかもしれない。この類には MYOOZU（能登先端部に1地点），MYOOZYO（能登半島），MYOOZYOO（福井，山口，高知に各1地点）などがある。

M～が語頭にくる語形は西日本に多いが，東北にもわずかながら（MIZI，MIZU など）あり，この形が古いものであることを示しているようである。これは能登半島の北部に MEEZI が分布していることもこの見解を支持するものであろう。

MYOOZI に接して NYOOZI 5566.35 があり，NYOOZYO 5621.43 があるが，これらは MYOOZI と近くにある NIZI との接触によって生まれたものであろうか。MYUUZI の近くに NYUUZI が，MYOOZI よりは多く大分にまとまりを持ち，四国，長崎にも散在している。これも MYUUZI と NIZI との接触によるものである可能性がある。

BYOOZI，BYUUZI は，広島から出雲にある。この B～はおそらく M～からの変化であると思われる。BYOBI 6402.53 の～BI は同化によるものであろうか。BYOOBU 6430.26 もこれと関係があろう。この2つは近くに位置している。

RYUUZI，RYUUSI は九州に見られる。また RYOOSI は山陰にある。これらは「龍子」という民間語源に支えられて存在しているものと思われる。そのようなことを注記で述べている調査者もあった。ZYUUZI などや YUUZI が九州で RYUUZI の近くにある。ZYUUZU もこの類である。R～は Y～や Z～とよく交替することがあり，これは 94 図「オチルを"下車する"の意味で使うか」などにも ORIRU～OZIRU としてあらわれている。この R～と関係があると思われる。YOOZI 1251.04，YUUZI 7257.94，8303.13，8303.70，YOOKAN 6484.43 などは，凧，風，雨，つゆなどに関係があるかもしれない。143 図「たこ」，254 図「つゆ」などを見てほしい。

RYUUSI，ZYUUSI などという～SI は，NISI など～SI となる九州南部と接している。これは，この地方の無声化の傾向を示すものであろう。なお，NISI は茨城にも1地点ある。九州南部では NISI となったあとにさらに語尾の母音を失って，NIT などとなる地点も出てきている。NIZI の第2音節の不安定の故に，NIHI 8313.72，NICI 6535.73，7392.94，NIICI7372.96，NIN 7275.84 など主として九州地方にいくつかの変種が見られる。NIRI 6581.36 の～RI は～ZI の変種であろう。上にも述べたように，R と Z はしばしば混同がある。また，～T は NO～の場合にも，NOT，NOOT として奄美にあらわれている。

ZIZI 8373.43，ZISI 8331.17，8372.47，8373.43 などは，上に述べた ZYUUZI がこの南九州地方で長母音の不安定から短化して，ZYUZI 7374.75，8302.19，熊本に分布する ZYUZU などとなり，それからさらに出たものであろう。ZYUZIRO 8302.55，ZUZU 8300.80

もこの類である。第2音節の不安定から ZYUCU 7371.93, 7381.97, ZYUT 7351.06, 7381.97, 7390.75, ZYUCCAMA 7390.26 などが出たものであろう。なお，ZYUCCAMA のように敬称の「様」をとったのは「虹」ではこれだけである。ただし，ZISIDON 8320.59 の「殿」はある。この2地点に比較的近いので，敬称を使う点では関係があろう。

GOO～は琉球に見られるが，意味はよくはわからない。OO～は，これも琉球に見られる。虹を蛇と見る考え方が昔からある。高知 7425.02 の ZYANOHOKE はこのひとつのあらわれかと思われる(HOKE は気息，蒸気)が，この OO～を ao～「青」であるとすれば，7色の虹の1色だけで代表させたと考えるよりは，「青大将」などとの結びつきを考えた方がいいであろう。これらは，～NAZI と～NA～をとることが多いのはなぜであろうか。ao～または au～という広い母音に同化して，N～の次の母音が広くなったとも考えることができる。

奄美には NOOGI が9地点に分布している。NOOGYA も含めれば10地点になる。NOOGIRI も～RI はわからないがこの類と見れば沖縄本島にも分布が広がる。NOGI が宮城東北端にあり，NONGI が秋田県に9地点分布している。さらに NUNGI が沖縄本島1地点，秋田に3地点，NUNGII が沖縄本島で1地点，NUNGIRI が同じく沖縄本島に3地点ある。この～GI は～ZI より古いのではないかと思われる。～GIが古いと見られる NO～や NU～にだけ結びついて，新しい NI～には結びついていないことを指摘しておく，～GI には他に MOOGI がある。これは石垣島に3地点である。MUUZI 2085.69 とともにM～の古さを思わせるとともに，～GI の古さをもあらわすものといってよかろう。なお，MOOKO 4654.52 はこれとは関係ないであろう。この，MOOKO はお化けをあらわすものであるかもしれない。

MUGENOZU と GOBONIZU の併用の 3775.83 では「前者は全部あらわれた場合で，後者は半分あらわれた場合」との注があった。前部分は形容的なものとして cut すべきであったかもしれない。よくはわからないが，MUGE～は「迎え」とも思われるし，GOBO～の GO～は GOO～とのつながりを思わせる。

NOORI 1270.26 は～RI があらわれていて，これも Z～R のひとつとも見られよう。NOOBI は0246.48 にあらわれるがよくわからない。NODE は山梨・埼玉の山間部に1地点ずつあらわれるが，これもよくわからない。しかし，NO～であるから古いものであろう。

YUN 以下5つの語形は，弓，弓張り，張りに関係あるものを集めた。これは虹の形から自然な発想であろう。甑島や薩摩半島南部に集中しており，地域的なものと思われる。伊豆利島にもあることは注目すべきであろう。これらは NIZI と併用のもので，NIZI の方が新しいとするものが多い。5つのうち，BIYA～を前部分とするものがあるが，この BIYA～は何を示すかわからない。～YA～は「矢」かもしれない。

NABENOCURU 以下6つの語形も，これと同じく形からの自然な発想であろう。能登，佐渡，秋田と続いているのはある時期の伝播を示すものだろうか。また，熊本，五島のもひとつの地域をなしていたが，今分断されて残ったものと考えられる。北海道で NABENOCURU があらわれている(1744.60)が，これは被調査者の両親が石川県河北郡出身なので，そこから持ってきたものであろう。なお，4654.52(佐渡)では「地獄の NABENOCURU」の語形も調査に同席した祖母のことばとして報告されている。NIZI と併用のものでは，NIZI を新しいとするものが多い。

NANAIRO は虹の色の数を名称としたものであるが，「虹は七色という」が「虹は7色のものであると世で言っている」の意味であれば名称とはならない。併用地点なのでその怖れは少ないが注しておく。

TACIMON が九州に点々と3地点見られるのも注目すべきである。3地点とも NIZI との併用で，NIZI の方が新しいとする。「虹が立つ」という地方であろうか。この点，虹の出現，存在を示す動詞についても調査すべきであったと考える。ハル，ハウ，ハエル，デル，フク，ヒク，サス，カカル，タツ，サクなどが，この調査でも出てきたが，ここではとりあげないことにする。フクというのは，池の主といったような，大蛇，大魚のような動物が「吹く」ものと考えているためという注が 3760.93 にあった。

ICUHUKUBI 以下は，YOOKAN を除いて琉球地方の語形であって，喜界島を除くと，先島関係である。由来のよくわからないものも多いが，CIRINUU-NU は「霧の布の義か」と注記にある。AMINUMYA は『八重山語彙』には，雨を飲むものの義とある。また，「天の宮」とも考えられ，AMI～は「天」か「雨」か定かでない。ICUHUKUBI は『八重山語彙』では絹の帯の義

とある。TINPAU 以下では TIN～, CIN～ は「天」であり，～BAU, ～PABU, ～BABU は「這う」「食む」と関係があろう蛇の一種のハブであろうか。なお「蛇」「まむし」の226図，228図を見よ。TINCYABOO も「天のはぶ」であろう。

新古の注記またはそれに類したもののあるものについて一部を以下に並べておこう。これは＜併用処理＞など図では省略したものについても述べてあるから，図上のものとは必ずしも一致しない場合がある。また，2形あった場合，一方にだけ＜新＞とあったり，＜古＞となったりして，他の語形に注記のなかったものも，＜新＞～＜古＞の対立があると考えた。NOZI と NUZI，これらと NEZI との新古，MYOOZI と NYUUZI との新古についての注記のなかったのは残念である。一方，多くは NIZI が共通語という注記だけがあるものは，ここでは新古は述べていないので，以下の表では省略しておく。

NO(O)(N)ZI などが古く，NIZI などが新しいとするもの

2734.05, 2751.10, 2791.15, 3705.47, 3733.88, 3751.81, 3753.85, 3756.40, 3757.09, 3761.74, 3763.17, 3771.29, 3777.86, 3791.02, 3791.76, 4609.54, 4619.29, 4628.28, 4659.85, 4694.95, 4704.04, 4730.45, 4731.42, 4750.32, 4771.92, 4792.43, 5606.83, 5657.06, 5683.61, 5684.11, 5685.37, 5695.10, 5696.54, 5712.70, 6603.08, 6603.24, 6604.98, 6613.07, 6613.54, 0248.00

逆に NOZI が新しく，NIZI が古いとするもの

5618.43

NO(N)ZI が古いとの注があるだけで，比較の語形のないもの

4733.91,

NE(N)ZI が古く，NIZI が新しいとするもの

1862.48, 4685.72, 5463.12, 5463.64, 5568.57, 5580.34, 5690.12, 6402.94, 6482.52, 6505.58, 6527.22, 6527.44, 6537.06, 6537.58, 6547.24, 6547.67, 6554.88, 6557.14, 6557.54, 6558.10, 6568.13, 6642.33

NEZI は幼児語との注のあったもの

6548.02, 6610.00

なお，幼児語の注のあるものとして，図には省略したが，6494.08 に DONDOROHAN NO OBI がある。雷さまの帯か。

NU(U)ZI が古く，NIZI が新しいとするもの

5608.16, 6497.90, 7247.86, 7336.71, 7365.51, 7375.37

MYOOZI が古く，NIZI が新しいとするもの

4597.72, 5517.78, 5527.94, 5528.31, 5585.63, 5620.30, 5620.32, 6348.77, 6357.74, 6368.60, 6377.11, 6384.25, 6385.10, 6387.62, 6404.83, 6415.23, 6415.80, 6415.83, 6419.69, 6503.73, 6504.01, 6690.08, 7229.75, 7303.75, 7333.29, 7414.43, 7435.07, 7446.26, 7501.68

MYOOZIN が古く，NIZI が新しいとするもの

5507.20, 5508.16, 6406.77, 6406.92, 6408.88, 6415.78, 6416.31

MYUUZI が古く，NIZI が新しいとするもの

6458.91, 7239.82, 7344.30, 7412.71

NYUUZI が古く，NIZI が新しいとするもの

7237.67, 7326.69, 7344.99, 7345.47, 7346.58, 7355.48, 7355.81, 7356.06, 7357.69, 7363.59, 7366.87, 7368.32, 7403.86, 7415.47

逆に NYUUZI が新しく，NIZI が古いとするもの

7407.24（ただし，これは調査者が強い自身の疑いを注している）

BYOOZI が古く，NIZI が新しいとするもの

6349.23, 6410.77, 6411.66, 6430.26, 6431.85, 6440.25, 6440.67, 6441.71, 6442.80, 6452.83, 6461.27, 6462.52

BYUUZI が古く，NIZI が新しいとするもの

6428.91, 6438.33

ZYUUZI が古く，NIZI が新しいとするもの

7229.50, 7249.35, 7249.95, 7258.58, 7258.82, 7269.51, 7269.96, 7279.93, 7331.41, 7340.24, 7340.50, 7340.74, 7341.47, 7350.96, 7352.14, 7361.17, 7372.03, 7374.75, 7383.98, 7391.94, 7392.33, 7392.94, 7395.25, 8303.47

以上のほかは，NIZI との併用で，新古の注のあるもののすべては NIZI を新しいとしている。

260. ゆき（雪）

きわめて単純な地図である。253図「あめ（雨）」などとともに，基本語の分布の1つの典型であろう。質問文には，「雪の種類による特別の名はとらない。」と注記しており，地図に示した語形はすべて一般称である。したがっ

て，語形としては，ユキを語の要素に含むかあるいはそれの音声変種かいずれかであるので，語形の違いをできるだけ細かく示した。121図から126図までの「ゆび(指)」関係の図，255図「ゆうだち(夕立雨)」，266図「ゆげ(蒸気——湯の場合)」，267図「ゆげ(蒸気——飯の場合)」，279図「さくばん(昨晩)」のそれぞれに現われる語形の，語頭音節と関連するところがあるので，参照されたい。

なお，YUKIに〈併用処理の原則〉を適用した。

紺で示した符号は，語頭音節母音が〔u〕および〔o〕の語形で，〔u〕のものに小符号を，〔o〕のものに大符号を与えた。赤で示した符号は，語頭音節母音が〔i〕および〔e〕の語形で，〔i〕のものに小符号を，〔e〕のものに大符号を与えた。

紺の符号の分布を大観してみる。YUKIは，関東から九州までの地域，および北海道に大勢力をもっているほか，東北，琉球など全国に広く分布している。このうち，九州に広く分布している語末音節母音の無声化した〔juki̥〕は，同じく九州に分布している〔jut, juʔ, juk, juk^{u}〕などを内容とするYUTと音声的に連続する語形であろう。YUKÏは，琉球先島に分布している語末音節の母音部分が中舌音〔ï〕であるものを，特に分出したものである。YUKÏÏ，YUCÏ，YUCÏNについても同様の扱いをした。これに対して，東北など本土部に分布している〔jukï〕はYUKIに含めてある。すなわち，〔ï〕に関して，東北と琉球先島の場合とは扱いを別にしてある。YUKII 6583.93, 0237.84, YUKÏÏ 2076.25, YUUKI 5548.58, 7353.51, 8229.96, 9312.42, YUUT 0256.08, 0257.12, 0257.43など，母音部分が長音化するのは，アクセントとの関連と見ることもできよう。YUGIは，北海道から東北・新潟・栃木・茨城・千葉にかけて分布しているほか，群馬・埼玉・長野・岐阜・福井，大阪，鹿児島などにも1～4地点ずつ見られる。語中語尾のカ行音の有声化の分布については，248図「たけ(竹)」などを参照されたい。YUG〔ŋ〕Iは，1793.14, 5781.65, 5782.79, 5782.94のいずれもYUGIの分布に接した地点に現われるものである。YUUGIの内容は〔ɯ̈:gi〕であって，YUGIの分布に接した地点4688.45に見られる。YUCI, YUCIIは沖縄本島およびその周辺に，YUCÏ, YUCÏNは先島に，それぞれ分布している。これらの語形をはじめ，琉球に分布している諸語形について，多くの地点で〈霰にも言う〉という注記がある。雪がほとんど降らずせいぜい霰のみという気象現象によるのであろう。SYUGIは〔^{ɕ}jɯ̈gɩ, ^{ɕ}jɯgi, ɕjɯgɩ〕を内容とし，ZYUKIは〔ʒɯ̈ḳi, j͡ʒɯkï, j͡zɯkï, j(z)ɯkï, j͡zɯ̈ki〕を，ZYUGIは〔zj͡ɯḳi, jʒɯ̈gï, ^{ʒ}jɯ̈ḳï, j͡zɯ̈ḳï, j^{z}ɯgï, żɯgi〕などを，ZUGIは〔zɯ̈ḳï, zɯgi〕を，それぞれ内容としており，いずれも山形東部，宮城・福島の連続した地域に分布している。YUKIBANAは，香川に2地点，山口に1地点見られる語形である。6485.14に，〈雪が降り積もって一面に白くなっているのはユキであるが，冬の始め，春近き頃など，チラチラと散りかかるように降り積もらずに終わる場合のをユキバナという〉という注があった。このような区別であれば，あるいは他の地点でも似たものが，あったかもしれない。YOKIが新潟中部に，YOGIが秋田西北部と山形西部に，それぞれ分布して，126図「ゆび(指)——第121・122・123・124・125図の総合図」におけるYOBIと似た部分を示しているが，必ずしも一致しない。

赤の符号で示したもののうち，IKIが栃木，北陸・岐阜，山陰などに，IIKIが5529.77に，IGIが東北中部，茨城，新潟南部，長野北部などに，ICIが5624.85に，ZIKIが4763.11に，ZIGIが4723.14に，それぞれ見られる。EKIは，栃木，北陸・長野，山陰に，EGIが岩手，新潟北部，長野北部に見られるが，北陸に分布しているもののなかには，Eが狭い母音であるものが含まれており，これらは地域的連続からしても，IKI, IGIとすることも可能な語形である。

「無回答」は14地点，すべて沖縄である。雪が降ることがほとんどないからであろう。

地図に採らなかった語形およびその注記を地点とともに示すと次のとおりである。

〔jɯkikoŋko〕〈幼児語〉(4667.33)
〔dambera〕〈ぼたん雪〉(5472.91)
〔bombo〕〈幼児語〉(5606.83)
〔ʃiɲʃɯ:nooʒigo, ʃiɲʃɯ:noobago〕〈ふぶいてくるとき〉(5664.58)
〔ha:te〕(5665.11)
〔watabo:ʃi〕〈ぼたん雪〉(6491.49)
〔jɯkioŋko〕〈小さい時〉(6536.68)
〔mizore〕〈粒状〉(6721.31)
〔koŋkoɴ〕〈幼児語〉(7208.97)
〔misore〕〈雨まじりの雪〉(7404.12)
〔watabo:ʃi〕〈雪片が大きいもの〉(7404.12)

このような，地図に採らなかった雪の特称についての調査も今後可能であろう。

261. こおり(氷)

関連項目として，96図「こおる(水が凍る)」，97図「こおる(手拭が凍る)」，262図「つらら(氷柱)」があるので参照されたい。語形のまとめ方，符号の色・形の与え方などは，これらの地図にできるだけ合わせたが，違いもある。なお＜併用処理の原則＞は KOORI に適用した。

分布を概観してみる。

緑を与えたコオリ類は，北海道，福島から九州の大部分の地域まで，および奄美に及ぶ分布をもち，青森などにも見られ，もっとも全国的な広がりをもっている語類である。このうち，KUURI から KUUT はほとんど九州に分布しているが，5617.85にも見られる。合音による語形であろう。ZYABINGOORI 6552.71, ZYAME 6580.33にはそれぞれ＜薄氷＞，＜薄い＞という注記があった。USUGOORI 4762.04, 5656.62などと同じように，もともと氷の種類をあらわす語なのであろう。SIMOGURI から SIMOGANE までは，語形にシモを含むものである。いずれも九州中南部に分布しており，その中で SIMOGANE は，鹿児島およびその周辺にまとまった広がりをもっている。SIMOGUI の＜これは「氷」のみならず「霜柱」にもいうようだ＞(8334.25)という注記のように，氷の張ることのめったにない温暖なこの地域では，シモの意味範囲が「氷」をも含んでいるのかもしれない。SIMOGANE から ITAGANE までは，カネを語形に含むものである。関東，北陸から九州東部までかなり広い地域に分布しており，地域的なまとまりも見られる。262図「つらら(氷柱)」のカネコオリ類の分布と対比してみて，重なり合う地域と，千葉，新潟のように一致しない地域とがある。いずれの地図がもとになってカネコオリ類が分布を広げていったのか，興味ある問題である。それによって，カネの性格を解明することも可能となろう。

草を与えたコゴリ類は，近畿に分布しているものである。96図，97図ではコゴルが近畿・中国に広く分布しているのに比してきわめて狭い。GORI 6523.54を地域的な連続からかりにこの類に含めたが，コオリ類の GOI 8300.11も語形としてはきわめて近似している。しかし，GOI については，コゴリ類とはかなり遠隔の地点にあること，近くに類似語形の KOI 8300.80があることなどで別語類とした。

橙を与えたスガ類は，北海道，福島を除く東北の大部分の地域に広く分布している。4598.33にも見られる。262図「つらら(氷柱)」において，福島東部から茨城にかけても分布しているのとどう関連するのであろうか。興味深いことである。他語類と併用の地点で，スガを「薄い氷」としている注記が多かった。

空を与えた TAPPE, TAPPEE(GOORI), TAPPEN, TAPPI は，岩手・宮城・福島・茨城，および伊豆諸島に点在している。タルヒを原形とした語形であろう。262図との関連を考えねばならない。

茶で示した SIMI は佐渡と隠岐に，SIMIDAE は，6413.29に見られる。SIMI は，『古今集』にすでに現われる「凍る」意味のシムの名詞形であろう。SIMIDAE の DAE は，262図の同地域に分布しているサエであろうし，新潟などに領城をもつザエともつながるものであろう。

紺で示した語形のうち，ZAI, ZEE, ZAYA, ZAA に関しては，『全国方言辞典』には，ザエ・ザイについて「①水中に浮流する氷塊。岩手県上閉伊郡。②水のためにとけた雪。山形県村山地方。③薄氷。新潟」と記載してある。意味分野をずらせば，もっと広い地域に分布している語となろう。KAGAMI, KAGARI, KAGAMU はほとんど能登半島に分布しているものである。「屈る」意のカガム，コゴムや，本図のコゴリ類などと関連があるのではなかろうか。また「鏡」からの連想ということも考えられる。YUKKAGAM 7246.45, SIMOKAGAN 8363.64, 8372.87も，地域は違うが，関連するものとせねばなるまい。GASA, GASU, GAN, GANBARI も，語頭がガになること，地域的に連続して分布していることなどから，なんらかの関連がありそうである。CURARA は5598.67, 5652.81, 6507.79の3地点に見られる。地域的に必ずしも無縁ではなさそうな地点であり，単なる誤答とすることはできない。KINAGO 5651.95は KOORI との併用である。＜木に花が咲いたようについたもの＞という注記があり，『全国方言辞典』も同様の説明であった。とすれば，氷の種類の名称であるらしい。CANPO 7301.67も KOORI との併用であって，＜穴の中に張った ko:ri を言う＞という注記があるので，これも氷の種類であろう。このように，

質問内容を変えれば，さらにさまざまな語形が現われそうである。「その他」は動詞形のもので〔sïmïrɯ〕(2791.15)，〔sɯmirɯ〕(3754.76)，〔ʃibarerɯ〕(0776.88)，〔ko:rjuri〕(0247.56)があった。「無回答」は，八丈島全島，奄美諸島5地点，沖縄本島以南の全諸島，および，2775.45，6479.95であった。自然現象としての「氷」が生活と無縁な地域に多い。

以上のように，本図だけで分布を見たかぎり，それほど複雑ではない。むしろ，各語類のまとまり方としては，単純明瞭である。にもかかわらず，それぞれの語類間の分布の歴史を見ることはこの1枚の地図だけではほとんど不可能である。それは，地域ごとに気象条件が異なっているということともかかわるのであろうが，「氷」について，それぞれの語のもつ意味分野にずれがあり，何枚もの関連意味分野を内容とする地図を重ねてみて，はじめて正確な解釈ができるのではないか，ということである。このことは，当然，262図についても言えることである。

262. つらら(氷柱)

本図に直接関連する地図として，261図「こおり(氷)」がある。符号の色・形の与え方をできるだけ合わせ，語形のまとめ方も考慮したが，本図の場合，語種がかなり多いので，大まかなまとめにせざるを得なかった。たとえば，KOORIには〔ko:ri, ko:rï〕のほか，〔kori, kot, ku:ri〕なども含めてある。また，96図「こおる(水が凍る)」，97図「こおる(手拭が凍る)」とも関連しているので参照されたい。<併用処理の原則>はCURARAに適用した。

分布は全国的にかなり多様である。しかも，地域ごとに，まとまったりあるいは連続した領域をもっている語類が多いことも特徴的である。

赤の符号を与えたものがツララ類である。関東・中部から近畿・中国・四国を経て九州に至るまでの連続した地域，および北海道に分布している。このうち，CURARAからTOOROOまでは，CINCIRORIN 6466.16のような特殊なものはあるが，ほぼ，ツララにもとづく単独語形と考えられるものである。CURARANBOO, CURUSINBOO, CURONBO, TOORONBOOは，語形の後部分にBOO，BOをもつもので茨城・千葉，神奈川に少数地点ずつ見られる。これらの地点に接して，関東に広く桃の符号のAMENBOO，紺の符号のKOORINBOOなどが分布している。ツララ類の分布の仕方から見らると，新しいもののようである。ただ，『源氏物語』の「朝日さす軒のたるひはとけながら，などかつららのむすぼほるらん」(末摘花)のように，「氷」の意味としてはかなり古くからの語であるらしい。とすれば，261図「こおり(氷)」の3地点に現われるCURARAは古形の残存という見方も可能である。

空の符号を与えた類は，タル，タレなど「垂れる」を意味していると考えた語を語形に含むものである。TARUHIからTAROPPEまでは，岩手・宮城の全域とその周辺，秋田，佐渡に分布して，この類のうちではもっとも広い領域をもっている。TARONBEは，九州西部に4地点(7370.16, 7370.41, 7390.75, 8300.25)と，それと遠隔の宮城に1地点(4725.68)見られる。TARUKIからOTTONTARUKIまでのものは，能登半島から福井にかけてまとまって分布しているほか，北海道，東北の西部沿岸地域，佐渡，静岡6665.25，熊本7380.74, 7390.26にも見られる。いずれも，分布の上から注目すべきであろう。TARUMIからTANONBIKIまでは，九州西部にのみまとまって分布している。TAROKINBOOが5555.58に，TARENBOOが4644.10, 6698.61に，TARANBOOが5689.98, 5699.25, 5790.03にそれぞれ見られる。れのように，タルヒ，タルキ，タルミなどを語形に含むものが，国の中央から遠隔の地域に，それぞれまとまって分布していることから，本図においては，もっとも古いものの分布だと言えるようである。タルキやタルミなどは，別語への類音牽引などによって変化した語であろうか。HODAREからHADARENBOOまでのものは，福井・滋賀と，九州中部などにそれぞれまとまった分布を示している。また，BOODAREが能登のひとまとまりと5682.34，7362.42に，BOODARAが4639.69，5507.20，6535.73に，BONDARA, BOYODARE, BONDANKARA, BONGARAが山形南部地域と0894.61に，それぞれ見られ，その多くが，タルヒ，タルキ，タルミなどを含む語形の分布に接しているので，それらと関連した語形が多いと考えられる。SUDAREは，岩手と九州に点在する。語形ノギスダレ(3765.74)も含まれているので，「簾」であろうか。氷を意味するスガとの関係も考慮してよかろう。GAMADARE 5566.95は，261図の同地点にも現われる語形である。AMADAREからAMADAREGOORIまでは福島北部，長野などに多少まと

まった分布をもっているがそれ以外にも点在している。＜雨のあまだれは，amaʃidzɯgɯ という＞(4781.86)，＜雨のしたたり落ちるのは amaotʃi＞(5663.64)という区別を示した注記があった。参考になろう。

桃の符号を与えたものは，語形にアメを含むものという点でアマダレなどと共通なので，符号の形を合わせた。関東から中部にかけてまとまった広い分布領域をもっているほか，福島 4675.62，7383.98 にも見られる。＜雨が垂れて凍ったもの＞(4792.43，5698.91)，＜雨の棒の意＞(5686.15)，＜飴ん棒のこと＞(5687.59)などのような語源意識についての注記があった。

橙を与えたスガ類は，北海道，東北北部・西部，福島東部，茨城北部に分布している。261 図「こおり」におけるスガ類の分布と重ね合わせてみることによって，この表現が，何らかの意味で関東北部から東北全域にかけて広く分布していた時期があったのではないかと考えられるが，それがタルヒ類とどうかかわり合って分布領域を変えていったのか，簡単には解けない問題である。

緑を与えたものは，カネ・カナなどを語形にもつものである。261 図における同語類の分布のうち，富山，岐阜北部，三重北部，山陰，九州東部などではある程度重なり合うが，それ以外の地域ではかならずしも一致しない。たとえば本図において，新潟およびその周辺，群馬東部，中国西部に分布が見られるが 261 図にはない。逆に，261図の千葉南部，四国の大部分に見らるれ分布が本図にはない。スガの問題と同じく，その解釈は今後の課題となる。地域ごとの詳細な比較が必要である。

紺の符号を与えたもののうち，SUGOORI が福島中部に，SUGURI が福島中部と長野北部に，SIGIRI が 4689.86 に，SUGURINBOO が 5652.06，5652.37 に，SUMURI が 5641.99 にそれぞれ分布している。スガ類の分布に接した地域に見られるこれらの語形は，スガゴオリの音転形とも考えることもできよう。SUMARU から SIMARA までは，山口およびその周辺，九州南部にそれぞれまとまって分布している。これらの語形について，あるいは，『全国方言辞典』の「すまる」についての記述，「①いか釣用の漁具。船のまわりに針金をしかけた物。愛媛県温泉郡。②小碇。周防（俚言増補）。③井戸に落した物を取るための錨様の道具。山口県豊浦郡・愛媛県大三島。」が参考になろうか。SIMOBASIRA，SIMOBASITA の注記に次のようなものがあった。＜霜柱と同語，つららも指す＞(8310.87)，＜南国ゆえあまり使わない。シモバシラは普通は地面上のを言う＞(8345.24)，＜地面の霜柱と同じように言う＞(8353.68)，＜実物を見ることがないからこの語用いることきわめて希＞(8372.87)。SIMIZAE から SEEGASA までは，隠岐，鳥取西部，島根・広島に連続分布しているものである。261 図では鳥取に 1 地点のほか新潟全域およびその周辺にまとまって分布している。MAGANKO から MAGARIKO までは九州北部にまとまっているほか，宮崎・鹿児島にも見られる。＜馬鍬(農具)の子の形に似ているので言う＞の注記が多かった。語源意識のかなりはっきりしている語形である。YOORAKU，YOORANKO は，大分南東部，宮崎北東部に分布し 7415.01 にも見られる。「瓔珞」であろう。NANRYOO，NANZYOO，NARANZYOO，NANZYORO は，島根西部から広島西部にかけてと，福井南部から滋賀にかけての地域に，それぞれまとまって分布している。「南鐐」であろう。BIIDORO から BIN までは，茨城 5742.65，5752.32，三宅島 6697.39，6698.20，静岡 6645.37，三重 7504.27，和歌山 7513.43，7521.79，7522.94，愛媛 7338.55，長崎 7266.92，7268.87，7275.24，および九州南部に 13 地点ほど，それぞれ分布している。古く輸入された外来語「ビードロ」をもとにした語形であろうが，沿岸地域にのみ見られるのは，言語伝播の経路を探る上で興味深い。CINKOGOORI から TOKECINBO までは，静岡から和歌山にいたる沿岸地域に細長く分布しているほか，7208.97，7229.75 にも見られる。「男根」を意味する語形らしいが，CYOROCIN 7390.70，CYOROKIN 7390.26，DONBENGOORI 7363.85 にもその意味が含まれている可能性がある。GIRA(GI)RA は広島に 4 地点まとまっている。氷の光る状態を示す擬態語と語形ツララが結びついた語形と考えるのはどうだろうか。SAGARINBOO，SAGANBOO は福島南部から茨城北部，栃木中北部にかけて分布しているものである。「垂れ下がる」状態に注目した語形であろう。SAGARINKO 7412.31，SAGARIGOORI 6665.01，6700.98，6710.55，7239.82，CURUSAGARIGOORI 6643.16，SAGARIGANKURI 6711.95，6721.31，6721.33，6731.03 なども同様であろう。KOORI には単独語形のコオリなどのほか〔nokigo:ri〕(7346.58)，〔janenoko:ri〕(5681.41，6386.32)，〔nɯkisakinoko:ri〕(5609.81) が含まれている。「無回答」は，甑島，種子島，屋久島，口永良部島，琉球列島の全地点である。その多くに，＜実物がない＞の注があった。その他本土部では，北海道，伊豆諸島，静岡，

滋賀・三重・和歌山，徳島・高知，宮崎・鹿児島などに合計20数地点あった。

大分布語の間に，数多くの小分布語や孤立語が見られるところに本図の特徴がある。そこに，「つらら(氷柱)」のどこに注目して命名したか，その名称の由来はなにかなど，地域社会の心理と言語の関係をさぐる手がかりが得られそうに思われる。孤立語をめぐって，この『日本言語地図』と，地域別の詳細な調査結果とのつきあわせの可能性がありそうに思われる。

263. じしん(地震)

この項目は，前期で調査を打ち切ったので，地点が少ない。＜併用処理＞はZISINに適用した。

ジシン類が圧倒的な勢力で全国に広く分布し，ナエ類など，それ以外のいくつかの語類が局地的に分布しているという比較的単純な地図である。

緑で示したジシン類のほとんどがZISINである。北海道から奄美までの地域を覆っている。ただし宮崎ではこの語形が少ない。〔ʒiʃiN, dʒiʃiN〕のほか，主として東北に見られる〔dzïsïN, zïsïN, dzusuN, dzŭsŭN, zŭsŭN〕，福島・茨城などに見られる〔ʒïʃïN, dʒïʃïN〕などを内容としている。RISINは，岐阜から愛知にかけての地域のほか，山梨・静岡，和歌山に1・2地点ずつ分布している。この語形について，6509.38, 6518.30, 6526.04では＜古＞，6509.43, 6517.31, 6548.26では＜他・希＞と注記していたため地図には採らなかった。ZISINBIKI 4619.29の内容は〔dzïsïmbuguˌ〕であって，ZISINとの併用であるため，ジシン類としたが，この語形についての＜語源は地響きなるべし＞という注に従えば，別類ということにもなろう。

赤で示したナエ類は，九州東部・南部から琉球に至る地域に連続して分布しているほか，全国に少数地点点在している。ただ，本州，九州(ただし宮崎を除く)，奄美では，ジシン類との併用地点が多いことに注目すべきであろう。NAEはほとんど九州であるが3704.42, 3768.50にも見られる。NAIは，奄美，先島にそれぞれまとまって分布しているほか，佐渡，富山，島根・広島・山口・福岡・大分・熊本・鹿児島にも点在している。NAYA 7368.32はNAE〔naje〕との併用であるが，その内容は音声的にはきわめて近い語形のようである。NEIは0246.97, 0256.08に，NEEは沖縄本島およびその周辺にまとまっているほか奄美，先島に，NEEIは1270.26に，NIIは0294.66に，NIは0237.79に見られ，いずれも琉球に分布している語形である。NEは0247.56, 0248.00にも分布しているが，3767.87, 3777.86, 5566.95にも見られる語形である。NEE, NEI, NEEIなどは当然NAE，あるいはNAIをもとにしていると考えられるが，九州に全く見られない点は，さらに考えるべき問題であろう。

NIIN 2095.60は，動詞形ではなかろうか。INA, ENAは，いずれも2734.05にあり，＜この頃は余り使わない＞と注記してある。ちなみに，被調査者の両親の出身地は富山である。ZINAI 1862.48は，ZINARIと別語類としたが，語形としては類似しているので符号の形を合わせた。被調査者の母親は，大分出身である。

ジシン類(漢語)とナエ類(和語)の歴史的関係は，分布から見て，ナエ類が古いと言ってよさそうである。両語の併用地点の多くで，ナエを＜古＞と注記しているし，『全国方言辞典』によれば，ナイ・ナエが，盛岡，秋田県雄勝郡，仙台，常陸，高知などにもあることから，かつては，もっと広い分布を示していたものと考えられる。文献でも，『日本書紀』に，「那為」としてすでに見られるし，『類聚名義抄』には「地震ナヰ」とあるので，日本語そのものとしても，きわめて古い語である。なお，ジシン類とナエ類との併用地点で，地域を問わずジシンを「大きい揺れ」，ナエを「小さい揺れ」とする地点が多かった。新語が侵入して旧語との関係をもつ際，各地域とも一様に同じ用法分野に入り込んでいることは興味深い。

紺で示したもののうち，YURI, YUIが，八丈と，佐賀・長崎とにそれぞれまとまって分布し，YUSURIが7374.75に見られる。この点については，見出し語形NAE, NAYAに含めた〔najegairu, najagairu〕(7368.32)に＜ナエ，ナヤだけでは「地震」の意にならない＞と注記があり，〔najegajuru〕(7335.34)にも＜ナエだけでは地震の意味にならない＞の注があったことに注意しなければならない。これに類した注記はほかの地点にも見られたものである。この質問項目は，元来「地震」そのものの名詞形を回答として求めていたが，それにもかかわらず，このように，主としてナエという語形に，ユル，ヨル，イルをつづけた文形式で示した地点があったことは，これらのYURI, YUI, YUSURIが，その動詞部分を前面に出した名詞形ではなかろうか，という考えを導く。むろん，地震は震動するものであるか

ら，八丈と九州それぞれで，ユルやユスルをもとにして独自に生み出された語形であると見ることもできよう。ZIBIT 7246.45は，ジシン類の ZISINBIKI と語形的に類似しているので同形符号を与えた。ただし，両語形の地点は離れている。ZINARI 6349.80，YANARI 7302.87は，「地鳴り」，「家鳴り」と考えられるが，NAE，NAI などナエ類とも無関係ではないかもしれない。

死語にならんとしている語の発掘，漢語が和語にとってかわって分布を広げていく過程，名詞「地震」部分と動詞「おきる」部分との関連など詳しくは今後に残された課題である。

264. つむじかぜ(旋風)

この図は102図「つむじ」と相互に関係する部分が大きい。そこで両図に共通に現われる語形・語類については符号の形・色を統一するように努め，比較の便宜をはかった。語形のまとめかたについても両図に矛盾がないように配慮したが，一部の語類については，102図でひとつの見出しにまとめた語形変種群を本図で分出した場合がある。さらに，この図は236～238図「かたつむり」とも関連する部分があるので相互に参照してほしい。

この項目は地図下欄の質問文や絵のように規模の小さいつむじ風の名称を求めたものであり，たつまきのような特に大きいものについては注記するよう調査票で指示してある。そこで「大きいものはタツマキ」「海上のものはタツマキ」などの回答が多数得られたが，それらの語形には補助符号をつけて図示することにした。補助符号の内容は，凡例で示したように，「大きなものを言う」「海上のものを言う」「大小いずれのものも言う」の3種類であるが，このうち「海上のものを言う」としたものは，もっぱら海上の旋風を指すと判断される注記内容のものに限り，「大きなもの。地上も海上も」は「大きなものを言う」に，「海上のものも陸上の小さいものも」は「大小いずれのものも言う」に含めた。補助符号をつけていない語形は，大小陸海に関する注記のないもののほか，「小さいもの」の注記のあったもの(これは併用の地点で片方が「大きいもの」他方が「小さいもの」のケースが大部分である)である。質問文から推して，注記のないものは陸上の小さいつむじ風を指すものが多いと考えられるが，そのほか，陸上の小さいものから陸上あるいは海上の大きなものまでの広い範囲の旋風をも含んでいる可能性がある。たとえば補助符号のない(注記のない)TACUMAKI は大部分がそうなのではなかろうか。

また，この項目では「カゼガマウ」「カゼガマワス」のような「カゼガ＋動詞形」の表現を回答した地点が多数見られたが，これらは「無回答」の中に含めた。ただし「ウズガマウ」のような場合はウズ部分を採用し，また「カゼガマイマイスル」のような場合は，単に「マイマイ」と回答した地点との関連を考慮して，このマイマイ部分を採用しておいた。「カゼノマイマイ」「カゼノウズ」のようなものは，それぞれ，マイマイ部分，ウズ部分のみを採用してある。

凡例からもうかがえるように本図には後部分に KAZE を含む表現が多いが，この部分には〔kadze〕のほか，〔kadʒe〕〔kadʒa〕〔ka~dze〕〔ka~dʒe〕〔kadʒi〕〔hadʒi〕など多くの音声変種が見られた。しかし，凡例のスペースの制約のため，本図ではそれらのすべてを KAZE としてまとめた。KAZE のZE の部分の音声変種は10図「カゼの-ZE の音」の分布とほぼ一致するが，10図では琉球の一部(とくに宮古と先島)に調査していない地点が多いので，その地域における KAZE 部分の音声変種の分布を述べておこう。

まず KAZE の ZE の部分について記す。

〔dʒi〕〔ʒi〕—10図の分布地域のほか，奄美の沖永良部0294.66，0294.93，沖縄の渡嘉敷1169.84，粟国1148.59，久米1156.89，1167.01，宮古と八重山の大部分

〔di〕—10図の分布地点のほか，奄美の喜界0249.17，0340.00，宮古2140.49，なお，与論1213.76は〔hada～〕

〔ri〕—沖縄の久高1271.05

〔tsi̯〕—八重山の石垣2076.99，〔tʃi̯〕—八重山の波照間2095.60

KAZE の KA の部分は10図では見られないが，本図では沖縄本島北部付近の11地点(伊平屋と伊是名を含む)と沖縄の久高1271.05，さらに奄美の喜界，沖永良部，与論と八重山の黒島2085.69に〔ha〕が分布し，そのほかの地点は〔ka〕である。

本図では＜併用処理＞は行わなかった。

次に，符号の与えかたの原則を述べる。本図に見られる語形の要素は，ツムジ類，ツジ類，マキ類，マイ類，その他に大別することができる。マキ類，マイ類は単独で語形を形成する場合もあるが，他の要素と結合したものも多い。そこで，ツムジ類には草，ツジ類には緑，マキ類には赤(または桃)，マイ類には橙，その他の類には紺

を与え，マキ類あるいはマイ類がそのほかの要素と結合した語形には，マキ類，マイ類の色を与えた。その際に符号の形はマキ類，マイ類を除いた要素が単独で現われる場合に一致させてある。たとえば，CUMUZI と CUMUZIMAKI には同じ形の符号を用い，前者に草色，後者に赤色を与えた。なお，最初に述べたように，これは102図「つむじ」における符号の原則をおおむね踏襲したものであるが，細部にわたって必ずしも統一できなかったうらみがある。

まず，凡例の CUMUZI から CUMUZIMAKI までのツムジ類について述べよう。この類は関東から中部あるいは東北南部にかけて領域をもち，東北北部にも多い。ただし青森のものは大部分が CIMURI～，CIBURI～のような末尾音節の子音が R の語形であるが，これらは岩手に見られる CUMUZI～，CUMUZU～など～Z～の音変化と思われる。もっとも，237図「かたつむり—その2」では青森に KATACUMURI，KATACU(N)BURI が多数見られるから，これとも関係があるかもしれない。101図「あたま」のツムリ・ツブリ類とは分布が全く異なる。

ツムジ類の領域は102図「つむじ」のものとほぼ一致するが，この図の方がやや広い。赤のマキ類との関係も102図と類似しており，「草で示した中部・関東のツムジは，赤のマキ類を分断して分布するところから，マキの類が各地で独自に発生したのでないとすれば，赤の類よりは後に広がったものであろう」という102図における解釈は，本図にもそのまま適用できると思われる。ただし，「山形南部のものは残存ではなく，旧藩時代に飛火したものではあるまいか」という102図の解説における記述は，本図の分布が明らかになったことによって，一部修整ないし補足する必要があるかもしれない。

いったいに，ツムジ類，ツジ類，マキ類，マイ類の語形については，102図あるいは本図に独自の語形が分布する一部の地域を除いて，両図の分布が一致する傾向があり，これは，「旋毛」と「旋風」のふたつの語の間でこれらの語形の歴史的関係に並行する部分が大きいことを意味するものと思われる。

なお，両図ともツムジ類が分布する地域ではツムジ(旋毛)—ツムジカゼ(旋風)の形で両者を区別する地点が多いが，本図でも東京・埼玉・群馬などに CUMUZI が多数見られ，一部の地点では両者を区別していない。しかし，この図に CUMUZI が現われることは，102図でこの地域に MAKIME が分布(ないし残存)することと関係がありそうである。

CUMOZIKAZE など～MO～の語形はツムジ類の領域中に散在するが，静岡にはとくに多い。この形は102図の方により多く現われる。また茨城では CUMUCIKAZE，CUMOCIKAZE のような～CI～の語形が目立つ。この形は102図には現われていない。

次は，凡例の CUZIKAZE から ZIZYUMAKI までのツジ類について述べる。この類は，まずマキ・マイ類を伴わない緑の類が北陸の一部，岐阜南西部とその隣接地域，四国の一部などにまとまった領域をもち，さらに八丈や中国・九州の一部にも見られる。また，マキ・マイ類と結合した赤の類は九州の大部分のほか，種子島，屋久島，奄美の徳之島などにも見られる。102図「つむじ」と比較すると，九州では本図のツジ類の領域の方が広いが，そのほかの地域では102図のツジ類の領域の方が少し広い。とくに，102図では，青森，新潟，そして沖縄本島，先島など，本図のツジ類の北限または南限のさらに外側にこの類が点在することが注目される。

本図のツジ類の大部分を占めるものは，緑を与えた CUZIKAZE，赤を与えた CUZIMAKI など，CUZI～の形であるが，そのほか，CUZUMAKIKAZE，CUZUMAKI，CUZUMAKKAZE CUZUMAT のような CUZU～の形が福岡から佐賀・長崎にかけてと熊本南部から鹿児島にかけてなどに，CIZIMAKIKAZE，CIZIMAKI のような CIZI～の形が熊本東部などに，CIRI，CIRIMAKIKAZE，CIRIMAKI のような CIRI～の形が石川と福岡から熊本にかけてなどにややまとまりをもって見られ，また，CUZIMAT，CUZUMAT，CUTMAT などの促音形が鹿児島に集中する。CUZYUMAKI, CYUZUMAKI, CYUZYUMAKI(KAZE)，ZYUZUMAKI，ZYUZYUMAKI，ZYUZYUMAT，ZIZYUMAT のような拗音音節を含む語形は九州各地に点在する。このような拗音音節を含む語形は102図では宮崎全域に分布する。

このように九州ではツジ類に，種々の変種が見られるが，このうち CIRI～の形が生まれた背景については，「リ」と「ジ」との交替現象との関連が考えられる。「リ」と「ジ」との交替については，たとえば94図「オチルを〝下車する〟の意味で使うか」を見ると，オリルの変化形と見られる OZIRU が熊本全域と福岡南部，佐賀・長崎の一部などに，同 ONZIRU が石川の一部に分布し，

本図のCIRI～と一致する部分が大きい。なお，石川に見られるCIRI～，CURI～の形は，102図の方により多く現われる。熊本東部などのCIZI～は，CUZI～とCIRI～との衝突の結果生まれたものかもしれもいが，CUZI～とは無関係にCIRI～が再びCIZI～へ音変化を起こすこともありえよう。

ツムジ類とツジ類との歴史的関係については，102図の解説では，「かつて中央にあったツムジが東日本に伝播して中部地方に領域を占める間に，近畿ではツムジ＞ツジという変化が生じ，それが周囲に広がっていったという歴史が推定される」と述べている。文献の上でも，「旋毛」の意のツムジあるいは「旋風」の意のツムジ・ツムジカゼが『和名抄』などに見られる。

次に，赤(または桃)を与えたマキ類と，橙を与えたマイ類について述べる。他の要素と結合した～マキ・～マイなどの語形を含み，これらの類は，北海道から琉球に至るまでの広い地域に分布する。102図と比較すると，地域によって異なるが，全体としては本図の方により多く分布し，とくにマイ類は本図の方が連続した領域をもち，かつ広い。さらに236～238図「かたつむり」を見ると，東海から関東東部にかけて，鳥取・島根，福岡などもマイマイ類の語形の分布地域として加えることができよう。

本図では，橙のマイ類は赤のマキ類の内側に分布する傾向が見られ，マイ類が近畿に発生して周囲に広がった比較的新しい表現であることを思わせる。もっとも，本図に見られるマイ類の中には，中央から伝播したものとは無関係にマキ類から変化したものも含まれていよう。MAIはMAKIのKが脱落した形ではあるが，この語形は単なる音変化によって生じたものではなく，「舞い」の意識が大きく作用したものかもしれない。なお，本図ではMEE, MYEE, MAA, MYAAなどの変種を分出してあるが，102図ではこれらをMAIに含めてあるので注意してほしい。

マキ類とツジ類との歴史的関係については，本図の分布，さらに102図の分布をもあわせ見ると，何とも決めがたい。先にも触れたように，マキ類が動詞マク(巻く)との関連で各地に独自に発生しうるとすればなおさらのことである。古い文献に見られる旋風の意の語形はツムジとツムジカゼであるから，近畿では，ツムジ(＞ツジ)＞マキ＞マイという変化があったという考えかたもあろうが，『新撰字鏡』に「颱，暴風也，豆牟志加世・颱，豆牟志風・凧・飄颱，豆牟志加世」，『和名抄』に「廻飄巻＝高樹＿，豆无之加世，飄者暴風従レ下而上也」(以上は『時代別国語大辞典上代編』より引用)とあるツムジカゼはかなり規模の大きい旋風の名称と思われ，本図の質問文にあたるような規模の小さいものは文献に記録されていない可能性もある。

凡例のTACUKAZEからTACUMEKAZEまでは「龍」と関係する語形である。この類の中で全国に分布するものの大部分はTACUMAKIであるが，この語形は，分布形態や注記内容などからみて，他のマキ類とはかなり違った性格をもつと思われるので，TACUMAKI, TACUMAKIKAZEおよびその変種のTACUMAT, TATMATには，他の～マキと区別して，桃の色を与えておいた。これらは，琉球を除く全国各地のうち，とくに海岸沿いの地域に分布する傾向が見られる。「大きなものを言う」「海上のものを言う」の注記のあるものが多い半面，「大小いずれのものも言う」の注記のあるものや，注記のないものも多数見られる。また，この類の語形が単用で現われる地点もかなりあり，さらに，これらは「無回答」の地点と混在して分布する傾向のあることが注目される。その理由はよくわからないが，あるいは，規模の大きな旋風を身近に経験する機会のある地域では，小さな旋風には注意を払われることが少なく，したがってそれに対する特称も存在しにくいということなのかもしれない。なお「無回答」は北陸から山陰にかけてとくに多い。

凡例のUZUKAZE以下は比較的少数の地点に分布する語形である。このうち，おもな語形について分布地域などを述べておこう。

UZUKAZEからUZIMAKIKAZEまではウズ(渦)を要素にもつ語形であるが，これらは他のマキ類の領域中に点在する傾向が見られる。この種の表現は，全国に分布していると思われるウズという語形や本図のマキ類の語形を基盤に各地で独自に生まれることが多いであろう。

MAWARIKAZEからHIKIMAASIまでは，マワル(廻る)あるいはマワス(廻す)にもとづくと思われる語形である。MAWARIKAZE, MAARIKAZEは東北に多く，そのほかの全国各地に点在する。MAWASIKAZE, MAASIKAZEは東海や出雲の海岸寄りなどに，MOORKAZE, MOOSIKAZEは奄美大島に見られる。

MEGURIKAZE は岩手 3764.16, MAKURIKAZE は青森 2784.63, MAKUREKAZE は岩手 3754.76 にある。この内容は，それぞれ〔meŋuri～〕〔magurï～〕〔magure～〕とあったものである。またMAKUIKAZEは宮崎 8313.72 にある。これらは『全国方言辞典』に記されている「ころがる」「転がり落ちる」意のマクレル（秋田・山形・福島から中国までの各地に分布），あるいは「卒倒する。気絶する」意のマグレル・マグルル・マグレイル（岩手・宮城と近畿，九州）—これらは「目がまわる」「眼前が暗くなる」に由来するか—などとも関係があろうか。

TONBOKAZE は奈良 6563.84, 香川 6487.43, 大分 7367.49 に，TAMAKAZE は青森 2793.51, 島根6411.80, 広島 6453.31, 山口6384.73, 7317.29 に，DAMAKAZE は青森2782.16 に，KAZEDAMA は三重 6576.32 に，MAIDAMA は高知 7471.38に，KAZEMURUSI は沖永良部 0294.66, 0294.93 に，MURAKAZE は愛知 6567.79 にそれぞれ見られる。KAZEMURUSI は『沖縄語辞典』にある「かたまり」の意の〔murusi〕との関係を考えて，タマ・ムラなどと通ずる扱いをしておいた。

DOMAKIKAZE は宮城 4714.22 にあり，DOOMAIKAZE, DOOMAI は兵庫に集中する。このうち宮城のものには「被調査者は胴巻風と説明。これは民間語源」との注があった。

SIMAKIKAZE から SINMAKKAZE までは北海道・青森，宮崎に多く，そのほか，東北，佐渡，近畿，九州など主として海岸地域に点在する。これらには「海上のものを言う」の注があるものがいくつかある。

SIOMAKI 6375.08, SYOOMAKI 4644.10, SYOODACU 5611.81, SYOOGIRI 4675.62, SYUUGIRI 4675.62 も，いずれも海岸地域に分布する。これらは「潮」にもとづく語形であり，「海上のものを言う」ものが大部分である。

SYOOGIRI から ZINZIRUMAI までは 102 図「つむじ」に現われる語形と関連のありそうなものを並べた。GIRI 6662.38, KIRI 7373.92, KIRIKIRIKAZE 6445.11, MEKIRIKAZE 6507.72, KIRIKIRIMAIMAI 5548.60, KIRUKAZE 5527.89, KIN 7373.92 は SYOOGIRI, SYUUGIRI とともに 102 図に広く分布するギリ類との関係が考えられるものであるが，いずれも分布地域あるいは語形が，102 図と微妙にずれている点がおもしろい。KYOONOMAKI 8239.31 と 102 図のキョオマキ類との関係もそうである。ただし，7373.92 の KIRI と KIN については「チリのなまりである」という調査に同席した者の発言が注として記されており，そうであるとすれば，これは隣接の CIRI 類の変化形ということになる。5527.89 の KIRUKAZE や 5548.60 の KIRIKIRIMAIMAI の KIRU, KIRI もそうかもしれないが 102 図で比較的近くに KIRIKIRI の語形が見られるから何ともいえない。むしろ，これらのギリ，キリ，チリは相互に関係しあっているとみるべきであろう。ZINMAKI 5642.31 は 102 図と同一語形であるが，本図の方は具体的には〔dʒimmakinokadze〕と回答されたものであって，多少とも区別があることになる。ZINZIRUMAI 6377.11 は 102 図にジン類が分布しない地域であるが，102 図を見ると，GIRI, GIN, SIN, ZIN などの語形は相互にかかわりをもつと思われるから，この ZINZIRUMAI も 102 図の語形となんらかのつながりをもつものであろう。

TENGUKAZE から TENGUSAN までは広島付近と大阪から兵庫にかけての 2 領域のほか，三重，隠岐，山口，長崎にも見られる。『全国方言辞典』によると，小豆島や大分にも「てんぐかぜ」があり，また，本図の TENKAZE 6440.81, TENMAIKAZE 6449.20, 6458.08 TENMAT 8342.69, TENMAKAZE 6552.46 の TEN も TENGU 類と関係があると思われる。あるいは西日本各地にテンカゼ(天風)・テンマキカゼ・テンマイカゼなどの素朴な表現があって，一部の地域では，それをテングカゼに変形させたものかもしれない。GUGINKAZE 6397.24 の GU は，比較的近くに分布する TENGUKAZE の GU と関係があるかもしれないが，『全国方言辞典』によると，「天狗」の意のグヒンサン・グヒンが静岡，岐阜，大阪，岡山，常陸（常陸方言）に，「旋風」の意のグヒンカゼが兵庫県飾磨郡にあり，これとも関係があろう。八重山の石垣に見られる ANKAZE は，具体的には〔aŋkadʒi〕2076.25，〔aŋkatsï〕2076.99 とあったものであるが，『八重山語彙』に，「アマカジ(天風)の義か」とある。

KAMAITACI から NOGAMA までは，愛媛 7400.11, 7420.91 から宮城に至る太平洋側の地域に分布し，和歌山，静岡，東北南部に比較的多い。これらは，単に語形を記入した報告のほかに，「つむじ風でけがをした時にはカマイタチニカケラレタという」「この風の中にカマイタチがいるなどという」「カマイタチは傷害と結びついている」などの注のあるものも採用したものである。

したがってこれらの語形には，単なる風の名称とはかなり性格の異なるものが含まれていることになり注意を要する。

ENOO 7316.93, EENOO 6354.46, INOOKAZE 2067.52, IINO 7302.71, NNUNKAZE 2072.20, INUUNUMARAKAZE 2068.08は「砂」を意味する各地の方言と関係がある。『八重山語彙』によると「砂」の意の〔ino:〕〔inoŋ〕〔ino:ŋ〕などが八重山各地に分布し，また，『全国方言辞典』によれば「砂」または「砂のまじっている土」の意のイナゴが千葉と埼玉に，「砂」ないし「砂利」の意のユナが岩手にあるという。

MADAKAZE 2095.60, YUBUSIKAZE 2140.49, 2150.06, 2150.17, YUBUSAAKAZE 2141.61は琉球の先島に，NOZIは新潟4685.28に，SIISIKAZEは鳥取6413.10に見られる。4685.28では259図「にじ」でもNOZIである。鳥取のものは，『全国方言辞典』のシージ「旋風。三重県三重郡」と語形が似てはいる。島根のCIZIKAZEとの関係も考えてみるべきであろうか。

最後に，本図で「その他」として扱った諸語形（これらは単用の場合は「その他」の符号で示し，併用の場合は地図に示していない。「その他」についてのこの処置は他の図と共通のものである）について，具体的内容と分布地点を記しておく。

〔dadakadze〕4790.74, 〔kizigɛę:kaze〕5608.51, 〔kandatʃi̥kaze〕6649.55(「少し大」と注記), 〔ba:kkaʒe〕7347.93, 〔dakinokadze〕7361.17, 〔torïkadze〕2771.64, 〔nïwakakadzę〕2793.00, 〔udegaʒe〕3797.32, 〔ʃikekadze〕5499.98, 〔kak̥ikaže〕5609.26, 〔kazenootoʃi〕6383.77, 〔ᵈʒo:ŋokaʒe〕6594.19, 〔urakadze〕7248.99, 〔jorikadze〕7382.97, 〔habuki〕7383.83, 〔hokadze〕7450.44, 〔sïtufukaʒi〕2151.20, 〔koŋaraʃi〕5591.91, 〔araʃi〕6505.58（「大きな風の場合」と注記), 〔toppukadze〕6389.56, 〔toppu:〕5595.89（「共」の注記), 7249.35(「新」の注記), 〔sempu:〕6358.43, 6449.84, 6457.18, 7321.46(このうち，6457.18と7321.46には「新」，6449.84には「共」の注記), 〔kadzako〕6403.60

以上，本図に見られる語形のうち，比較的分布領域の広いものについて，102図「つむじ」などと対比しつつ，きわめて大ざっぱな考察を行った。それぞれの地域における各語形，語類の詳細な分布とその解釈については102図を含めた関連諸項目との綿密な対比，検討が望まれる。また，本図に分布する語形の性格を明らかにするためには，風の種類や，そのほかの種々の気象についての名称を各地で調査し，相互に比較することが期待される。

265. けむり(煙)

後期調査になって加えた項目ゆえ地点がすくない。

大局的には，糸魚川，浜名湖線を境として，以東はKEMUなどの赤符号で示したもの，以西はKEMURIなどの空符号で示したものとなり，あと，奄美大島以南にKIBUSIなどの緑符号で示したものがある，ということになる。ただし赤符号の広く分布する地域内にも空符号が見られ（北海道・青森・岩手，山形庄内から新潟北部・佐渡，長野南部など），空符号の分布地域内にも赤符号が見られ(鳥取から岡山北部にかけてなど)，また，緑符号の地域内にも空符号が見られる。

なお，見出し全体をKEMU，KEMURIなどの類(ぬき符号)とKEBU，KEBURIなどの類(べた符号)とに大別することもできようが，その区別は，この地図で色を与えた区別とくらべて，その地理的分布がはっきりしない。

凡例にしたがって見ていこう。

KEMUの中には，3689.38の〔kẽmɯ̈〕が含まれている。

KEMOは，宮城のほか栃木・千葉にもある。KEMORIと対比すべきものである。

KEBUには，〔keᵐbɯ, kẽbɯ〕が含まれている。秋田の全地点，山形の4659.01, 4701.14, 4711.82, 4722.40を除く7地点，新潟の4676.39の計26地点である。

KENBUは，北海道・青森に見られる。当然，KEBU中の鼻音的要素のあるものと関連する。

KEMURIには，〔keᵐmɯri, kẽmɯ̈rï〕が含まれている。それぞれ4653.84と3772.32。別に，Rが反舌音になるものがある。6412.91, 7363.59, 7372.27, 7383.98, 8302.55である。このうち6412.91のものは〔kemɯ˞ɽɩ〕で，付近のKEMORIとの関連が指摘できる。また7394.60のものは〔kemurⁱ〕で，付近のKEMURとの関連が指摘できる。

KENMURIは，青森に3地点。

KEMURは，壱岐・対馬に3地点，熊本に5地点見られるほか，富山にも1地点ある。富山のもの壱岐のも

のおよび 7373.99 のものを除く 6 地点は，R がすべて反舌音である。富山のもの壱岐のものは，〔kemul〕とある。なお KEBUR 参照。

KEMUT は，五島と熊本に計 3 地点。

KEMUI は，鹿児島の 8 地点のほかは，宮崎と佐賀に各 1 地点，別に，新潟の 4666.99 にも見られる。

KEMORI は，岩手，粟島（新潟），富山・石川，島根に見られる。粟島，富山・石川のものの O は，3 地点とも U に近い O という。KEMO, KEMURI 中の KEMORI に近いものについては，すでに述べた。

KEBURI には，〔ke^{m}bɯri, kẽbɯ̃rĩ〕が含まれている。3713.75, 4638.22, 4648.42, 6584.90 である。別に，R が反舌音になるものがある。6286.68, 7269.51, 7372.03, 7381.38, 7391.01 である。なお，7266.92, 7394.60 のものは〔keburi̥〕で，付近の KEBUR との関係が指摘できる。

KENBURI は，青森に見られる。KENBU, KENMURI を参照。

KEBUR は，長崎と熊本に見られる。このうち熊本の 5 地点は，R がすべて反舌音である。

KEBUT は，7372.03 のみ。

KEBUI は，佐賀・長崎，宮崎・鹿児島に見られる。KEMUI と比較される。

KEBURE は，5517.57 のみ。〔kebure̥〕だから，KEBURI に含めることもできた。

KIBUI は，沖縄島とその属島に見られる。

KIWUI は，1221.47 のみ。平山輝男『琉球方言の総合的研究』には「伊是名では中位で /b/ を落とす傾向がある」(105 ぺ)として，〔na:wi〕(鍋)などを例示している。

EBURI は，4609.68 のみ。〔ẽb̃ɯrɯ̃〕である。『山形県方言辞典』には，庄内南部(温海町)に，ファジ(火事)，フギ(釘)のような発音がある(717 ぺ)というが，関連があろうか。

KEBUTAI は，6552.90, 6572.04 の 2 地点。注記はないが，形容詞形ではあるまいか。

K'iBUSI の中には，奄美の〔kĩ～〕，八重山の〔～sĩ〕が含まれている。1231.72, 1242.00, 1260.87 のものは，〔k'i～〕である。これらは，KIBUSI が，本土の *KEBUSI に対応することを示している。*KEBUSI は，煙るに対する煙すの名詞形のようにも思われるが，『沖縄語辞典』には，kibu=sjuN などという語は載っていない。『日本国語大辞典』にもけぶすはない。

KIHUSI は，2068.08 のみ。〔kɨΦᵾsĩ〕。

HIBUSI は，1232.29, 1232.75 の〔hibuʃi〕，0228.96 の〔hĩbuʃi〕の計 3 地点。

KIBUNCI は，2072.20 のみ。

KIBOOCI は，1242.22 のみ。

なお，琉球方言中この地図に資料の見られないものを『採訪南島語彙稿』『琉球方言の総合的研究』『琉球先島方言の総合的研究』などで補えば，次の通り。喜界・沖永良部〔çibuʃi, çĩbuʃi〕，与論〔ʃimbuʃi〕，池間〔kju:sĩ〕，宮古〔kivsi̥〕，宮古・上地〔ki̥ffu〕，八重山〔kibusĩ, kju:ʃi〕，八重山・大浜〔kibu〕，八重山・新城〔kifu〕，八重山・石垣〔kju:〕，波照間〔kɨpᵾsĩ〕。

KAWOSI は，1241.49 のみ。

HUSURI は，7332.52 のみ，HUSUT は，7353.51 のみ。

SUMORI は，5472.91, 6413.29 の 2 地点，SIMORI は，6410.77 のみ。『島根県方言辞典』には，「しもり」は煙として，「すもり」はくすぶる煙として出ている。『全国方言辞典』には，出雲，宮崎・鹿児島に，いぶる・くすぶるの意味の「すもる」がある，と出ている。

HOKE は，6296.27, 8394.01 の 2 地点，HOOKE は，8300.11 のみ。本集 266, 267 図の「ゆげ」参照。

無答は，8315.42 のみ。調査もれという。

『日本国語大辞典』を参考にして文献による語史を略説すれば，けぶり(万葉)・けむり(大日経義釈延久承保点)が古く，けぶ(国町の沙汰)・けむ(名語記)が新しいものらしいことがわかる。けぶたし(十巻本和名抄)・けぶる(日本紀竟宴和歌)・けぶい(浮世風呂)と，けむたし(伊京集・日葡)・けむる(和泉式部集)・けむい(和英語様集成)を加えれば，べた符号のブの類がぬき符号のムの類より古そうに見える。『沖縄語辞典』は，kibusaN, kibujuN を挙げている。

なお，『日本国語大辞典』は，「けぶりとけむりは主として表記の違いと考えられる」として，『名語記』に「けぶりともけむりとも両様にかきあひたり」とあること，『初心仮名遣』(元禄四年)に「ふをむに読む事，是はふと書ながらむと読むなり」として煙を例としていることを示している。これは，むろんフ字とム字一般のことではなく，煙について，『名語記』以後，フとあってもムと発音することがあるから注意せよという程度であろう。

さて，地図の分布から赤の類と空の類の新古をいうことは，すぐにはできない。ただし，赤の領域に含まれる空の類と，空の類の領域に含まれる赤の類の分布とを比較すると，赤の類が，東日本と鳥取の2か所で別々に新しく発生したのかもしれないと考えることは，さして無理ではなかろう。その場合，大阪と愛媛の赤の類は，注記はないが，新しい東日本風の表現と位置づけることができよう。これに対して，赤の領域中の空の類について，そのすべてを個別的発生や西日本風の表現の侵入のいずれかであると考えることは，やや困難と思われる。八丈島は，『八丈島の言語調査』によれば，ケブリのようである。

クビルのように，まずケブ～ケムという表現があって，それが動詞ケブル～ケムルとなり，さらに名詞ケブリ～ケムリとなったという考え方もあろうが，強く主張する根拠はない。ただ言えることは，新しい(かもしれない)ケブ～ケムの類が，特に東日本において非常に広い連続した領域を持つに至った経過を，どのように説明するか，ということぐらいであろう。判定の鍵は，琉球の KEBUSI の位置づけ，別資料によって補足した先島に見られる赤的な表現の位置づけにある，と言えるかもしれない。

ブ(べた符号)の類とム(ぬき符号)の類の隆替については，全国的視野の中で，地理的分布からその流れをつかむことは，いっそう困難のように考えられる。東京市部はたしかにムの類と言えそうであるが，東北方向を除いて，周辺にブの類がある。大阪は，『大阪方言辞典』によれば，ケブリ・ケブタイが優勢らしい。もっとも，ケムニマクという見出しも出ている。京都も，『京言葉』『京ことば集』によれば，ケブル・ケブタイが優勢らしい。もっとも『京ことば集』には，センコノケム(線香の煙)も出ている。

全国的に見ると，宮城・福島・茨城のように，全域がムの類の地方(栃木，東京・神奈川，高知がそれに準ずるか)があるのに対して，全域ブの地方(山梨，愛知，大阪・奈良，佐賀・長崎本土部がそれに準ずるか)のないことは指摘できる。ただし，その意味するところは，明らかでない。

サブイ～サムイ，サビシイ～サミシイなどの関連事項の資料，地域的な詳しい調査によって今後解明されていく問題なのであろう。

266. ゆげ(蒸気――湯の場合)

267. ゆげ(蒸気――飯の場合)

266図，267図は関連項目なので，まとめて説明する。両図に共通した語形がかなり多いので，語形の分類の仕方，符号の色・形の与え方を一貫させた。なお，＜併用処理の原則＞は YUG〔ŋ〕E，YUG〔g〕E，および ZYOOKI の3語形に適用した。

橙を与えたのがユゲ類である。266図，267図ともに北海道から奄美まで全国のほとんどの地域に分布しているが，267図では，北海道・青森・岩手，関東，近畿およびその周辺，中国などの地域以外の分布はまばらである。ユゲ類のうち，YUG〔ŋ〕E は，〔jɯŋe, jɯ̃ŋe〕などのほか，〔jɯ̃ge, jɯ̃g̃e, jɯŋge〕などを内容とし，YUG〔g〕E は，〔jɯge, jɯγe, jɯgɛ, jɯγɛ, jɯ̃ge, ǰɯ̃ge, jɯ̃gẹ, jɯ̃g̣e〕を内容としていて，地域的にかなりまとまった分布を示している。1図「カガミ(鏡)の -G- の音」，2図「カゲ(蔭)の -G- の音」の分布を参照されたい。YUUG〔ŋ〕E〔jɯːŋe〕は266図の5714.10に現われるが，267図の同地点では YUG〔ŋ〕E〔jɯŋe〕であった。UG〔ŋ〕E は，267図の3747.91にのみ現われる語形であるが，266図の同地点は YUG〔ŋ〕E である。このように，両図の間の同一地点で，きわめて類似しているが異なった語形が現われることがある。SYUG〔ŋ〕-E〔ʃɛɯŋe, ˢjɯŋe, ʃɛɯ̃ŋe, ˢjɯ̃ŋẹ〕，ZYUG〔ŋ〕E〔ʒɯŋe, ʒɜɯŋe, ʒɯŋe, ʒɯŋẹ, ʒɯ̃ŋe, ʒɯ̃ŋe, ʒɯ̃ŋe, ʑɯŋe, ʒ⁽ᶻ⁾ɯ̃ŋe〕は，主として266図の宮城・山形にまとまって分布しており，267図の同地域にも多少見られる。126図「ゆび(指)―第121・122・123・124・125図の総合図」における ZYUBI の分布，260図「ゆき(雪)」における SYUGI，ZYUGI の分布と，重ね合わせて見られたい。YUKE は，266図では5665.11，7332.52，7340.74，8364.33であり，267図では5665.11，8364.33である。このうち，群馬では IKI，EKI に接しており，九州では HOKE に接しているので，それらとの混交形であろうか。267図の YUKI 4643.47についても IKI との関連で同様のことが考えられる。266図の YUG-〔g〕AI 5654.98は，この地域に広く分布している YUG-〔g〕E から「誤った回帰」によって作られた語形かもしれない。YUG〔g〕I は，266図で4710.18，6677.41，6677.

70, 0237.79に，267図で3706.91, 4710.18, 4735.42, 6677.41, 0237.79に，ZYUG〔g〕Iは266図，267図の4763.45に見られる語形である。このうちのいくつかの地点では，一般的に，語中語尾のガ行子音が〔ŋ〕となり，語中語尾のカ行子音は〔g〕となる傾向があるので，YUG〔g〕I, ZYUG〔g〕Iの中にはイキ類とすべきものもあったと考え，イキ類と共通の符号の形を与えてある。EG〔g〕E(266図—4700.78, 6402.94, 6432.22, 267図—4700.78)についても同様のことが考えられる。OG〔ŋ〕E(266・267図—5574.84)は，地域としてはユゲ類と，語形としてはホケ類とつながりがありそうなので，凡例における位置によってそのことを示そうとした。EG〔ŋ〕Iは266図，267図を通じて主として岩手に分布し，IG〔ŋ〕Iは266図，267図を通じて主として東日本のあちこちに点在しているものである。いずれもGの部分が〔ŋ〕であることからユゲ類としたが，イキ類に通ずる点もないではない。YUEN(266図—5731.29, 6349.80, 7349.86, 267図—5731.29)およびZYUEN(266図—4742.43)は，ユゲ類としてあるが，「油煙」だとすると別類になろう。YUG〔ŋ〕ERIからIG〔ŋ〕IRIまでは，266図，267図ともに福井にまとまっているほか7355.48にもある。いずれも後部分にRIまたはREをもつ語形である。福井には隣接してイキ類のIKIRI, EKIRIが見られるので，それと関連があろう。

緑を与えたイキ類の分布は，267図の方がやや広くしかも分布密度はかなり高い。266図では，宮城・秋田・山形・福島・茨城，北陸・中部に連続しているほか，広島，奄美，宮古にまとまって分布している。ただし，これらのうち，岐阜北部，奄美を除いて，本州のほとんどの地域ではユゲ類と，宮古はキブシ類と混在している。これに対して，267図では，266図とほぼ同じ地域に分布しているほか，関東にも分布している。これらのうち関東，広島，宮古以外の広い地域では，他語類の目立った分布はあまり見られない。イキ類と，それ以外の語類との意味分担の仕方の変化を，示しているのだろうか。

ICÏKI, ICÏG〔g〕Iは，266図，267図を通じて宮古にまとまっているものである。アチキ類が奄美から沖縄にかけて分布しているので，それとの関連が考えられよう。IKIRI, EKIRIは，266図，267図を通して富山・石川・福井と岡山・広島にそれぞれまとまって見られる。この語形については，動詞「いきる」が『日本国語大辞典』によれば，「身体が熱くなる。ほてる。」の意味として富山県礪波，和歌山で，『全国方言辞典』によれば，「意気込む。力む。」の意味として大阪，岡山，南伊予で，「熱の盛んになること。勢いづく。」の意味として大阪，淡路島，徳島・高知で，それぞれ使われているので，その名詞形と考えて，関連づけることができよう。「人いきれ」「草いきれ」とか「いきり立つ」などの語ともかかわるところがあろう。

空を与えたのがホケ類である。中心的な語形HOKEは，267図では，中国・四国・九州に連続した広い分布領域をもっているのに対して，266図では，鳥取，山口およびその周辺，四国，九州中南部などにやや不連続に分布していて，その間隙にユゲ類が入り込んでいるように見える。ホケについては，『時代別国語大辞典上代編』の記述のように「火気」と思われるが，先島のPUKIについての＜沸騰する意か＞(2075.22)の注に従えば，「吹く」の名詞形とも考えられる。266図に現われるHOG〔ŋ〕E, HOG〔g〕E, HOG〔g〕EE, HUG〔g〕E, YUHOG〔g〕E, 267図に現われるHOG〔ŋ〕E, HOG〔g〕E, HOG〔g〕EE, HUG〔g〕Eは，三宅島，静岡，和歌山，愛媛，九州などに分布している。これらのほとんどは，HOKEの単なる音転形ではなくて，ユゲとの接触によって作られたものであろう。HOKERI, HOKIRIは，両図を通して，IKIRIの地域に連続した中国西部から福岡北部にかけて分布しているので，それとの混交形であろう。

茶を与えたアチキ類は，両図を通して奄美から沖縄本島およびその周辺に分布している語形である。0275.97には＜熱気の訛＞とある。そのほか，他語形との併用地点におけるアチキを特徴づける注は次のとおりである。ただし，これは＜併用処理の原則＞を適用した地点を含んでいる。

266図
0247.31〔atsu̯kï, juge＜新＞〕
0249.17〔ak'ki＜希＞, i'tʃi〕
0275.97〔asïki＜古＞, juge＜新＞〕
1241.96〔at'ʃik'i:, Φu:k'i:＜多く用いる＞〕

267図
0249.17〔ak'ki＜希＞, i'tʃi〕
0275.97〔asïki＜古＞, juge＜新＞〕
1241.96〔at'ʃiki':, Φu:k'i:＜多〕

ユゲ類との併用地点では，アチキ類が古そうである。

赤を与えたもののうち，両図を通して，YUBURI

7659.40を除くKEMURIからKIHUまでは，「煙」を意味する語形，またはそれを語形に含むものであり，YUBURIも，ユゲとケムリの混交形と思われる。ケムリ類は，266図では，先島諸島にまとまって分布しているほかは東日本に点在しているだけであるが，267図では，先島諸島とともに，関東および伊豆諸島にまとまって分布している。＜飯のユゲとは言わない＞(5666.18)，＜御飯からケブが出ている＞(5677.28)のように266図と267図の間の使い分けを明記した地点がいくつかあった。CYUU 2074.69は，地域的連続からしてもKIHUなどの音転形とも思われるが，『八重山語彙』では「露」の意味の語形としているので，それに従えば赤符号の中では異質のものになろう。なお，「煙」については，本集にその地図(265図)がある。

紺で示したものは，まとまった分布をもたない語形である。HOMEKIは267図の1地点(6375.40)のみに現われる語形であるが，『全国方言辞典』によれば，動詞「ほめく」が，「むれる」の意味として岡山，山口で，「顔がほてる」などの「ほてる」の意味として福井県大飯郡，山口，熊本で，それぞれ使われている。その名詞形だとすると，他地点にも，ちょっと質問を変えれば現われそうに思れる。HODORIも267図の1地点(5761.27)だけに見られる語形である。『全国方言辞典』に「暖かくなる。暖まる。岩手，宮城，福島県相馬郡，栃木県河内郡。」とある動詞「ほとる」と関連する語形であるとすれば，共通語「ほてる」ともなんらかのつながりが出てくるかもしれない。HOSE，HOSYEは，267図の鳥取・島根，岡山北部にまとまって見られ，266図の6415.78，6421.82，6422.16にも見られる語形である。ホケ類の分布の中にあり，その変種語形とも考えられるので，HOKEと同形符号で示した。HOYA (267図——隠岐3地点)，HONO(267図——7401.92，7410.57)も，語頭がHOであり，また分布からもホケ類と無縁ではなさそうである。『全国方言辞典』によれば，「ほのき」が「熱気，ほとぼり。」として，「ほのか」が「暑い，むし暑い。」として，いずれも高知で使われているとする。参考になろう。また，擬態語「ほやほや」，「ほかほか」，「ほのぼの」などとの連想も感じられるがどうであろうか。ZYOOKI，ZOOKIは「蒸気」であろう。266図の次の地点に現われる。3699.55，3727.81，3797.32，6434.52，6449.84，6466.16，6494.55，7303.38，7351.06，7422.26。このなかには，＜子どもの時にはこう言った。今はjugeと孫達は言っている＞という地点(7351.06)もあったが，5661.34，5662.78，6429.61，6519.43，7302.87，7415.47における他語形と併用のZYOOKIには，＜新＞・＜上＞・＜共＞・＜希＞などの注記があったので，＜併用処理の原則＞を適用して，これを採用しなかった。「無回答」は次の地点である。

266図—7376.68，2068.08，2072.20，2141.61

267図—5588.81，5613.80，5639.80，5654.98，5657.73，5682.37，5712.70，5790.64，6412.91，6426.47，6455.27，6527.73，6548.26，6626.30，6702.21，7461.23，2068.08，2072.20，2141.61

267図に「無回答」が多い理由については不明であるが，266図と同じだということで回答しなかった地点もあるのではなかろうか，と思う。

各語類間の歴史関係を見ることはかなり難しい。この2項目に近接する意味分野，たとえば，口から吐く息，ふかした芋からの湯気，体や頭から立つ湯気，池の水面に立ちのぼる湯気，煙など，さらには「熱気」などとの関連も見なければならないであろう。この2枚の地図からだけでいえるごく大まかな見通しを述べるとすれば，まず，267図の各語類の分布が地域ごとにかなり鮮明であるのに対して，266図は，全国的にユゲ類以外の語類の分布が比較的希薄である点に注意する必要があろう。標準語の入り込み易い意味分野が266図だとすれば，267図が，より古い分布の様相を示していると言えようか。主として東日本にイキ類が，主として西日本にホケ類が，領域を二分して分布している。266図にもその傾向はある程度見られるので，古くは，2項目を区別しないイキ類とホケ類が，東西に広く分布していたのではなかろうか，と考えられる。あるいは，イキ類が奄美，宮古諸島にまで分布していることから，さらに古くは，全域がイキ類であったのではないか，とも考えられる。ただ，「呼吸，気力」などの意味のイキ，「火の気，煙」などの意味のホケは，すでに『万葉集』などに現われているので，イキ，ホケともに語そのものとしてはきわめて古いことに留意しなければならない。また，静岡や三宅島などに孤立的にまとまってホケ類が見られるので，かつては東日本にまで広く分布していたのではないかとも考えられる。両方の言い方を共存した時代があって，意味のかたよりが地方ごとに起こり，現状ができあがったのかもしれない。ちなみに，「湯気」の意味では，『日葡辞書』にホケは採られているがイキは見あたらない。その後，

267図で国の中央でユゲが生じたため，その領域が広がるにつれて，少しずつ，266図との区別が行われるようになった。ところが，267図では，イキ類やホケ類の強い抵抗に遭ってユゲ類は分布を広げることができず，むしろ，共通語の入り込み易い266図のほうにユゲ類が勢力を急速に広げつつあるのだ，とする見方はどうであろうか。

今後の小地域ごとの詳細な調査，あるいは，「ゆげ」の意味内容をずらした周辺部分についての調査などによって，新しい見方も可能になってくるであろう。

268. におい(芳香)

269. におい(悪臭)

268図，269図は関連が深いので，一括して説明する。なお，第2集の85図・86図「匂を嗅ぐ」とも関連があるので，解説とも比較してほしい。

この268図，269図は，すでに85図があるので，ともにそれに準じて作図した。たとえば85図では NIYOI は分出したが KAWORI は KAORI に含めてある(ただし NIWOI は分出してある)，KANZA は KAZA に含めてあるが KANMARI は分出してある，などの問題となりうる点があるが，いまそれに従っている。もっとも85図は目的格を示す文法要素を含む場合があったりして，全く同じというわけにはいかない。なお，今回の図と対比してみると，85図の NYOO 0228.96 は同図ではオ助詞をとる形として分類してあるが，268図，269図ともに同地点に NYOO (単独名詞形とみられる)が現われ，どうも違ったらしい，などということもあった。

268図，ことに269図では，動詞形，形容詞形の回答が報告されることがあったが，これは，図上に「名詞形なし」として示し，「無答」とは区別した。質問が，用言を引き出しやすい傾向(同じようなことをくどくど聞くことを含む)を持っていたのかもしれない。なお，269図の「名詞形なし」は，ほとんどが(～)クサイという形であった。5608.51，5674.54の語形は KUSE とあるが，前者には(名詞である)，後者には(クセガスルという表現あり)の注のあったことから，「名詞形なし」に分類しなかった。このような例のあることは，いちおう形容詞とした処理したものの中にも，実は，名詞のものが含まれているかもしれないことを暗示している。このほか，269図の回答には，イヤナを冠するものがいくらかあって，図上では，その部分を省略して示したことを注意しておこう。正当な処置であったかどうか，やや疑わしい。それから，4609.25は，両図とも KANSÏ であった(85・86図の場合の内容は〔kansïru〕)。いま「名詞形なし」としてあるが，名詞として取り扱うべきだったかもしれない。

さて，268図は芳香(名詞)，269図は悪臭(名詞)を求める意図の質問であったが，被調査者に，質問文を通じてそれを十分に察してもらうことは，できなかった疑いがある。参考までに示すという意図なのかもしれないが，268図用の回答の併用語形の一方に<悪臭>の注のあるものなどがあった。これに準ずる積極的な注記のある不適当な語形は地図から排除したが，無注のものの中にも，悪臭をさす語がまじっている危険はある。269図についても，同様のことがあった。

なお，質問は，268図に対応するものが先で，269図に対応するものがそれに続いていたことを注意しておこう。

両図の併用処理語形は，268図，269図ともに NIOI である(85図，86図の場合は，NIOIO-KAGU が併用処理語形であった)。268図で除いた NIOI は120ほど，269図で除いた NIOI は70ほどであった。

268図，269図の両図を対比してみると，分布はかなりよく似ているといってよろしかろう。概略的には，東北地方北部にカマリ，秋田南部から新潟にかけてカ，富山にハナガ，石川にホガ，フガがある。そして，佐渡，中部地方西半，近畿，中国東半，四国(北半)，宮崎，鹿児島東半、奄美・沖縄にカザの類があり，そののこりの地域にニオイの類が分布すると言えよう。ニゴイやニメエの領域も両図共通する。部分的にはもちろん相違があるが，268図にカオリやカバ(琉球)がかなり見られるという点が，両図の間のもっとも大きな違いということができそうである。85図と比較すると，中国・四国・九州に「前部分がない」が見られて大きな違いのように見えるが，残りは大体似ていると言えよう。85図の欠けた部分を86図で補ってみると，カザムの類が268図，269図のカザよりやや広く分布していることが注目される。カズム，カズン，カジンの類を含めれば，その領域はいっそうひろがる。

凡例を追いつつ見ることにしよう。

NIOI の中には，〔ɲioe, nïoï〕などを含む。〔ɲɪoš〕が

両図の6488.48にある。268図6547.24は〔ɲioĭ〕であった。

NIHOIは，両図とも，5588.78，6516.15，6519.43である。

NIÖEは名古屋市周辺に多いが，そのほか，268図では5590.53，6446.43に，269図では6446.43に現われる。ÖEの内容については，第1集解説7ページを見てほしい。

NEOIは，両図とも6402.53，6413.29に現われる。

NUOIは宮城を中心に7～8地点見られるが，4711.42のものは〔nɯoːɪ〕であった。

NIUIは，268図では4676.39と0294.66に，269図では，4647.69と4676.39に現われる。

NIEEのEEの内容については，第1集解説7ページに準ずる。

NIEのEは〔e，je，æ〕などである。

NYEは両図とも8352.40。

NUEEは268図の4711.42のみ。

NIIIは両図とも7334.44，7347.93のみ。

NYUIIは269図の7347.93のみ。

NIIやNIは，新潟に見られる。前者のほうが多い。

NIOは268図の4685.72のみ。

NIYOIについては，すでに述べたように，NIOIに含めてしまう考え方もある。両図に現われる4665.87の〔ĩjoɪ〕，268図の6470.11の〔nijoiː〕などを含む。

NIYUIは，両図とも7334.78のみ。

NYOOIは両図とも6407.28，6472.68。

NYOIは，両図の4695.19，4695.87，5611.74，6414.25，268図の5615.74に現われる。

NYUIは両図とも5603.88のみ。

NYOOは両図とも0228.96のみ。これが目的格を示す助詞部分を含まぬ名詞形と考えられることはすでにのべた。

NIWOI，両図8303.47の〔nị^{w}oi̯〕，7380.74の〔nĩ^{w}oi〕，268図7382.58の〔nĩwoi〕を含む。

NUWOIの内容は〔nũ^{w}oi〕で，両図とも7352.97のみ。

NIWEIは両図とも7659,31，7659.40。

NIWEEのEEの内容は，^{w}eː，weː，wɛː，wæːなど。

NIWEは，両図とも4710.55，7350.21，7352.38，8321.58，9322.52。

NIWËの内容は〔niwë〕で，両図とも，奄美大島に4地点。

NYUWEEは両図とも7343.14のみ。

NYUWEは両図とも9312.42のみ。

NIWIIは両図とも7333.75，7344.45のみ。

NIWIは両図とものの7376.68と，268図4647.69。

NIGOIのGの内容はほとんどが〔ŋ〕であるが，5792.78のみは両図とも〔ɣ〕。

NIGEEは，両図とものの6656.31と，269図の6655.38。Gは両地点とも，〔ŋ〕。

NIMEE，NIMEは，両図とも西北九州にかたまっているが，うち7361.82の内容は〔ɲiɱe〕。

KAZAの中には，両図の6505.60，268図の7377.27の〔kad^{z}a〕(これは296図ならKADAとしたかもしれない)，両図5609.26，6535.24の〔ka^{n}za〕を含む。また，269図の6631.05は〔ni^{w}oĭnoka^{d}za〕とあった。

KAZAAは269図の5585.09のみ。

KAZYAの中には両図の2765.71，2773.13，269図の2763.28の〔kandʒa〕を含む。

KAZYAAは269図の1241.96のみ。〔kadʒaˑ〕であった。

KADA，KADAAのうち後者は両図とも0246.97，0256.08，0257.12，0257.43であったが，すべて〔kadaˑ〕であった。

KARAは，両図とも6458.91，6562.64，6571.68。

KARAAは，両図とも2095.60のみ。

KASAは，両図の6521.20，6545.41と，268図の6408.15。

HAZAは，両図の1231.72，2085.69と，269図の0294.66。

HAZYAは，両図の0294.93，1211.69と，269図の1232.75，1233.61，1242.72。

HAZYAAは，両図の1221.47，1241.49と，269図の1231.88，1242.00，1242.22。

HADAは，両図の0249.17，0340.00，1213.76。

HARAは，両図の1271.05のみ。

KABAは，268図に多い。269図は，1156.89，1270.26のみ。

KABAAは，両図の0256.76，268図のみの1241.96。

HABAは，両図の1232.29，268図の1232.75，1233.61，2085.69。

HABAA は，268 図の 1231.88 と 1242.22 のみ。

HAWA は，268 図の 1242.72 のみ。

KABASÏ は，268 図の 2068.08 のみ。これは名詞ではないかもしれない。

KAMARI の中には，269 図 3753.85 の〔jatsɯzɯrikamari〕，3754.37 の〔jatsɯzɯrekamari〕を含む。八丈にもあって注目される。

KANMARI は，両図とも 2772.74 のみ。

KAMARIKO は，秋田・岩手に見られるが，268 図は 7 地点，269 図は 3 地点。

KAMORI は，両図の 3783.11 と 268 図の 3773.12。

動詞連用形からの転生名詞のものは，268 図（とくに岩手）に多い。269 図では，それにかわる動詞形（名詞形以外）の回答があったためであろうか。86 図の KAMARU, KAMAROWA, KAMURU, KAMORU, さらに KAGURU などと関連させて考える必要があろう。

KAORI の中には，〔kaorï, kawori, kaworï〕などを含む。5538.33（両図），5548.24（268 図）の〔kaol〕もある。

KAOT は，268 図のみ。7373.23 と 7373.56。

KAOI も，268 図のみ。4659.50 と 7330.77。

KAORE も，268 図，6422.93 のみ。

KAORIKO は，両図の 3762.85 と 268 図の 3747.45。

KAWARI は，両図とも 3702.89 と 6472.53。

KA は，両図とも 50 地点ほど。

KAA には，〔ka·〕も含む。

KAKKO は，両図とも 3649.16 のみ。

KAN には，5623.42（268 図），5623.85（両図）の〔kã:〕，3688.82，5633.45（ともに両図）の〔kã〕を含む。

NIYOIKA は，両図とも 1725.35。

HOGA, HUGA とも，併用が多い。

HANAGA も，併用のほうが多い。

KUS(Y)AMI は，269 図に多い。〔kɯ̃samï〕などを含む。〔kɯʃami〕は，3778.00（269 図）のみ。

KUSE は 269 図のみ。5608.51 と 5674.54。すでにのべたように，名詞と思われる。

HUSYASYA も，269 図，2068.08 のみ。

KUSURI も，269 図，7422.26 のみ。

KIBIRE も，269 図，7415.85 のみ。

KOOKI は，268 図のみ，4638.43，5604.52，7362.42。新潟のものは，ともに〔kɔ:ki〕。

KABIN も，268 図，6635.44 のみ。

KAHUN も，268 図，6466.16 のみ。

名詞形がない，はすでにのべたように，269 図に多い。両図にある KANSÏ についてはすでに触れたが，268 図のものは，あと 3 地点（4637.20，6496.72，7351.68）で，すべて動詞形だったが，269 図のものは，KANSÏ を除いて，すべてクサイと～クサイ（イヤリクサイ，ケヤズリクサイ，ケヤツリクサイ，ズズリクサイ，ズリクサイ，ツズケクサイ，ツズリクサイ，ネンズリクサイ，ヤツズリクサイ，ヤッツズレクサイ，ヤネズリクサイなど）が岩手にあるほか，6460.08，6481.15 のシビトクサイ，7406.25 のキノミクサイ，7381.97 のキジメクサイ，7501.68 のキナベクサイなどが珍しい表現である。

無回答は 268 図になく，269 図に 14 地点である。四国に多いが，おそらく，268 図と違わないので答えなかったというものを含んでいよう。

もう一度，地図にかえって，全体を見てみよう。

草であらわした表現は，すべて動詞ニオウの名詞形（の変種）とみられる。

緑で示したものは，上の草の類からの変化と思われる。ニゴイは，語頭の鼻音が後続音に影響し，i から o へのわたりに ŋ として顕現したものと考えられる。ニメエは，周辺の NIWEE と関係があり，これも語頭の鼻音が，W を M に変えたものと思われる。

赤のカザの類は，文献では『名語記』（13 世紀後半）がもっとも古い。このカザは，86 図と対比すれば，カザムという動詞と関係の深いことがわかる。このカザムは，キザスなどという語と関係があるかもしれない。名詞カザをもととして，たとえば白む，腹む，淀むなどのように動詞カザムができたのか，あるいは逆に，カズム（黒ずむ，立ずむなどの類）などからカザムが生じ，さらに名詞カザが独立するようになったのかは，ちょっとわからない。分布からは，動詞形が古いのではないか，という感じがするが，如何であろうか。ただし，カズムは文献には見られず，カザムは，『談義本風流志道軒伝』が初出のようで，どうもはっきりしない。カザの語源については『言語地理学の方法』によると，香ザスの語根説，風の転かという説，香ザ（ザは餌サのサと似ている）説などがあるが，北陸で香を源とする語と共存することなどから，結局香ということばと関係があるものと思われる。関東，福島西部のものの性格は，よくわからないが，古い時代の飛火現象の残存ではあるまいか。268 図

では，5609.26でニオイ新，5781.65でカザ多，6702.21でカザ古，269図では4689.86でカザ古，5609.26でニオイ新，6702.21でカザ古などの注が，あることはある。

以下橙の符号のものが並ぶ。

カバの類は，琉球の島々にのみ見られる。268図に多く見られ，カンバシ＜カグハシの語幹とも思えるが，86図には，動詞としてKAB～という語根が多いことがわかり，当然無関係ではない。いずれにせよ，香をもととすると言ってよかろう。

カマリの類は，北奥にかたまっている。なお，『日本国語大辞典』には宮城にもあるとするが，地図では八丈島にも現われて驚かされる。86図と対比することによって，動詞カマルとの関係がわかる。カマリは，当然動詞カマルの名詞形であろうが，この動詞カマルは，自動詞もあるかもしれないが，『全国方言辞典』などを見ると他動詞がふつうのようである。したがって，カラム：カラマル，クルム：クルマル，チヂム：チヂマル，ツカム：ツカマル，ハサム：ハサマルなどから類推して，カム：カマルの関係を見ようとすることには，いささか無理がある。しかし，86図によって，東北地方にカムの多いことがわかり，カムとカマルの関係は断ち切りにくい。一方，KAMORI (3773.12, 3783.11—269図は後者のみ)や次に述べるKAWARI (両図とも3702.89と6472.53)を介すれば，カオリとの関係を無視することはできない。ともあれ，いずれにせよ，香ということばをもととすると考えられる。

カオリの類は，まず，動詞カオルの名詞形としてよかろう。カオルの語源ははっきりしないが，やはり，香と無縁ではあるまい。

曲玉の符号を与えたものは，茶・紺の色を与えたものを含めて，香の直系の語形と思われる。秋田から北陸にかけて多く見られるが，別に，九州や沖縄にも見られる。北陸におけるこの類とカザの類との併用地点の注記を見ると，ホガ・フガ・ハナガが古いとするものが，圧倒的に多い。ホ(ガ)・フ(ガ)・ハナ(ガ)の意味はよくわからないが，ハナガは，鼻香であろうか。香が一音節なので，なにかをつけて語形を補強したのであろう。

こうみてくると，主として橙と赤であらわした香をもととした諸語形が，北奥から主として日本海岸を通り，中部地方西部から近畿，中国東部，四国(北半)を経て宮崎・鹿児島に達し，さらに琉球の島々にかけて，ほぼ連続して分布し，東北南部，関東から東海地方にかけて，および高知，さらに中国西部，九州北西部に，ニオイの類が密度高く分布している，ということになろうか。香の類が連続して分布し，ニオイの類が地域を分断されながらそれを取り囲んでいるようにも見える。

しかし，268図では橙のカオリの類が全国に散在し，一方，香の類の地域とした中にも，ニオイの類がかなり見られることにも，注意しなければならない。また，86図を見ると，動詞形の中の香は，山口，福岡北部，大分南部，奄美・沖縄を除いて，ほとんど全国を覆っていることに注意する必要がある。

したがって，268図，269図だけを見て，ニオイ類が古く，香の類が新しいなどとすることは，速断にすぎない。文献の教えるところによると，ニホフもカヲルも，元来は嗅覚に関するものではなかったようであるが，意味変化は，各地で，複雑な過程を経て，さまざまに進行したものと思われる。現在ニオイの勢力の強いいくつかの地方では，おそらく，各地域で平行的な変化があったのであろう。

分布上から言えることは，香の類の中で，カザの類が新しい，というぐらいであろうか。カバの類，カマリの類，ホガ・フガ・ハナガの類は，それぞれ局地的な発生に違いない。

268図と269図，さらには85図，86図を詳しく比較すれば，さらに深い段階に達することができよう。それは今後の課題となる。

270. はい(灰)

質問番号150と151とを区別せず，同一語形を回答した地点が非常に多かったので，両項目の回答を1枚の地図に登載し，両項目間に違いの見られる地点では，それぞれの符号に補助符号を付けて示した。たとえば，青森の2743.86では，150がHOGORI，151がAGUであり，新潟の4648.42では，150がAGUとHAEの併用，151がAGUであることを示す(それぞれの地点で両項目に共通に現われる語形には，補助符号を付けていない)。ただし，項目間に微細な音声的差異が見られ，それらが本図で同一見出し語形にまとめられた範囲のものであるときには，その区別を図示していない。たとえば，山口6376.33の内容は[haɯ](150)と[hai](151)であった。

質問番号150の項目は，62年度以降に一部の地域で

調査を打ち切っており，151の項目は，同年度以降全地域で調査を打ち切った。そのため，本図では地点数が少なく，また，一部の地点では，150の回答しか得ていない。

この図では，ハイ類およびハイ類を要素に含む語形(AKUBAIなど)について，語形の分類のしかた(それぞれの見出し語形の下にまとめられた音声変種の範囲)，および，符号の色・形を，比較のため，232図「はえ」と統一した。その際，232図の内容に見られない音声変種については，232図の分類原則に照らしてしかるべき見出し語形に含め，あるいは新たな見出し語形を加えた。

凡例の見出しの排列も232図にならった。すなわち，ハイ部分の音声内容が，代表見出し形として示したものと同一もしくはそれに含めて良いと認めたものは，代表見出し形の次にまとめて排列し，見出しの位置を一段右側へずらしてある。たとえば，HEE〔he:〕の次に位置するHEEBOは，HEE部分の音声が〔he:〕であり，HEE〔hɛ:〕の次のHEEBOのHEEは〔hɛ:〕であることを示す。

＜併用処理＞は，232図と統一して，これを行わなかった。

以下，色ごとに，その分布を説明しよう。

緑の類は，東北，九州東部，琉球の大部分などを除いた地域に広く分布する。この類の各種の語形や音声変種の分布について232図と比較すると，調査地点数の違いによる分布の粗密の相違は別として，その領域は，大まかには一致しているものが多い。ただし，HAIBO, HAEBOなど，～BOの語形の分布には両図の間に大きな違いが見られ，232図では富山・石川などに見られるのに対し，本図では愛知東部から静岡西部にかけて集中している。また，232図に見られるHAIBOBOなど～BOBOの形は，本図では皆無である。またHAEは本図の方が若干少ないが，この点，「はひ(灰)」と「はへ(蠅)」との古形もしくは表記の違いが，わずかに反映すると言えようか。

本図の凡例のKARAHAI以下NUKABAIまでの語形などは，灰の原材料や製法など，いわば灰の種類の違いにもとづくと考えられる語形が多く，これらは当然232図にはない。本図では，この種の語形も，原則として全部登載してある。これらのうち，SUBAI, WARABAIには「わら灰の，作りたてでまだ色の黒いもの」などの注記が多かった。また，KOZURIBAI 6507.48には「木のもえさしなどのまだ混じった灰」とあった。なおZIRUHAI, SIROBAI, KUSABAI, MOKUBAI, TAKIBAI, NUKABAIは150の項目のみに，DOBAI, KOZURIBAIは151の項目のみに現われた語形である。

橙の類はハイ部分の語頭が両唇摩擦音HW～の語形をまとめたものであるが，これらは，九州の主として東部と奄美・沖縄，さらに東北の一部にも見られる。茶のアク類に圧倒されたため東北で分布が薄くなっているほかは，232図の分布と大差はない。

ハイ部分の語頭がP～である赤の類は琉球に集中する。なお，SIRAPPEE 5671.68もP～ではあるが，これは，他のP～の語形と性質が異なる点を考慮して緑の類に含めた。またKARABALĬ 2068.08のB～はP～の変種とみなして赤の類に含めた。なお，PALĬ, BALĬのLĬは〔ɾᶻi〕〔ɻ〕〔ᶻi〕をまとめたものである。

赤の類のうち，宮古のものは大部分がKARAPALĬであるが，このKARA～の語形は九州の壱岐・対島にも集中的に見られる。KARAは「燃えがら」の意と思われるが，あるいは，「籾殻」などの「殻」との関連についても考慮すべきかもしれない。というのは，本図で福島の5608.51にSUGUBOがあり，その注記に「特にもみがら灰を言う」とあるし，また熊本の7364.34にNUKABAIが見られ，171図「もみがら」を見ると，この地点はMOMINUKAであり，また，本図でKARA～が分布する琉球の宮古や九州の壱岐・対島には171図でモミガラ類が分布すること，などからである。もっとも福島の5608.51は171図でNUGAであってスクモではないが，やや離れた関東南部にはSUKUMO, SUGUBOが集中的に分布する。

紺の類のうち，EE〔e:〕およびEE〔ɛ:〕は，ともに8323.59にHE〔he〕との併用で見られる。これらは隣接するHEE〔he:〕やHWEE〔Φɛ:〕の類に含めてもよかったが，質問番号150の注記に〔e:〕＜古＞・〔he〕＜新＞とあり，〔e:〕が偶発的な音声のゆれによって生じたものではないらしいので，これを，とくに分出しておいた。なお，EE〔ɛ:〕は，質問番号150と151の両方の注記に「e:はɛ:のようにも聞える」とあったので，これを採用したものである。

茶のアク類は東北と北海道に広大な領域をもつほか，琉球の奄美を含め，全国に点在する。この分布から，近畿を中心に最初に広がったのはアク類であるという見方

が可能かどうかという点については，「灰汁」「植物の渋み」など他の意味のアクがもし全国的に用いられているとすれば，西寄りの地域に点在するアクは別の意味分野から，いわばしみ出したものとも考えられるから，アクの分布に周圏論を適用することは無理かもしれない。

東北にアクが広まった背景については，この地域でハイ（灰）とハエ（蠅）とが同音衝突を起こした結果，隣接意味分野（「灰汁」など）のアクが「灰」の意味分野にまで侵入したことも考えられる。もっとも，東北以外の全国各地で「灰」と「蠅」とが現実に同音衝突を起こしているのに，ほとんどの地域でこれを避けようとしていない点などに問題があるかもしれず，なお検討を要する。しかし，たとえば，先に述べた，北陸における「灰」—ハイ（ハエ）と「蠅」—ハイボ～（ハエボ～）の区別，東海地域における「灰」—ハイボと「蠅」—ハイの区別などは，同音衝突を避けた例とみることができよう。さらに，同音衝突回避説とは別に，あるいはそれに加えて，東北その他，本図でアクが分布する地域には「灰汁」や「植物の渋み」を意味する別の語形が古くから存在したために，中央から伝播したアクを「灰」の意味で採り入れたという事情があるのかもしれない。全国各地で「灰汁」「植物の渋み」などをどう呼ぶかについて詳しいことはわからないが，『全国方言辞典』には，「きけ」の見出しで「気。あく気。『さつまいものキケをとる』秋田県鹿角郡・山形県米沢」，「じけ」の見出しで「植物のあく。岡山・高知」とあり，本図のアクの分布と，やや関連するところがあるようにも思われる。『山形県方言辞典』によれば「山菜などにあるあく気」の意のキケは，米沢を含む置賜地方で広く用いるようである。なお，『日本国語大辞典』によれば，古い文献では，「あく」は，「灰汁」の意として『古今集』や『十巻本和名抄』に現われる。

次に，西日本各地のアクは，多くの地点で150もしくは151のいずれか一方の回答であり，しかも，150と151のいずれを意味するかについて，必ずしも一定の地域性が見られない。これは，結局，西日本では「灰」の意味でアクを用いることはまれであり，150と151のいずれにアクが現われるかについてはある程度の偶然性が働いたにすぎないのかもしれない。これに対して，東北では，アクが150・151を通じて用いられる地点が多いとともに，ハイ類とアク類との併用の地点では，ハイ類が150のみに，あるいはアク類が151のみに用いられる地点が比較的多く，これに対して，アク類が150のみにあるいはハイ類が151のみに用いられるという逆タイプの併用地点は少ないという傾向が認められる。なお，単用の地点で「150のみ」の補助符号が付いた語形は，最初に記したように，151については調査を行わなかった地点のものであり，その語形が151の意味では使わないことを意味するものではないことに注意してほしい。

アク類のうち，AKOは八丈の3地点のほか静岡6633.27に，またAGOは山形4628.61に見られる。八丈にはアク類が集中しており興味深いが，これらはいずれもハイ類と併用されており，いずれの地点でも，ハイ類に「木灰」，アク類（AKUBEIを含む）に「わら灰」と注記してあった。151の方はともかく，150の項目の回答として「わら灰」の注記は妙だから，これらのAKUは「151のみの回答」として扱うべきであったかもしれないが，150の質問文の中の「たきぎ（まき）」の部分に十分な注意が払われなかった地点が他にもありうると考えて，本図では，150・151それぞれのカードに記入してある語形は，注記内容の如何にかかわらず，原則として，その項目の回答として図示してある。6472.05と0257.12のAKUは150のみの回答であるが，これらは150のカードの注記欄に「わら灰」として記入してあったものを，上の原則に準じて，150の回答として採用したものである。なお，0257.12のAKUの具体的内容は〔a'k〕であった。また，6377.11，6440.67のAKUは151のみの回答であるが，これらにも「わら灰」の注記があった。

このように，ハイ類との併用でアクがわら灰であると注記してある地点のアクの中には，洗濯や染色など特殊な用途に対する名称，いわば「灰汁」を意味するアクとの境界にある語形が含まれていよう。実際に，八丈の7659.40のAKUには，150の項目の方のカードに「わら灰。洗濯に使った」との注記が見られた。また，6412.91のAKUには「炭火の上にかけるときに特に言う」とあった。そのほか，アク類の語形についての注記として，「かたまった灰」とするものが，1763.60，4599.31（以上「150のみ」の回答），1719.38，5613.53（以上「151のみ」の回答）の4地点に見られた。なお，新潟の5613.48では「〔hae〕からとった純粋の灰分は〔aku〕という」，また，5612.98では「こんにゃく製造の時に使用する，そばがらを焼いて作った灰分は〔agu〕と言う」とあり，この〔aku〕と〔agu〕とは，150・151のいずれにも該当しないと判断して採用しなかったが，アク類の領域の末端にこのよう

な注記つきのアク類の語形が見られるのは，それなりの理由があろう。

北海道の 0873.94 や新潟の 4637.68 では，150—AGU・151—AKU，また，宮城の 4763.62 では，150—AKU・151—AGU という区別が見られるが，これらは，あるいは音声のゆれにすぎず，被調査者に両項目を区別しようとする意識はないかもしれない。この種のものは，ほかに，150 — HAI・151 — HAE 6652.06，150—HEE〔hæ:〕・151—HAI 6471.59，150—HYAA〔ça:〕・151—HAI 7383.83，150—HYEE〔çæ:〕・151—HEE〔hæ:〕6635.54 など，数地点に例が見られる。

紺を与えた諸語形のうち，凡例の HOKORI から HIBUGURI まではホコリ類と考えて符号を与えた。これらはいずれも項目 150 の回答である。この類の語形には，「燃え残りの白いもの」「飛び散るもの」「ふわふわしたもの」などの注記のある地点が多かった。

ホコリ類のうち，HOKORI，HOGORI のような単独形が最も多く，これらは青森に集中するほか，愛知 6630.82 にも見られる。なお，271～274 図「ほこり・ごみ」を見ると，青森ではゴミ類が多く，ホコリ類は青森東部のそれも一部分に分布するだけであり，本図の HOGORI とほぼ補い合う分布を示している。本図で青森南部，岩手東部，さらに全国各地に点在する HIHOKORI，TAKIBOKORI，MEEBOKORI などの複合語形は，「埃」「塵」などのホコリとの混同を避けたものと言えよう。なお，MEEBOKORI 5685.37 の MEE はたぶん「燃え」であって「舞い」ではなかろう。

OKORI 2775.45，MOEOKORI 6506.86，OGORI 2763.28，OKIRI 6632.15 は一つの類と考えて符号を与えた。これらはおおむねホコリ類に接して分布しているから，オコリはホコリの転じたものとも考えられるが，あるいは動詞オコル(炭火などが熱して赤くなる)との関係も考慮すべきかもしれない。OKI 7433.52 は「熾」であろうが，OKI と OKE 7504.11，あるいは OKIRI との関係の有無は不明である。

ZYOO，ZYO，ZYUU は滋賀を中心に集中するほか，福井，富山・新潟，秋田にも見られる。RYUU 5604.52 は ZYUU の変種とみなして符号を与えた。この類の語形は，150 の項目にのみ現われ，また，ホコリ類の場合と同様に，「燃え残りの白いふわふわしたもの」「燃えたあと，原形を保っているもの」などの注記のあるものが多かったが，ホコリ類に多かった「飛び散るもの」という注記は見られなかった。なお通説ではジョオは「尉」に由来するものであって，白い灰を老人の白髪になぞらえたものと言われる。『日本国語大辞典』によれば，「灰」の意味のジョオは大阪・和歌山・鳥取・愛媛にも分布するらしいが，本図には現われていない。

KUDO 7313.34 は「かまど」の意から転じたものであろう。YUNI は奄美の喜界島に見られる。これと関係があるものとして，『全国方言辞典』によれば「火山灰」の意味のヨナが熊本にあり，また 274 図「ごみ（川のごみ）」では沖縄 1261.70 に YUNI が見られる。HIGUN 2072.20 は「火のごみ」であろう。同地点は，271 図「ほこり」では KUN，273 図「ごみ(掃除の対象)」および 274 図では MYAKUN である。OKOROMO 5611.74，HWEEGOROMO 7395.25 のコロモは，薪や炭が燃焼して灰をかぶったようすをあらわしたものか。KOMORO 7461.77 は KOROMO の音位転倒とみなして符号を与えた。SYARI 6583.93 には「水がかかったり，杉の木を焼いたもので，固まるもの」との注記があった。これは，あるいは「舎利」に由来するものであろうか。HIBOI，HINBOE はともに山形に見られる。『山形県方言辞典』によれば，ビボエは「焔」あるいは「火の粉」の意味で県下各地に分布する。この BOI，BOE は，あるいは「燃え」にもとづくものかもしれない。なお，HIBEE 4700.37 は緑の類に含めたが，これは，分布から見て，HIBOI，HINBOE の転とも考えられる。

以上，主な見出し語形について説明した。最後に，比較的少数の地点(5 地点以下)にのみ現われる見出しについて，検索の便のため，その所在を記しておこう。(すでに分布を記した語形は除く。)

DOBAI 6412.12，6585.25，7423.77，SUBAI 5597.78，6424.89，6476.93，6491.49，7460.23，ZIRUHAI 0275.36，KOZURIBAI 6507.48，SIROBAI 6610.00，KUSABAI 7364.34，MOKUBAI 7382.97，TAKIBAI 7332.46，7373.99，YAKIBAI 7393.62，HAAI 6518.87，HYAAI 6607.18，HAÏ 1715.53，5574.42，5574.79，HAEBO 6621.94，HEI〔hei〕5654.94，5655.41，7659.31，7659.40，HEI〔hɛi〕6507.72，6517.31，6517.50，HEEBO〔he:～〕6549.03，6558.09，6611.61，SINNOHEE 7380.74，SIRAPPEE 5671.68，WARABEE 5635.65，GOBEE 5626.92，KOBEE 8311.63，HEEBO〔hɛ:～〕5731.13，HIBEE 4700.37，GONABEE 5771.36，

HEE〔hɛæ〕4644.10, 6407.28, HEE〔hɜ:〕1260.87, HYEE〔çɛæ〕7269.96, HYEEBO〔çɛæ～〕5741.25, HINNOHYEE 8300.25, HIEE 7269.48, HE〔hɛ〕4619.63, 4652.79, 4704.45, 6518.30, 8324.26, SIBE 3791.02, HE〔hæ〕3721.37, 3732.26, 3781.86, 3782.98, 4702.10, HYE〔çæ〕3792.96, HAA 6528.06, 6528.64, 8393.69, 9303.88, 9313.55, MOKUBYAA 7381.47, 7382.97, HWEI〔Φei〕7345.43, 7353.19, HWEI〔Φëi〕0246.97, 0256.08, HWEE〔Φë:〕0237.84, 0257.12, 0257.43, HWEE〔Φæ:〕8304.66, HWE〔Φɛ〕7385.38, 8305.73, 8334.25, 8335.48, 8335.83, HWEKKO 3782.12, HWEBUGURO 3740.29, HWYE〔Φjæ〕3752.47, HWYAA〔Φja:〕7239.82, 7384.16, 7385.61, ZIROPAI 0228.96, PALÏ 2068.08, 2151.64, PEE〔pɜ:〕2095.60, PEE〔pɛ:〕1241.49, AKUBAI 4629.43, 6495.88, AKUBEE〔～bɛ:〕4652.79, AKUBEI〔～bei〕7659.31, AKUBO 7421.62, WARAAKU 6460.10, AGUBEE〔～bɛ:〕4722.55, AGUBE〔～bɛ〕4618.87, 4629.43, AGUBE〔～bæ〕3772.73, HODOAGU 4741.44, HIHOKORI 5628.23, HIBOKORI 3726.25, 6610.77, 6622.69, SIBOKORI 3705.82, 3716.58, HIPOKORI 3732.73, 3757.09, SIPOKORI 3701.70, TAKIBOKORI 4752.11, 6433.34, 7432.95, 7461.77, HIHOGORI 4733.91, HIPOGORI 3741.57, 3747.91, 3778.00, HIPPOGORI 3756.26, SIPPOGORI 3731.61, SUPPOGORI 3712.74, 3721.30, 3731.46, HIBUGURI 3717.90, SARIZU 7420.18, YAGEAGARI 3764.86, TAKIOTOSI 6529.15, HINOKO 5577.88, 5578.27, 無回答 1169.84。

271. ほこり(埃)

272. ごみ(目にはいるもの—塵)

273. ごみ(掃除の対象—塵芥)

274. ごみ(川のごみ—塵芥)

相互に関連が深いので，4枚を一括して説明する。作図にあたっては，語類のまとめ方や符号の与え方を，各図統一してある。なお，この4項目についつては，後期計画で調査を打ち切ったので，地点がすくない。

塵埃，塵芥，廃棄物，残滓，屑などの諸概念については，各図左下欄に示した質問文によって，各調査地点の言語状況のすべてが明らかになるとは思えない。むしろ，不十分というべきであろう。ここでは，273図に示した掃除のときに集まるゴミを中心に据えて，一方にはそれと区別されることのある274図の川のゴミ，他方にはかなり形態は違うがゴミと言われることの多い272図の目にはいるゴミを配してその関係を見，さらに目にはいるゴミと関連の深そうなホコリを調べてみたに過ぎない，と言えるかもしれない。文献によればチリもゴミも，元来は土や泥に関連したことばだったらしいから，もうすこしそうした面に触れる質問も用意したほうがよかったのかもしれないと，いまは思っている。

まず，各国をそれぞれざっと見ることにしよう。

271図ホコリについて

この271図で<併用処理>の対象としたのは，HOKORI, HOKOT である。処理したものは全国で約40か所ほど，九州にやや多く，中国，北陸，新潟にわずかに見られるという状況であった。なお，特にこの図についてであるが，本集270図「はい(灰)」に関連するところがあるので，解説とも対比してほしい。

凡例順に見ていくことにする。

MIZIN は，微塵という表記につられてここに配列した。岐阜・滋賀，和歌山に見られる。

GO(O)MI の中でGOOMI という表現は，6497.41のみ。

GO(O)M の中の GOOM は，7381.97 と 8301.19。

GUMI(I)の中の GUMII は，1231.72のみ。

GUN は，5547.96 と 0228.96。

CIRIGOMI は，5589.30のみ。

HOKORIGOMI は，6395.46のみ。

～GOMI の内容は，5546.56のワタゴミ，5677.85のドロゴミ，6457.45のスナゴミ，7373.92のタタキゴミであった。

GODO は，3773.12のみ。

BOKUTA は，7450.20のみ。

BOKU も，同じく7450.20のみ。

BOKA は，6621.94のみ。

HOKORI の中には〔hokorï, hogorï, Φogori, hokor〕なども含まれている。

HOHORI は，4753.52 と 6710.02。

HOORI は，6649.28 と 0256.76。

HOKOI の中には〔Φogoji〕も含まれている。

HOKIRI は，5652.96 のみ。

HUK(K)UI の中の HUKKUI は，1232.75，1233.61，1242.26。

GOMIBOKORI は，6472.58 と 6562.48。

～BOKORI は，実は 5546.82 のワタボコリのみ。

PUKUSUMI は，1242.72 のみ。

HUKUSIN は，1232.29 のみ。

PUKUSIN は，1241.05 のみ。

PUKUMI は，1223.91 のみ。

HUHUMI は，0256.08 のみ。

HUHUMÏ は，0247.56 のみ。

HUHUM は，0246.97，0256.08，0257.43。

HUUMU は，0249.17，0340.00。

HOOMO は，0238.55 のみ。〔Fo:mo〕とあるから，HWOOMO としたほうがよかったかもしれない。

HOMU は，0256.89 のみ。

HOOGO は，7361.82 のみ。

BOCI(MEKI)は，3701.70 の〔botsïmekï〕と，3716.58 の〔bwtsï〕。

BOSA は，5741.25 のみ。

BOSU は岩手，GASU は新潟に見られる。

GOBEE は，5703.68 のみ。

HOKE は，5471.59 と 6296.27。

KO(O) は，6506.55 と 6610.77 の KO と，6571.68 の KOO。

KOKO は，6506.55 のみ。

TATAMINOKO は，5472.34 のみ。

KUN は，2072.20 のみ。

NIKO は，6554.45 と 6582.73。

NI(N)GO は，6582.73 の〔niŋo〕と，6583.41 の〔niŋŋo〕。

SUBO は，九州東岸。

GOMISUBO は，7376.68 のみ。

YOGORE は，7383.83 のみ。

ZIMI は，5557.48 のみ。

その他は，6657.54 のドロと，7391.44 のケブリ，ヨゴレケブッ，ゴムケブッであった。

無回答は，1221.47 と 1242.00 と 2074.69。

したがって，凡例には 50 種ほどの語形が挙がっているが，6 地点以上に見られるものは，凡例順に，CIRI, GOMI, GOM, GON, GUMI, HOKORI, HOKOI, HOKORE, HUKUI, PUKI, SUBO の 11 語形ということになる。これらをさらにまとめれば，チリ，ゴミ，ホコリ，スボということになろうか。

このうちスボは 272 図に，チリは 273 図にもっとも多く出現する表現なのでそちらで説明することにすれば，結局この地図は，巨視的にはゴミ類とホコリ類の 2 語類の対立がもっとも顕著である，ということになろう。ゴミ類の勢力は，他の 3 枚と対比すればわかるように，この図においてもっとも弱く，ホコリ類は，4 枚の中でもっとも強い，ということになる。ゴミは『平家物語』『名語記』以降，ホコリは『運歩色葉集』以降の表現のようであるが，本土部では国の中央にホコリが多く，国の両端でゴミの勢力が強いと言えようが，琉球では逆に中央でゴミが勢力を持ち，周辺にホコリが見られるといった状況で，ゴミ・ホコリの消長には，やや複雑な事情のあったことが想像される。ここでホコリの類としたものの中にも琉球（ことに奄美から沖縄島北部にかけて）は特殊なものが多く，正確には，素性のわからないものもある。273 図で八重山に見られるもの，274 図の沖縄島の HUKUCICI と八重山の YURIHUKUZI も関連して考えるべきものである。

272 図ゴミについて

この 272 図で＜併用処理＞したのは GOMI であり，全国で 11 地点であった。このほか，5569.99 の〔jugi〕＜冬に言う＞，5657.73 の〔suna〕(共)，6457.51 の〔tsutʃikemuri〕，6546.15 の〔iʃi〕〔石に限らない〕を併用の特殊語形として省略した。最初のものは，冬には土埃など立たない地方の特色なのであろう。

凡例順に見ていく。

AKUTA は，7360.47 のみ。

CIRI は，5670.47，5688.37，6698.61，7354.23。

ME(N)CIRI は，6593.98 の〔metʃiri〕，6698.20 の〔mettʃiri〕，6584.90 の〔menotʃiri〕をまとめたもの。

MINCIRI は，琉球列島に見られる。奄美のものは，MINCIRI で現わしうるものが多いが，それでも 0340.00 の〔mintʃira:〕，0249.17 の〔mintʃi:ra:〕をも含んでいる。先島のものは，2150.07，2151.67 の〔mi:nutsï〕，2151.64 の〔mi:nutsï:〕，2150.17 の〔mi:mutsï〕である。この 4 地点のものは，別出すべきものだったかもしれない。

ME(N)ZURI は近畿南部に見られる。MENZURI となるものは 6582.73，7502.22，7503.11，7523.30，7523.74 および，MEZURI，MENZURI 両用の 7522.48 であった。

GO(O)MI の中で GOOMI となるのは 7362.67 と 9322.52のみ。

GO(O)M の中で GOOM となるのは，7372.96 のみ。

GUMI(I)の中で GUMII となるのは 0257.12 のみ。

GUUM は，0246.48 のみ。

GUN は，5547.96 のみ。

～GOMI の内容は，6466.16 の〔sunagomi〕と，6550.96 の〔tsutʃigomi〕。

GOMOKI は，6287.42 のみ。

GOMUKI は，7390.70 のみ。

GOMOT は，7275.07 のみ。

GOKUMO は，八丈島に 3 地点。

GOTA は，6583.93 と 7501.68。

GO(N)DOの中で GONDO となるのは，3787.45 と 4704.45。ただし gõdo のようなものは別にもある。

MEEBOKU は，7450.20 のみ。

HOKORI の中には，271 図と共通するものが含まれている。

HOKOI も HOKORI と同じ。

HOKORE は，8229.96 と 8300.87。

MEBOKORI は，6583.41 と 7414.43 と 7423.77。

GOMIBOKOI は，7350.21 のみ。

～BOKORI の内容は，5579.10 と 5612.39 と 6652.30 の〔sunabokori〕6519,43 と 6606.35 の〔tsutʃibokori〕，4760.64の〔dzɯ̃bogojï〕，7433.52 の〔tat[s]ubokori〕，4741.92 の〔bambogoɾ〕であった。

HUKUSIMI は，1221.47 のみ。

HOOMUN は，0275.97 のみ。

BOSU は，3746.09 のみ。

GASU は，4638.43 と 4667.76 と 4677.65。

KOHAI は，6524.66 のみ。

MEHODA は，7406.53 のみ。

MON(O)のうち MON は，6587.42 のみ。

MOO は6520.94 のみ。

ME(NO)MON(O) の中で多いのは MENOMON, MEMONO, MEEMONO, MEMON, MEEMON であり MENOMONO は 5472.34, 6476.93 のみであった。別に MENMONO とでもすべき 6519.67, MENONOMONO の 7460.39, MANAKOMONO の 4687.37 が含まれている。このほか，6460.08 では〔me:monogahaitta〕と言うらしい。〔me:moŋgahaitta〕とするものは 6378.87, 6419.09, 6460.08, 6532.70 であった。これらもこの見出しに含めてあるが，me: の部分は＜目へ＞という名詞プラス助詞(と交渉の深い)ものと思われる。

MEMUN は，8313.72 と 8324.26。

MEBUN は，7391.44 のみ。

ME(NO)MO の中で，MEMO は 6572.97, MENOMO は 6542.32 と 6564.51 であった。別に 5588.81 と 7339.27 のものは MEEMO とすべきものであった。

MEEBO は，6523.86 のみ。

MEPPO は，6565.17 と 6565.22。

MENOME(NO) のうち MENOME は 5574.79 と 5575.93 と 5585.09 と 6555.31 と 7266.92。

MENOMI は，6552.88 のみ。

MEMONZYO は，7248.15 と 7248.49 のみ。

MEMENZYO は，7381.97 のみ。

ME(ME)NGO は，7390.26 のみ。同地点で 2 形併用である。

MEMURI は，7384.16 と 7385.61 のみ。

MI(N)CIMUNU の中で，ほとんどは MICIMUNU であり(但し宮古のものは〔mi:tsïmunu〕，2095.60 は〔miʒimunu〕)，MINCIMUNUU は 1169.84, MINCIMUN は 1148.59 と 1231.72 と 1261.16, 〔mintimununinukuŋ〕とあったのが 2072.20 であった。

MI(N)CIBUNU とあるものは，逆に MINCIBUNU式の方が多く(但し 0294.66〔mintʃiburu〕，1223.91〔mi:ntʃiburu〕，1232.75〔mintʃibui〕，2074.69〔mintʃipuni〕で，みな変種)，MICIBUNU は 2076.98 と 2151.11(後者は〔mi:tsïv〕)であった。

MI(N)CYUMUNU とあるものは，MICYUMUNU 式の方が多く(但し 2085.69〔mitsumunu〕，2076.96〔mittʃumunu〕，2151.51〔mi:tʃumunu〕，2075.22〔mitsumu〕を含む)，MINCYUMUNU 式のものは，1251.27 の〔mintsumunu〕，1271.20 の〔mintʃu:na:〕，1270.26 の〔mi:ntʂuna:〕(後 2 者は別出すべきだったか)のみである。

MINCYUBU は，1211.69 の MINCYUBU と，1250.59 と 1270.29 の MINCYUU であった。

MINCYAMU(N)にも変種が多い。MINCYAMUN は 1260.78 と 1261.01 と 1261.70 と 1271.05, MINCYAMU は 1241.96 と 1251.98 と 1260.87 (最後のものは〔mintʃamu:〕で，別に，2068.08 の〔mittamunu〕，1251.73, 1261.32 の〔mintʃamuna:〕，1261.80 の〔min-

tʃamuja:〕を含んでいる。

MINCYABU(U)も同様で，MINCYABUとなるのは1156.89（実は〔mittʂabu〕）と1233.61と1241.49と1242.72（後2者は〔mintʃawu〕），MINCYABUUとなるものは，1231.88と1242.00と1251.04であった。他に，1167.01の〔mintʃabuna:〕，1232.29と1241.05と1242.22と1242.26の〔mintʃabui〕（最初のものは〔mintʃaβui〕）であった。

MOYAは，7312.69と7333.51。

NIKOは，6554.45のみ。

ME(N)SUBOはほとんどがMESUBO（8324.83，8334.25，8334.63）で，7376.68はMESUBOとMENSUBOの併用であった。

YAMAは，7312.83のみ。

その他は，6571.63の〔metsubuʃi〕のみ。

無回答は，5624.85のみで，砂とか土とか答えたという。

以上の60ほどの見出しの中で，6地点以上に見られるのは，MINCIRI，ME(N)ZURI，GO(O)MI，GO(O)M，GON，GUMI(I)，MEGOMI，GOMOKU，GO(N)DO，HOKORI，HOKOI，～BOKORI，MON(O)，ME(NO)MON(O)，MENOME(NO)，MI(N)CIMUNU，MI(N)CIBUNU，MI(N)CYUMUNU，MI(N)CYAMU(N)，MINCYABU(U)，SUBOの21種であり，271図よりやや複雑であることがわかる。

大まとめにすれば，メノチリ，ゴミ，メゴミ，ゴモク，ゴ(ン)ド，ホコリ，モノ，メノモノ，メノメ(ノ)，ミンチャムン，スボとなろうが，こうしてみても271図より複雑である。

この大まとめのうち，ゴミは273図，ゴモク，ゴ(ン)ドは274図，ホコリは271図に多いのでそちらで説明するとすれば，A図を通じてこの地図に現われやすい表現は，メノチリ，メゴミ，モノ，メノモノ，メノメ(ノ)，ミンチャムン，スボの7種となろう。

このうち，メノチリとしてまとめたものは，三宅島と近畿南部と琉球列島とに見られる。近畿のものはME(N)ZURIが多いが，ME(N)CIRIがわずかに共存することから，同類とみてよかろうかと思う。なお，273図にGONZURIがあり，併せて考えるべきである。チリという表現は273図に多く見られ，近畿でも琉球でもこのメノチリと分布が重なるとはいえないが，関連が深いことは疑いえない。メノチリがある以上，もとチリがその地域に存在したものといちおう考えてよかろう。南近畿のものは，全く別系のものが，民間語源説によってME(N)CIRIに近づいていったとも考えうるが，逆に，現在チリが存在しないため，なんらかの事情で語形が離れていった，と考えるほうが，穏当であろう。小地域における精査が望まれる。

メゴミは，福井，静岡，兵庫，広島に各1地点のほか，佐賀と熊本に見られる。付近にメノモノの見られることは示唆的であるが，深い関係を考えずに，ゴミの一種で，特に目にはいるものと考えておく。

モノの類は，東北地方から新潟にかけておよび伊勢湾周辺にややまとまりがあり，そのほか，近畿・中国・四国に点在する。モノはもっとも抽象的な名称のひとつであって，何かわからないもの，という意味であろうか。次項とも関係が深い。

メノモノは，新潟のもの（〔manakomono〕ゆえ特殊）以外，大体西日本に見られるといってよい。概して前項のモノと分布上平行していると言えるかもしれないが，東北，北陸，九州などでは一致しているとは言い難い。しかし，ここにまとめたものの中には，前述の〔me:moŋgahaitta〕式の回答が含まれ，これははたしてメノモノなのかモノなのかはっきりせず（その中間ともいうべきものかもしれない），両者の関係を断つことはできない。

メノメ(ノ)類は，語形はかなり離れているが，前項のメノモノが語源不明になって以後成立したものと思われる。福井でも，三重から奈良へかけてでも，愛媛でも，長崎でも，いずれも周辺にメノモノが見られる。もっとも以上のような離れ離れの地域で，たがいに無関係にメノモノ＞メノメノの変化が平行的に起こったと考えるのは不自然で，むしろ古いメノメノの領域が分断された後，民間語源説によって各地でメノメノ＞メノモノという変化が平行的に起こった，とする考え方も，当然ありうる。

ここでミンチャムンにまとめたものは，変種が非常に多い。沖縄県下に見られるもので，ミは目，ムンは物と思われるが，よくわからない。

スボは，271図・273図にも見られるが，この図にもっとも多い。『物類称呼』には，西国および四国で苞のことを言うと出ているが，『日本国語大辞典』には，そのほか，わらしべの意味のものが大分・鹿児島に，わらな

どの塵の意味のものが福岡に，ごみの意味のものが大分・宮崎に，土の乾いて砂のようになったものの意味のものが宮崎にある，と出ている。この図に多く，ついで271図に，そして273図にすくないということは，わらの細かい屑から，目にはいるごみの意味に変化し，さらにほこり一般に変化し，他方，わずかにごみ一般に変化していったのでもあろうか。地域的な詳しい調査によって，意味変化のプロセスが明らかになるものと思われる。

273図ゴミについて

この地図で＜併用処理＞した語形は GOMI であり，全国でわずかに5地点(近畿で1，九州で4)であった。併用の特殊表現で省略したものはない。

凡例順に見ていくことにする。

AHUTA は，宮古島に3地点。

CIRIAKUTA は，沖縄に2地点。

ARUHUTA は，2095.60のみ。

CIRI(I)の中で CIRII となるものは，1241.05のみ。この CIRI の中には〔tʃïrï, tsïɽ, tsɯ̈ri, tˢiri〕なども含まれている。

CII は，4760.64のみ。〔tʃïjï〕。

CIT は，7373.23のみ。

GONZURI は，6548.02のみ。近くに CIRI がある。なお，CIRI の中に〔tsɯ̈ri〕などが含めてあることから，この見出し語形も GONZIRI としてよかったか，と思われようが，CIRI の中の〔tsɯ̈ri〕が4701.73，4750.32，4753.76のみであったことも考慮する必要がある。なお，272図に ME(N)ZURI が，地域はやや離れているが現われていたことを想起してほしい。

KIRI は，1241.49のみ。誤れる回帰とみてよかろう。

MIZIN は，5577.88のみ。271図にもあったが，漢字の関連でここに置いた。

MIZINGOMI は，5568.57のみ。

GO(O)MI 中で GOOMI となるものは，5556.84と9322.52であった。この類の中には〔gomï, gõmi, g̃omi〕などが含まれる。そういえば，5556.84の GOOMI は，〔goïmi〕であった。

GUMI(I)の中で GUMII となるものは，0246.97と0257.12。

GUUM は，0246.48のみ。

GUN は，0228.96のみ。

CIRIGOMI は，6457.45のみ。

～GOMI は，6457.45のみで，内容は〔aragomi〕であった。

GOMIKUTA は，6537.21のみ。

GOMOKUTA は，7341.47のみ。

GOMIKUZU は，6529.63のみ。

GOMOKUZO(O) のほとんど（5地点 —すべて九州—）は GOMOKUZOO であり，GOMOKUZO は7353.03のみであった。

GOMO(O)KU の中で，GOMOOKU は8301.76のみ。

GOMOKI は5585.63と6287.42。

GOMUKI は7390.70のみ。

GOMOT は，7275.07と7284.16と8343.97。

GOKUMO は，八丈島に2地点。

GOOMO は6384.25のみ。

GOTA は，7501.68のみ。

GUTA は，6558.37のみ。

GOTTAKU は6603.52のみ。

GOSO は，7385.38と8335.83。

GOSSA は，4598.33のみ。

GO(N)DO のほとんどは GONDO であるが，3762.85，3772.73，3782.38，4701.73は〔gõdo〕，3783.11，3792.33，5732.13は〔godo〕であった。

GASUGOMOKU は，4696.82のみ。

BOKU は，7450.20と7460.23。

MOKUZU は，7411.27のみ。

MOKUZO は，6476.93と6485.46。

GASUMOKU は4781.86のみ。

HOKORI の中には〔hogori, hokoɽ〕などが含まれている。

HOKOI のうち佐賀，屋久島のものは〔hokoi〕だが，4760.64のものは〔Φogoji〕である。

HOKORE は8229.96のみ。

HUKUI は，1156.89と2067.52。

PUK(K)UI は，PUKUI の1242.72と，PUKKUI の1242.00。

PUKI は2068.08と2151.64と2151.67。

HOOCIBUKUI は，1260.87のみ。

HUKUZÏ は2076.96と2076.98と2076.99。

HUKUZI は，2075.22と2085.69と2086.03。

HUKUCÏ は，2076.25のみ。

HUKUCI は，2074.69 のみ。

HUSUKUMI は，1261.16 のみ。

AKA は，6555.31 のみ。

AKKEZU は，3699.55 と 4609.68 と 4618.87。

DOBO は，5586.70 のみ。

GASU の中には，4619.23 と 4687.37 の〔gasï〕を含む。

HOOCIGARA(A) は，1260.78 の HOOCIGARA，1261.01 の HOOCIGARAA，1231.72 の POOCIGARAA。

SOOZIGARA(A) は，2141.61，2151.20，2151.51 の SOOZÏGARA，2150.06，2151.11 の SAUZÏGARA，2068.08 の SYOOZÏGARA，1231.88 の SYOOZIGARAA をまとめたものである。

SOOZÏGURU は 2141.71 のみ。SOOZÏGURU としたほうがよかったかもしれない。〔so:zïguru〕。

HAKIDAME の中には，3764.16 の HAKITAME，7470.29 の HAKUDAME〔hakŭdame〕，7376.68 の HAWAKIDAME を含む。

HOOCIDAMI は，0294.66 のみ。〔Fo:tʃidami〕であったから，HWOOCIDAMI としたほうがよかったかもしれない。

KEBA は 3764.86 のみ。〔kɛba〕。

MOYA は，7312.69 と 7333.51。

MYAKUN は，2072.20 のみ。

無回答は，1223.91 と 1261.80 と 2140.49 であった。

凡例に示した語形約 60 のうち，6 地点以上のものは，AKUTA，CIRI(I)，GO(O)MI，GOM，GON，GUMI(I)，GOMOKUZO(O)，GOMO(O)KU，GO(N)DO，HOKORI，HOKOI，GASU，SOOZIGARA(A)，HAKIDAME，SUBO の 15 種ということになり，これらをさらにまとめれば，アクタ，チリ，ゴミ，ゴモクゾ，ゴモク，ゴンド，ホコリ，ガス，ソオジガラ，ハキダメ，スボの 11 種ということになろう。

これら 11 種のうち，ホコリは 271 図で，スボは 272 図ですでに触れるところがあったし，アクタ，ゴモクゾ，ゴモク，ゴンド，ガスは 274 図の説明で見ることにすれば，ここでは，チリ，ゴミ，ソオジガラ，ハキダメの 4 表現についてだけ概観することになる。

チリは，『日本書紀・万葉集』以来の表現であるが，あまり多くない。近畿から四国・九州，さらに沖縄にかけてやや密度が高く，そのほか関東（東京から西北にかけて），能登・佐渡・新潟・福島・山形方面に点在すると言えよう。沖縄のものは中心部で密度が高いから，一見この表現が（すくなくとも沖縄では）新しいもののように思えるかもしれないが，272 図などと対比すれば，語根のチリはもっと広く分布していることがわかる。近畿内部でも，同様な傾向が見られるといってよい。チリという語根は，また塵取りや塵紙などの要素としてはさらに広く分布していると想像されるから，ここで使った 4 種の質問以外を使えば，単語としてのチリが，ここに見られるより（ずっと多く）現われる場合があることが考えられる。つまり，この 273 図の分布だけからこのチリの歴史を解読することは困難だ，ということであるが，歴史の古いこの表現が，案外見られないものだ，という印象はたしかにある。

ゴミは，すでに述べたように『平家物語・名語記』以降の表現であるが，琉球先島を除く全国に広く分布している。271 図以下 274 図までを通じて，もっとも勢力の強い表現であるが，4 枚のうちもっとも劣勢な 271 図では，おもしろいことに，この表現が琉球先島にも現われている。あとでもう一度述べるところがあるが，271 図以下 274 図までを通じて，このゴミ類を一貫して使う地域（津軽や鹿児島など）もすくなくない。これらのことは，この表現が，文献では鎌倉時代以降にしか現われないにもかかわらず，現代日本語として，非常に深く根をおろしたものであることを示しているのであろう。

ソオジガラは，沖縄の宮古島に多く見られる表現である。掃除殻ということであろう。

ハキダメは，四国から宮崎にかけて見られる表現である。掃き集めて溜まったもの，という意味であろうか。274 図では，青森に見られる。

274 図川のゴミについて

この図で＜併用処理＞した表現は GO(O)MI であり，全国で 8 地点であった。併用の特殊表現で省略したものは，0779.03 の〔mokudzɯ〕＜親に言われた＞と，4609.54 の〔mogu〕＜生えている水草をさす＞であった。

AKUTA の中には，6559.67 と 6661.02 の〔aŋɯta〕が含まれている。

AHUTA は，2140.49 と 2140.96 と 2151.64。

AKOTA は，1251.27 のみ。

HAKOOTA は，1231.88 のみ。

AYAKUTA は，6582.48 と 6582.73。

AKUTAMOKUTA は，7411.27 のみ。

AGURA は，7239.85 のみ。

AGUI は，1251.04 のみ。

CIRI は，岩手と大分と沖縄島北部。このうち，岩手のものは〔tsɯri〕とあった。

HAMOOZIRI は，1148.59 のみ。

GO(O)MI のうち，GOOMI となるのは，5556.84 と 7382.58 と 9312.42 と 9322.52。このうち 5556.84 は〔goːmi〕であった。なお，4715.98 は〔kawanogomï〕と報告されていたが，ここに入れた。

GOM は，九州のほか 5547.96 と 5620.80。

GUMI(I) のうち GUMII となるのは 0257.12。

GUNは，5547.96 と 0228.96。

AKUTAGOMI は，6488.48 のみ。

KAWAGOMI の中には，KAAGOMI としてもよかったものを含む。GO(O)MI に含めた 4715.98〔kawanogomï〕も，ここに入れることも考えられた。

NAGAREGOMI は，4753.76 と 6424.20。

～GOMIは，2800.52 のみで，内容は〔tʃaŋaragomi〕であった。

GOMIAKUTA は，7362.67 のみ。

GOMOHUTA は，0238.55 のみ。

GONMOKUTA は，4740.26 のみ。〔gommokɯda〕であった。

GOTTOMOKU は，5664.51 のみ。

GOMOKUSA は 3720.71 のみ。

GOMOKUSO は，4589.83 と 5508.19 と 5760.24 と 5770.46 であった。

GOMOKUZU は，3751.81 と 7354.23 と 7390.26。

GOMOKUZO(O) のうちでは，GOMOKUZO がすくなく，7343.14 と 7343.17 と 7352.38 と 7353.19 と 8300.25 であった。

GOOMOKU は，6497.41 と 7355.81 と 9303.88 と 9313.55。GOMOKU の見出しを GO(O)MOKU としてその中に含めることもありえたろう。

GOOMOKUSOOMOKU は，8248.18 のみ。

GAMOKU は，6498.33 のみ。〔gamoku〕とあった。

GOMUKU は，7390.70 のみ。

GOOMUKU は，8229.96 のみ。

GOMOKI は，5585.63 と 6287.42。

GOKUMO は，7659.31 と 7659.53。

GOMOZU は，3772.32 のみ。

GOMOZO は，8353.68 と 8363.64 のみ。

GOMUZ(Z)O のうち，GOMUZO は 8343.74 で，GOMUZZO は，7266.34 と 8352.40 と 8361.28 であった。

GOOMO は，6384.25 のみ。

GUTA は，6558.37 のみ。

GOTAN は，7503.11 のみ。

GOT(T)AKU のうち，GOTAKU は 3757.09 で，GOTTAKU は 5652.96 と 5662.78。

GONTAKURE は，6558.10 のみ。

GOOSO は，7356.06 と 7365.67。

GOSO は，7385.38 と 7386.63 と 7395.63 と 8335.83 と 8345.24。

GOSSA は，4598.33 のみ

GOZU は，5672.52 と 5681.47 と 5692.53。

GOIZO は，6491.65 のみ。

GOZO は，5781.65 のみ。

GOIDO は，6491.65 のみ。

GO(N)DO の中で，明らかに〔godo〕のものは，3783.11 と 3791.76 と 3792.33 と 5732.13 と 5781.65。東北地方のものは GOTO に対応するものか。しかし，東北地方に〔gõdo，gondo〕も多いので，GO(N)DO とした。

NAGAREGONDO は，4711.41 のみ〔naŋarẹ́gõdo〕とあるから，NAGAREGODO としたほうがよかったかもしれない。

BOKUTA は，7450.20 のみ。

BOKU は，7460.23 のみ。

NOKUT は，0246.48 のみ

NIKUTA は，0246.97 のみ。〔nïkuta〕であった。

NUKUNZYA は，1242.22 のみ。

KAWAMOKU は，7431.67 のみ。

ZOOMOKU は，7503.48 のみ。

MOTA は，6527.44 の〔mota〕と，4716.20の〔mõda〕。後者は MODA とすべきものであるが，ここにまとめた。

BOTA は，5506.68 のみ。

MOKUSA は，7423.12 のみ。

MOGUSO は，7433.52 のみ

MOK(K)UZU のうち MOKKUZU であるものは，3781.21 のみ。高知には ZU 部分が〔$d^{z}u$～$d^{(z)}u$～du〕となるものがある。

MOKUZO(O) のうち，MOKUZOO となるのは，

4760.98 と 7249.95 と 7386.55 であった。

MUZZO は8313.88 のみ。〔mutzo〕とあったが，別の表示をすべきものだったかもしれない。

MOKUDO は，8306.42 と 8315.46。

GASUMOKU は，4781.86 と 5701.25。

HOKORI は，6582.48 と 7522.94。

YURIHUKUZI は，2086.03 のみ。

HUKUCICI は，1242.26 のみ。

ABA は，8303.13 のみ。

AKA は，7362.42 のみ。

AZU は，7239.41 と 7279.01 と 7303.17 と 7353.03。

AUSÏ は，2151.67 のみ。

GASU の中には，〔gaʃi〕(1754.16)，〔gasï〕4619.23，〔gasɯ̈, gasɯ〕が含まれている。4619.29 は，〔gasï～gasɯ̈〕と報告されている。

GARAKU は，8325.77 のみ。

GAHU は，2067.52 のみ。

GOYA は，6511.85 のみ。

HAKIDAME は，273 図とは地域が違い，2783.73 と 2793.00 の 2 地点である。

KAWAGI は，5586.70 のみ。

KAAYAGI は，6721.33 のみ。

KAAIMACUBUMUNU は，2150.17 のみ。

KAWAYOSE は，6557.33 のみ。

KAWANAGARE は，5618.43 と 6576.56 の KAWANAGARE と，3745.98 と 4773.78 の KAANAGARE である。

KOTO は，6528.21 と 6537.21。

KOCUMO は，7417.27 のみ。

MINAGARE は，6436.57 と 7332.46。

MUNAGARE は，6416.58 のみ。

MOBA は，6495.88 のみ。

MONO は，5615.28 のみ。

KITANEEMON(O)は，2792.07 と 5685.02 と 6520.94 と 8325.03。このうち，2792.07 は〔kïtanɛmono〕，6520.94 は〔kitanaimoN〕，8325.03 は〔kisane:moN〕であった。

NAGAREMONO は，5674.06 のみ。

NAGASIMON は，7381.47 のみ。

MOYA は，7312.69 のみ。

MYAKUN は，2072.20 のみ。

NAGASU は，3786.44 のみ。

SERI は，6650.70 のみ。

SIGARAMI は，7218.26 のみ。

SIIKUSAA は，1271.20 のみ。

SIONAGARE は，6586.27 のみ。

SUBO は，7355.48 のみ。

SUKUDO は，8315.89 のみ。

YOGORE は，8310.87 のみ。

YORIKUSA は，いろいろの変種を含む。沖縄島周辺は〔juikusa〕が多く，1251.73 のみ〔juikusa:〕。宮古のものは，〔juɸfusa〕(2151.20)のほかは，〔jurafusa〕(2151.51)，〔jurjaΦusa〕(2141.61)，〔juravva〕(2141.71)。八重山のものは〔ju:ressa〕(2085.69)。

YOTA(KKUZU)は，6645.37 のみ。同地点で両用である。

YOTARA は，5679.86 のみ。

YUNI は，1261.70 のみ。

その他は，7394.14 の〔doro〕のみ。

無回答は，本土部 8，琉球列島 21 である。

以上凡例に挙げた語形約 120 のうち，6 地点以上に現われるものは，次の 24 種であった。AKUTA, GO(O)-MI, GOM, GON, GUMI(I), KAWAGOMI, GOMI-KUTA, GOMOKUTA, GOMIMUZU, GOMO-KUZO(O), GOMOKU, GONMOKU, GOMOT, GOMUT, GOMO, GOTA, GO(N)DO, MOKU-TA, MOKU, MOK(K)UZU, MOKUZO(O), GASU, KUZU, YORIKUSA。4 図の中でもっとも変種が多い。

これをさらに大まとめにすれば，アクタ，ゴミ，カワゴミ，ゴミクタ～ゴモクタ，ゴミクズ，コモクゾ，ゴモク，ゴモ，ゴタ，ゴンド，モクタ，モク，モックズ，モクゾ，ガス，クズ，ヨリクサの 17 種となろうか。

このうち，ゴミは 273 図の説明のとき触れるところがあったので，ここでは述べないことにする。カワゴミも，まさにそのものであるから，それに準ずることにする。

アクタは，関東南部，浜名湖付近に見られるほか，四国を中心に，中国地方南部，九州北部に多く，琉球にもかなり見られる。近畿地方，九州南部にはすくない。この表現は上代以来のもので，もっと多く現われそうにも思えるが，国の中央ではすでにすたれてしまったのであろうか。もっとも，他にもっとアクタの出やすい質問があるのかもしれないから，速断はゆるされない。

ゴミクタ～ゴモクタ，ゴミクズ，コモクゾ，ゴモク，ゴモ，ゴタ，モクタ，モク，モックズ，モクゾは，語形

の点からもまた分布の上からも，いちおう相互関連的であると言うことができよう。

ゴミクタ～ゴモクタは，津軽にもあったりして全国に散在するが，特に近畿地方に多く見られる。クタの部分は，アクタのクタとも比較すべきものであろう。

ゴミクズは，全国に点在するが，クズ（この地図では秋田に多いが，文献では平安後期以降）との関連を考えねばならない。関連が深いと思われるゴモクゾは，熊本を中心とする九州に多く見られる。ゴモクタもそうであるが，ゴミ～でなくゴモ～となる理由については，さらに考えたい。ゴミ＋モクズ(藻屑)がゴモクズを生んだとする経路は考えやすいが，ゴモクタの説明にはならない。アクタモクタということばがあるが，このモクタがゴミと結んでゴモクタが生じたのであろうか。

ゴモク・ゴモの類は，全国に点在するが（北海道南部から北奥，山形・宮城・福島，八丈，北陸など），近畿に目立って多く，山陰，四国東半，九州にもかなり多い。ゴモクズやゴモクタなどの下略形と思われるが，奈良などではゴモクタ＞ゴモク，熊本などではゴモクズ＞ゴモクなどという二様の系列を考えることは，はたして許されるのであろうか。たとえば近畿でゴモクが生じ，西方へ，そこにあるゴモクズと関係なしに伝播するなどということも考えられなくはないからである。関係なしにとは言ったが，在来のゴモクズに引かれて外部からのゴモクがこの地に侵入しやすかった，などということも，無論考えられる。ゴモクの侵入によって在来のゴミクズがゴモクズに変化する，などということも，ありえよう。なお，6553.22では，ゴモク＜少＞，ゴモクタ＜多＞，6582.12では，ゴモク＜少，ゴモクタの略＞などの注があった。7392.45では，ゴモクゾオ＜優勢＞などともあった。なお，ゴモはゴモクなどの下略形とするほかに，ゴミからの直接の変化とも考えうるが，秋田のゴモのそばにゴモクタが（津軽や道南のものも，この秋田のものに準じて考える），愛知のゴモのそばにゴモクやゴンモクが，山口のゴオモのそばにゴモクがあることから，赤色の符号によって，その関連を示しておいた。

ゴタは，近畿南部のほか，宮城や青森の海岸に見られる。ゴモクタの中略形と考えれば，奈良南部や和歌山にはゴモクタが現存しないがもとはその地に存在したということになろう。宮城や青森のものは，海岸づたいの伝播であろうか。三河湾のグタも関連させて考える必要があろう。岩手の海岸のゴタクはよくわからないが，ゴタの前段階かもしれない。長野のゴッタクなどとともに，タク(T•AKU)についてアクタやアク(灰)の意味と関連づけつつ，考えるべきものであろう。

ゴンドは，岩手・宮城・秋田・山形のほか，福島南部，茨城・栃木，千葉北部や愛知東部に見出される。さらに関係のあるGOIDOが愛媛にある。千葉のものがGOZO，愛媛のものがGOIZOとの併用であり，秋田ではGOMOZU，さらにクズが付近にあることから，このゴンドにクズと関連のある符号を与え，色は赤色にしてあるが，はたして正しい処置であったろうか。

モクタは，いちおうゴモクタの上略形と考えてみた。山形に多いが，北海道，大阪，高知にもある。山形では付近にゴンモクがあり，無関係とは思えない。大阪で付近にあるのはゴモク，高知で付近にあるのはアクタモクタであり，高知の例からはアクタに引かれてモクタが自然発生的に生じたようにも見えるが，山形や大阪の例からは，やはりこのモクタがゴモクタとの関連で成立したものと見るのが穏当であろう。藻＋腐という語源も考えられるが，強く主張する根拠はない。

モクは，高知に多く，山形・福島，埼玉，島根，宮崎に見られる。モクタの下略形の場合と，モクゾ(次項)の下略形の場合があろう。山形の4760.98のものなど，MOKUZOOとの併用であろう。

モックズ，モクゾは，藻屑をもとにしているかもしれないし，ゴモクズやゴモクゾの上略形と見ることもできる。『増補俚言集覧』には，あくぞもくぞ・あくたもくたという見出しがあった。芥藻屑があくたもくたになり，またもくぞはもくづからの転としている。地理的には四国(香川や高知)や九州(宮崎)に多いが，東北地方その他にも散在する。付近にゴモクズ，ゴモクゾはあまり多くないが，それぞれの地方で発生したと考えるほかに，よそで生じたものが現在地に伝播してきたもの，とも考えることができよう。

ガスは，山形，新潟にまとまっている。北海道にもある。別に，関連のあると思われるGASUMOKUが，福島にある。糟または滓(平安初期以降)をもととしているのであろう。天正かるたのつまらぬ札をさすことばとしてのガスがあるらしいが，これもかすからの転化であろうか。

クズは秋田に多いが，福岡，群馬・新潟，福井，長野にも見られる。屑（文献では平安後期以降）であろう。

もっと多く全国満遍なく現われそうで，質問文の限定ゆえであろう，地域的な遍りが見られておもしろい。

ヨリクサについては，すでに述べるところがあった。地理的環境から，川の多くない地方であることを留意しておきたい。〔jurafusa, jurjaΦusa, juravva〕のように，動詞相当部分の末尾が a である点がおもしろい。

各図の総合

以上，各図の凡例を見ながら，優勢な表現について粗い考察を行ったが，以下，4枚の地図を総合的に見ながら，全体をもう一度見直すことにする。

地点ごとに各図を対照すると，たとえば 7503.11 では 271 図 HOKORI, 272 図 MENZURI, 273 図 GOMI, 274 図 GOTA と GOTAN のように，各図の内容をそれぞれ言いわけている地点があると同時に，かならずしも遠くない 6590.87 や 7504.11 では，全地図を通じて GOMI が現われ，各図の内容を全く言いわけていないことがわかる。

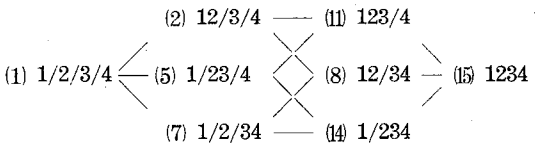
繁をいとわず，4枚の図に関する，ありうる各種の組み合わせを示すと，次の通りになる。

(1) 1/2/3/4 6572.22 など
(2) 1 2/3/4 6523.54 など
(3) 1 3/2/4 2151.67 など
(4) 1 4/2/3 1241.96 など
(5) 1/2 3/4 7334.78 など
(6) 1/2 4/3 7355.48 など
(7) 1/2/3 4 6543.05 など
(8) 1 2/3 4 7396.53 など
(9) 1 3/2 4 4720.17 など
(10) 1 4/2 3 見当らず
(11) 1 2 3/4 7424.67 など
(12) 1 2 4/3 4677.65 など
(13) 2/1 3 4 7407.36 など
(14) 1/2 3 4 3762.85 など
(15) 1 2 3 4 4667.76 など

1種を除いてすべての存在が確認される。もっとも，全部の組み合わせが平等に存在するわけではなく，すでに示したように(10)は存在せず，目立つのは(1)(2)(5)(7)(8)(11)(14)(15)で，それに対して(3)(4)(7)(9)(12)(13)はすくない（ないしは極めてすくない）ことがわかる。

ちなみに東京目黒区(6608.07)と京都上京区(6532.89)はともに(8)であって，共通性が認められる。大阪城東区(6552.71)も，これに準ずることができよう。ただし，東京江東区(6609.02)や大阪東住吉区(6562.22)は(8)ではなく，現代日本語が(8)を中心とするなどということは，さしひかえなければならない。

いま，(1)(2)(5)(7)(8)(11)(14)(15)の8種の親近関係を図示すれば，次のようになろう。



ただし，変化のプロセスが，たとえばかならず(1)から(15)の方向へ流れる（あるいはその逆）というわけではないことはもちろんであり，また，(2)から(5)へ（あるいはその逆），(5)から(7)へ（あるいはその逆），(11)から(8)へ（あるいはその逆），(8)から(14)へ（あるいはその逆）の変化もありえないことはないから，注意しなければならない。

(1)(2)(5)(7)(8)(11)(14)(15)の地理的分布の概略を述べれば，およそ次のようになろう。石川・岐阜，愛知西部以東は，秋田南部，山形，新潟北部の一画および伊豆諸島を除いてほとんどが(14)と(15)であって，福井・滋賀，愛知以西の地域と，かなりはっきり対立する。西日本の地域には，(1)(2)(5)(7)(8)(11)(14)(15)のすべてが見出される。秋田南部，山形，新潟北部には(2)(8)(11)などが見られ，伊豆諸島には，(7)(11)(14)などが見られる。

山形に(2)が見られ，隣接する秋田南部に(11)が，新潟北部に(8)が見られるが，さきほど掲げた図が，さほど見当違いでないことを示しているといっていいであろう。これ以外にも，たとえ熊本北部には(1)が見られるが，南部には(2)が，東北には(7)が，西には(5)が見られるなどの例を，いくつか挙げることができる。

ともあれ，4枚の地図の内容を区別する傾向は，それが古いものかどうかは別として，西日本で盛んであるとだけは言えよう。もっとも複雑な(1)は，愛知西部，近畿中央部，四国，九州（熊本北部を中心），沖縄に見られるが，これは，他の地図の分布傾向と比較して，この種のものがそう古いものではないことを思わせる。無論，強く主張することはできない。

この4枚の地図のさらに詳しい対照，文献との対比，地点密度を高めたり関連項目の範囲をひろげたりする詳細な調査が行われれば，いっそう確実な結論に達することができると思われる。

275. さきおととい(一昨昨日)

276. おととい(一昨日)

この2枚の地図に現われる方言形には共通する部分が少なくないので，両図における符号の与え方にはできるだけ共通性を持たせた。作図にあたっては276図「おととい(一昨日)」を中心に考えたため，説明は「おととい」の図を先にする。

「おととい」の図では，オトトイ，オトツイ，オトチイなど，「おととい」の末尾の「～とい」にあたる部分の音の違いにまず注目して，これを符号の形の違いで示した。さらに，オトテナ，オッテナなど，語末に～ナという形態素を持つ類とそれ以外との対立にも注目した。この～ナを持つ類には他図との関連も考慮して赤を与え，～ナを持たない類の紺と対立させた。

凡例の OTOTOI から OTOTOGI まで，および，赤で示したものの大部分は，「おととい」の末尾「～とい」の子音部分に，～TOI，～TOE，～TEE，～TE のような破裂音の現われるもので，オトトイ類およびその変種と考えて，線型の符号を与えた。北陸・中部以東の東日本，及び，九州に広い分布領域を持ち，そのほか琉球を除いた各地にも点々と見られる。OTOTÖE は名古屋周辺に6地点見られるものである。このÖEの表記については，第1集の別冊『日本言語地図解説—各図の説明1—』の7ページ，「形容詞項目全体について」を参照されたい。OTOTOGI は，いちおうオトトイの類と考えてここに置いた。これは岐阜北部と長野西南部に各1地点見られる。～G～の部分は鼻音であった。このほか，地点数の少ないものを挙げれば，OTOTOOI 8301.76, OCUTOI 5574.42, OCUTEE 7257.94, OTOTEI 4780.64, 7659.31, OTOTTE 4654.52 がある。

OTOCUI から OTOCURI までをオトツイ類およびその変種と認めて，丸味を帯びた一連の符号を与えた。末尾の連母音にはかなりの音変種が見られたので，特殊なものについては見出し語形の後に音声表記を付した。中部・近畿・中国・四国，九州東半にまとまって分布領域を持ち，その周辺部にも散在する。東日本には少なく，東北地方には見られない。この類の大部分は「～とい」の子音部分に，破擦音の現われるものと言えよう。OTOCUI-[t^sui]，OTOCUI[tui]は高知に広い分布を持ち，そのほか，北海道，佐渡，石川・福井・滋賀，奈良に計7地点点在し，徳島・愛媛，大分・宮崎にも見られる。このうち，OTOTUI[tui]は破擦音ではないが，いちおう，ここにおいた。OTOCII[tsï:]，OTOCII[tsy:]は，ともに名古屋を中心に計6地点見られる。OTOCII[ts^{w}i:]からOTOCI[t^{s}i]までは，中国中部，九州東半にのみ見られる形である。このほか，地点数の少ないものを挙げると，OTOCYUI 7303.29, OTOOCUE 5471.59, OTOCCEE 4653.47, OTOCUU 6528.64, 7395.09, 7395.63, OTOCU 7395.25, OCCUU 7394.60 である。OTOCII から OCCI までは，九州各地のほか，山陰，中国東部，隠岐にも点在する。OTOTII[t^{w}i:]からOTOTTIIまでは末尾音節の子音に摩擦的要素が見られない点では，オトトイ類的であり，末尾母音が～IIである点がオトツイ類のオトチイなどと類似点を持つという両様の性格を持つ類である。九州に7地点あるほか山梨にも1地点見られる。OTOCUGI は OTOTOGI と併用され岐阜東部に1地点見られる。一種の回帰現象であろうか。OTOCURI は隠岐に見られる。この末尾の～リは282図「あした(明日)」のアシタリの～リと関係があろうか。

UCUCUI 以下 BUSITI までは上の類と前部2音節の母音部分で異なる。UCUCUI から UCICI までは伊豆三宅島及び八丈島に分布するもので，UTUTII 以下の琉球列島に分布するものと形の上では似ているが，歴史的に直接関係があるかどうかはいま断じがたい。

UTUTII 以下の琉球に分布するもののうち，UTUTII から GUTTII（これは久高島に見られる）までは奄美・沖縄本島及びその属島にもっぱら分布し，先島には BUTUTUI 以下 BUSITI までが分布し，その分布は互いに入り混じっていない。先島の BU～は，「おととい」の古形「をとつひ」の「を～」に対応している。

赤で示した類は，末尾に～ナという接尾要素を持つものである。東北地方の西半分，新潟・長野，群馬に連続した分布領域を持つ。北海道には，赤で示したものは数地点しか見られず，東北北部に広い領域を持つ方言形が，北海道，とりわけ，道南に分布を見せない点が注目される。この～ナについては，278図「きのう(昨日)」で若干言及したので参照してほしい。

KINOOOTOTOI から KINOOOTOTENA までは凡例順に，それぞれ各1地点，7341.47, 7301.67, 4653.02, 7340.47, 1731.89, 6594.67, 1731.89 に見られ

る。ISSAKUZICU は 5564.76, 6436.98, 6541.52 の3地点に見られる。SAKIOTOTOI は 5635.65, SAKIOTTOI は 1744.60, 2750.43 の2地点に見られる。両地点とも 275 図「さきおとという」では，無回答となっている。HUNIDAA 1221.47 は「このあいだ」にあたるものと思われる。「その他」としたものは新潟西部に2地点見られたキノオノマエノヒ（この2地点は 275 図で無回答）と，琉球宮古に1地点見られたミイカナイである。

つぎに，275 図「さきおとという(一昨昨日)」について説明しよう。この図に現われる語形は，一部の地域のものを除いて，先に説明した 276 図「おととい」に現われるオトトイ，オトツイ，オトテナなどの語形の前部にサキ～，サキノ～，サ～などの接頭要素が付加されたものである。したがって，作図に際して，後部分の諸語形については符号の形の別をもって示し，276 図「おととい」に現われる当該語形と符号の形を類似させ，前部分の違いを橙，茶，緑の色別をもって示した。また，末尾に～ナを持つ類は，「おととい」の図との関連を考えて赤で示した。これらの類は前部分という観点からはすべて橙に属すべきものである。草，紺については，これらとは別な基準で分類したものであって，後でべつに述べる。

後部分のそれぞれの語形には，276 図の当該語形の符号と同一のものを与えるべく工夫したが，あるひとつの後部分につく前部分に，たとえば，SAKI～，SAKE～，SAKU～などのようないくつかの変種が現われた場合，符号の向きの違いや，補助要素の付加によってその違いを示したため，両図が完全に同一符号とはならなかった。しかし，あるひとつの符号が，両図で異なった語形を示すということのないようには工夫してある。

両図を地点ごとに対比すると，両図における「オトトイ」部分の分布は非常に似ていると言うことができよう。

前部分の諸変種は，おおきく3つの類にまとめられる。まず橙および赤で示した類は SAKI～，SAKE～などであって，サキ類としてまとめられるもの，茶で示したものは，SAKINOOTOTOI, SAKINOOTOCUI など，前要素と後要素が，助詞の「の」を介して造語されている類，緑のものは SA～，SAA～，SAI～ などの類である。

サキ類はほぼ全国にわたる広い領域をもって分布している。この類のうちでは，SAKI～が最も多く，橙類および赤類の領域のほぼ全域にわたって分布している。SYAKI～は 6582.48 にある。SAKE～は，近畿周辺，佐賀・長崎にややまとまりを見せるほか，能登，長野南端・愛知，愛媛にも点在する。SAKU～は熊本・鹿児島に見られる。うち，8320.98 では，実際の音は[sahu～]であったが，SAKU～に対応するものと考えここに含めた。SAKO～は天草に見られる。SAT'～となるものは，鹿児島，宮崎南西部および対馬を含む長崎の一部に見られる。SAKAKI～は静岡西部に，SAKKI～は愛媛にそれぞれ1地点見られる。SAKISAKI～は宮城北部に見られる。このほか，サキ部分とオトトイ部分とが融合し一種のリエゾン現象を呈している SAGGOTOTOI, SAKKOTOTEE, SAGGOTOTE, SYAGGOTTE, SAGGOTOCI, および SAGOTTE の諸語形が九州西半に点々と見られる。これらは，分布上から SAT'OTOTE など，SAT'～を持つ類と関連があると考えられる。また，SAKYOOTTE は天草に，SAKYOOTOCUI は鳥取にそれぞれ見られる。

茶で示したサキノ～という前部分を持つ類は，広い占有領域を持つものではないが，北陸から中部地方の南端にかけての地域，紀伊半島南部，中国，九州東北半にそれぞれある広がりを持って分布している。そのほか関東地方，四国などにも点在する。OCCAKINOUCUCEI, OCCAKINOUCICI はともに八丈島に見られるものである。

緑で示したものは近畿西半から中国・四国にかけて領域を持ち，北海道，滋賀，福岡，宮崎にも1地点ずつ見られる。とくに，中国西部，四国南半にはややまとまった領域が見られる。これらのうち，SATOTOI は北海道にあり，しかも SA～で切ると～TOTOI が残り，オトトイ類としては1母音不足することになるが，いちおう緑の類に入れここに置いた。福岡の SAOOTOCUI は，SA-OOTOCUI か，SAO-OTOCUI か切り方に迷うところである。SAIOTOCUI は，滋賀と徳島に各1地点見られる。この SAI～は，SAKI～の一種の音便形とも考えられるが，いちおうここに置いた。これら緑で示した前部分は，後に草で示した SAATEE から SEETII までの類とあわせて考えるべきものであろう。両類は分布の上でも重なる部分があり，互いに関連があることを示唆している。

周防大島の MAEOTOCUI と佐賀の OTOOTOTEE は，上述のどの類にも入れ難いが，オトトイ部分に何らかの前部分が付加されたものという点に上述の各類

との類似性を認めて，凡例の位置を考え，紺を与えておいた。

SAATEE 以下 SEETII までは草で示した。現状からは何類と称すべきか決めにくいところであるが，それぞれの語形間にはある種の連続性が見られ，全体としてひとつの類とまとめうると考えられる。分布は高知東半と愛媛の一部，広島，宮崎東南半と鹿児島南半，種子・屋久，それに，隠岐である。四国のものは，SAICUI が主で，SAACUI が1地点見られる。SAACUI はこのほか広島にも3地点ある。隠岐は，SYEECI である。そのほかはすべて宮崎から鹿児島にかけての地域に分布する。これな前部分は，橙等のサキ～の変化形と考えることもできよう。その場合これらの祖形として，「さきつひ」という形を仮定することができる。

琉球は奄美の1地点を除いて，造語の発想が本土部と全く異なる。現われる語形は紺で示した YUKKANAATI 以下，UTTIISACI までの各語形である。

「その他」として示した地点では，多く「おとといのまえのひ」という表現をしている。説明的な表現であって，1語として機能していないと考えて「その他」とした。中国西部に多く分布している点は，東隣の広島・岡山に無回答がやや多いこととならんで注意を引く。これらの地域では「さきおとい」に対する明確な1語表現が力強くは存在していないものと考えられよう。

両図を通覧して巨視的な立場に立つとすれば，まず，東日本，九州西半に広い領域を占める，オトトイ，オトテなどの非破擦音の末尾音節を持つ類と，それを分断する形で中央部に分布する破擦音類との対立がまず目につく。オトトイ類が古く，オトツイ類が新しいというのが，さしあたっての周圏論的解釈である。

この問題の音は，古形「をとつひ」の助詞の「つ」とつながりをもつ。古くは「つ」は〔tu〕であったとされるものであるが，この「つ〔tu〕」が，一方では〔to〕に，他方では〔tsu〕に変化していって現状ができあがった，ということになろう。すなわち，中央が音韻法則的，周辺が例外的，ということになる。

ただし『日本国語大辞典』によれば『後撰集』『源氏物語』に「おととひ」があるというから，前音節の影響などから「つ〔tu〕」が「と〔to〕」にかわる傾向が，古くは近畿地方でも行われたらしい。

なお，両図の作図にあたっては＜併用処理＞は行わなかった。オトトイ，オトツイのいずれにも＜上品，希，共通語的，新しい＞などのいわば標準語的であるとする注が見られ，あえて削除するのは惜しまれたからである。併用地点のうち，岐阜，長野南部から東海地方にかけては，オトツイを標準語的とする注が多く見られ，逆に中国・四国・九州の各地ではオトトイにその注が多く見られた。

277. おとといのばん（一昨晩）

この図に現われる語形は276図「おとい」，278図「きのう」，および279図「さくばん」に現われるものと関連する部分が多い。作図にあたってはそれらとの関連を考慮したので参照してほしい。

この図の語形のほとんどは「おとい」「きのう」にあたる前部分と「ばん」にあたる後部分と，それを結ぶ助詞「の」にあたる中間部分の3部分から成り立っている。作図にあたっては，前部分のちがいを色の別をもって示し，後部分のちがいを，符号の形の別によって示した。中間部分については，「の」の有無を単に見出しに示しただけで，符号としてはとくに考慮していない。OTOTOI-(NO)BAN のように括弧でくくった(NO)で示したものは，NO を持つものと持たないものの両方をその中に含むことを示す。この～NO～の中には OTOTOINBAN の～N～のような撥音化した「の」も含んでいる。

前部分についてまず注目されるのは，草で示したオトトイ～類と，赤で示したキノオ～類との対比であろう。前者は一昨晩が一昨日に属しているという発想にもとづくものであり，後者は一昨晩は昨日の範疇に属する，すなわち，すくなくとも過去については，一日は夕方（日没）から始まって翌日の夕方（日没）までとする発想にもとづく表現であると考えられる。この点については279図「さくばん（昨晩）」の解説でやや詳しく述べたので，そちらを参照してほしい。

オトトイ～類は北海道，東北南半から中国，四国の東半にかけて広い領域を持って分布して，九州以南にはほとんど見られない特徴がある。オトトイ部分の音声的な面に関しては，276図「おとい」を参照してほしい。原資料に記された音声には，両図の間にほとんど差が認められなかった。したがって，本図では276図などで示した細かい音声の違いは考慮せず大まかにまとめてしまった。したがって，ある地点の両図の語形が見出し表記の上で多少異なっていても，異語形が存在すると速断しないでほしい。

空に含めたものの多くは，ユウベノマエ～という表現であったが，分布には特に見るべき点はなく，いずれも，草類の領域内にわずかに見られる程度である。

キノオ～類の占有領域は九州・琉球であり，そのほか，各地に小領域を持ちつつ散在する。キノオ部分の音声的な面に関しては278図「きのう(昨日)」を参照してほしい。両図の間で音声的な違いがかなり認められるが，多くは，278図でキノオ，キニョオなどの長母音を伴っていたものが，本図で短母音となって現われるというタイプの相異である。なお，278図で分出した摩擦を伴った[kç]は，本図ではK～の中に含めてある。

紺で示したもののうちSAKI(NO)BANからMAZUNOBANまでは，その晩の属するのが昨日とも一昨日とも分からない類で，単に，「前の」という標識しかない類である。東北地方北半にまとまった領域を持ち，北海道，新潟・福島(中通り)・栃木，伊豆半島北部に小領域が認められるほか，その他の地域にも点在する。多くはサキ～類であるが，新潟・福島・関東には，マエ～類がやや多い。この東北地方に多く分布する紺類と，九州以南を中心とする赤類およびその中間地域に広く分布する草類について，279図における諸語形の分布と合わせて「さくばん」—「おととといのばん」という2項の組み合わせを考えると，東北地方は，ユウベ(キノオノバン)—サキノバン，中央部は，ユウベ—キノオノバン，ユウベ—オトトイノバン，九州以南はユウベ—キノオノバンという，それぞれに異なった組み合わせを得る。

YUUBENOBAN, YOINOBAN, YOINOBANGEは，それぞれ，6620.20, 4792.43, 4791.61に見られる。SARAIBANは7512.43に見られる。「再来～」であろうが，時間の方向が逆に向かっている表現である。OTOCUINOMAENOBANからSAOTOCUINOBANまでの各語形は，一昨昨晩にあたると考えられる表現である。各1地点，それぞれ6389.56, 2812.96, 6552.71, 6626.30, 6525.75, 6481.56に見られる。これらの地点は279図「さくばん」の回答がそれぞれ，YUUBE 6389.56, SAKI(NO)BAN 2812.96, YUNBE 2812.96, SAKUBAN 6552.71, YUUBE 6626.30, YUUBE 6525.75, KINOO(NO)BAN 6481.56となっている。SENZICUNOBANは6398.42にある。この地点の「おととい」の図の回答はOTOTOIである。ASATTENOBANは1761.74にある。この地点の279図「さくばん」の回答は，ASITANOBANとある。どこかで誤解が生じたものと思われる。

後部分について各語類の分布を見ようとすると，各色に分散している共通する形の符合をいちいち見ていくという煩雑な方法しかない。これらの語類については，279図「さくばん(昨晩)」，281図「こんばん(今晩)」，283図「あしたのばん(明晩)」の各図も同時に参照してほしい。これら後部分の語形のまとめ方は，他図の「晩」にあたる部分のものとほぼ同じにした。琉球に見られる～YURUには，YUURUU, YUURU, YURUUとあったものが含まれる。

最も広い分布領域を占めるものは，～バン，および～バンゲである。全見出しを通じて，線形の符号が～バン類，べたの円形符号がおおむね～バンゲ類である。琉球を除く全国に分布する。この分布の様相は，283図「あしたのばん」に見られる～バン，～バンゲの分布と酷似するといえよう。～バンゲは東北地方に広い領域をもつほか，関東南縁，中部，近畿北縁にも散在する。これな～バン・～バンゲ類の分布と，281図「こんばん」に見られる語形の分布との間の問題については，283図「あしたのばん」で多少ふれる。参照してほしい。

三角形の符号をたどっていくと，ヨサリ，ヨサの類の分布が得られる。石川，福井北半，岐阜，長野南西端等の一領域と，近畿西部から中国中部にかけての一領域が抽出される。そのほか，山形(1地点)，新潟，伊豆諸島，紀伊半島，四国，九州(2地点)にも見られる。これらのヨサリ，ヨサの分布は，279図「さくばん」，281図「こんばん」，283図「あしたのばん」の各図に現われる同類の分布と比較すると，全体の分布傾向としては類似しているものの，くわしく見ると必ずしも一致していないことがわかる。とくに，近畿西部から中国中部にかけての分布は各図とも異なっている。『竹取物語』，『源氏物語』にも見える「よさり」の語史と，これらの各図のヨサリ，ヨサの分布とを対照してみるのは興味ある課題と言えよう。

～ユウベ類にも一定の類似した符号を与えた。山梨・静岡にややまとまって分布しているほか，あちこちに点在する。～ヨルも一類として立てることができよう。奄美・沖縄本島に～YURUという形で広く分布し，本土部では，関東南縁から東海地方にかけての地域，新潟，および，中国中部にやや多く見られ，その他の地域にも点在する。ただし九州には見られない点に特色がある。～ヨイは四国に5地点，～YUIとして沖縄に1地点見

られる。～エは，隠岐に3地点見られる。～YUU は琉球先島を中心に見られる。～YOMA は東北，愛知に計4地点見られる。

なお，275図から279図の各図に現われる，末尾要素の～ナの分布は，その領域において他図と大差はないが，この図において，密度がやや低いと言えよう。また，その接続の仕方も，オトテナ，キンナ等のように前部分にのみ接尾し，後部分の～バン，～バンゲ等に接続したものは1例も見られない点，注目すべきであろう。この～ナについては，278図「きのう」の説明でやや詳しくふれるので，参照してほしい。

278. きのう(昨日)

この図に現われる語形は，すべて，キノオおよびその変種と考えられるものである。したがって，作図にあたっては，音声的な面に重点を置いた。多くは紺で示したが，キノオにあたる部分にさらに～ナという接尾要素の付いたものは他図(275, 276, 277, 279の各図)との関連を考慮して，赤を与えて別出した。赤の類は，～ナ部分を除いた語形について，紺類の分類原則を適用して符号を与えた。

分類の第1の観点として，キノオ対キニョオ，キンノオ対キンニョオのように，第2音節に拗音が現われるか否かに注目した。拗音の現われない類をべた符号で示し，拗音の現われる類を輪郭のみの中ぬき符号で示した。拗音の現われないものは，ほぼ全国に分布する。拗音を持つ類は，秋田，中部，中国・四国，九州東半にやや多いと言えようか。その他の地域にも散在するが，関東はやや少ないと見られよう。つぎに，キノオ対キンノオ，キニョオ対キンニョオのように，撥音の有無に注目した。キノオ，キニョオなど撥音の現われない類を三角形などの角ばった符号で示し，撥音を持つ類は円形などの丸味をおびた符号で示した。なお，赤の類については等辺四角形符号を用いた場合もある。撥音を持たない類はほぼ全国に分布するが，撥音を持つ類は，北陸・近畿に集中し，中部から静岡・関東南縁にかけて連続した分布が見られ，中国地方にもいくらか分布する。それ以外の地域には少ないと言えよう。また，赤の地域の大部分にもこの類が分布する。KĨNOO, KĨNYOO などと表記した語形は，第1音節の母音に入りわたりの鼻音の見られるものである。撥音の程度に多少のちがいがあるものと考えて，キンノオ，キンニョオなどと区別する符号を与えた。岩手，愛媛，琉球にやや多く見られ，北海道，佐渡にも各1地点見られる。そのほか，末尾母音の長短，開合，頭子音の別などにも注目して，符号の形や向きをもって示すことを試みた。短母音のものは近畿に多く見られ，九州南部，琉球にもややまとまりを持つ。また，赤の類の中にも，KINA, KINNA, K[kç]INNAなど，短母音を持つものが広く見られる。

紺の円形符号の領域をたどると，これらは，かなり新しい広がりと言うことができよう。これらのうち，KINNO, KINNYOなど撥音を持つものの拍数は3であり，拍数の上ではそれぞれKINOO, KINYOOにあたるということになる。KINOO, KINYOOが短母音化したため拍数を保存する必要上撥音を補ったとする考えかたと，逆に，撥音が加わったため，1拍余って末尾母音が短くなったとする考えかたの両様があろうが，いずれにせよ，音調も考慮に入れる必要があろう。KINO, KINNOOの説明には問題があるとしても，この母音の長短と撥音の有無とは無縁ではないと考えられる。末尾母音が開音の[ɔ:]になるものは，佐渡・新潟に散在するほか，三重東端に2地点見られる。歴史的には「きのふ」が原形であるとすると，開母音が現われるのは一般的な変化の規則に反することになる。これに対して，キヌウ，チヌウ，キンヌウ等の合母音を持つ類は，この一般的な規則に合致しているものである。九州から琉球列島にかけて広く分布するほか，岩手に1地点，群馬に4地点見られる。頭子音のちがいのうち，強い摩擦を伴ったK[kç]の音を持つものは，関東以北の東日本に散在するほか，中国地方北部に2地点，琉球先島に2地点それぞれ見られる。口蓋化してCI～となるものは，琉球にやや多く分布するほか，関東以北にも散在する。琉球には，SINU, SĨNUU, SĨNU と SI～にまで変化したものも見られる。さらにNNUとなったものも見られる。

その他，やや個別的な音を持つものを列挙しておこう。

KINNYOI	4653.02
KENNYO	5527.94, 5536.99
KIGYOO	3746.41, 3785.42, 3786.01, 6631.69
KIGYO	0776.88
KINGYO	5690.12
KINGOO	7303.38
KIN'YOO	3767.87, 7404.56

KINEI　7659.31, 7659.40, 7659.62
KINEE　7659.51
KINII　7659.53

これらのうち，語中にGを持ついくつかの語形は，キニョオなどの口蓋化のニョの調音点の位置が後退し，軟口蓋の位置にまで行ったものと考えられる。

赤で示したもののうち，KINOONA から CINNY-ONAまでは，～NA を除いた部分が，紺で示した各語形と対応する。KININA, KINNINA は宮城に各1地点見られ，分布地域はかなり異なるものの，八丈の各語形といちおう形の上では類似が見られる。それに対して，KINA 以下に並べた各語形は，末尾が～ナとはなっているが，その前の部分が紺で示したキノオ類と必ずしも対応しない。慎重な立場をとればキノオ類にナが付加してさらにそれが変化しこれらの語形が生まれたのか，全く別な変化の道程をたどったのか，にわかには判断しがたい，ということになる。分布は北海道に1地点見られるほかは，すべて東北地方から長野にかけての地域の日本海側の半分に限られる。

これら末尾に～ナを持つ類は，他のひにちに関する図(275図「さきおとい」，276図「おとい」，277図「おとといのばん」，279図「さくばん」，281図「こんばん」)に見られるので，それらを通覧する必要があろう。275図から279図までの各図に現われる～ナの領域は，みなほぼ同じと言えよう。ただし，分布の密度にそれぞれちがいがあり，本図の密度が最も高いと言うことができる。それに対して，281図「こんばん」ではバンゲナ等のわずかな語にしか～ナは現われず，分布も，岩手南部，宮城北部のごく狭い地域に限られている。282図「あした」以下，283図「あしたのばん」，284図「あさって」，285図「しあさって」，286図「やのあさって」の各図には，283図「あしたのばん」に ASITANOBANGENA が 3782.38(秋田東南部) に1地点見られる以外には現われない。このように見ていくと，この接尾要素～ナは，時間的には過去を現わすものが主流であり，現在および未来の意味は原則として持っていないと考えてよさそうである。ただし，岩手南部，宮城北部の小地域では，「今晩」という未来，あるいは近い未来にも使うことがあるらしい。「明日の晩」の意味での ASITANOBANGE-NA もこの岩手の数地点の領域の東縁に位置し，やはり未来を言う点では意味的にも，地理的にも「こんばん」の図のものと連続が認められる。

名詞として用いられた場合と副詞的に用いられる場合とで，これらの表現は全く同じなのであろうか。歴史的な考察にはいるまえに，共時的な文法機能についてなど，さらに考えるべき点が多いようである。

279. さくばん(昨晩)

この図に現われる語形は，日本全土に分布するユウベおよびその変種の類と，キノオノバン，キノオノヨサリなど，キノオノ～という表現をとる類が大方を占める。

ユウベおよびその変種のうち，ユウベナ，ユベナ等，末尾に～ナを持つ類を，他の図に現われる～ナとの関連を考えて，草を与えた～ナを持たないものから分出し，空を与えた。なお，キノオノ～の中にも～ナを持つものが含まれている。これら～ナを持つものは東北地方から新潟・長野にかけて連続した領域を持ち，275図から278図までに見られる～ナの分布とほぼ一致する。～ナについては，278図「きのう」の解説でやや詳しくふれたので参照してほしい。

ユウベ類は，音声的な区別をやや詳しく示した。空の類については，末尾の～ナを除いた部分に草類と同一の符号を与えたので，～ナ以外の問題では草類と同列に扱う。なお，これらユウベの前部分，ユウ～・ヨオ～等の音声については，255図「ゆうだち」に現われるユウダチ類の音声との関連が考えられるので比較してほしい。

音声面で注目した点はいくつかあるが，まず，ユウベ対ユンベ，ヨオベ対ヨンベのように，～ベの前に撥音を持つかどうかをとりあげた。べた符号は撥音のないもの，中ぬき符号は撥音の見られるものを示す。両者の分布は全国的に混在していると言えよう。ただ，九州西半から琉球にかけて撥音のないものの分布が目立つ。とくに琉球には撥音はまったく見られない。また，その中間的なものとして，入りわたり鼻音の見られるものもあった。これらは音韻論的に単に有声音に属する入りわたり鼻音と認めてしまう見方と，不完全な撥音とみて，ユンベなどとの関連をみる見方との二様の解釈が可能であろう。この図ではとくにどちらとも解釈せずに，鼻音記号を付して見出しとして分出し，半分しろぬきの符号を与えた。秋田を中心に東北地方に多く見られ，愛媛にも見られる。

YUUBE, YUNBE 対 YOOBE, YONBE のように，はじめの母音がウとなるかオとなるかという点に

も注目した。多少の例外はあるが，ウとなるものには長めの四角形，オとなるものには正方形の符号をそれぞれ与えた。オとなるものは，九州に広い占有領域を持つほか，近畿周辺部，北陸にも分布が見られる。東日本にも散在するが，北海道，東北地方の東半分，関東には少ない。琉球には全く見られない。諸表現を比較して「ゆうべ」の古形をたどるときには，九州に見られるこれらオを持つヨンベ，ヨベが注目されよう。「ゆふべ」からの変化とは，考えにくい表現だからである。『源氏物語』に見られる「よべ」と関連づけるべき表現とすべきものかもしれない。

ユウベ類の語頭の半母音が摩擦音となって現われるものは，大きい平行四辺形で示した。東北地方に散在する。これらについては，260図「ゆき」，266図，267図「ゆげ」などにも現われるので比較してほしい。このほか，YUBERA から YONBERA までは，青森に9地点見られる。末尾の～ラは空とすべきものではないかもしれないが，いちおうここに置いておいた。奄美沖永良部に見られる YUBIRU も，何らかの1音節末尾要素を持つという点を考慮して，いちおうここに置いた。

赤で示したものの語形のまとめかたは，前部分，後部分とも，すべて277図「おといのばん」で赤で示した類と同じにした。277図の解説を参照してほしい。符号の与え方も，対照の便のため全く同じとした。この図の赤類の分布と277図の赤類の分布とを比較すると，当然ではあるが，この図で赤の現われるところには，277図で赤は現われていない。ある種の相補的分布を示している。ただし，両図の赤は，九州・琉球を除いては，はっきりとした占有領域を持たず，地域的にまとまった領域間での相補関係は示していない。あるのは地点地点の，あるいは，小地域間の相補関係のみである。したがって，すぐ隣の地点で，キノオノ～の意味が逆転するという地域的にみて不安定な現象が各地で生じている，ということになる。各地で，いろいろなコミュニケーション上の誤解が生じるのではあるまいか。ただし九州・琉球では，この相補関係が広い地域にわたり，キノオノ～の意味はこれらの地域ではまず安定していると考えられる。

紺で示したものには雑多なものが含まれ，まとまった分布をもたないものが多い。うち，YAZEN, YAZYEN, YADEN は，四国を中心に西日本に散在する。『大日本国語辞典』によれば，『保元物語』などに「夜前」という例があるようである。広島西部，山口には YUUYA, YUUYAGATA, YUN'YA が見られる。「夕」と「夜」との複合したものであろうか。

280. きょう(今日)

この項目は後期調査計画で関東以西、中国・四国にかけての地域で調査を打ち切ったため，それらの地域では調査地点が少ない。

この図に現われる語形は，凡例末尾の KONNICI 以外，すべての語形が共通語のキョオと同形あるいはその変種と考えられるものであり，分布も比較的単純である点が特徴と言えよう。

作図にあたっては，いくつかの共通点をとりあげて，符号の形の上に反映させた。おもなものを挙げるとつぎのようである。KYOO, CYOO などのように長母音を持つものは横向きの符号で，KYO, CYO などのように，短母音を持つものは縦の符号でそれぞれ示した。短母音を持つものは，東北地方北半と九州南半に多く分布する。新潟・関東以北，および，琉球列島に分布する CYOO, CYUU など口蓋化を伴ったもの，さらにはその変種と考えた SYUU, HYUU などはべた符号で示した。琉球に点在する KUU, CUU, SUU, HUU には口蓋化半母音の要素を含まない類として一類の符号を与えた。長三角形を与えた3語形は，開音のオ，オオを持ち，円形符号を与えたものはすべて，ウ，ウウと合音を持つ。開音を持つものは愛知西部の1地点を除いて，すべて新潟に分布する。合音を持つものは，九州から琉球にかけて広い領域を持ち，新潟・山形(1地点)にも分布が見られる。KIYO は岩手に1地点見られる。K〔kç〕YOO は頭子音に摩擦を伴うものを分出したもので，東北地方に点在するほか，熊本にも1地点見られる。東北のものは，音声的には CYOO, CYO などの口蓋化を伴うものに関連するものと言えよう。KEI, KEE は八丈に，KÏI は奄美に，KII は八丈と沖縄久米島にそれぞれ分布する。KONNICI は西日本に5地点点在する。無回答は，6631.05である。なお，併用として現われるもののうち，共通語と認めて削除したものは KYOO である。ただし<併用処理>をした地点数は多くない。

「きょう」の古形は「けふ」とされている。九州以南に分布するものは多く合音を持ち，この「けふ」からの変化と

考えてさしつかえあるまい。ただし，CYUU 等の口蓋化を起こさせる母音はイで，エではなかろう。したがって琉球に分布するものの多くは「けふ」から直接変化したものではなく，いちど，キョオあるいはキュウに変化してさらに口蓋化したものであろう。KEI, KEE, KÏI, KII は「けふ」のケ音を保存するものと考えることもできよう。新潟に見られる開音は，単純な音韻変化の筋道には反するものである。しかし，全体的に見ると，分布は単純であり語形の変種も規則的なものが多い。古くからの日本語の基本的な部分を占める語であると言うことができよう。

281. こんばん(今晩)

この図に現われる方言形は，大別して，5類に分けられよう。空を与えたコンバン，バンゲなど，「晩」にあたる形を含む類，緑で示したコンヤ類，赤で示したヨサリ，コイサなどの類，橙を与えたコヨベ，コイベなどの「ゆうべ」にあたる語を含む類の4類と，紺で一括して示した類の計5類である。

空で示したものは，関東以北の東日本，近畿，中国東部，四国の大部分に分布が見られる。しかし，三重，愛媛・高知に占有地域がわずかに見られるほかは，他類の語と混在した分布しか見せず，北陸，山陰，中国西部，四国東部，九州以南には，ほとんど見られない。空の類はさらにふたつに下位区分されよう。中ぬき符号で示した，KONBAN, KYOONOBAN などのコンバン類と，BANGE, KYOONOBANGE などのバンゲ類である。それぞれの類の中心的語形は KONBAN と BANGE である。コンバン類は主として関東以西に分布し，東北地方にも散在する。これに対してバンゲ類は，佐渡，新潟北半，関東東半以北の地域から北海道にかけて広く分布し，そのほか近畿西端に小領域を持ち，新潟西端，福井北部，愛知，四国西部にも見られる。コンバン類，バンゲ類の多くは，それぞれ上記分布領域のなかに散在するが，いくつかはやや地域的な特徴があげられる。KYOOBANは，岡山から広島にかけての地域に多い。バンゲ類中の BANGENA から BAENA までの末尾にナを持つ類にも，一定の領域がある。278図「きのう」の解説のなかで述べたように，このナは275図から279図までの各図を通じて過去を示す接尾要素と考えられるにもかかわらず，例外的に未来を含むと考えられる本図に現われる点，なお検討を要する。BANSUNA は，末尾要素として，～SUNA をとり出すことも考えられる。279図の福島などに現われる YUNBESINA の末尾要素と対比すべきであろう。いったいに，コンバン，キョオノバンなどは，単なる「夕方」という意味のバンに「本日の」という限定を加える要素が付加して「今晩」を示す語形であるが，バンゲはどうであろうか。キョオノバンゲなどそのような限定の加わったものもあるが，多くは，裸のバンゲである。これらバンゲ地域では，単なる「晩」は何と表現するのであろうか。ヨサリ対コイサリ，ユウベ対コヨベなどの場合も同様であるが，「晩」と「今晩」との両方を対比しての考察が必要となろう。

緑で示したコンヤ類は，琉球を除くほぼ全国に分布する。ただし，コンバンの占有地域である三重，愛媛・高知には少なく，東北地方の分布もやや薄いと言えよう。中心的語形は KON'YA である。東北地方，北陸を中心に KONNYA, KONYA などのように，撥音の次の半母音が拗音化したものがかなり見られる。音声表記の上に個人差があって，あるいは，コンヤに入れるべきものもあるかと考えたが，あいまいなものについては，コンニャ，コニャなどであるとの調査者の確認を得た上で作図した。緑の末尾に置いた KOIYA, KOIE は紀伊半島南部，瀬戸内海沿岸その他にややまとまった領域を持つが，コンヤ類に入れるべきかどうか迷うところである。「今宵」などと関係があるかとも考えられるし，半母音の前の撥音の鼻音性が弱まった結果生じたものとも考えられる。あえて緑では示さず，凡例の位置のみここに置くことにして関連を暗示した。

赤で示した類は，さらに2類に下位区分される。三角形符号を与えたヨサリ，ヨサなどの類と，コイサリ，コイサなど，前者に「本日の」を表わすと考えられるコ～が付加した類の2つである。ヨサリの類は近畿北部から北陸にかけて濃い分布を示すほか，コイサリなどの全領域の周辺にも点在する。コイサリ，コイサ類は，紀伊半島，中国・四国，九州北東部に領域が見られる。KYOONOYOSARI から KYUUNUYUSARABI までは，「きょうの～」という限定がついている点，コイサリ，コイサの類に入れられよう。このグループには，まとまった領域は認められない。そのほか赤の類は，離れて，新潟・群馬・長野，兵庫，山口・福岡，琉球にも点々と見られる。これらは一見孤立的に見えるが，他の277図「おとといのばん」，あるいは283図「あしたのばん」を見

ると，これら孤立的なものと本図の領域を持った分布との間にヨサリ，ヨサを含む種々の語形が分布して，各図を総合するとヨサリ，ヨサはかなり広い領域を持っていることが分かる。ただし，琉球のものは，他図には現われず，孤立的と言わざるを得ない。ヨサリ，ヨサ，ユウサリの語形のうち，ヨ～は「夜」，ユウ～は「夕」と一応考えられるが，サリ，サは何であろうか。「よさり」は『竹取物語』，『宇津保物語』などに現われる語形のようで，かなり古くから用いられていたもようである。また，『狂言』には「よさ」が見られるようである。分布を見ると，近畿の中央部には見られず，東へは，日本海側を東進した形跡があるが，東海道を下った様子はうかがうことができない。西へはかなり進んだようで，その最先端は本図の琉球のものであろう。周圏的分布は示しているものの，緑のコンヤ，空のコンバンの各語形との関係はやや特殊である。緑，あるいは空の類はかなり強い勢いで侵入しているにもかかわらず，赤類を完全に駆逐し去ることなく，赤の分布の上に重なり，赤はその領域を緑，空の類と共有しているというのがこの図の分布である。ヨサリ，ヨサあるいはコイサリ，コイサは，『竹取物語』『宇津保物語』を含む古い時代，かなりの勢いで四方へ広がったが，すぐあとにおこったコンバン，コンヤの類に後を追われ，今の分布以上に拡大する力を失った。一方，コンバン，コンヤ類は一挙に日本全土に広がったが，漢語であるためか完全な方言形としての地位は得られず，赤の類を駆逐するまでには至らず，やや文章語的あるいは固い表現としてコイサリなどの和語表現の上に重層をなしてかぶさっていったのではないだろうか。意味の分担などの移行的現象もあってかもしれない。

橙で示したものは，「本日の(この)ゆうべ」にあたる表現をもつ類である。中国西部に領域を持つほか，長野西部，石川南部，伊豆新島に，また，類似の語形が八丈にそれぞれ見られる。279図「さくばん」には，ユウベ類はほぼ全国に分布するのに比べ，この橙類の分布が小さい地域に限られているのはやや興味のある点である。

紺で示したものは，さらにいくつかの類に分けられよう。YORUから NEEKANUYURU までは，「よる(夜)」を含む語形で，琉球先島にややまとまりを持つほかは全国に点在するのみで，まとまった領域は見られない。KOYOI から YAAYUU までは，「宵」「よ(夜)」「ゆう(夕)」と考えられる要素を持つもので，YAIYO から YAAYUU までは八丈に見られるものである。YOONÏから KYUUNUYUNEEN までは琉球に見られ，とくに，奄美には多く分布する。NIKA から NAASIRU までは同じく琉球に見られ，全体として一類と考えられる。ASITANOBAN は東京西部に見られる。この地点は，283図「あしたのばん」では，ASATTENOBAN となっている。なにかの混線であろうが，調査者の注には単純な誤りではないとある。277図「おとといのばん」はキノオノバンであり，279図「さくばん」はユウベとなっている地点である。「その他」は北海道中部にある。回答はオバンデスとあった。無回答は青森県津軽半島に1地点見られた。

282. あした(明日)

この項目は後期調査計画での調査を打ち切ったため，地点数が少ない。

この図に現われる語形のほとんどは，アスの類とアシタの類の2類に属すると考えることができよう。そこで，アス類を緑で示し，アシタ類およびその他を紺で示した。

緑で示したアス類のうち，ASYU は 0894.61 に1地点見られる。ASI としたものは青森のほぼ全域および岩手・宮城・秋田，新潟，島根に1～2地点ずつ見られる。秋田のもの以外はすべて中舌の[i̽]であり，音声的には[ɯ]の中舌に近いものであろう。SASU は 4746.20 に見られる。形の上の類似からここに置いた。

紺で示したもののうちどこまでをアシタ類と認めるかは，判断の分かれるところであろう。ASITA から少しずつ変化しあたかも連歌の如くに連なり，ついには NAACYA まで連続している。ASITA と NAACYA とは形の上でかなりの隔たりがあるが両語形の間を埋める多くの語形がある。したがって，ここではこれらを全体としてアシタ類と考えておいた。これら ASITA から NAACYA までのうち，形の上で相似性の高いものを下位区分して，それぞれに類似の符号を与えた。まず，ASITA から ASUDA までを一類として円形の符号を与えた。ASIDA は宮城・秋田に見られる。ASUTA は岩手・宮城・山形・新潟北端に一連の分布が見られ，富山にも1地点見られる。ASYUTA は山形，茨城に計2地点，ASUDA は宮城に7地点それぞれ見られる。AHITA，AITA は互いに類似していると考えた。AHITA は中国・四国・九州に散在するほか，石川，

山梨，奈良・和歌山にも計5地点見られる。AITA は和歌山に6地点，高知に2地点，甑島に1地点それぞれ見られる。ASISA，AISA は近畿中央部に計6地点見られる。ASITTA，ASUTTA は岩手東部に2地点，ASINATA，ASUNATTA も岩手北端に2地点，それぞれ見られる。ASITARI は岐阜，紀伊半島南端，鳥取にそれぞれまとまりを持ち，岡山，山口，宮崎にも各1地点見られる。この末尾のリについては，281図「こんばん(今晩)」に現われる，ヨサリ，ヨオサリなどのリとつながりがあろうか。分布地域にも連続性が考えられる。ASITE は宮崎にまとまりを持つほか，福岡南部にも1地点ある。この末尾のテは何らかの連母音から変化したものとも考えることができ，九州各地に分布し，福井にも1地点見られる ASITAA，ASICYAA などの末尾の音とのつながりを考えることもできる。ACCYA から NAACYA まではすべて琉球列島に分布し，琉球列島にはこれら以外の語形は分布しない。ACCYA から ASA までは，いずれもアシタから変化した語形と考えられ，NAACYA はさらに変化したものであろう。ただし，ASA は，「朝」そのものかもしれない。

ASUNOHI から AKENOHI までは，近畿・中国に計5地点見られるのみである。このほか，ミョオニチ，ミョオジツという語形がわずか見られたが，文章語的なものと考えて，地図上からは削除した。なお ASU，ASITA ともに＜共通語的＞＜上品＞＜希＞などの注のあるものがあったが，＜併用処理＞は行わなかった。

分布を概観すると，アシタはほぼ日本全域に分布するが，アスは青森を除いて考えると国の中央部にまとまりをもって分布すると言うことができよう。青森のものを海上からの輸入と考え，単純な周圏論をあてはめると，アスは新しい広がりで，アシタは古くから全国に分布していたということになろう。しかし，アスの分布には占有地域が少なく，アシタの広い分布領域に比べて，その存在の基盤はやや薄いと言うことができ，単純な2型の平面的闘争を想定することは危険である。両者間の意味的，文体的関連の推移が問題となる。両型が AS～ を共有する点にも注意しなければならない。なお，283図「あしたのばん」の「あした」部分も関連して考えるべき材料である。

アス，アシタについて＜標準語的＞という注のあるものの分布を見ると，アシタを＜上品，新，希＞とするものが紀伊半島南部に6地点，愛媛北部に4地点あるほかは，関東から中部地方にかけての地域，中国東半，四国などにはアスを標準語的とする注が圧倒的である。さきの分布からの推定とからませれば，アスを新しい広がりと考える根拠のひとつとなろうか。

283. あしたのばん(明晩)

この項目は後期調査計画で調査を打ち切ったため，地点数が少ない。

この図に現われる語形のほとんどは，「あした」にあたる部分と「ばん」にあたる部分から成り立ち，多くは中間に助詞の「の」にあたる語形を介して結合している。したがって，作図にあたっては「あした」にあたる部分の類別を色をもって示し，「ばん」にあたる部分の類別を符号の形の別をもって示した。この前後両部分については，それぞれ282図「あした」，281図「こんばん」，277図「おとといのばん」の各図も参照されたい。前部分は大別してアス～類とアシタ～類との2類に分けられる。アス～類には緑を与え，アシタ～類には紺を与えた。後部分については，281図の「こんばん」に現われるものと，符号の形をなるべく似せて示した。

緑で示したアス～類の分布と，282図「あした」に現われるアス類の分布とを比べると，東北南部から中国・四国にかけての地域および北海道では，各地点については多少の出入りは認められるものの，分布密度から見て両図はおおむね似通っていると言うことができよう。また，琉球も，アス類の分布が見られないという点では両図共通している。それに対して，岩手，宮城北半，および，九州全土について見ると，282図「あした」ではアシタ類が分布するのに対して，この図ではアス～が占有領域とも言える広い領域を持って分布している点が特徴的である。282図「あした」では，いちおうアシタよりアスの方が新しいのではないかという解釈を試みたが，この図では逆に，むしろ，アシタの方がアスよりも内側に分布し，アスよりも新しそうに見える。ただ，琉球は全域アシタ類であると思われることがこの解釈の難点となろう。本図のアス～，アシタ～はともに複合語形の一部分であって，282図の単独語形の場合とは多少事情が違うということもあろう。

アス～の諸語形の分布について282図「あした」のアス類のものとの異同を見ると，細部にわたってはそれぞれ相違が見られる。ASI～ は青森に広く見られる点では

共通しているが，その他の孤立的なものについては必ずしも同じではない。AHI～は九州南部に強固な領域を占めている。AI～は鹿児島に計3地点見られる。ともに，緑の類としては，282図に現われないものである。

アシタ～類は紺で示したが，その分布領域についての282図との異同は，当然のことながら，先のアス～類の場合と相補的な況状を呈している。すなわち，岩手，宮城北半および，九州全域における分布が282図に比べて大幅に後退し，アス～類にとってかわられている。その他の地域については，アス類においては両図の間で多少のちがいが見られたのに対して，この類の分布は，むしろ両図で似ていると言うことができよう。アシタ～類のうちおもな語形はASITA～である。これ以外の諸語形について282図「あした」のアシタ類の分布とを比べると，それぞれにわずかな出入りのあることが分かる。

後部分の各語類のうち，～バン類以外のものは，281図「こんばん」に現われる当該語類と符号の形を似せた。～バンについては形を似せることはできなかった。この図の～バンは，281図でコンバンという形をとって現われるバンと比べて，その分布領域が大いに異なる点が注目される。281図では，それほど広い占有領域を持たず，とくに中国西部以西から九州にかけては，ほとんど分布しなかったのに比べて，この図では東北南半以南，琉球を除く全土に広い領域をもって分布している。281図で広い領域を占める語形はコンヤであるが，本図では～ヤを伴った語は現われない。「晩」と「夜(や)」との意味の分担の違い，あるいは造語力の相違に起因するのであろう。～バンゲ類は円形符号で示した。北海道にやや少ないほかは，281図のバンゲ類と分布はほぼ重なると言えよう。ヨサリ，ヨサなど，282図で赤を与えた類には，本図では三角形符号を与えた。北陸から中部西縁，近畿周辺部，中国中部，四国東部にややまとまった分布を示し，宮崎，長崎にも1地点ずつ見られる。281図の分布と比べてやや領域が狭くなっていることと，領域に多少のずれが見られることに注目したい。とくに281図では，鳥取・兵庫・岡山にかけての地域と大分に，このヨサリ，ヨサが見られない点が目立つ。これらのヨサリ，ヨサ類については，281図の解説にふれた部分があるので参照されたい。281図では，「ゆうべ」にあたる語形を含むコイベ，コヨベなどが中国西部に現われたが，本図では，八丈に2地点現われるほかは，道南の単独語形YUUBE1地点以外全く見られない。琉球では，281図とほぼ似た分布が見られる。すなわち，奄美を中心としたYOONÍ, YOONEなどの類，沖縄本島を中心とした「よる」にあたるYURU類，先島に多い～YUU類などである。281図ではヨサリの類の語が数地点見られたが，本図には現われない。

MYOOBANはやや文章語的な表現かとも思われるが，分布を見ると，関東，近畿西部から四国北部にかけてなど，地域性も見られる。AKURUBANからAKECYENBANまでは，造語法の上で共通するものである。三重に2地点，広島西端，宮崎にそれぞれ1地点ずつ見られる。ASATTENOBANは5697.86，6552.71に見られる。5697.86については単純な誤りではないらしいことを281図の解説でふれた。6552.71については，他図を見ると，277図「おとといのばん」がサキオトツイノバン，279図「さくばん」がサクバン，281図「こんばん」がコンバンとなっている。語彙構成上何らかの混乱が生じたものであろうか。ASUは7450.20，YUUBEは2741.46，YUUSARIは5597.78，SAKUBANは7324.24に各1地点見られる。現実に合わない回答のようだが，単純な誤解とする根拠もないので，いちおう採っておいた。

284. あさって(明後日)

この項目は後期調査計画での調査を打ち切ったため地点数が少ない。

この図に現われる語形は，ごく一部のものを除いてはすべてアサッテおよびその変種と考えられ，語形の上の変種が少ない。地理的にも分布がきわめて単純である点が特徴である。したがって，作図にあたっては音声の面を比較的詳しく示した。

全国に圧倒的な領域を占めるASATTEも，琉球列島には奄美に1地点見られるのみである。ASʏATTEはサにわずかな口蓋化の見られるもので，大分に2地点ある。ASATTʏE，ASACCYEはともに九州に分布する。末尾の口蓋化の程度を2段階に分けて示してみた。長崎，鹿児島に1地点ずつ見られるASACCIとつながりのあるものであろう。このASACCIは，さらに琉球に分布する諸語形ともつながりが考えられよう。ASATTI，AHATTI以下ACYANAACYAAまでの諸語形のうち，ASATE，ASATTAを除いては，全部琉球列島に分布するものである。ASATEは奄美

大島にも数地点見られるが，青森に広い領域を持ち，秋田，佐渡，三重，和歌山にも各1地点見られる。ASATTA は，群馬に3地点，埼玉，兵庫にそれぞれ1地点ずつ見られるものである。琉球に見られるもののうち宮古島の ASCI とあらわした語形は，〔～s～〕に持続の表記が認められるもので，シの母音の無声化したものとも考えられよう。ASITI と同類のものであろう。八重山の AHTU も母音のひびきのない〔～h～〕のみが表記されていた。近くの ASITU，ASUTU と同類のものと認めてここに置いた。ACYANAACYAA は「あしたのあした」という意味であろう。SIASATTE は神奈川に1地点ある。調査者の注によれば，言い誤りではなさそうである。なお，同地点の285図「しあさって(明明後日)」に対する回答は無回答となっている。被調査者の思い違いとも考えられるが，いちおうここに載せておく。無回答は埼玉北部に1地点あった。

285. しあさって(明明後日)

286. やのあさって(明明明後日)

両図に現われる語形には共通する点が多いので，両図合わせて解説することにした。

作図にあたっては，語形の分類，および，見出し語形の立てかたの基準を同一にした。符号の与え方も両図同じ観点に立って，両図共通の語形には同じ符号を与え，ひとつの符号が両図で異なる語形を示すことのないよう配慮した。

285図「しあさって」に現われる語形は，琉球に分布する一群の表現を除いては，そのほとんどが，284図「あさって」に現われる語形であるアサッテ類の語の前部に種々の接頭要素を付けて，造語されたのである。作図にあたっては，それら前部要素の区別を，色の別をもって示した。すなわち，シアサッテ，サアサッテなどシ～，サ～およびそれに類する要素を持つ類を赤で示し，ヤノアサッテ，ヤナサッテなど，ヤ～を持つ類を空で示した。その他の前部要素を持つものおよび琉球に見られる一群のものは，紺で示した。

赤で示したもののうち，まず SIASATTEから HINOASATTE までを，大きく一類と考えた。すなわち，以下説明する SIASATTE などの類，ヒアサッテ類，シガサッテ類，その他をまとめてシアサッテの類とし，線形および中ぬきの符号を与えた。SIASATTE から SIOOASATTE までは，その下位の1類とすることができる。SI～，SE～，SU～ などは，上記中ぬき符号を与えた大きな類の中での中心的な位置を占めるものと言うことができよう。線形の符号を与えておいた。この接頭要素は，「し(四)」に由来する，あるいはそれの変化したものと考えられていよう。これらは，北陸・近畿以西に広く分布するほか，中部地方にも散在する。東日本にも点々と見られ，東京中心部，神奈川海岸部，関東西縁の山沿いなどには，小さいながら領域が見られる。これらのうち，第2音節に半母音が現われるものは，横向きの符号で示した。SIASATTʸE から SIASACCI までおよび HIASATTʸE は，末尾に口蓋化の見られるものである。九州東半に点々と見られるこの現象は，284図「あさって」にも見られる。SIIASATTE は，北陸に5地点見られる。SEASATTE，SYEASATTE，SEEASATTE，は，北陸および島根東部に見られる。SYASATTE から SYAAASATTE までは，岐阜，山陰に領域を持ち，岩手南部，大阪，岡山・広島の境界付近，大分にも見られる。これらは，後に述べるサ(ア)サッテの類の語頭子音が口蓋化したものとも考えられるものである。とくに岐阜のものは，南北両隣にサ(ア)サッテ類が分布し，サ(ア)サッテとの近さを示している。しかし，この地方では「サ」が「シャ」になる現象がかならずしも一般的でないことを考慮して，ここではシアサッテの語頭連母音が変化して生じたものと考えシアサッテの類に入れておいた。ただし，大阪，中国中部の SYASYATTE，SYAASYATTE は，ササッテに入れるべきものだったかもしれない。SIWASATTE は，青森，富山・岐阜，愛知，広島，福岡，長崎に計20地点見られる。SUASATTE，SUUASATTE，SUWASATTE は，岩手・宮城・福島，富山・石川・福井，大分北部に見られる。SYOWASATTE は岐阜に，SIOOASATTE は淡路にそれぞれ見られる。これら SIWASATTE から SIOOASATTE までは，第1拍から第2拍にかけてのわたり音に〔w〕が現われるもの，ないしは，その変種として一類をなすと考えられよう。HIASATTE から HIIASATTE までは，北海道，岩手・宮城，埼玉，隠岐，岡山，大分・熊本に計9地点見られる。この語頭のヒ～は，いちおうシアサッテのシ～が変化したものと考えられるが，一方，「曾孫」を意味するヒマゴ，ヒコ(マゴ)，や「曾祖父」を意味するヒ(イ)ジイサン等に現われる接頭要素のヒ(イ)～との関

連も考えることができよう（第3集139図「ひまご」以下も参照）。SIGASATTE から HIGAASATTE までは，中部地方南部に領域を持ち，伊豆半島先端，岐阜北部にも飛地が見られる。シアサッテの語頭連母音の間に一種のわたり音として，軟口蓋摩擦音が加わったといちおう考えられようが(276図「おととい」の OTOTOGI と比較せよ)，連体格用法の格助詞「が」にあたるものではないかということも，考えておかねばなるまい。～G～は，長野南部，静岡のものはおおむね鼻音であるが，愛知全域および，6622.69, 6632.15, 6665.01, 6665.25 では非鼻音であった。SINOASATTE から HINOASATTE までは，長野中部に6地点，山形南部に1地点見られるものである。いずれも，接頭要素シ～とアサッテとの間に助詞の「の」にあたる語形が加わったものと考えられようか。

SAASATTE から SONOASATTE までを，上記のシアサッテ類と対立せさて，接頭要素にサ～を持つ点に注目し，サ(ア)サッテの類としてまとめることができよう。三角形およびそれに類似した形のべた符号を与えた。うち，三角形符号で示した SAASATTE から SASATE までは，北陸から中部・三重と一連の分布を示し，そのほか北海道，岩手，福島，岡山・広島・島根・山口，鹿児島にも点在する。SSASATTE としたものは富山に2地点見られる。語頭の〔s〕に持続が見られるとの表記があったものである。SAGAASATTE は長野西南部に1地点見られる。それ以南に分布するシガサッテと関連するものであろう。これら接頭要素サ～は，275図「さきおととい」で緑を与えたサオトトイ類のサ～などと関連があると考えられ，「さらいねん」「さらいしゅう」などの「さ～」とも関連しよう。これら「さらいねん」などの「さ～」は「さい(再)」の変化という解釈もあろうが，「さをととし」が『竹取物語』に見られ，「さをととひ」は『名語記』に見られ，サ～という要素が和語と結び付く例は，かなり古くからあったようである。一方，シアサッテのシ～が語源的にはどうであれ，「四」と受けとられたと仮定すると，このサ～を「三」とする民間語源が生じることも考えられる。SAN'ASATTE から SAANSATTE までが，その語源説にもとづく表現と考えられる類である。八丈に5地点分布するほか，岩手，長野，福岡に各1地点見られる。福島西部の SANOASATTE の～NO～は助詞かもしれない。SONOASATTE は静岡に1地点あるが，この SONO～については連体詞にあたるものか，サノアサッテの変化したものか決めがたいが，いちおうここに置いた。

SIRASATTE から SARAASATTE までは，第2音節子音に～R～を持つ点で共通するもので，中国中央部，九州西部に領域を持ち，秋田，能登，九州南半にも点在する。うち，SARASATTE, SARAASATTE は，秋田に見られる。SASIASATTE, SIASASATTE は，高知と岐阜に見られる。この2つは造語の発想からみて，286図に現われそうな語形である。まさに，これらの現われる地点の286図での回答は，「無回答」となっている。

空で示したものは，赤で示したものと対立して，全体としてヤノアサッテ類としてひとつの類にまとめることができよう。新潟，長野北半，山梨，静岡東半以東の東日本に広い領域を持つ。ヤノアサッテ，ヤナアサッテ，ヤナサッテが中心的な語形である。ヤナサッテが青森，東北南部から関東東半にかけてやや多いほかは，混然とした分布を示している。YANEASATTE から YANAÎASATTE までは，空類の領域の西縁に分布し，とくに長野北部，山梨，静岡東部にまとまりが見られる。YANNOASATTE は岩手北部に1地点，ZYANOASATTE は宮城に2地点それぞれ見られる。YANAASATTA は群馬に2地点見られる。この地域には，284図「あさって」でも ASATTA が見られた。YAGIASATTE は6634.32に1地点見られる。鼻音の～G～を持つもので，シガサッテなどの～G～と関連するものであろうか。ZYANASATTE は山形東部に1地点，YANASUTTE は伊豆三宅島に1地点それぞれ見られる。YANOSATTE は宮城東北部に1地点，YAASATTE は山形西端に1地点，YONOASATTE は伊豆新島に1地点それぞれ見られる。このYO～は「四」あるいは「余」と意識されているかもしれないが，いちおうここに置いた。

紺で示したもののうち，RAIASATTE から RANOASATTE までは，秋田・山形にそれぞれ1地点ずつ見られる。これらの接頭要素は「らい(来)」に由来するものであろう。SAKIASATTE, SAKIASATE は，北海道・青森，愛知・三重，鳥取・島根，福岡，長崎，種子に計11地点ある。GOASATTE, GOYASATTE は岐阜，広島に各1地点ずつ見られる。この2語形は286図に多く現われる語形である。MYOOASATTE は新潟に1地点、MATAASATTE は石川南部に1地点それぞれ見られる。ASUASATTE は宮城南部に1地点あ

る。一見アスとアサッテの複合形のようにみえるが，すぐ北隣には SUASATTE があり，SIASATTE も近くに2地点見られるので，それらとの関連も考えられよう。ASATTE は，6439.61，6615.09，7304.26，7391.01 に，ASATE は，2771.83，2783.06，2792.40 にそれぞれ見られる。これらの地点は，284図「あさって」で何と言うかは不明である。286図「やのあさって」では，青森の3地点がヤノアサッテ類の語，山梨，兵庫，山口の各地点がシアサッテ，熊本がゴアサッテとなっている。

YUKKA 以下 NAAASATI まではすべて琉球に分布する語形である。奄美に SIASATTE が1地点見られるほかは，琉球にはこれらの語形しか分布しない。これらのうち，YUKKA から ATUYUUKA までは「4日」「きょうから4日」など「4日」という表現を持つものであり，ASATTINUNAACYA 以下は，「あさっての翌日」という表現にもとづくものである。NMYAMIIKA は宮古にある。MIIKA は「3日」であって他のものより1日少ないが，286図ではこの地点は NMYAYUUKA となっているのでつじつまは合っている。「その他」としたものは，「あさってのつぎの日」など，1語とは認めがたい表現が多かった。

つぎに，286図「やのあさって」について述べよう。この図に現われる諸語形は，7色を与えて区別した。空と赤で示したものは，285図「しあさって」にその色で示したものと同じかあるいは類似したものである。空，赤両類をもとに2次的に造語されたもの，および，285図の語形と直接の関係のみられないものを，その他の5色で類別して示した。

空で示したヤノアサッテの類は，285図と比べて語形の変種も少なく，広い占有領域も持たないが，東京中央部にまとまって5地点見られ，注目すべきである。そのほか，北海道に計11地点，青森，宮城南部，新潟西部，群馬，神奈川，長野，岐阜北部，伊豆半島南端，大阪に，計16地点見られる。うち，YARASATE は青森に1地点ある。この表現はこの図にのみ見られるもので，第2音節は他のものと異なるが，空の類の変種とみなして，ここに置いた。

赤で示したシアサッテ，サ(ア)サッテなどの類は，285図のものと比較して，その分布領域が大きく異なる。「しあさって」の図では，もっぱら西日本に分布しているのに対して，本図では関東から東北南部にかけて広い領域を持つ点が注目される。そのほか，道南，東北北部，三重，愛知南部にも小領域を持ち，東日本のその他の地域にも小領域を持ちつつ点々と分布する。東京中央部が欠けていることにも注目すべきであろう。中部地方以西では，とりたてた分布は見られないが，各地に孤立的に点々と現われている。関東を中心に広く分布するものはおおむね，シアサッテであるが，東北地方に現われるものは，サアサッテ，サナサッテ，サラサッテなど，語形の変種が多い。赤のべた符号を追って見てほしい。

紺で示した YANOYANOASATTE から SIIYANASATTE までは，空のヤノアサッテ類の各語形の前に，種々の限定要素を付加した2次的造語によって造られたと考えられる語をまとめたものである。ヤノアサッテに，さらにヤノ～を加えたと考えられるものが，YANOYANOASATTE, YANAYANOASATTE, YANAYANASATTE である。宮城に広く分布し，岩手にも数地点見られる。YAYANOASATTE, YAYANAASATTE, YAYANOSATTE, YAYANASATTE は，ヤノアサッテにヤ～を付加したものと考えられ，岩手にのみ分布する。SARAYANOASATTE から SARAYANASATTE までは，もっぱら秋田に分布し，山形北部にも2地点見られる。この接頭部分サラ～は，「更」(あるいは「再来」)などと関連するものと考えられるが，同地域に分布する赤で示したサラサッテのサラ～と共通する点に興味が持たれる。そのほか，SAKIYANASATTE, HIYANASATTE, SIIYANASATTE は，秋田，新潟にそれぞれ見られる。これら一類としてくくったものは，全体的には東北地方に領域を持ち，福島・関東一円にかけて分布する赤の類と相補いつつ，285図で一面に分布する空の領域を埋めている点に注目すべきであろう。

草で示した3語形は，ヤノアサッテのヤ～を「八」と解した結果，その次の日にはヤ～の代りに「九」にあたるココノ～をあてて造語したと考えられるものである。青森東部から岩手北部にかけての小領域，および，山形の小領域に分布する。

緑で示したものはもっぱら青森に分布し，道南にも2地点見られる。これらの前部分の由来はよく分からない。また，どれを代表的な形とするかも不明である。この地域の KI が[k^{s}i]のような音であることから，SI との関連も考えられるが，第1音節 KI～，KU～などが，ヤノアサッテのヤ～を草と同様「八」と解したとみて「く(九)」にあたる可能性はないだろうかと考えて，草の類

のそばに置いてみた。

橙および茶で示したものは，その各語形を造語するときの発想のもとにシアサッテなどの赤類の語が介在すると考えられる類である。

橙のものは，ヤノアサッテとヤノヤノアサッテの関係のように，シアサッテの前に種々の限定要素を付加して2次的に造語した語形である。SASIASATTEは高知に領域を持つ語形である。GOSIASATTEは福井南部に1地点，GOSYASYATTEは島根東部に1地点それぞれ見られる。YOKUSIASATTʏEは長崎島原に1地点見られる。SISASATTEからCUGINOSASATTEまでの各語形は，ササッテが基になっているもので，いずれにも，三角形の符号を与え，赤のサ(ア)サッテ類との関連が見られるようにした。福井・岐阜・三重にある領域を持ち，九州南部の種子・屋久にも見られる。これらの地域は，285図でいずれもサ(ア)サッテの現われる地域である。SASARASATTEは秋田に1地点見られる。赤のサラサッテと関連するものと考えられる。HIGASATTEASITAは愛知に1地点ある。その他の橙類のものと異なり，～アシタという限定要素が後に付いているが，赤のヒガサッテから2次的に造語されたものなので，いちおうここに置いた。

橙の類が，赤の類の各語形にさらに何かを付加して造語されたものであるのに対して，茶で示したものは，赤のシアサッテのシ～を「四」と解した結果，その翌日を「五」と考え，たとえば，シアサッテに対してゴアサッテ，シガサッテに対してゴガサッテ，シラサッテに対してゴラサッテという具合に，シ～をゴ～と入れかえて造ったと考えられる語形を集めた類である。なお，このゴ～は「ご(後)」という語源意識も働いたのではないかということも指摘しておこう。茶の類の分布領域は，285図の赤類の占有領域にほぼ重なり，語頭部分のゴ～以外の各要素の特徴の地理的分布も，赤類のそれぞれ該当するものの分布にほぼ重なるといえよう。ゴアサッテと同じ発想で，赤類のサ(ア)サッテ(「三」)から造られる語はシサッテ(「四」)である。三重に4地点見られるSISATTEがこれにあたるものである。道南のSAKIASATTEと愛媛のCUGIASATTEとは，シアサッテのシ～に対して，ゴ～以外のものを入れたと考えたものである。茶の類が赤の延長とみられるのとは多少性格が異なるので，紺を与え茶のばに置いた。

ICIKA以下ASATINUNAACYANUSACIまでは，すべて琉球に見られるものである。ICIKAからATUICIKAまでの各語形は，「いつか(五日)」にあたる表現を含むもので，NMYAYUUKAからYONNAACYAAまでは，「4日」という発想を持つ表現であろう。AHATTINUNAACYANUNAACYA以下は「あさっての翌日の翌日」という表現である。

「その他」としたものの中には，「しあさってのつぎのひ」にあたる表現のもが多く含まれる。一語として機能していない文的表現と考え，見出しにはたてなかった。なお，先に述べた琉球の「あさっての翌日の翌日」にあたる一連のものも同様の性格をもつが，分布領域を持つ点を考慮して，特に別見出しとした。

「無回答」が非常に多いのも286図の特徴である。東日本には地域性が見られるのに対して，西日本のゴアサッテ類の領域内では全体的に密度が高いということがいえよう。ゴアサッテ類の表現がしっかりと定着していないことを示すものであろう。逆に無回答の少ない地域を見ると，それぞれしかるべき表現が小さいながらも領域を持って分布している。

285図，286図の両図を総合して，「しあさって」「やのあさって」の2つの意味にまつわるさまざまな問題を論じ尽くすのは容易なことではなく，各地点についての対比の詳細については，原カード，あるいは『日本言語地図資料』を参照する必要がある。ここでは，その概略について述べておこう。

「しあさって」――「やのあさって」をどう言いわけているかを全国的に見ると，東北北部のヤノアサッテ―～ヤノアサッテ（ヤノヤノアサッテなどの紺の類，ココノサッテなどヤノアサッテを基に造られた各類の表現），東北南部から関東にかけてのヤノアサッテ――シアサッテ，あるいはヤノアサッテ――サ(ア)サッテ，さらに秋田北部のヤノアサッテ――サラサッテなどがとり出されようか。新潟には，ヤノアサッテ――無回答が目立つ。東京およびその周辺に点在するシアサッテ――ヤノアサッテ，あるいは，シアサッテ――無回答は注目すべきであろう。さらに，西日本一帯のシアサッテ――ゴアサッテ，および，286図で橙となっている，シアサッテ――～シアサッテ(サシアサッテ，シアササッテなど)，三重，種子・屋久などのサ(ア)サッテ――シアサッテなどが抽出されよう。八丈のサンナサッテ――シアサッテも注目される。なお琉球はヨッカ――イツカという表現

に基づくもの，およびアサッテノアシタ——アサッテノアシタノアシタという表現が多くを占めている。

東京のシアサッテ——ヤノアサッテについては，ふつう，「しあさって」を意味する上方のシアサッテが侵入して，すでにあったヤノアサッテと衝突した結果，ヤノアサッテは「やのあさって」の意味に追いやられ，その衝突を解消して新しい組み合わせが生じたと考えられている。その周辺に分布するシアサッテ——無回答も，同様の経過をたどり，この場合は，ヤノアサッテが消え去ったものと考えられよう。長野中央部のものなどについても同様に考えることは可能であろう。しかし，関東一円に広く分布する，ヤノアサッテ——シアサッテのシアサッテの由来は何であろうか。「しあさって」の意味で西日本に広く分布するシアサッテと無関係ではないと考えられるにしても，それが，どこで，どのようにして「やのあさって」の意味になり，このような広い領域を持つに至ったのであろうか。中部地方を経て西から地をはうように侵入したと考えると（侵入はしたものの在来のヤノアサッテが強固なために位置がずれて受け入れられた），その地域に285図で広く分布するシガサッテがほとんど入っていないことが説明しにくい。やはり，上方の中心的語形であるシアサッテがシガサッテ領域を飛び越えて，関東中央に侵入し，それが四方へ広がったと考える方が自然ではなかろうか。そして，侵入したシアサッテは，ヤノアサッテと衝突した結果，江戸では，その後のシアサッテの補給もあってヤノアサッテを「やのあさって」の位置に追いやったが，その周辺地域では，ヤノアサッテの力に勝てず，その翌日の意味に変化したという考え方である。しかし，この考え方も，中央でヤノアサッテを「追いやった」シアサッテより，どちらかと言えばヤノアサッテに「はじき返された」感じのするシアサッテの方が強い力で四方へ広がっている点，満足のいかない点がある。また，そのシアサッテに連続して関東北縁から福島に分布するサ(ア)サッテの説明もできない。

287. なのか(七日)

後期調査で新しく加えた項目なので，調査地点がすくない。なお，288図「ここのか(九日)」と対比してほしい。

糸魚川浜名湖線を境として，以東が，NANOKAなどの赤符号の類，以西が，例外はあるが，NANUKAなどの緑の類と大別できよう。例外としては，中国地方にNANOKAがかなりあり，北陸と九州(琉球を含む)にNANKAが見られ，北陸，島根，九州にNANIKA，広島，種子島にNANAKAが見られる。東日本では北海道と千葉にNANUKAが多いこと（後者にはNANKAもある），八丈島がすべてNANUKAであることなどが注意される。別に，沖縄本島を中心としてSICINICIが見られる。『沖縄語辞典』によれば，çiitaci(月の第一日)，hwiQcii, ʔicinici(一日)；huçika(二日)；saNnici(月の第三日)，mica(三日〔文〕)，miQca，miQka(三日)；juQka(四日)；gunici(五日)；rukunici，dukunici(六日)；sicinici(七日)；hacinici(八日)；kunici(九日)；tuka(十日)；haçika(二十日)となっている。なお，naNkaは七日ごとの法事(例：haçinaNka—初七日)をさすという。同辞典には，別に正月七日の節供をさすnaNkanusikuという語も載っている。参考までに『八重山語彙』による日数表現を示せば，tsïkïtatsï(月の第一日)，pïtui，itsïnïtsï(一日)，futsïka(二日)，sannitsï，mï:ka(三日)，ju:ka(四日)，itsïka(五日)，muika(六日)，nanuka，naŋka(七日)，jauka(八日)，kukunuka(九日)，tukka(十日)，ninzju:nitsï，patsïka(二十日)。

以下，凡例の順にしたがって見出しを見ていこう。

NANOKAの中には，〔nanǫka〕(新潟に6地点と福島の4678.77)も含まれている。

NANOGAの中には，〔nanǫ̨ka〕も含まれている。そのうち4628.28のものは〔nanǫ̨ka〕であった。

NANOG〔ŋ〕Aは，3736.03のみ。

NONOKAは5594.02のみ。

NANKAは，すでに述べたように北陸，九州，琉球に多いが，千葉南端にもある。

NANKAAは1211.69と1241.96の2地点。

NANGAは，2076.99と2095.60の2地点。

NANUKAの中には，6613.97の〔nanɯ̟ka〕が含まれている。

NANUKAAは，1221.47のみ。

NANYUKAは，8248.18のみ。

NANUKWAは，3619.08のみ。〔nanɯkʷa〕とある。288図にも現われる。

NANUGAは，0873.94*，2731.97，2774.59*，3717.90*，3776.97であるが，*印のものは〔nanuǩa〕である。

NAMUKAは，6349.09，6423.23，7302.71，7313.34，7322.17の5地点。山陰から北九州にかけて点在する，

ということになろうか。

NANIKA は，すでに述べたように，北陸，島根にややまとまって見られるほか，九州に3地点ある。このうち 6421.79 のものは〔nanïka〕であった。

NANAKA は，広島，種子島の，計5地点である。288 図の KOKONAKA などとは，地点が違う。

SICINICI は，沖縄島およびその周辺だけに見られるものであるが，むしろ〔çitʃiɲitʃi〕のほうが多く，〔ʃitʃiɲitʃi〕は，1148.59, 1231.72, 1232.29, 1261.01, 1261.80, 1270.29 にすぎない。

文献の教える国語史では，ナヌカが古いようである。二日の場合フタカがフツカになるのと平行的な語形と思われる。

地理的分布からは，赤の類と緑の類のいずれが古いか，ただちにきめることはできない。赤の類は，東日本と中国地方とに領域がわかれている。そのほか，岐阜西部や奈良南部に，ややまとまりがある。一方，緑の類は，西日本に広い領域があるように見えるが，そのほか，千葉南部や八丈島にもまとまりがある。地域連続の法則をあてはめれば，近畿地方の緑の類は新しそうだとか，東海地方の赤の類は新しそうだとか言えるかもしれないが，全国的な流れの中での位置づけができない。この場合は語形の音変化であるから，原則の無条件的な適用ははばかられる。もっとも，緑の領域・赤の領域の広さから，両語形の歴史は，それぞれかなり深いものである，ぐらいは言えるかもしれない。

茶の類は，分布上から，緑の類との親近性を考えるべきもののように思われる。ただし，288 図の場合との比較も必要となる。そこでは，多少事情がことなるようである。

NANIKA も，分布上から，緑の類に近いものとみてよかろう。

NANAKA は，最も古いものの残存かとも思われるが，一方，民間語源による複元形（回帰形）かもしれない。

沖縄の SICINICI については，すでに触れたところであるが，分布から，この漢語系の表現は，和語系の表現より新しいものと考えられる。

ナヌカとナノカの併用地点での注記を見ると，ナヌカを＜方言的＞とするのが 4706.84，ナノカを＜古＞とするのが 4694.26，7533.12，ナヌカを＜多＞とするのが 4653.02，ナノカを＜多＞とするのが 5667.81 であった。別に，ナノカが＜日常語＞で，ナヌカは＜忌日を言うとき＞に使うとした 5676.84 もあった。注は以上の程度であったが，そのほか，3752.53, 3760.93, 3791.02, 4730.96 では，六日をムヨカ～ムヨガと言う，というものもあった。ちなみに，これらの地点では，七日をナノカ～ナノガと言う。また，八日をヤアカと言う，とした地点もある（ヤアカと言う地点については，288 図の説明末尾をも見よ）。5472.91, 6414.25 であるが，これも，いずれも，七日をナノカと言う地点である。

288. ここのか(九日)

後期調査で新しく加えた項目なので，調査地点がすくない。なお，287 図「なのか(七日)」と関連するので，対比されたい。もっとも，七日と九日とを比較すれば，日常生活では，七日のほうが九日より多く使用されるのかもしれない，ということはある。

全国的に広く赤符号を与えた表現が分布し，緑符号のものは，近畿周辺と四国，中国西部，九州に，茶符号のものは，千葉，新潟，三重にわずかに見られるほか，九州から奄美にかけて見られる，ということになろう。別に，七日の場合と平行して，漢語系の KUNICI の類が，沖縄島周辺に見られる。

凡例にしたがって，見出し順に見ていこう。

KOKONOKA の中には，4687.01 と 4695.33 に現われる〔kokonɷka〕を含む。

KOKONOKWA は，3619.08 のみ。〔kokonok^{w}a〕である。287 図にも KWA が現われた地点である。

KOKONOGA の中には，〔kokonoɣa〕も含まれている。

KOKONOG〔ŋ〕A は，4716.72 のみ。

KOGONOKA の中には，〔koɣonoka〕も含まれている。

KOGONOGA の中には，〔koɣonoɣa, kogonoɣa〕も含まれている。

KOKOMOKA は，7323.84 のみ。

HOKONOKA は，新潟の中部に見られる。

HUKONOKA は，6608.69 のみ。

KOKONKA は，九州以外では，6567.79, 6639.29, 6649.55, 0256.76 に見られるだけである。

KOGONKA は，8361.28 のみ。

HOKONKA は，5615.78 のみ。

KOKUNKA は，7350.96 のみ。

KONKA は，奄美のみ。

KUNKA は，0246.48 と 0275.36。

KOKONUKA の中には，6613.97 の〔kokonu＋ka〕も含まれている。

KUKUNUKA は，琉球先島に 7 地点。

KUKUNUGA は，2076.98 のみ。

KUG〔ŋ〕UNUGA は，2072.20 のみ。

KUHUNUKA は，1232.29 のみ。

KUNUHA は，2074.69 のみ。

KOKONAKA は，石川に 3 地点，滋賀に 1 地点。

KOGONAKA は，2771.22(津軽)のみ。

HAKONAAGA は，2095.60 のみ。〔xa̤kona:ga〕とあった。

UNOHO は，2085.69 のみ。

KUNICI は，沖縄島とその周辺。

KUNUCI は，1241.49 のみ。

KUNCI は，5678.33 のみ。

YOOKA は，鳥取，広島，香川に計 8 地点。

無回答は，1241.96 と 2076.99。

ココノカの語源は九(ココノ)日(カ)であろうが，文献による語史を『日本国語大辞典』によってみると，ココヌカが古く(『土佐日記』，『後撰集』)，ココノカが新しい(『天草本平家』)ようである。

地図の分布からは，京阪地方では，もと KOKONUKA であったが，後に KOKONOKA が勢力を持つようになった，と言えそうに思われる。KOKONUKA と KOKONOKA との関係は，たしかに音の違いに過ぎないが，近畿周辺の KOKONUKA がきれいなドーナツ状を呈していることから，これらが別々に発生したとか，その領域が密接な交通によって結ばれていたとかするより，古い残存と考えるほうが，いっそうありうることだと思えるからである。ただし，全国の緑の類と赤の類との関係を長い歴史的な展望のもとに位置づけることはむずかしい。つまり，東日本に広い赤の類と，近畿周辺を除く四国・中国・九州の緑の類，および同じ地方の赤の類の歴史については，なんとも言えない，ということである。北陸から東日本へかけての広大な赤の領域が，文献による語史よりさらに古い時代の状況の反映ではないか，と想像する程度である。287 図との関連もよくわからない。288 図の緑が，287 図の緑に影響されて発生したこともあったのではないか，と考えてみる程度である。

新潟中部の HOKONOKA, HOKONKA の類は，この地域の特性を示すのであろうか。

茶の類は，287 図と違って北陸および琉球先島になく，千葉のもの九州のものともに，赤の類にまじって現われる。奄美の KONKA, KUNKA(および緑で示した琉球先島の KUNUHA)は，KOKONKA (KUKUNUKA)の変種ではないかもしれない。

紺の符号を与えたもののうち，言及可能なものは，沖縄の KUNICI, KUNUCI と，YOOKA ぐらいである。KUNICI は，分布から見て，新しいものらしい。YOOKA は，なんらかの混乱によって生じた表現と思われる。YOOKA を含めて，特殊表現については，それぞれの地域の 1～10 日をあらわす全表現との関連で見ていく必要があろう。

注記では，ココノカ，ココヌカの併用地点で，ココノカを＜古＞とする 7533.12 や，ココヌカを＜多？＞とする 7432.95 があった程度であった。6522.03 と 6583.93 では，音声的なあいまいさがあるという。別に，8 日をヤアカと言うとした，5462.57, 5463.64, 5472.31 があった(ヤアカは，287 図の注記によれば，別に 5472.91, 6414.25 にもある)。

289. 「おおきい」(第 17 図)と「ふとい」(第 20 図)と「あらい」(第 21 図)との総合図

290. 「ちいさい」(第 22 図)と「ほそい」(第 24 図)と「こまかい」(第25図)との総合図

289 図と 290 図とは相互に関連する部分が大きいので，一括して説明する。最初に，作図の手順，原則について述べよう。

各総合図は各 3 枚の地図を重ね合わせたものであるが，それぞれの図に現われる語形をそのまま組み合わせると，その種類はかなりの数にのぼり，そのすべてを凡例に示すことは不可能である。そこで，それぞれの原図における見出し語形の一部をさらにまとめた上で，それらの組み合わせを示すことにした。しかし，それでもなお見出しの数が多いので，具体的語形はすべて数字に変

え，その排列によって組み合わせのパタンを示した。それぞれの数字の内容は，凡例後半の部分に掲げてある。たとえば，289図の凡例の冒頭にある1—1—1は，17図・20図・21図ともOOKIIであり，同図末尾見出しの47—15—20は，17図—無回答，20図—HUTOI，21図—ARAIであることを表わす。

以下，289図，290図のそれぞれについて，まとめた語形の範囲を示しておこう。数字は総合図凡例の見出し番号，数字に続く語形は総合図における見出し語形であり，＜　　＞内は，その見出しの下にまとめられた，原図における語形の種類である。なお，原図の語形をそのまま総合図でも踏襲したものについては，掲出を省略する。

289図

1. OOKII＜OOKII・OOKIKA・OOKITAI＞
4. OOKINAI＜OOKINAI・OOKINAKA＞
15. HUTOI＜HUTOI・HUTEE・HUTE・HUTÖE・HUTÖ・HUTOO・HUTOWI・HUTII・HUTI・HUTWII・HUCWII・HUCII・HUCI・HUCUU・HUTOOI・HUUTOI・HUUTEE・HUUTII・HUUTWII・HUUCII・HUTTOI・HUTTEE・HUTTE・HUTOKYA・HUTOKA HUTOGA・HUTTOKA・HUTTOGA＞
16. BUTOI＜BUTOI・BUTÖE・BUTTOI・BUTTEE
17. GOBUTOI＜GOBUTEE・GOBUTE＞
20. ARAI＜ARAI・AREE・ARE・AAREE・AARE・ARREE・ARAA・ARYAA・ARYA・ARII・ARAKYA・ARAKA・ARAKU・ARAGA＞
23. ARAPPOI＜ARAPOI・ARAPEE・ARAPPOI・ARAPPEE・ARAPPE・ARAPPII＞
27. DEKAI＜DEKAI・DEKOI＞
31. ZUNAI＜ZUNAI・ZUNNAI・ZYUNAI＞
32. MAGI-＜MAGI-・MAKI-・MAGE-・MANGE-・MAGA-＞

290図

1. CIISAI＜CIISAI・CISAI・CISSAI・CIISAKA・CISAKA＞
2. CICCYAI＜CICCYAI・CICYAI・CIICCYAI・CIICYAI・CINCYAI＞
7. CIKOI＜CIKUI・CIKOI＞
12. HOSOI＜HOSOI・HOSEE・HOSE・HOSYA・HOSII・HOSÖE・HOSÖ・HOSOWI・HOSOOI・HOSSOI・HOSSE・HOSSI・HOOSOI・HOOSEE・HOOSE・HOOSÖ・HOSOKA・HOSOKYA・HOSUKA＞
13. HOSOKOI＜HOSOKOI・HOSOKEE・HOSOKE・HOSOKKOI・HOSOKKEE・HOOSOKKEE＞
17. KOMAKAI＜KOMAKAI・KOMAKEE・KOMAKE・KOMAKAA・KOMAKKAI・KOMAKKEE・KOMAKKE・KOMAKKYAA・KONMAKAI・KONMAKKEE・KOMOKAI・KOMOKKE・KOMAKAKYA・KOMAKUI・KOMAKOI・KOMAKKOI・KONMAKOI＞
21. KOMAI＜KOMAI・KOMEE・KOME・KOMAA・KOMYAA・KOMYA・KOOMAI・KOOMEE・KONMAI・KONMEE・KONME・KONMYAA・KOMI・KEMAI・KOMAKA・KOMAAKA・KOMAGA・KONMAKA・KOMANKA・KOMENKA・KONMANKA＞
23. KOMANCII＜KOMANCII・KOMANCIKA＞
24. CIKKOMAI＜CIKKOMAI・CYOKKOMAI＞
27. CINMAI＜CINMAI・CYONMAI・CYONMAKA＞
29. KUMA-＜KUMA-・HUMA-＞
32. CIBII＜CIBII・CINBII・CINPII・CIPPII・CIBINKA＞
35. BETTAI＜BETTAI・BETTE・BETEE＞
36. BETAKOI＜BETAKOI・BETTAKOI＞
38. BAKKO(DA)＜BAKKO(DA)・BAKKO＞
42. KONCII＜KONCII・KONCYOKA＞
43. NUKOI＜NUKKOI・NUKOI・NOKII・NOKKOI・NIKOI・NOKKOCII・NEKKOKYA＞
53. KUU-＜KUU-・HUU-＞

なお，項目158（おおきい）および項目159（ちいさい）については，17図「おおきい」，22図「ちいさい」とは別に，一部の語類についての詳細図である18図，19図，23図があるため，17図と20図と21図，あるいは，22図と24図と25図とは語形のまとめかたが異なっている

ことに注意してほしい。このような事情もあるので，総合図では原図のどれよりも大まかな分類を行い，原図で分出してある見出し語形を総合図でまとめることはあっても，原図で同一見出し語形の下にまとめてある語形群の一部を総合図で分出することはしないという方針を採った。

以上の処理により，総合図における見出しの数をある程度減らすことができた。次に，原図に複数語形が併用として登載されている地点については，そのすべての組み合わせを地図に登載することは不可能な場合があった（たとえば項目①がＡＢ語形併用，②がＣＤ併用，③がＥＦ併用の場合，①②③の総合として，ＡＣＥ・ＡＣＦ・ＡＤＥ・ＡＤＦ・ＢＣＥ・ＢＣＦ・ＢＤＥ・ＢＤＦの８とおりの組み合わせがあり得る）。そこで，併用地点で＜新・上・共＞の注記のあるすべての語形，および，それぞれの項目で標準語形と認めたもの（項目158のOOKII, 159のCIISAI, 160のHUTOI, 161のHOSOI, 162のARAI, 163のKOMAKAI）に＜希＞の注記のある場合は，その語形をあらかじめ削除して総合図を作図した。つまり，原図でも上の標準語形について＜併用処理＞を行っているが，総合図では，この削除語形の範囲をさらに広げたことになる。さらに，それぞれの項目で，「非常に大きい（太い・粗い・小さい・細い・細かい）」のような強調・誇張表現と認められる注記のある語形も削除した（原図では原則として採用してある）。この種の注記のある語形は158（おおきい）の項目に多く，具体的には，DEKAI, DODEKAI, DOIKAI, ZUNAI, GOCCUIなどの語形に比較的多かった。なお，強調・誇張表現を削除したことによって，原図に見られる，DOIKAI(17図)，DOERAI(17図・20図)，KEKKE(17図)，TESIKOI(17図)，ZUBUTOI(20図)，DOBUTOI(20図)，CIPPIKUTAI(22図）の語形は総合図から消えた。そのほか，AKAI（17図）も総合図に登載していないが，これは6632.15で項目158（おおきい）の回答として〔akai〕と報告されたもので，調査票を調べたところ，これは〔ikai〕の誤記であることが判明した。この語形は他の地点には現われておらず，したがって，17図「おおきい」および19図「おおきい―デカイ・イカイ類の詳細図」におけるこの地点のAKAIをIKAIに訂正し，両図の凡例からAKAIの見出しを削除する。また，20図「ふとい」の凡例で，３行目の８番目にあるHUTOKAはOOKIKAの誤りである（符号はそのままでよい）。

なお，総合図作成の過程で，ほかにも原図の一部に分類などの誤りが発見されたが，総合図ではそれらを訂正した上で作図した。また，原図の作図にあたって，複数語形併用の地点について，＜併用処理＞以外にも注記などにより一定の方針で取捨が行われている場合があるが，原図に登載していない語形は，原則として総合図でもすべて削除してある。

原図の見出し語形の一部をまとめたこと，また，原図に登載してある語形の一部を削除したことによって，併用語形がかなり整理されたが，注記のない併用地点も多いので，依然として全語形（の組み合わせ）を登載することが困難な併用地点が残った。そこで，以上に記した処理を施した後も，なお複数の項目に併用が残る地点（１つの項目だけが併用の地点では，すべての組み合わせを登載した）については，さらに次に記す処理原則を適用して，併用のうちの一部の語形を無視して組み合わせを作り，無視した語形との組み合わせは「その他」として示すにとどめた（その場合，該当地点には逆向きのアークをつけた）。

① ある１項目だけに現われて他の項目にまたがらない標準語形（と認めたもの）は無視して組み合わせを作る（たとえば，158がOOKINAIとHUTOI, 160がHUTOI, 162がHUTOIとARAIの地点では，162のARAIを無視し，総合図ではHUTOI—HUTOI—HUTOIとOOKINAI—HUTOI—HUTOIの２者併用プラス「その他」とする）。

② （①の処理後もなお複数項目の併用が残る地点について）同一語形が２項目にまたがる時は，それを分割する組み合わせは総合図に登載しない（たとえば，158が語形A，160と162がAC併用の場合，ACAとAACの組み合わせは無視し，総合図では，AAAとACCの併用プラス「その他」とする）。また，どの語形も３項目にまたがっている時は，その語形を分割する組み合わせを総合図に登載しない（たとえば，３項目とも語形ABの併用の場合，AAB・ABB・BBA・BAA・ABA・BABの組み合わせを無視し，総合図では，AAAとBBBの併用プラス「その他」とする）。

なお，上の処理は地図のスペースに制約があるために止むを得ず行ったものであるが，全国的に見た場合，この処理を施したことによって分布の様相が大きく変化す

ることはないと判断される。特定地域における分布の詳細や，特定の組み合わせを採り上げて問題にするような場合，「その他」の符号(逆アーク)を登載してある地点については，それぞれの原図における該当地点の語形を確かめることによって，「その他」部分の具体的な組み合わせを知ることができる。なお，それぞれの地点の具体的な報告内容(語形・注記)を知るためには『日本言語地図資料』によらなければならない。

以上に述べたように，この総合図と原図とでは，語形のまとめかたやその採否に関する方針に違いがある。したがって，厳密には，これは表題に示した3図の総合図というより，158と160と162，あるいは159と161と163の3項目の総合図というべきかもしれない。しかし，すでに述べたように，原図における作図原理を全く無視したわけではなく，語形のまとめかた，語形の採否，さらに符号の与えかたについても，原図との関係をできるだけ考慮し，原図と総合図とを大まかには比較することが可能なよう配慮した。

次に，289図および290図で用いた符号の色・形について説明しよう。それぞれの図の凡例に示した見出しは構造的に，「3図が同語形のもの」「3図とも語形が異なるもの」「3図のうち2図が同語形のもの」の3種類に大別され，最後のものは，どの図に共通の語形が見られるかという観点から，さらに3つの種類に分けることができる。そこで，このような構造上の違いを色で区別し，「3図が同形」には赤，「3図とも異形」には紺を与え，その中間の構造のものには，橙・桃・草の淡色を与えた。また，同色の類の中での見出しの違いは，符号の形で区別したが，その場合，赤の類には，それぞれの語形に対して，原図のうちの大小関係の図(289図では17図，290図では22図)と同一あるいは同系の符号を与え，橙・桃草の類については2図に共通に現われる語形に対して，また，紺の類については，17図あるいは22図に現われる語形に対して，赤の類と同じ方針で符号を与えた。たとえば，289図における赤の1—1—1，橙の1—1—～，桃の1—～—1，草の～—1—1，紺の1—～—～には，17図「おおきい」における OOKII と同一ないし同系の符号を用いてある。

なお，赤の類におけるそれぞれの見出し語形の一部が標準語と入れ替わった構造を有する他の色の類の見出しに対しては，符号の形および方向を赤の類の当該見出し符号と一致させた。たとえば，赤の類の2—2—2 (OOKINA—OOKINA—OOKINA)，橙の類の2—2—20(OOKINA—OOKINA—ARAI)，桃の類の2—15—2 (OOKINA—HUTOI—OOKINA)，草の類の1—2—2 (OOKII—OOKINA—OOKINA)，紺の類の2—15—20(OOKINA—HUTOI—ARAI)には，同一の形・方向の符号を用いてある。

このような符号の与えかたをしたことによって，符号の色を無視し，その形のみに注目すると，289図は17図と，290図は22図と，分布の様相が比較的類似するという結果になった。言いかえれば，この総合図は17図あるいは22図を基本として，その背後にある各図との関連を構造的にとらえ，それを図示したものとみることもできよう。なお，一部の地域では，289図と17図，290図と22図との分布がかなり違って見えるが，これは，先に述べたように，総合図では原図における見出し語形の一部をさらにまとめたこと，また，原図と同一の語形についても総合図で符号の形を多少変更した場合があることなどに起因する。

さて，全国の分布を大観すると，289図，290図ともに最も目立つ地域差は，中国・四国を縦断する地帯を境界とする東西の対立であろう。すなわち，その地帯から西の地域は，琉球を含めて，ほぼ赤または橙の類で占められ，東側の地域では種々の類が混在する傾向が見えるものの，その中で紺の類が最も勢力をもつ。また，西側の地域のうち，中国・四国・九州から奄美大島にかけての地域では赤と橙とが混在しているが，徳之島以西の琉球各地は，一部の地点を除いて橙の類で占められている。ただし，両図をくらべれば289図よりも290図の方で赤の勢力が強く，九州や中国西部などでは両図の差がとくに大きい。東側の地域における赤および橙の類は，両図ともに，北陸から新潟，さらに山形の庄内にかけて比較的連続した領域を示している。桃の類は両図ともに主として紺の領域中に見られる。東日本では289図の方により多く分布するが，岡山から兵庫南部，鳥取東部にかけての地域などでは，290図の桃がとくに目立つ。草の類は290図では四国東部に集中し，静岡，島根，福岡などにややまとまりが見られるが，289図にはわずかしか見られない。

このように，色では区別した各類の分布は，部分的には両図にかなりの差が見られるものの，大局的には，その分布傾向に共通する面が大きいと言えよう。これは，大小，太細，粗密をめぐる語彙構造の歴史に関して，全

体を通じての傾向があることを意味するものと思われる。

次に，289図，290図のそれぞれについて，おもな見出しの分布を見よう。まず，289図から述べる。

赤の類のうち最も多いものはHUTOI—HUTOI—HUTOI(15—15—15)であって，おもに中国・四国の西半から九州全域にかけて集中し，橙のHUTOI—HUTOI—ARAI(15—15—20)と混在する。21図「あらい」を見ると，この地域はアライ類とフトイ類の併用の地点が多いが，その場合，アライを＜上品＞とか＜新しい＞とする注記が多い(21図の解説参照)。このことから，この地域におけるHUTOI—HUTOI—ARAIは比較的新しい勢力であり，一時代前にはHUTOI—HUTOI—HUTOIがより高い密度で分布していたものと思われる。つまり，HUTOI—HUTOI—HUTOIとHUTOI—HUTOI—ARAIの分布が錯綜していることは，この地域で「粗い」の特称がまだ十分に定着していないことを示すものであろう。これに対して，徳之島以西の琉球各地では，HUU～—HUU～—ARA～(13—13—26)—徳之島など—，MAGI～—MAGI～—ARA～(32—32—26)—沖縄本島など—，UPU～—UPU～—ARA～(11—11—26)—宮古など—，MAI～—MAI～—ARA～(33—33—26)—八重山—のように，アラ～の語形が「粗い」の特称として使われる地点が大部分を占める点に特徴がある。

赤および橙の類は東日本にも見られるが，分布の希薄な点からみて，そのすべてを古いものの残存とすることはできない。オオキイ・デカイなどが「太い」や「粗い」をも包みうる上位概念であるとすれば，OOKII—OOKII—OOKII(1—1—1)・DEKAI—DEKAI—DEKAI(27—27—27)などは，桃の類のOOKII—HUTOI—OOKII(1—15—1)・DEKAI—HUTOI—DEKAI(27—15—27)あるいは，紺の類のOOKII—HUTOI—ARAI(1—15—20)・DEKAI—HUTOI—ARAI(27—15—20)などの中に平行潜在し，それが偶発的に姿を現わした場合もありうるからである。しかし，北陸から庄内にかけて分布する赤および橙は比較的連続する領域をもっており，西日本における領域の分布と合わせみると，これらは近畿から伝播したものかもしれないと考えられる。

赤のOOKII—OOKII—OOKII(1—1—1)および橙のOOKII—OOKII—ARAI(1—1—20)のうち，中国，四国西部，九州北東のものはHUTOI—HUTOI—HUTOI，あるいはHUTOI—HUTOI—ARAIが分布するところにOOKIIが侵入して交替した結果生じた場合が多いと思われる。新潟北部，佐渡，山形西部付近のものも，同様の可能性がある。

中国地方における赤および橙の類には，ほかに，OOKINA—OOKINA—OOKINA(2—2—2)・OOKINA—OOKINA—ARAI(2—2—20)・IKAI—IKAI—IKAI(30—30—30)・IKAI—IKAI—ARAI(30—30—20)のように，OOKINAあるいはIKAIを含む構造のものが多い。これらも一時代前にはHUTOI—HUTOI—HUTOIであったものとみられる。17図「おおきい」の分布から判断すると，OOKINAを含む構造のものはOOKIIあるいはIKAIを含む構造のものよりも古そうである。イカイ類とオオキイ類との新古関係については，17図の分布から，西日本では前者が後者よりも古そうであるが，17図の解説でも述べているように，東西のイカイ類の中間地域には隣接する意味分野にイカイ類が潜在している可能性があり，それが一部の地域で「大きい」あるいは「太い」「粗い」の意味分野に浸出したものかもしれず，なお検討を要する。

17図の解説では，東日本ではデカイ・イカイ類がオオキイ類よりも新しい発生であると述べており，この考え方，および，東西の赤・橙の類がかつて連続していたという前提に従えば，北陸付近のDEKAI—DEKAI—DEKAI(27—27—27)・DEKAI—DEKAI—ARAI(27—27—20)は，OOKII—OOKII—OOKII(1—1—1)・OOKII—OOKII—ARAI(1—1—20)，あるいは，HUTOI—HUTOI—HUTOI(15—15—15)・HUTOI—HUTOI—ARAI(15—15—20)などが分布していたところにDEKAIが侵入した結果生じたことになろう。ただし，近畿から北陸，山形西部あるいは中国地方にかけての地域が，中国・四国の西部から琉球にかけての地域のように，かつて赤や橙の類に占有された時代があったかどうかについても疑問があり，あるいは，この地域では古くから種々の構造(色)のものが混在していたという見方も考慮すべきかと思われる。

中国・四国の東部から青森までの地域では，紺の類のほかに，OOKII—HUTOI—OOKII(1—15—1)・IKAI—HUTOI—IKAI(30—15—30)・DEKAI—HUTOI—DEKAI(27—15—27)など，桃の類の分布が目立つ。桃の類は近畿をとりまく形で分布する傾向がうか

がわれ，紺の類よりも古いことを思わせる。しかし，紺と桃とはその領域が分離していないから，両類は発生当初から共存しつつ東西に広がり，その後次第に近畿を中心に紺が勢力を増大した，すなわち，ARAI がもとは不安定な状態にあって，次第に「粗い」の特称としての性格を強めていったとみるべきかもしれない。

文献の上では，形容詞フトシが上代から見られるのに対して，形容詞オオキイが現われるのは室町時代以降のことであり，それが西日本における OOKII と HUTOI の分布に反映しているといちおう考えられるが，東日本における OOKII がすべて近畿から伝播したものとすれば，その伝播速度はかなり速かったことになる。オオキイが比較的新しい語形であるとすれば，それ以前に，たとえば東北などでそれにかわるどんな語形が分布していたかも問題である。分布から見て，HUTOI—HUTOI—HUTOI が東北全域を覆っていた時代があるとは考えにくい。

もっとも，上代の文献にも見られるオホキ～（オホキ＋名詞・オホキナリ・オホキニなど）の語形が非常に古い時代から各地に存在したとすれば，東日本の一部では，中央におけるオオキイの発生よりも早い時期に，それとは直接関係なくオオキ～（オホキ～）からオオキイ（オホキシ）が生まれていたかもしれない。むしろ東日本のオオキイが中世以降近畿に輸入され，中央語としての勢力を得て再び周辺に広がったことも考えられる。この考え方に従えば，すくなくとも形容詞形については，古くは本州の西側の地域（九州から中国・四国にかけて。あるいは近畿・北陸までを含む）は HUTOI—HUTOI—HUTOI で占められ，その頃東日本では OOKII—HUTOI—OOKII，あるいは OOKII—HUTOI—ARAI が優勢であったということになろう。

桃の類の中で，OOKII—HUTOI—OOKII（1—15—1）は IKAI—HUTOI—IKAI（30—15—30）や DEKAI—HUTOI—DEKAI（27—15—27）の外側に分布する傾向が見られ，前者は後2者よりも古いことを思わせる。東日本におけるデカイ・イカイ類がオオキイ類よりも新しいとすれば，東日本では OOKII—HUTOI—OOKII における OOKII の座を IKAI・DEKAI が奪いつつある，あるいは，強調・非強調の差を伴って OOKII と IKAI・DEKAI が共存するに至った，ということになる。

草の類は全体として非常に少ないが，これらは概して種々の構造（色）が錯綜する地域に点在しており，そのような状態の中で生じた一種の混乱現象とみられる。このような一見個別的な現象が，その地点の方言社会の中ではある程度安定した状態で存在するのか，それとも一個人が偶発的に答えた結果にすぎないのかという点については，あらためて検証する必要があろう。

なお，289図で草の類が分布する地域の中には，290図でも，同一ないし隣接地域に同じ草の類が分布する場合があること（岐阜・静岡，愛媛西部，中国一帯，九州北東など）を指摘しておく。このことは，大小・太細・粗密を通じて，一定の傾向の認められる証拠となる。

紺の類の中では，OOKII—HUTOI—ARAI（1—15—20），IKAI—HUTOI—ARAI（30—15—20），DEKAI—HUTOI—ARAI（27—15—20）などの分布が目立つ。すでにのべたように，東日本におけるイカイ・デカイがオオキイより新しいとすれば，その地域における OOKII—HUTOI—ARAI は他の2者より古いことになる。ただし，近畿におけるオオキイ類（とくに OOKII—HUTOI—ARAI）が比較的新しい発生とみられること，近畿北東ではオオキイ類にイカイ類が隣接することなどから，一昔前には，近畿ではイカイ類（IKAI—HUTOI—ARAI など）の領域が現在より広かったことも考えられる。

次に，290図について述べよう。

赤の類のうち最も多いものは KOMAI—KOMAI—KOMAI（21—21—21）であって，中国・四国の西半から九州にかけて集中する。この分布領域は289図における HUTOI—HUTOI—HUTOI と類似するが，分布密度は KOMAI—KOMAI—KOMAI の方が高い点，一方，佐渡・新潟に KOMAI—KOMAI—KOMAI が見られない点も相違する。したがって，かつて中央に KOMAI—KOMAI—KOMAI が分布した時代があったかどうかは疑問であるが，新潟付近に赤や橙の類が集中的に分布する点は289図と共通することから，かつて中央に「小さい」「細い」「細かい」の3者を区別しない赤の類が存在した可能性については，289図における赤あるいは橙の類の分布の解釈と並行的に考慮する必要があろう。

橙の類の中で比較的目だつものは，四国西部などに多い KOMAI—KOMAI—HOSOI（21—21—12）および KOMAI—KOMAI—KOMAKAI（21—21—17），島根東部から鳥取にかけて集中する HOSOI—HOSOI—

KOMAI(12—12—21)，沖縄本島付近と八重山の KUU～—KUU～—KUMA～(53—53—29) および GUMA～—GUMA～—KUMA～(30—30—29)，宮古(琉球)の IMI～—IMI～—KUMA～(55—55—29)，さらに，新潟付近に集中するほか全国に点在する CIISAI—CIISAI—KOMAKAI (1—1—17)，あるいは CIISAI—CIISAI—KOMAI(1—1—21)などである。

このうち，KOMAI—KOMAI—HOSOI，HOSOI—HOSOI—KOMAI，KOMAI—KOMAI—KOMAKAI の3者は，KOMAI—KOMAI—KOMAI (21—21—21) の地域に，中央から HOSOI あるいは KOMAKAI が侵入した結果生じたものと思われるが，これについては後に述べる。

徳之島以西の琉球各地の大部分が橙の類であることは289図と共通であり，この地域は，「粗密」に関する特称が定着しているという点で，それ以東の奄美大島から九州・中国・四国にかけての地域と対照的である。

CIISAI—CIISAI—KOMAI も，鳥取東部付近のものなどは，KOMAI—KOMAI—KOMAI を基盤として，あるいは，KOMAI—KOMAI—KOMAI>HOSOI—HOSOI—KOMAI>CIISAI—CIISAI—KOMAI の順序で生まれたものとも考えられる。新潟付近の CIISAI—CIISAI—KOMAKAI・CIISAI—CIISAI—KOMAI も，あるいは隣接する CIISAI—CIISAI—CIISAI(1—1—1)から生まれたものかもしれないが，断定はできない。近畿以東に「細かい」の特称としての KOMAI あるいは KOMAKAI が古くから分布していたとすれば，新潟付近の CIISAI—CIISAI—CIISAI などが，逆に，CIISAI—CIISAI—KOMAKAI あるいは CIISAI—CIISAI—KOMAI から生まれたことも考えられるからである。

なお，紺の類の中に点在する赤および橙の類は，多くは併用として現われており，これは CIISAI・CICCYAI などが上位概念をも示して「細い」「細かい」などをも包みうる概念であるために生じたものかもしれず，現在紺の類が分布する地域の全部がかつて赤や橙の類で占められていたとは考えにくい。289図の東日本の状況と比較される。

桃の類の中では KOMAI—HOSOI—KOMAI(21—12—21)が最も多く，中国東部から四国東部にかけて集中する。この地域には289図でも桃の類が分布しており，両者の関連をうかがわせる。もし，かつては中央にも赤の KOMAI—KOMAI—KOMAI があったとすれば，現在の KOMAI—KOMAI—KOMAI，KOMAI—HOSOI—KOMAI，さらにその内側の近畿各地に点在する紺の KOMAI—HOSOI—KOMAKAI (21—12—17)は，中央における発生の順序を反映するものと言えよう。

しかし，先に述べたように，現在の KOMAI—KOMAI—KOMAI の分布から見て，かつて中央にこの構造のものが他を排して広く分布した時代があったかどうかについては疑問もある。あるいは，KOMAI—HOSOI—KOMAI は，東西に隣接する紺の CIISAI—HOSOI—KOMAI (1—12—21)と赤の KOMAI—KOMAI—KOMAI との接触によって生まれたものかもしれない。

四国東部には草の KOMAI—HOSOI—HOSOI(21—12—12)が集中しており，これは桃の KOMAI—HOSOI—KOMAI と混在しつつ兵庫・岡山方面に連続した領域をもつ。KOMAI—HOSOI—HOSOIは，KOMAI—KOMAI—KOMAI の領域にKOMAI—HOSOI—KOMAIが伝播，もしくは発生する際に，それとの関連で生まれ広がったものであろう。兵庫の2地点に見られるKOMAI—CIISAI—CIISAI (21—1—1)や淡路および四国各地に点在するCIISAI—HOSOI—HOSOI (1—12—12)も，KOMAI—HOSOI—HOSOI とのつながりが考えられる。おな，島根，福岡・熊本などに点在するKOMAI—HOSOI—HOSOI は，分布の不連続性および孤立性から見て，四国東部から中国東部にかけてのものの伝播と思えない。

四国西部に見られる橙の KOMAI—KOMAI—HOSOI(21—21—12)は，四国東部の KOMAI—HOSOI—HOSOI と分布が連続しており，これは KOMAI—KOMAI—KOMAI の地域に東から KOMAI—HOSOI—HOSOI が侵入した結果生じたものと思われる。もっとも，KOMAI—KOMAI—HOSOI は九州北部にも数地点見られ，この付近には KOMAI—HOSOI—HOSOI は少ないから，KOMAI—KOMAI—HOSOI の中には KOMAI—KOMAI—KOMAI と HOSOI—HOSOI—HOSOI(12—12—12)との接触によって生じたものを含んでいるとみるべきかもしれない。西日本各地に点在し，高知付近や九州北端に比較的多い HOSOI—HOSOI—HOSOI は，KOMAI—KOMAI—KOMAI が優勢の地域にホソイ類が伝播して来た

際に生まれやすいタイプのひとつであって，これがHOSOI－HOSOI－KOMAI (12—12—21)，KOMAI—HOSOI—HOSOI, KOMAI—KOMAI—HOSOI，HOSOI—KOMAI—KOMAI (12—21—21)などの発生に影響を与えた場合も多いと思われる。

愛媛に多い橙の KOMAI—KOMAI—KOMAKAI (21—21—17)はこの地域に特徴的な存在であるが，これについては同一領域中に混在する KOMAI—KOMAI—HOSOI との関係を考慮すべきであろう。25図「こまかい」を見ると，この地域の KOMAKAI は中央のものと必ずしも連続していないことがわかる。25図の分布から，四国では KOMAKAI が HOSOI よりも古いとするならば，KOMAI—KOMAI—KOMAKAI が KOMAI—KOMAI—HOSOI よりも古いことになるが，逆に、四国東部では HOSOI を「細かい」の意味に用いる KOMAI－HOSOI－HOSOI や KOMAI—KOMAI—HOSOI がすでに勢力をもっていたために，中央から伝播してきた KOMAKAI が侵入しにくく，愛媛西部に及んではじめて KOMAKAI が力を得たことも考えられる。22図「ちいさい」でも愛媛西部の CIISAI は中央のものと分布が切れており，この付近は中央語の影響を受けやすかった事情が何かあるらしい。あるいは近世藩領との関係であろうか。

島根東部から鳥取にかけての地域には橙の HOSOI—HOSOI—KOMAI (12—12—21) が集中する。この中には KOMAI—KOMAI—KOMAI と桃の KOMAI—HOSOI—KOMAI との接触によって生まれたものが多いのではないかと思われるが，実際には，ほかに種々のケースがあったかもしれない。たとえば，KOMAI—KOMAI—KOMAI>HOSOI—HOSOI—HOSOI>HOSOI—HOSOI—KOMAI など。

KOMAI—HOSOI—KOMAI に連続し，主としてその西側の中国西部から九州北部にかけて，同じ桃の類の KOMAI—CIISAI—KOMAI (21—1—21) が見られる。この地域には，KOMAI—CIISAI—KOMAI のほか，橙の KOMAI－KOMAI－CIISAI (21—21—1)・CIISAI—CIISAI—KOMAI (1—1—21)，草の KOMAI—CIISAI－CIISAI (21—1—1)，紺の KOMAI－HOSOI－CIISAI (21—12—1)，さらに赤の CIISAI—CIISAI—CIISAI (1—1—1)など，CIISAI を「細い」や「細かい」の意味に用いるものが散在するが，これはこの地域で CIISAI の意味範囲がきわめて不安定であることを意味するものと考えられ，KOMAI—CIISAI—KOMAI の発生もその現われと思われる。ただし，KOMAI—CIISAI—KOMAI は各地で KOMAI—HOSOI—KOMAI と隣接する傾向があり，両者は構造上にも共通点が認められることから，この2つはその発生に関して相互にある程度のつながりをもつものではないかと考えられる。

草の類は，先に述べた KOMAI－HOSOI－HOSOI のほかに，島根東部付近，福岡，四国西部に HOSOI—KOMAI—KOMAI (12—21—21) が数地点ずつ見られる。これらは隣接する HOSOI－HOSOI－KOMAI や HOSOI－HOSOI－HOSOI が KOMAI－KOMAI－KOMAI と接触し合った結果生まれたものであろう。また，西日本各地に点在する草の CIISAI—KOMAI—KOMAI (1—21—21) も，分布および構造の上から，HOSOI—KOMAI—KOMAI との関連が認められる。

なお，全国に分布するコマイ類の語形は，KOMAI—KOMAI—KOMAI, KOMAI—KOMAI—HOSOI, KOMAI—HOSOI—KOMAI, HOSOI—KOMAI—KOMAI, KOMAI－HOSOI－HOSOI, HOSOI—HOSOI—KOMAI などのように，KOMAI が「小さい」あるいは「細かい」の意味にかかわりをもつ構造として現われるものが大部分であって，CIISAI—KOMAI—CIISAI (1—21—1)，CIISAI—KOMAI－KOMAKAI (1—21—17)などのように，KOMAI が「細い」の特称であるものはごくわずかの地点にしか存在しないことを指摘しておきたい。これは，KOMAKAI, KUMA～, GUMA～などを含め，コマ～類全般についても言えることであって，コマイあるいはコマ～の中心的な意味を示唆するものと言えよう。

近畿以東の地域には紺の類が最も多く，そのほかの類では，新潟付近を除くと桃の類が比較的多い。桃の類は CIISAI－HOSOI－CIISAI (1—12—1)，CICCYAI—HOSOI—CICCYAI (2—12—2)，CIKOI—HOSOI—CIKOI (7—12—7)，CYAKOI—HOSOI—CYAKOI (11—12—11)，KOSUI—HOSOI—KOSUI (40—12—40)，KOCUI—HOSOI—KOCUI (41—12—41) など，ホソイ類を「細い」の特称とするものが多く分布する。桃の類が東日本では紺の類と混在すること，また，桃の類は近畿に比較的少なくその両側の

地域に多いことは，289図における紺の類，桃の類の分布と傾向を同じくするものであって，両類の歴史的関係についても289図と並行する面が大きいと考えられる。

草の類は東日本にも見られるが，静岡西部から長野南端にかけてのものを除いて一定の領域をもつものは少なく，具体的語形を見ても，西日本のものと共通の要素は少ない。岩手，長野・静岡の CIISAI—HOSOI—HOSOI（1—12—12），CIBII—HOSOI—HOSOI(32—12—12)，KOSUI—HOSOI—HOSOI(40—12—12)は，HOSOI を「細い」と「細かい」の意味で用いるという点で西日本のものと共通の面をもつが，これらをも含めて，東西の草の類は相互に直接の関係はもたない（中央から伝播したものの残存ではない）と考えておきたい。ただし，分布が連続する静岡・長野の草の類，および，岩手の3地点に見られる CIISAI—HOSOI—HOSOI は，それぞれの地域における伝播を考慮すべきであろう。

紺の類は HOSOI を「細い」の特称とするものが大部分であるが，「細かい」の意味分野を占める語形は，25図「こまかい」を見ても分かるように（290図では，紺の類における KOMAI と KOMAKAI の違いは主として符号の方向によって示してあるので，一見，判別しにくい），本州北部（東北北部の大部分と佐渡など）では KOMAI，近畿から東北南部にかけては KOMAKAI が多い。紺以外の類を含めて見ると，KOMAKAI が中央に，KOMAI がその両側の地域に分布することから，KOMAI が KOMAKAI よりも古いと考えられ，これによれば，かつて中央には CIISAI—HOSOI—KOMAI（1—12—21）などが（あるいは，先に述べたように KOMAI—KOMAI—KOMAI, KOMAI—HOSOI—KOMAI なども）広く分布しており，その後 CIISAI—HOSOI—KOMAKAI（1—12—17）などが広がったことになる。

ただし，コマイが文献に現われる時期はそれほど古くはなく，現在東西に分かれて分布するコマイ類のすべてが中央から伝播したものの残存であるかどうかについては，なお検討の余地がありそうにも思われる。あるいはコマイ類の中には（289図におけるオオキイ類についても類似の見解を述べたが），コマ～の語形を基盤に，それぞれの地域で独自に発生したものを含んでいるかもしれない。

紺の類の大部分は「小さい」の意味分野を占める語形の違いによるものであるが，これらの新古関係については，もっぱら22図「ちいさい」および23図「チイサイ類の詳細図」の解釈にかかわる問題であり，ここでは検討を省略する。

以上，289図，290図に見られる見出しのうち，一定の領域を占めるものについてその分布を概観し，その歴史的関係についての一応の考え方を述べた。比較的少数の地点に分布する種々のタイプのものについても，その付近にどのような構造のものが分布しているかを見，相互の構造上の類似点を検討することによって，それぞれの発生の背景を推察することができよう。また，両図の基本的な解釈についても，ここに述べた以外の別の見方が可能なはずであり，この点については，「大きい」「太い」「粗い」，「小さい」「細い」「細かい」の周辺意味分野（形容詞形をとらないものも含む）を含め，文献との対比，あるいは小地域での綿密な調査を行い，その結果をふまえて総合的に考察を進めていくことが望ましい。

なお，隣接意味分野の複数の地図を1枚にまとめて作図する総合図については，作図の方法，地図解釈の基本原則などに関する方法論が確立しておらず，今後の研究が期待される。

291. おいしい（美味しい）

後期調査で加えた項目のために，地点数がすくない。なお，第1集37図「あまい（甘い）」に関連するところがあるので，解説とともに参照してほしい。なお，この地図は，琉球の形容詞の語尾を全部示している点で第1集の一般的な扱いと異なり，特色があると言えるかもしれない。

この調査項目の質問文はオイシイ・ウマイの選択を求める形式であったところから，たとえば，もし「味のよいことを何と言うか」式の質問をすれば，結果に多少の違いの現われることが考えられる。選択式の質問であったため，実際の音声がどうであるかについても，この場合詳しくないことが考えられる。たとえば2755.76ではこの図は〔umai〕だが37図は〔ɯmai〕となっており，2763.22，3701.49などではこの図で〔umai〕なのに対して，37図は〔mmɛ〕となっている，などがある。

＜併用処理＞は行っていないが，女性語として使われるという注記のあったオイシイ（10地点ほど）は除いた。また，3767.22のスックズァエエ，6408.88のアジガエエ，アジコイ，6477.02のアジガヨイは，特殊な表現と

して除いた。

凡例を，順を追って見ていこう。

OISII の単用は11地点のみ。なお，4743.44 と 4746.20 の〔oisïː〕，3764.92 の〔oisʉ̈ː〕，8372.87 の〔oiʃi〕を含む。

OISIKA は，7382.01 と 7383.98 の 2 地点のみ。

UMAI は，宮城に多い 10 地点ほどの〔umae, ɯmae〕のほか，3757.09 の〔ʉ̈mai〕，6413.43 と 6421.79 の〔ʉ̈maï〕，6427.27 の〔ɯmæi〕を含む。

UMEE は，〔umeː, ɯmeː〕のほか，7 地点の〔umɛː, ɯmɛː〕，8 地点の〔umæː〕，4 地点の〔um^{w}eː〕，7345.43 の〔ʉ̈m^{w}eĭ〕，7344.30 の〔u~m^{w}eː〕を含む。

UME は，岩手に 5 地点。

UMAA は，6583.45，7325.57，7503.48 のみ。このうち大分のものは〔uma: noː〕という回答であった。

UMYAA は，7385.84 のみ。

UMII は，6604.98 のみ。〔ʉ̈mɪː〕とあった。

OME は，2765.71 のみ。〔omɛ〕とあった。

UNMAI は，5568.92，5598.67，6517.70 の 3 地点で，すべて併用。

UNMEE は，4706.84 のみ。〔ɯmmɛː〕とあった。

UNME は，3767.22 のみ。〔ɯmmɛ〕とあった。

NMAI の中には，25 地点ほどの〔^{m}mai〕，0724.58，0724.95，2812.96 の〔mmaï〕，7414.06 の〔mːmai〕，24 地点ほどの〔mmae〕，6427.40 の〔mmæi〕，3746.09 の〔mmæĕ〕などを含む。なお，3746.41，6448.23，6497.36，7431.08 の答えは〔mmakatta，mmagatta〕などであった。これらのうちあるものは，NMEE，NME などとすべきものだったかもしれない。

NMEE の中には，30 地点ほどの〔mmɛː〕，15 地点ほどの〔mmæː〕，7343.76 の〔mməĕ〕，5790.39，5790.79 の〔^{m}meː〕，8305.76，8335.05 の〔^{m}m^{w}eː〕，4760.98 の〔^{m}mɛː〕，8305.40 の〔^{m}mæː〕を含む。

NME の中には，45 地点ほどの〔mmɛ〕，35 地点ほどの〔mmæ〕，8343.74，8344.71，8353.68 の〔mːme〕，3619.08，3741.16，8334.25，8342.69 の〔^{m}me〕，3783.08 の〔^{m}mɛ·〕を含む。3756.40 の〔^{m}magatta〕をここに含めてしまったが，NMAI の説明で述べたように，他との関連を考えて，NMAI に含めるべきだったかもしれない。

NMYAA は，6414.25，7363.59，7406.53 のみ。徳島のものは〔^{m}mjaː〕とあった。

NMAEE は，4686.02 のみ。〔mmaeː〕であったが，NMAI に含めることもできた。

NMAKA には，8363.64 の〔mːmaka〕，7259.22，7382.01，8352.92 の〔^{m}maka〕を含む。

NMAGA は，8361.28 のみ。〔mːmaga〕とあった。

NMAKYA は，八丈島の 5 地点であるが，うち 7659.31 と 7659.40 のものは〔mːmakja〕であった。

NMA は，7420.18 のみ。〔aː^{m}ma!〕という回答であった。

NMAA は，2074.69 のみ。〔ʔmmaː〕であった。

MAI は，全国で 17 地点。出雲周辺に多いが，千葉，長野南部，石川北部にもある。6401.89，6402.53，6403.60，6412.48，6423.23 は〔mae〕，6403.62 は〔maï〕，6402.94 は〔makatta〕であった。

MEE は，6507.72，6702.21，6710.70 の 3 地点。うち 6507.72 のものは〔mɛi〕。

ME は，2771.83，3701.70 のみ。

MAKA は，0228.96 のみ。〔'makajaː〕とあった。

MAGA は，8239.31 のみ。

MAAKA は，0238.55 のみ。〔'maːka〕とあった。

NMASYAALÏ は，2068.08 のみ。〔mmaʃaːl〕とあった。

NMASAAN は，2076.96 のみ。〔ʔmmasaːŋ〕とあった。

NMASAN は，2067.52 の〔mmasaŋ〕と，2086.03 の〔ʔmmasaŋ〕。

NMAHAN は，2076.97，2076.98 のみ。〔ʔmmahaN〕とあった。

MAASAAN は，1231.72 のみ。〔ʔmaːsaʔaN〕とあった。

MASAAN は，1223.91 のみ。〔masaːN〕とあった。

MAAHAAN は，1232.29 のみ。〔maːhaːN〕とあった。

MAASAN は，12 地点。ほとんどは〔maːsaŋ〕で，1241.96，1242.00 は〔ʔmaːsaN〕。

MASAN は，1270.26 のみ。〔masaN〕とあった。

MAASYEN は，1241.05 のみ。〔ʔmaːʃeN〕とあった。

MAAHAN は，7 地点。沖縄の 6 地点は〔maːhaN〕，八重山の 2085.69 は〔mãːhaŋ〕。

MAHAN は，2076.99，2095.60 のみ。〔mahaN〕とあった。

MAAN は，2072.20 の〔ma：ŋ〕と，2075.22 の〔ma:N〕のみ。

MASSAN は，2076.25 のみ。〔ʔmassaŋ〕とあった。

MAAI は，0275.36 のみ。〔maai〕とあった。

MAASA は，0256.08, 0256.76, 0256.89 で，〔'ma：sa〕とあった。

MASA は，0246.48, 0247.31, 0248.00 で，〔'masa〕とあった。

注記について見ることにしよう。

OISII と他のものが併用として現われ，OISII のほうが＜上品，共通語的表現，新しい，希＞としたものが，86地点あった。7356.70 の NMAI と OISII との併用で，OISII を＜昔＞とする。7427.90 の NMAI と OISII との併用で，OISII を＜多＞とするのが，わずかの例外であった。

NMAI などと NMEE などとの併用で，前者が＜上品，共通語的表現，新しい＞とするものは，4695.87, 5672.67, 5676.84, 5791.68, 5792.62, 7386.63, 7406.53, 7503.48, 8335.48 であった。

UMAI と NMAI の併用で，前者を＜共通語的＞とするのは，5568.22 であった。

以上を通観することによって，全国の中でおもな表現として OISII, UMAI, UMEE, NMAI, NMEE, NME, NMAKA, MAI, MAASAN のあることがわかる。

この 9 見出しを中心にして分布を概観すれば，OISII は，関東から中国・四国にかけて，いわば国の両極を除いた地域に，散在すると言えよう。注記などから，新しい発生ということができよう。この地図から省略した女性語のあることから，伝播は，女性語を介していることも考える必要がある。『日本国語大辞典』は，美味の意のイシの例としては『太平記』を挙げ，また，『日葡辞書』の「この語がこの意味で用いられる時は，通常女性が用いる」を引用している。なお，オイシイの例としては『浮世床』を挙げている。

UMAI, UMEE の類と，NMAI, NMEE の類と，MAI, MAASAN の類との分布を見ると，U～の類が，青森，栃木・群馬・埼玉・山梨・静岡，滋賀・京都，島根・広島・山口，大分・宮崎にややまとまりを見せ，N～の類が，秋田・山形・福島・茨城・千葉・新潟・富山・石川・岐阜・三重・奈良，兵庫・岡山，香川・徳島・高知，福岡・佐賀・長崎・熊本・鹿児島にまとまっているといえようか。MAI は出雲，MAASAN は沖縄である。この観点からは，201 図「うま(馬)」と対比することができる。似てはいるが，違いもある。質問の形式の違い，語源の違いなども考えに入れる必要がある。

つぎに，UMAI, NMAI, MAI の類と，UMEE, NMEE, NME の類との分布を見ると，後者が，岩手・秋田，岡山南部，大分・宮崎・鹿児島東部に見られることがわかる。質問が選択式であることを考慮する必要があるし，分類にも違いがあるが，28 図「あかい（赤い）」などと対比することができる。

結局，大局的には，ウマイ類が全国的に古くからの表現であり，オイシイの類が，新しく中央から広がっていったことを示す地図，ということになる。

292. ケチダを“不思議だ，不都合だ”などの意味で使うか

本図は，質問番号 208 と 209 の 2 項目の結果を組み合わせて作図したものであるが，そのほか質問番号 207「けちということばですが，『けち』とか『けちだ』ということばをどんなときに使いますか」で回答された内容のうち，208 または 209 の回答を補っていると判断したものについては採用した。このほか，関連した調査項目として，質問番号 210「物惜しみをするという意味で『けちだ』ということばを使いますか」があるが，これの地図化は割愛した。なお，207, 208, 209 の 3 項目とも，前期調査のみなので，地点数が少ない。

208, 209 の質問文に示された意味内容は，かならずしも明確であったとは言えないので，207 も含めて 3 項目の原カードの注記をてがかりにして，「使う」，「使わない」をあらためて分類しなおした。208, 209 を通して，「使う」という回答の記入してあるもの，および「使う」に次のような注記のあるものも，「使う」に分類した。＜古＞，＜新＞，＜上＞，＜下＞，＜共＞，＜子＞，＜希＞，(?)。このほか，208 の場合，カードに「使う」となくとも，作図に際して「使う」に分類した注記内容は大よそ次の通りである。＜けしからん男＞，＜悪い奴＞，＜ひどい男＞，＜変人＞，＜ふうがわりな＞，＜常識なし＞，＜正常でない＞，＜変わった時分に変わったこと

をする＞，＜偏屈で人並でない＞，＜ひねくれてすなおでない＞，＜人の意見に横車を押したり反対したりする＞，＜物になんでも反対する＞，＜人の言うことをきかない＞，＜強情＞，＜道理を知らない＞，＜義理を欠くような人＞，＜しなければならないことをしないでいる＞，＜自分本位の人＞，＜人づきあいをしない＞，＜人づきあいが悪い＞，＜人になんくせをつける＞，＜心が汚い＞，＜人の悪口を言うような人＞，＜うそをつく人＞，＜ことばづかいが悪い＞，＜話のわからない奴＞，＜つまらない奴＞，＜異風な＞，＜乞食など異様な風体＞，＜不愉快＞，＜気にくわない＞，＜虫が好かない＞などである。209の場合，カードに「使う」となくとも，作図に際して「使う」に分類した注記内容は大よそ次の通りである。＜ケチに当たる＞，＜巫女におがんでもらって急に治ったときなど＞，＜妙な日・こと＞，＜けったいな＞，＜変わった＞，＜おかしな＞，＜合点がいかない＞，＜わけがわからない＞，＜自分の考えにそぐわない＞，＜損をする＞，＜勘定して合わない＞，＜悪い運のきっかけ＞，＜事が順調に進まなくなる＞，＜まが悪い＞，＜マンが悪い＞，＜不審な＞，＜不幸な＞，＜不吉な＞，＜不運がつづく＞，＜悪い因縁＞，＜悪いことがつづく＞，＜ケチがついたからけがをしたなど＞，＜縁起が悪い＞，＜奇怪な＞，＜原因不明の火をケチ火＞，＜怪しい火を見て＞，＜或る家に変事が起こった場合＞，＜不慮の死にあう＞，＜神仏のばちがあたる＞，＜たたりがあるとき＞などである。しかしながら，この2項目間の意味分野のあいだに，かならずしも明瞭な区別があるわけではなく，重なり合う部分，あるいは連続している部分があるため，この分け方に問題はあろうし，また別の見方も出てこよう。

符号は紺1色で示し，次の4通りの組み合わせによってそれぞれ異なった符号を与えた。(イ) 質問番号208，209いずれも「使う」，(ロ) 質問番号208「使う」，質問番号209「使わない」，(ハ) 質問番号208「使わない」，質問番号209「使う」，(ニ) 質問番号208，209いずれも「使わない」の4種類である。

(イ)は，能登半島から富山・岐阜・愛知にかけて連続分布しており，(ロ)は，岩手およびその周辺，埼玉・東京およびその周辺，富山・石川などにまとまっており，(ハ)は，中部から近畿にかけてと四国南部，大分などに分布している。(イ)(ロ)(ハ)の混在は鳥取・島根・山口などにやや目立つが，それ以外のあちこちの地域にも見られる。(ニ)は，青森西部，秋田東部，九州西南部，琉球などが主な地域であるが，全国を詳細に見れば，その傾向の地域はもっと広げられよう。

この両項目の歴史関係を見ることは，実は，簡単ではない。それは，前述したように，両項目の間の意味分担の境界がはっきりしていないからである。『全国方言辞典』によると，「けちな」が「不都合な，けしからん」の意味として，仙台，群馬，石川，秋田，岩手，宮城で，「変な，妙な，不思議な」の意味として，栃木，群馬，山梨，長野，岐阜，石川，福井，三重，出雲，大分で，それぞれ使われている，とされる。さらに，「けちだ」が「耕作者に凶事があるという田」の意味として長野県で，「けちくそ」が「不都合だ，けしからん」の意味として大阪で，「けちび」が「怪火」の意味として高知で使われている，とする。これらは地域的にも交錯しており，またかなり広い地域にわたっている。『日葡辞書』には「不吉なことの前兆」の意味の語として採っているが，それが両項目の意味とどう結びつくのか，「物惜しみ」の「けち」との結びつきはどうか。また，『上方語源辞典』に「ケ(異)の派生語か」としているように語源はなにか，など，不明な点がまだまだ多い項目である。

293. いくつ(何歳)

49図「いくつ(個数)」，50図，「いくら(値段)」，特に前者との関連が密接であることから，語形のまとめ方を一致させ，符号を共通にした。

本図の分布は，49図，50図，ことに前者とかなり類似しているので，重なり合うものについての解説は，49図，50図の解説を参照してほしい。以下，主として分布の違いを示すものについて記述する。

緑の符号で示したイクツ類が国の中央部地域と北海道，九州・琉球などに分布し，赤で示したナンボ類が北海道・東北，近畿・中国・四国，九州東部に分布し，草で示したイクラ類，紺で示した符号のうち DOSIKO から DORESIKO までのドシコ類が九州に分布していて，巨視的には49図とほとんど共通した分布を示している。以下，49図と地域ごとに対比してみると，福島南部，新潟・佐渡でイクツ類がふえ，ナンボ類が少なくなっており，福井南部から滋賀・三重・和歌山にかけてもイクツ類の分布がやや広がり，ナンボ類の領域が後退している。九州では，ドシコ類にかわってイクツ

類が分布の密度を高めている。イクツ類は，奄美から沖縄本島にかけての地域でも，イクラ類にかわって分布を広げている。49図で北陸・近畿，九州などに分布するDOREDAKE，高知に見られるDOREBAAは本図ではまったく見られないし，DONOKURAIも，長野・岐阜以外に見ることができない。逆に，49図でまったく見られなかったNANIDOSIが6646.23に，NANNOTOSIが6436.57，6631.05に，NANSAIが5565.12にある。年齢を尋ねるのだから，当然であろう。

50図とは，ナンボ類の分布がほぼ重なり合う。ただ，山梨およびその周辺，石川，滋賀，和歌山，高知，福岡・熊本，宮古諸島などで，ナンボ類にかわって主としてイクツ類が分布している。イクラ類は，佐賀・対馬・長崎，熊本南部で重なり合った分布を示しているが，50図のイクラ類の分布地域のうち，北海道，福島南部から近畿に至る国の中央部地域，九州中部地域，琉球では，代わって主としてイクツ類が分布している。50図で，九州中南部にドシコ類が，富山およびその周辺にDOREDAKEがそれぞれまとまって分布していたが，本図では，九州中部を除き，代わって主としてイクツ類が分布している。

以上が49図，50図との大まかな対比であるが，ことに，意味分野のより近接する49図と，1地点ごとに対比してみると，両図の間の差異が明らかになるはずである。たとえば，3751.81，3761.74の2地点は，49図〔nambotsɯ̈〕，本図〔nambo〕であり，2095.60は，49図〔u:bi〕，本図〔u:tsï〕であるがごときである。今後，それぞれの語が含包している意味範囲の地域差などについての詳細な調査なども考えられよう。年齢を尋ねるといっても，相手がどんな人かを想定するかによって，ことばづかいが異なることなども，考えておく必要がある。

294. かつぐ(片方の肩で包を担ぐ)

この地図は，第2集所載の64図「おんぶする(幼児を負う)」，65図「しょう(包みを背負う)」，66図「かつぐ(材木を担ぐ)」，67図「かつぐ(天秤棒を担ぐ)」，68図「かつぐ(二人で担ぐ)」と通じる項目なので，語形の分類の仕方を合わせ，符号の色・形をなるべく共通させてある。また，295図「かつぐ(担ぐ)——第66，67，68図の総合図」とも関連するところがあるので，それぞれの解説とともに参照してほしい。なお，後期調査のみの項目なので，地点数が少ない。<併用処理>は，この項目内容を示す共通語形が明瞭でないということから，その原則を適用しなかった。凡例に示した見出し語形については，たとえば，〔katani kakerɯ〕(7401.92)は見出し語形KAKERUとして示し，〔katae kakete kaⁿzɯkɯ〕(4648.42)はKAKETE KAZUKUとして示し，それぞれの名詞部分〔katani, katae〕の部分は無視した。

各語類の地図上に現われる分布の仕方は，関連地図のいずれかの同語類の分布と共通するものもあるが，この地図の内容が臨時的な動作と考えられるせいか，まとまった領域の現われない語類が多かった。それぞれの語類および語形のうち，関連地図に現われ，重なり合う分布を示すものについては，それぞれの地図の解説でふれてあるので，この地図に特徴的な語類，語形および分布を中心に述べることにする。

緑の符号を与えたカツグ類は，66，67，68図と似た分布を示している。このうち，HIKKACUG〔ŋ〕UからKATAKACUG〔ŋ〕INISURUまでの語形のそれぞれの前部分，HIK～，HURI～，HU～，BUK～，KATAKAKEDE～，KAKETE～，KATA～などは，関連地図の語形にはほとんど見られないものである。それに対して，これらは，この地図では緑以外の他の語類を通して多く現われるものであり，このような背負う動作と結びついた独特の語構成要素と言えよう。

紺の符号で示した語形のうち，カタグ類としたKATAGUからHURIKATAGENISURUまでの分布は，66図と似ているが，それよりやや粗くなって，茶で示したカルウ類，橙で示したカケル類などが混在している。

空の符号のオウ類は，OUが鳥取・岡山・広島・山口，香川・愛媛に見られ，OINERUが滋賀・三重に，ONERUが5597.26に，OOTORUが6498.93に，KAKETEOUが6436.33にそれぞれ見られる。64図，65図のオウ類の分布地域と重なるところはあるが，それとくらべてかなり局地的になっている。

桃の符号で示したショウ類は，65図では大領域を持つ語類であるが，本図での分布はきわめてまばらで，主として中部以東に散在しているほか，SEOUが6572.04に，KOZYOUが6484.43，6494.08に，KUZYUUが7452.08に，それぞれ見られるに過ぎない。KATASYOI 6601.25は，名詞形であろうが，カード表記のまま語形で示しておいた。

紺で示したSETTARAUは，6572.55に1地点だけ見られる語形であって，同地点における別人は，〔seo-u〕と答えたという注記があった。SETTARAUは，65図で，大阪・奈良・和歌山にまとまって分布しているものである。

赤の符号のニナウ類は，鳥取西部から島根にかけてまとまっているほかは，5594.02に見られるだけである。66図と似た分布の現われる語類である。

茶の符号のカルウ類は，山口から九州にかけて，他語類と混在しながらまばらに分布し，7461.39にも見られる。65図ではほぼ同じ領域に，64図ではそれよりやや狭い領域に分布している。KATATEGARIISURUの7353.51には，＜片手荷負(ガライ)する意味＞との注記がある。参考になろう。

橙を与えたカケル類は，先島諸島を除く全国に広く分布している大勢力語類である。関連地図のうちでは，65図にわずかに点在しているだけであり，本図の特徴的な語類と言えよう。＜軽い物の場合に使う＞という注記が，4742.43, 4746.20, 5629.17, 5697.53, 5761.77, 6526.08, 6539.78, 6662.01にあった。この類の中には，語形の前部分に，HIK～，UCI～などをもつものが多い。いずれもこの語類のひとつの性格を示していると言えよう。二段活用と思われるKAKURU, KAKUT, KAKUI, HIKKAKURU, HIKKAKUT, HIKKAKUI, HIKKAKU, HUKKAKURU, UCIKAKURU, UCIKAKUT, UKKAKURUなどは九州全域に分布している。KAKERUに含めた〔katani kakete ikɯ〕(7320.95)も，分布から見てKAKURUの可能性があるし，KAKECYOO 7324.96, KAKECYOT 7370.16, KAKECYOI 6296.27, 8324.83についても，KAKURUとの関連が考えられる。KATAKAKERU 4703.18の実際の報告の表記は〔kata kakerɯ〕である。もしもこれを2語ととれば，分類原則からKAKERUとして示すべきものであろうが，ここでは1語と考えておいた。KATAKAKESURUからHATAHWAKISUNまでは，いずれも，「肩掛け」を意味する名詞形をサ変動詞化したものと考えられるので，KATAKAKERU，さらにはKAKERUなどと密接な関連をもつものということになる。徳之島から沖縄本島にかけて分布しているUCCYAKIIS(Y)UNからUCCYAKIINまでのものも，西日本に散在している前部分にUCI～をもつ語形UCIKAKERU, UCIKAKURU, UCIKAKUT, UKKAKURU, UCIKAKETORUなどと関連するものと思われる。HIKKAKE 6277.62, 7239.82, BUKKAKE 3767.22, UCIKAKE 6453.59, KATAUCIKAKE 7349.86, KATAKAKE 7239.41は，いずれも名詞形であろうから，その動詞形と考えるべき語形がそれぞれの地点に近接分布している語形の中に，見いだされそうである。

紺の符合で示したもののうち，KATAMÏRYUMからKATAMIIまでは，琉球に分布している語形である。「肩」を意味するKATA～，HATA～を語の要素に含んでいるとみられ，カタグ類とすることもできよう。分布としてもカタグ類と連続的である。

この地図に現われた各語類の分布の歴史を，本図だけで見ることは不可能であろう。関連地図を重ね合わせ，さらに，現実に行われている多種多様な本来的，臨時的なかつぎ方をあらわす語形との対比においてみなければならない。

295. かつぐ(担ぐ)——第66, 67, 68図の総合図

本図は，内容の隣接しあいながら異なった意味内容をもつ3項目間の語形の現われ方を，1枚の地図にまとめて示したものである。3枚のそれぞれの地図についての解説と関連するところが多いので，合わせて参照されたい。

この地図は，66図，67図，68図の3枚の地図を原図として，ある程度符号の形をそれらに合わせながら語形をまとめて示したものであるが，種々の制約があるため，違いが出ざるを得なかった。ことに，語形は，66図，67図，68図よりかなり大まかにまとめたために，2図ないし3図間で多少の違いがあるにもかかわらず，本図では同一見出し語形のもとに示された場合のあることに注意する必要がある。これはある意味で行き過ぎであるが，細部にこだわって大局を見失わないための処置として諒解してほしい。実際の内容が異なるものを同一視した場合は，地図では補助符号＊をそれぞれの符号の右上に付して区別してあるので，具体的内容は，あとでも示すところがあるが，別に66図，67図，68図にもどって点検してほしい。

色は，次の原則で与えた。緑は，3図間に区別がなく

同一語形のものである。ただし，＊を付したものは，すでに述べたように，実際の語形は2図ないし3図間で多少異なっているものであるから，別の観点からは，緑以外の色(2図ないし3図間で見出し語形が異なるもの)を与えた組み合わせと同種のものとみることもできる。赤は，66図(材木を担ぐ)と67図(天秤棒を担ぐ)の見出し語形が同一で，68図(二人で担ぐ)の見出し語形が異なっているものである。桃は，66図と68図の見出し語形が同一で，67図の見出し語形が異なっているものである。橙は，67図と68図の見出し語形が同一で66図の見出し語形が異なっているものである。赤，桃，橙を与えたもののうち，＊を付したものは，次に述べる空，紺を与えた，3図とも見出し語形が異なるものとも同類とみることができる。空，紺は，3図とも見出し語形の異なるものであるが，空は，3図のうち，いずれか2図の見出し語形が同語類のものであり，紺は，3図とも別語類のものである。

本図に示した見出し語形は，原図のそれぞれに示した見出し語形を次のようにまとめたものである。

KACUGU として示したもの——KACUG[ŋ]U, KACUG[g]U, KACUKU, KAZUG[ŋ]U, KAZUG[g]U, KAZUKU, KACUGO, KACUGERU, KACUNERU, KUCUNERU。

SASI KACUGU として示したもの——SASIEKKACUGI, SASIAI・NI/DE・KACUGU, SASIYAWASE・DE KACUGU, SASIKKACUGU, SASIKACUGI (SURU), SASI・DE KACUGU, SASIKO・DE KACUGO, SASIMOCIDE KACUGU。

KATAGU として示したもの——KATAGU, KATAU, KADAGU, KATAGURU, KAKAGURU, KATAGUT, KATAGUI, KATAGUU, KATAGERU, KATAKERU, KATAGET, KATANERU, KATONERU, BUKATANERU, KATAMURU, KATAMUT, KATAMUI, KATAMET, KATAMERU, KAKAERU, KATAMÏRYUM, KATAMÏYUM, KATAMËRYUM, KATAMYURYUN, KATAMIRUN, HATAMIYUN, KATAMUN, KATAMERUN, KATAMIIN, HATAMIIN, KATAMIN, HATAMIN, KATAMÏN, HATAMÏN, HATAAMIN, KATAMII, KATEYUN。

SASI/～・KATAGU として示したもの——SASIAI・NI/DE・KATAGU, SASYEE・NI・KATAGURU, SASI・NI/DE・KATAGU, SASI・NI/DE・KATAGURU, SASIMOCI・DE KATAGERU, MANGATAMII SYUN, MANGATAMII SUN, BOOGATAMII SYUN, TAIGATAMII SUN, NAHANACI HATAMIYUN。

SETTARAUとして示したもの——SETTARAU。

NINAU として示したもの——NINAU, NINOU, NINOO, NINO, NINAT, NIRAU, NNAU, NIMAU, INAU, INAERU, ENAU, ENAA, INAHU, INABU, INOU, INOO, INNOO, INO, IMO, INAGU, IRAU。

SASI/NAKA・NINAU として示したもの——NAKANINYA SURU, NAKANIRAU, NAKAINAU, NAKAINAI (SURU), NAKAIANI (SUT), SASIAI・DE NINAU, SASININAU, SASININAI (SURU), SASI・NI NIRAU, SASIAIINAI SUSU, SASIAI・DE NINAU, SASIINAU, SASIINAI SURU, SASI・DE INAU, SASI・NI ENAA。

KARUU として示したもの——KARUU。

KAKU として示したもの——KAKU。

SASI/～・KAKU として示したもの——TOMUKAI・NI SURU, SASIKAKU, TAIGAKI SYUN。

CURU として示したもの——CURU, ZURU, CURIMOCU。

NAKAZURU として示したもの——NAKAZURU, NAKAZUT, NAKAZURI SURU, NAZUT。

NAKADORU として示したもの——NAKADORU, NAKADORI SURU。

SASIAU として示したもの—SASIAU, SASIOO, SASIAI (SURU), SASIAIMOCI SURU。

その他として示したもの—KAERU, OOKO SYUM, OOKO SYUN, NAKAMOCI SURU, SASI・NI SURU, SASI・NI MOCU, SASIMOCI (SURU), TAIMUCI SUN, NAKAMAASI SUN, NAHAMAASI SUN, WAGERUN,

その他。

色ごとに分布を概観してみる。

緑を与えたもの，つまり3図とも同一語形のもののうち，その語形が KACUGU であるものは，北海道から新潟・長野・静岡までの東日本全域に分布している。これには，原図66図，67図，68図の見出し語形KACUG〔ŋ〕U, KACUG〔g〕U, KAZUG〔ŋ〕U, KAZUG〔g〕U, KAZUKU, KACUNERU が含まれている。符号に＊を付した KACUGU の内容と地点は次の通りである。

66 図	67 図	68 図
KACUG〔ŋ〕U	KACUG〔ŋ〕U	KACUG〔g〕U 4700.78
KAZUKU KACUG〔ŋ〕U	KACUG〔ŋ〕U	KAZUG〔ŋ〕U 4742.43
KACUG〔g〕U	KAZUKU	KAZUKU 4695.33
KAZUG〔ŋ〕U	KAZUG〔g〕U	KAZUG〔g〕U 2731.97
KAZUKU	KAZUKU	KACUG〔g〕U 4695.87
KACUG〔g〕U	KACUNERU	KACUNERU 4760.54

3図共通の KATAGU は，新潟・富山，石川北部，岡山・広島・山口，四国東部，対馬，九州東部，琉球に分布している。これは，原図の見出し語形 KATAGU, KADAGU, KATAGURU, KATAGUT, KATAMUI, KATAGERU, KATANERU, KATAGUI, KAKAERU, KATAMÏRYUM, KATAMËRYUM, KATAMYURYUN, KATAMIRUN, KATAMÏYUN, KATAMUN, KATAMII, HATAMIN, HATAMÏN, KATAMIIN, KATAMÏN, KATAMIN, HATAMIIN, KATEYUN を内容としている。＊を付した KATAGU の内容と地点は次の通りである。

66 図	67 図	68 図
BUKATANERU	KATANERU	KATANERU 4667.76
KATAGU	KATANERU	KATANERU 4598.59
KATAGURU	KATAGUI	KATAGUI 6296.27
KATAGU	KATANERU	KATANERU 5528.31

3図共通の NINAU は，鳥取・島根・隠岐にまとまっているほか，5591.60, 6504.44, 6512.14 にも見られる。この中には，原図の見出し語形が NINAU であるもののほか，INAU, ENAU のものを含んでいる。＊を付した NINAU は 6411.80 の1地点である。内容は66図 INAU, 67図 NINAU, 68図 ENAU である。

赤を与えたもの，つまり，66図と67図が同語形で68図が別語形である組み合わせのものは，ほぼ緑の分布の中に混在している。このうち，目立った分布を示しているものとして，66図・67図 KACUGU, 68図 SASI-KACUGU が関東・中部のほか岩手・宮城，大島，新潟，広島・山口などに，66図・67図 KATAGU, 68図 SASI/～・KATAGU が大分・宮崎，沖縄本島と岡山・広島・山口に，66図・67図 KATAGU, 68図 KAKU が四国東部から岡山にかけての地域と，広島・山口に，それぞれ見られる。それ以外の語形の組み合わせのものは少数地点であって，ほとんどまとまった分布をもっていないので，それらの組み合わせ語形と地点番号のみを示しておく。

66図	67図	68図	
NINAU	NINAU	SASI/N-AKA•NI-NAU	6413.29, 6423.23, 6553.22, 7351.06
KACUG-U	KACUG-U	SASI/～・KATAGU	6453.31
KACUG-U	KACUG-U	NINAU	5568.22, 5655.97, 6509.91, 6529.63, 6537.58, 6638.14, 6650.12
KACUG-U	KACUG-U	SASI/N-AKA•NI-NAU	6548.26, 6568.13
KACUG-U	KACUG-U	KAKU	6373.84, 6386.32, 6398.78, 6482.04, 7303.17, 7308.33, 7317.29
KACUG-U	KACUG-U	SASI/～・KAKU	7430.80
KACUG-U	KACUG-U	CURU	6527.73
KACUG-U	KACUG-U	SASIAU	6453.59, 6472.05, 6475.27
KACUG-U	KACUG-U	その他語形	4648.42, 4753.36

KATAG-U	KATAG-U	KACUGU	4638.43, 4657.64, 5536.29, 6367.09, 6498.93, 6551.20
KATAG-U	KATAG-U	NINAU	6474.50, 6474.83, 7406.53, 8334.63, 8344.71
*KATAGU(KATAGUR-U, KATAGERU)	KATAG-U(KATAMERU)	NINAU	7383.98
KATAG-U	KATAG-U	SASI/NAKA•NINAU	5591.91, 6477.02 8344.71
KATAG-U	KATAG-U	CURU	4589.83, 5537.34, 5538.49, 5558.33
KATAG-U	KATAG-U	SASIAU	6436.33, 6436.98, 6453.64, 6455.31, 6465.82, 6466.41, 6472.05
KATAG-U	KATAG-U	その他語形	4647.69, 5507.09, 6522.03, 7365.51, 7420.91, 1232.75, 1241.05, 1250.59, 1261.80
SASI/～•KATAG-U	SASI/～•KATAG-U	SASI/～•KAKU	1261.32
NINAU	NINAU	KACUG-U	5696.68, 6421.82
NINAU	NINAU	NAKAZURU	7320.95, 7332.52
NINAU	NINAU	SASIAU	6521.20

桃の符号を与えたもの，つまり66図と68図が同語形で67図が別語形の組み合わせのものは，ほとんど見るべき分布がない。以下，組み合わせ語形と地点番号を示しておく。

66図	67図	68図	
SASI/～•KATAG-U	KATAG-U	SASI/～•KATAG-U	1241.96
KACUG-U	KATAG-U	KACUG-U	2812.96, 4653.84, 4694.26
KACUG-U	NINAU	KACUG-U	1739.10, 4744.10, 5586.56, 6466.36, 6517.50, 6529.88, 6640.76, 6651.64, 6662.01, 7401.60
*KACUGU(KACUGERU)	NINAU	KACUG-U(KACUG〔ŋ〕U)	5586.56
KATAG-U	NINAU	KATAG-U	6466.36, 6485.30, 7374.15, 7400.11, 7434.02, 8315.46,
KATAG-U	KAKU	KATAG-U	6472.58

橙の符号は，67図と68図が同語形で66図が別語形の組み合わせのものである。このうち，66図 KACUGU，67図・68図 NINAU は，静岡・愛知・岐阜・福井とその周辺の連続した地域のほか京都・兵庫・鳥取，愛媛，熊本などにも見られ，66図 KATAGU，67図・68図 NINAU は，近畿，鳥取・島根，香川・愛媛，九州中部西部などのかなり広い地域に分布しいる。それ以外の組み合わせ語形と地点番号を示すと次の通りである。

66図	67図	68図	
KACUG-U	KATAG-U	KATAG-U	4666.42, 4668.27, 5620.30, 7307.14
KATAG-U	KACUG-U	KACUG-U	4687.01, 6472.68, 6473.04
*KATAGU	NINAU (NIRAU, INOO)	NINAU (NINAU, IRAU, INOU)	6426.47, 6429.65, 7301.67
NINAU	KACUG-U	KACUG-U	5594.02, 7302.66
その他語形	KATAG-U	KATAG-U	0248.00

空および紺で示したもの，つまり，66図，67図，68図ともに別語形の組み合わせのものは，ほとんど西日本にのみ分布している。空の符号のうち66図 KACUGU，67図 NINAU，68図 SASI/NAKA・NIN-

AU は愛知，滋賀およびその周辺に分布しているほか，6417.85 にも見られる。66 図 KATAGU，67 図 NINAU，68 図 SASI／NAKA・NINAU は，近畿，九州中西部地域のほか石川・福井，香川などにも見られる。いずれも，橙の類に通ずる性格を持っているものである。そのほかの少数地点に分布しているものの組み合わせ語形と地点番号を示しておく。

66図	67図	68図	
KATAG-U	SASI/～・KATAG-U	その他語形	1251.73
KATAG-U	NINAU	SASI/～・KATAGU	6427.93

紺で示したものでは，66 図 KACUGU，67 図 NINAU，68 図 KAKU が四国のほか 6384.25，6459.87，6503.73，7313，68 に，66 図 KACUGU，67 図 NINAU，68 図 CURU が岐阜・愛知・三重のほか佐渡に，66 図 KACUGU，67 図 NINAU，68 図 SASIAU が京都・兵庫の北部，滋賀東部，岡山東部，鳥取東部や近畿南部などに，66 図 KATAGU，67 図 NINAU，68 図 KAKU が兵庫，四国，九州北部などに，66 図 KATAGU，67 図 NINAU，68 図 CURU が近畿南部に，66 図 KATAGU，67 図 NINAU，68 図 NAKAZURU が九州中西部に，66 図 KATAGU，67 図 NINAU，68 図 NAKADORU が近畿南部に，66 図 KATAGU，67 図 NINAU，68 図 SASIAU および 66 図 KATAGU，67 図 NINAU，68図その他語形，が混在しながら兵庫とその周辺，近畿南部などに，それぞれ分布している。それ以外の組み合わせ語形と地点番号を示すと次の通りである。

66図	67図	68図	
KACUG-U	KATAG-U	KAKU	6385.10，6495.88，6497.00，6497.77，7317.29
KACUG-U	KATAG-U	CURU	5538.49
KACUG-U	NINAU	SASI/～・KAKU	7430.75，7430.80
KACUG-U	NINAU	NAKAZ-URU	7332.27
KACUG-U	NINAU	NAKAD-ORU	7501.14，7501.68
KACUG-U	NINAU	その他語形	6457.18，6511.49，6593.98
KATAG-U	KACUG-U	NINAU	5574.68，6543.56
KATAG-U	KACUG-U	NAKAD-ORU	6590.35
KATAG-U	NINAU	KACUG-U	6437.94，6472.68，6495.82，7302.71，8302.55
KATAG-U	KAKU	NINAU	7324.24
SETTA-RAU	KATAG-U	NAKAD-ORU	6591.57
SETTA-RAU	NINAU	NAKAD-ORU	6591.57
KARUU	NINAU	KAKU	7322.79
その他語形	KATAG-U	KAKU	7408.50
その他語形	NINAU	SASI/～・KAKU	7323.84

以上を資料として歴史を再構成することは，興味深いことではあるが，容易な業ではない。3 枚の地図に示した項目以外にも，多種多様な「かつぎ方，背負い方」があるはずだからである。『日本言語地図』でも，64 図「おんぶする（幼児を負う）」，65 図「しょう（包を背負う）」，294 図「かつぐ（片方の肩で包を担ぐ）」があり，無論それ以外にもいくつかあろう。当然，それらを含め，さらに物の運搬法自体の歴史的変遷ともかかわってくるはずである。たとえば，NINAU が 3 項目のうちどの項目に位置しているか，つまり，NINAU がそれぞれの意味分野へどのようにかかわっているかなどが重要な手がかりになりそうに思われるが，なお考えるべき点が多い。

ただ，分布の仕方そのものからだけで見れば，緑で示した 3 図同語形が，近畿，四国を除く国の東西に分布していることから，これらが歴史的にもっとも古いものだとしてもよさそうに思われる。この考えに従えば，もともと各種の担ぎ方の表現間には区別がなく，主として東日本がカツグ，主として西日本がカタグ，そして出雲地方がニナウであったと見ることになる。これをもとにすれば，次の時期，3 種の担ぎ方のうち 1 種を区別する傾向が生じ，赤，桃，橙の符号の分布が現われるということになる。この中には，たとえば，66 図 KACUGU，

67図 KACUGU, 68図 SASIKACUGU という区別の仕方から KACUGU, KACUGU, NINAU の区別のものまでが含まれていて，これらは分布の上でも，ほぼ緑の符号に隣接していることがわかる。そうだとすれば，もっとも新しいものは，紺の符号で示した組み合わせではなかろうか。そして，空の符号で示した組み合わせは，赤，桃，橙から紺へいたる過渡的な段階とみることができよう。

地域的な関連ということから見れば，近畿南部と西九州が，66図 KATAGU, 67図 NINAU, 68図 NAKAZURU または NAKADORU という類似した傾向を示し，中国，東九州，琉球が3図とも KATAGU という共通性をもっている。このことは，東日本の分布が単純であるのに対して西日本が複雑であることと共に——これは全言語地図を通じて言えそうなことである——日本の古代社会の成立，さらには日本民族の歴史を探るひとつの手がかりとなるのかもしれない。

今後の課題としては，ことに西日本の地域から，語形の組み合わせで興味ある小地域を選んで，さらに多くの運搬方法を示す表現をとりあげて，詳細な調査を実施する方向がありそうである。

296. かぞえる(お金を数える)

この地図は，第2集所載の69図「(鉛筆を)かぞえる」と関連が深いので，解説とともに参照してほしい。この調査項目は，69図の場合と違って，全地点での調査ではなく，後期調査で除いたものであった。この地図で＜併用処理＞した語形は，KAZOERU である。

なお，調査に際しては，この296図のお金に関する質問が先にあり，69図の鉛筆に関する質問が，それに続いていた。回答の分類や符号の与え方などは，69図に準じてある。ただし，この地図を作るにあたって69図を見直してみると，分類について次のような問題があった。

69図の場合——

(見出し)	(内　容)	(地　点)
KAZOERU	kazoetemiru	7308.33, 7383.83, 7383.98
	kazoetʃimiru	7352.97, 8305.76
KANZERU	kandʒetemiru	7259.22, 7383.83, 7390.26, 8301.19
	kandʒetʃemiru	9313.55
KANDERU	kandetemit	9322.52
KAZUERU	kazɯetemiru	7304.26, 7304.29
KANNERU	kannetemiru kannetemit	7352.61, 7372.03, 7372.96, 7382.58
YOMU	jondemiru	5557.42

これらは，それぞれ KAZOYURU, KANZURU, KAZUYURU, KANNURU, YON などとすべきものだったかもしれないのである(8333.03の〔kanze?-mi?〕が KANZURU としてあるといった例外もある)。なお，以上は，69図の回答のうち，～テミル式の回答全部ではなく，地域的に問題になりそうなものの摘記にすぎない。

しかし思えば，これらをすべて分類の誤りとすることもできない。したがって，296図を作るにあたっても，～テミル式の回答は，69図に準じてすべて一般的な形に含めて示すことにした。

296図の場合——

(見出し)	(内　容)	(地　点)
KAZOERU	kazoetemiru	7308.33, 7383.83
KANZERU	kandzetemiru kandʒetemit その他	7352.97, 7380.74, 7383.83, 7390.26, 8301.19, 8304.66, 8332.59, 8333.03, 8334.25, 8350.68, 9313.55
KANDERU	kandetemit	9322.52
KAZUERU	kazuetemiru	7304.29
KAZUNERU	kazunetemit	7352.97, 7353.51
KANNERU	kannetemiru kannetemit	7352.61, 7364.34, 7372.96, 7381.38, 7382.58
SIRABERU	ʃirabetemiru ʃirabetemit	7353.51, 7372.96, 8302.55

これらも，～テミル式の答えの全部ではなく，分類に問題のありそうなものの摘記である。

このほか,69図と扱いの違うのは,0340.00の〔kandʒo:i〕が，69図ではKANZYOOSYUNに含めて示してあるのに対して，ここではKANZYOOIという見出しを立てたこと，69図では「その他」の中に，〔ʃiraberɯ〕4704.96, 4724.75, 6477.02, 6572.22, 6576.28, 6617.34, 7401.92, 7403.16, 〔kandʒo〕5770.46, 5780.57, 6576.32, 〔sannjo:〕6465.40を含めたのに対して，ここではそれぞれ見出しとして立てたこと，などである。

分布は，69図とよく似ており，69図の解説に加えるべきことは,ほとんどない。カゾエルやヨムの類が69図よりややすくないこと，カンジョオスルがやや多いこと，琉球での違いが目立つこと,などを指摘できようか。お金と鉛筆という，対象の違いに由来するものといえよう。見出しの内容および分布についていくつか指摘するとすれば，KAZEERU, KAZERUなどとしたものの～ZE～部分が，多く〔dʒe～ʒe〕であったこと，KADOERU, KADOYURU, KANDURU, KADUYURU, KANDUYURUのようにDOやDUの現われるものは大分に多いが，三重，中国地方の瀬戸内海岸,屋久島にもあること,KADERU,KANDERUのようにDEの現われるものは，青森，兵庫，屋久島にあること，KANNERU, KANNURUは西北九州のほか，兵庫，愛媛にもあること，KARRERUは兵庫，KANMURUは福岡であること，などであろうか。

なお，〔kãdzoerɯ, kãdʒoerɯ〕などはKAZOERU, KAZYOERUなどに，〔kazoju?, kazuju?〕などはKAZOYURU, KAZUYURUなどに,〔kadᶻoerɯ, kadᶻojuru〕などはKADOERU, KADOYURUなどに含めてある。69図と同じ取り扱いである。

KAZOERUが＜新しい，上品，共通語的，希＞であることから併用処理の対象となったものは，50ほどであった。このうち，残された語形がKANZYOOSURUの類であったものは35，YOMUの類であったものは6であった。

併用の場合の注記を参照すると，これに対してKANZYOOSURUの類が＜新，上，希＞のものもあった。0779.03, 1854.24, 4653.84, 4730.45, 5597.78, 5666.10, 5669.96, 6515.24, 6523.86, 6553.22, 6562.22, 6572.97, 6577.71, 6583.41, 6661.02, 7432.95, 7523.30, 0249.17, 0294.66である。KANZYOOSURUの類が高額の場合(*金銭の場合),KAZOERUの類が少額の場合(*物の場合)という注記もあった。*4609.54, *5632.28, 6339.35, *6409.35, 6409.72, 6544.26である。

沖縄のSANMINS(Y)UNの類とYOMUの類の併用では，ほとんどが前者を＜多＞とするが，1270.29のようにYOMU類を＜多＞とするもの，1251.73のように相手が数えればSANMINSUN，自分がするならYUMUというのもあった。

そのほか，6545.19で，KAZOERUに対してKANZYOOSURUはツケ買いをするとき，というものなどもあった。

以上と重複する点もあるが，凡例を見ながら，69図と対比しつつ、注意すべき点を列記しよう。

KAZOERU 中には〔kãdzoerɯ〕3619.08, 4735.37, 69図では3619.08, 4619.63, 4637.68, 4735.37を含む。

KANZOERU は,3767.87のみ。69図は，2765.02, 3746.76, 3767.87。

KAZYOERU は，3727.21, 4722.55。69図は2791.88, 4722.55, および〔kãdʒoerɯ〕の4762.99。

KANZYOERU は，2617.68, 2791.88, 3727.21, 3737.32。69図は2617.68, 2791.88, 3737.32。

KAZEERU は，4714.22の〔kãdʒɛ:rɯ〕，69図は4714.22の同表記のものと、4713.60の〔kãdze:rɯ〕を含む。

KANZEERU は，69図の3757.09と5674.06のみ。

KAZERU は，かなり多い〔kãdzerɯ, kãdʒerɯ〕を含む。69図も同じ。

KANZERU に，～テミル式の回答を含むことは，すでに述べた。

KAZZERU は，69図の6447.84のみ。

KAZIIRUは,4733.35, 4763.11(後者は〔kãdzĩ:rɯ〕)。69図も同じ。

KANZIIRU は，3715.51の〔kandzɪirɯ〕と3746.09の〔kandʒĩjerɯ〕。69図も同じ。

KANZIRUは，2795.01, 5565.55, 6449.19, 6449.20。69図は，以上のほか6449.84。

KAZOYURU には，〔kazoju?〕とする7340.24, 7341.47を含む。69図では，7340.27も同じ。

KANZOYURUは,296図8324.26のみ。69図では，KANZYOYURUとして，8324.26の〔kandzojuru〕と，8325.03の〔kandʒojuru〕をまとめて示してある。

KANZOYU は，7360.47のみ。69図も同じ。

KANZOORU は，3766.47のみ。69図も同じ。

KADOERU には，7309.61の〔kadᶻoerɯ〕を含む。

69 図には 7513.15 にも同様のものがある。

KADERU は，2781.34 のみ。69 図は2790.38 のみ。

KANDERU は，6449.19，6550.13，9322.52 のみ。69 図には，以上のほか 2771.64 にもある。

KADOYURU には，7356.70，7365.67，7366.87 の〔kadᶻojuru〕を含む。69 図の同表記のものは，7356.70，7356.98，7366.87 である。

KANDURU は，9312.42 の〔kandut〕のみ。69 図も同じ。

KADUYURU は，7334.44，7335.34，7365.25 の〔kadᶻujuru〕を含む。69 図で同音のものは，上記 3 地点に 7377.27 が加わる。

KANDUYURU は，7326.41 のみ。69 図も同じ。

KAZUERU には，3783.08 の〔kãdzɯ̃erɯ〕(69 図も同じ)，6401.89，6403.60，6411.33，6412.12，6413.10，6421.26，6422.16 の〔kaʒierɯ, kaʒïerɯ〕を含む。これは，KAZIIRU に入れることもありえた。69 図では，以上 7 地点のほか，3699.55，3764.86，4741.44，6403.62，6420.58 も同音であった。

KAZUERO は，69 図6667.81 のみ。

KAZUYURU には，7341.42 の〔kazuju?〕を含む。69 図も同じ。

KANZUYURU は，8315.89 のみ。69 図も同じ。

KAZURU は，69 図 7396.16 のみ。

KANZURU には，両図を通じて R が反舌音のもの，〔kanzut, kanzu?, kanzui〕を含む。

KANZYURU は，7361.82 の〔kandʒut〕のみ。69 図も同じ。

KAZURERU には，6410.77，6411.66，6412.48，6422.93 の〔kaʒireru〕を含む。69 図では，以上 4 地点のほか，6411.80 も同音であった。KAZUERU と KAZIIRU が別見出しとしてあるのだから，それに準じて分出することもありえた。

KAZURURU は，7331.41 の〔kazurut〕のみ。69 図も同じ。

KARRERU は，6448.61 のみ。69 図では，6414.25，6447.39，6447.84 も同音であった。

KARRURU は，69 図 7347.93 のみ。

KAZUNERU に，KAZUNURU に入れるべきだったかもしれない～テミル式の回答が含まれていることは，すでに述べた。別に，6402.94，6420.34 の〔kaʒineru〕(69 図は以上 2 地点のほか 6402.53) も含む。

KAZUNURU には，7373.23，7373.92，7381.97 (69 図は以上のほか 7373.56，7382.01) の〔kazunu?, kazunut〕を含む。

KAZUMURU は，7332.46 のみ。69 図は，以上のほか 7332.97，7342.76 にもある。

KANNERU には，すでに述べたように，KANNURU に入れるべきだったかもしれない～テミル式の回答を含む。

KANNURU には，7362.42，7372.96，7381.97 の〔kannut〕(69 図は 7381.38，7381.97 のみ)を含む。

KANURU は，69 図 7259.98，7269.96，7323.84 のみ。

KAINURU は，69 図 7266.60 の〔kainu?〕のみ。

KANNYUU は，69 図 7363.59 のみ。

KANMURU は，296 図 7311.68 のみ。

KAZAERU は，6584.90 のみ。69 図も同じ。

KAZYOYUI は，69 図 0276.50 のみ。

KAZYOOI は，0276.50 のみ。69 図も同じ。

KANZYOOI は，0276.50，0340.00 のみ。すでに述べたように，69 図では，0340.00 のこれにあたるものを，KANZYOO SYUN に含めてある。

KAZOERYUM は，0256.08 のみ。69 図も同じ。

KAZOERYUN は，69 図 0247.31 のみ。

KAZYOYUN は，296 図 0276.50 のみ。

KANZYOOYUN は，296 図 0276.50 のみ。

KAZYUIN は，69 図 1271.20 のみ。

KAZYUUIN は，1148.59 のみ。69 図も同じ。

KANZYOOSURU には，6576.28 の〔kandʒo:o suru〕，5609.26 の〔kanʒo:ïsɯrɯ〕，4689.86 などの〔kandʒo:sïrɯ〕，7249.95，8312.75，8341.46 の〔kanʒo:sut〕，5685.37 の〔zenekandʒo:sɯrɯ〕などを含む。69 図も以上に準ずるが，6515.70 の〔kandʒio suru〕などもある。

KANZOOSURU は，296 図に 5 地点，69 図に 3 地点。

KANZYOSURU には，2619.28，3724.96 の〔kandʒokosuru〕，3716.58 の〔kandʒokosïru〕，3720.58，3751.81 の〔kãdʒosɯ̃rɯ̃〕などを含む。69 図も大体同じ。

KANZOSURU は，3796.48 と 3797.32。69 図は，3766.97 と 3796.48。

KAN'YOSURU は，4770.62 のみ。69 図も同じ。

KANZYOOSIRU については，特に言うことがない。

KANZYOOSIN は，296 図 6657.54 のみ。

KAN'YOOSIRU は，296 図 6720.67 のみ。

KANRYOOSIRU は，69 図 4637.20 のみ。

KANZYOSIRU については，特に言うことがない。

KANZYOOSERU の 5588.78 〔kandʒooseɯ〕は，KANZYO-O-SERU とすれば，〔kandʒo:osɯrɯ〕を KANZYOOSURU にしたのと同じ原理で，KANZYOSERUにすべきだったかもしれない。69図も同じ。

KANZYOSERU については，前項の問題以外，特に言うことがない。

KANZYOZERU は，5567.46 のみ。69 図も同じ。

KANZYOOSU は，3725.12 のみ。69 図も同じ。

KANZYOSU には，3649.64，3730.43，3771.29 の〔kãʒosɯ̃〕(69 図は 3649.64，3730.39，3730.43)を含む。69 図には，別に，2781.58 の〔kandʒokosï〕も含む。

KANZYOOSOWA は，7659.62 のみ。69 図も同じ。

KANZYOOSYOWAは，7659.31, 7659.40, 7659.51。69 図は，このうち 7659.31 が KANZYOSYOWA。

KANZYOOSYUN は，0256.89，0257.43 の〔kandʒo:ʃum〕, 0275.97 の〔kandʒo:ʃuN, kandʒo:ʃuri〕の併用，0265.96 の〔kandʒo:ʃuN, kandʒo:ʃui〕の併用などを含む。

KANZYUSYUN は，296 図 0294.66 のみ。

KAZYESURU は，69 図 3771.44 のみ。

KANZYOO は，6449.19，6457.45，6515.24，6541.27 のみ。この見出しの内容が 69 図でその他に分類してあることは，すでに述べた。

KANZYO は，1778.45，1786.13，2811.01，5770.46，5780.57，6576.32 のみ。この見出しの内容が 69 図でその他に分類してあることは，すでに述べた。

YOMU の中には，6458.40，6552.71，7406.53の〔kazujomu〕が含まれている。なお，69 図の YOMU の中には，〔kazujomu〕が全部で 15 地点，別に〔kazuojomu〕が 5 地点あった。～テミル式の表現については，すでに述べた。

YON には，特に言うことがない。

YOBU は，69 図 6439.17 のみ。

YUMYURI は，0237.79 のみ。69 図は別に 0247.56 にもある。

YUMIRI は，0249.17 のみ。69 図も同じ。

YUMYUI は，69 図 1213.76 のみ。

YUMII は，69 図1156.89 のみ。

YUMIILÏ は，2068.08 のみ。69 図も同じ。

YUMYUM は，0246.97，0256.76，0257.12 のみ。69 図は，以上のほか 0246.48，0294.93 にもある。

YUMYUN は，0238.55 のみ。69 図は，そのほか 0294.93，1213.76 にもある。

YUMIN は，0294.66，1250.59，1271.05 のみ。69 図は，0294.66，1167.01，1231.88，1271.05。

YUUMIN は，1251.04，1251.27 のみ。69 図も同じ。

YUMUN については，特に言うことがない。

DUMUN は，2072.20 のみ。69 図も同じ。

YUUMUN は，69 図 1241.96 のみ。

YUM については，特に言うことがない。

YUMYAASÏ については，特に言うことがない。

YUBYUN は，0237.84 のみ。69 図も同じ。

YUNYUN は，69 図 1231.72 のみ。

YUNUN は，1221.47，1270.29 のみ。69 図も同じ。

YUYUN は，69 図 0228.96 のみ。

MIRU は，296 図 9 地点，69 図 6 地点。

SAN'YOOSURU は，296 図 6484.78，7417.27 のみ。

SAN'YOSURU は，296 図 6494.08 のみ。

SANNYOOSURU は，北陸から西に 20 地点ほど点在。九州南部の 8300.87，8310.26，8362.81 は〔saɲɲo:sut〕。69 図は 6385.98，6515.24 のみ。

SANNYOSURU は，5565.12，5620.32，7373.23，8332.42，8342.35。このうち 7373.23は〔saɲɲosut〕。69 図にはない。

SANNYOSIRU は，296 図5536.99 のみ

SANNYUUSURU は，296 図 6461.27 のみ。

SANNYOOSYUN は，0247.31 と 0247.56。後者は〔saɲɲo:ʃuri〕。69 図にはない。

SANNYOO (名詞形であろう) は，6379.67，6416.58，6515.24。69 図の見出しにはないが，その他のうち 6465.40 がそれであった。

SANTOOSURU は，296 図 8313.72 のみ。

SANMINS(Y)UN は，琉球に多い。1156.89 の〔sammiɴsu〕，1261.16 の〔sammiɴΦuŋ〕，1251.98，2076.98 の〔sammiŋhuŋ〕，2076.97 の〔sammindusï〕を含む。69図は，1233.61 のみ。

SANMIISYUN は，296 図 0294.93 のみ。

SANMESYUN は，296 図 0228.96 のみ。

SANMIN (名詞形であろう) は，296 図 1211.69 の

み。SANNYOO の場合と違って，69 図の「その他」に分類されたものの中にもない。

KAZU(O)SURU は，6701.01，6711.60，7435.07，7446.26。後 2 者がオをとる。69 図には 12 地点あらわれる。見出しは KAZUSURU となっているが，KAZUOSURU 6517.70，6569.12，7435.07 や，KAZUUSURU 6646.74，6677.41 を含む。

KAZUSIRU は，5790.79 〔kazɯ:ʃirɯ〕。69 図では，このほか 6616.93 の〔kazuʃiru〕を含む。

KAZU(O)SERU は，6557.36 のみ。この地点でオをとるものとオをとらぬものが併用される。69 図では，オのある 6547.24，6547.67，6557.36 と，オのない 6518.87 がその内容である。

KAZOKU は，5539.43 のみ。69 図も同じ。

SINZYOOSERU は，6567.79 のみ。69 図も同じ。

ARATAMERU は，296 図 6551.18 と 6562.64 のみ。

ARATAMURU は，296 図 7382.58 のみ。

SIRABERU は，25 地点ほど。質問の際の注意にこの種のものは採らない，としてあった。69 図では 7 地点（うち 1 地点は〔kazuʃiraberu〕）に現われたが，その他に入れてある。

SIRABURU は，296 図 7311.68，7332.46，7364.34 のみ。

その他は，7275.84 〔kanze〕。69 図同地点同内容であった。69 図のその他には，すでに述べたもののほか，1727.75 の〔namboaru〕，3775.83 の〔kagetemiru〕を含む。

無回答は，5548.35，6497.36，6533.36。69 図は，4687.01，5604.28，5677.85，6533.36，7321.87，7405.35 の 6 地点であった。

297. カドの意味

この地図は，質問番号 144 に対する回答と，質問番号 145 に対する回答とを，総合的にまとめて示したものである。

このうち 145 の質問はふつうの S 式，すなわち，ある語形で示してそれがある特定の意味用法があるかを尋ねる形式であって，この種の質問形式の地図は，この『日本言語地図』の中にもいくつか地図化されているが，144 の質問はいわば本来の S 式，すなわち，ある語形を示してその意味を自由に答えてもらう形式であって，調査に際しては試みられたものの，他と項目の地図化にあたって参照することはあったにせよ実際に地図化されて公表されるものは，『日本言語地図』中この地図以外にはないものである。したがって，この地図は一種独特なものと言うことができよう。

144 式の質問が調査されながら地図化されなかった理由は，ざっと次の通りである。1．回答の分類が困難である。2．多義語でありながらひとつの意味しか回答されない場合が多い（らしい）こと，など。

なお，この地図の内容は，第 4 集 196 図「カドを“前庭—仕事場”の意味で使うか」と関連が深いので，その解説とともに参照してほしい。

凡例を見ることにする。

左欄にたてに並んでいるのが，質問 144 に対する回答である。回答は前述の通り自由形式であったから，分類に困難があった。なお『全国方言辞典』には，ここに示した意味のほか，「便所（会津，新潟魚沼地方）」があった。以下分類の内容のうち問題になりそうなものを摘記するが，“本来の S 式”（一般の質問では意味を与えて語形を自由に聞く質問が行われる。これはその逆）のむずかしさを示すことになる。

「屋外・家の周囲」としたものの中には，6422.93 の＜屋敷の外＞，6475.07 の＜外の広い所＞，6450.45 の＜屋敷内で建前（ママ）の外＞，6480.41 の＜家を離れた所＞，6550.96 の＜構造以外，入口の空地，軒先より外＞，6561.49 の＜仕事場であるとは限らない＞，6585.83 の＜家の外の軒＞，6586.32 の＜表側のかど，裏側のぐるり＞，6623.53 の＜家の周りの軒先と家との間＞，7238.90 の＜ノキサキ＞，7323.17 の＜軒下のこと＞，7412.71 の＜屋外でアマオチの外の所＞，7432.95＜宅地全部を含む場所〔建坪も含む〕＞，7441.89 の＜家の近く〔の畑〕＞などを含む。

「境」としたものは，4780.64 のみで，詳しくは＜隣接地間の境，田の境＞であった。

「家の前，仕事場，干場」としたものの中には，5471.59 と 5472.34 の＜広場＞，5722.37 の＜外の庭＞，6407.43 の＜寺の前の広庭＞，6451.79 の＜表通りに面した所＞，6460.08 の＜家の前や横＞，6504.01 の＜入口のひろっぱ＞，6545.41 の＜家の前の仕事場，道も含む＞，6562.64 の＜広くなっている庭＞，6575.66 の＜門内の庭先＞，6585.25 の＜出入する外庭＞，7361.17 の＜シノバ〔収納場〕＞，7504.11 の＜庭園のような空地。発音は〔kan-

do]>，1169.84の<墓の前の囲いに囲まれた広場，民家の母屋の前の広場には言わない>などを含む。6545.41は「道」との併用にすべきだったかもしれないし，7361.17の分類にはいま思えば疑問がある。

「家の前の道，道，道端」の中には，4723.58の<道路よりのところ>，5667.81の<道路に面したそば>，6477.02の<往来の一部分>，6485.14の<店先の往来の道路>，6601.93の<家の外のこと，ここで言えば歩道のこと〔市街地ですぐ前は歩道〕>などを含む。

「家」としたものは，5636.74の<一軒を勘定するとき>，5641.13の<奉公人を別家させたその家で，カドというのは好ましくない所>，7430.75の<対社会的に生計を立て一戸も構えること〔あのカドは工面がいい〕>などを含む。

「入口，門のあたり，戸口」としたものには，4654.52の<庭の入口で，ここで下駄を脱ぐ>，5653.42の<道から家への小道，またはその別れ場所>，5679.86の<家の前に長く出ている所>，5712.70の<公道から屋敷へ，そこから建物の入口あたりまで>，6412.91の<道路から屋敷へ入る傾斜>，6422.16の<門前>，6432.22の外庭から道まで，または道から外へ行くまでの場所>，6457.45の<家を出たところ>，6461.53の<家のジョーワキ，家のほとり>，6479.51の<屋敷の門の外側>，6491.65や6646.23の<家の出入口，表の入口>，6494.55の<戸口の外側1メートルぐらいのところ>，6546.15の<家から道路へ出る所>，6567.79の<土間から外に出た道>，7427.90の<家の前の道路のある所>などを含む。5653.42は，次項との併用とすべきだったかもしれない。

「道から家への曲り角」には，4722.55の<家の前の角になっているところ>，6401.89の<浜へ下る家並の角>，6626.46の<家の外に出てまがる所>などを含む。

「道や町の曲り角」には，0840.33の<家をまがる所，四つ角>，1756.32の<町の辻>，2741.46の<路地に入る曲り角>，5678.71の<道の別れるところ，四つ角などの角>，6595.32の<町。道の角>，6638.14の<家の外の道などの曲がった所>，7385.61の<物や場所の曲り目>，7436.40の<カドの家のように曲った所>などを含む。

「家・屋敷の角・隅」には，6626.71の<建物の中などのまがる所>，6628.59の<家の突端>，7352.61の<家のぐるりの隅，屋敷中の角隅>，7392.33の<角—屋敷，場所の曲って行く所>，7659.40の<石垣のかど>，0294.66の<屋敷の四つ角>，1261.80の<畑のかど—karu>などを含む。

「角，隅」には<曲り角>という説明のあるものを多く含むが，6607.03の<柱のはじなど>，7373.92の<物の隅>，2076.99の<もののとがり—kątu>などもあった。

「物洗場，流れ，井戸」の中には，3712.89の<水の湧いているところ>，3714.27の<家の周囲の井のあるところ>，3744.18，3776.51の<流れをせきとめて使う用水>，3783.11の<足洗い場>などを含む。川所などが語源であれば，別語とすべきかもしれない。

「無答」としたものは，斜線を引いてあるものが多いが，単に<カドグチ>などとあって説明不十分なもの，6441.55の<カザンバ〔花山場〕もある，ツキヤマになっていない所>，6571.68の<バのこと>などのようによくわからないもの，6461.27のように<門，出入口>とあるが語形がカドグチであるものなどを含む。

さて，凡例上欄によこに並んでいるのが145の質問に対する回答である。

「言う」としたものの中には，1727.75，2700.48，6472.58，6571.68，7322.81のように<希>とあるもの，1719.38，1862.48，7460.39のように<古>とあるものを含む。

「カイドと言う」の中には，5516.19，5536.99のように<語形はガイド>とあるものを含む。この類は，質問文中で与えた語形がカドだったために，実際より少ししか現われなかったと思われる。

「言う(?)，言わない(?)」としたものは，実際に<言う(?)>，<言わない(?)>とあったもののほか，6439.77の<使う場所をカドと言う。使わない場所はカドではない>，6449.20の<所有地を言う>，6586.27の<どちらとも答えられる>などを含む。

「言わない」の中には，単に<言わない>とあるもののほか，さらに，たとえば4753.76のように<入口だけを言う>，7404.12のように<家の出入口に通じる道路>のような説明のあるものもあった。これらの145についての注記は，この地図では144の回答とみなして分類してある。

「無答」は，NRとあるもの，白紙のもの，斜線を引いてあるもの，などである。

なお，カド・カイドの音変種について注記のあるものを列記しておこう。〔kado:〕1211.69，〔kando〕7504.11，

〔karo〕4672.19, 7321.46, 7322.21, 〔kazo〕7368.32, 〔kadu〕奄美以南に多い, 〔kadu:〕1221.47, 1231.88, 2075.22, 〔hadu:〕1242.00, 2151.67, 〔kạtu〕2076.99, 〔hadu〕1232.75, 2085.69, 〔karu〕1156.89, 1169.84, 1241.05, 1261.80, 〔haru〕1232.29, 1271.05, 〔ke:do〕5665.46, 5791.68, 〔kɛ:do〕5792.18, 〔kɛdo〕6517.31, 〔kædo〕3705.82, 〔gaido〕5516.19, 5536.99。

よこ軸の各欄を左からAないしEとし，たて軸の各欄を上から1ないし12として，各欄中地点のわずかなものを挙げておこう。

Aの4　6473.65, 6601.93。

Aの8　北海道に6地点。あと神奈川，三重，山口，高知，対馬に計7地点。

Aの9　1719.38, 7352.61, 7433.52。

Aの10　ほとんど併用(14地点)。単用は5588.81のみ。

Aの11　3774.61のみ。

Aの12　6378.87, 6441.55, 6461.27, 6571.15, 6571.68, 6622.69。

Bの1　北陸と岐阜北部の7地点。

Bの3　北陸を中心に，長野・岐阜・滋賀に16地点。ほか山口にもある。

Bの4　北陸を中心に，新潟，岐阜に16地点。ほか群馬に1地点。

Bの6　5665.46, 5791.68, 5792.18, 6524.66。

Cの1　6449.19, 6527.22, 6528.21, 6586.27, 7441.89。

Cの4　6457.45のみ。

Cの5　5636.74のみ。

Cの6　九州に5地点のほか，福島・群馬，兵庫，高知に計5地点。

Cの8　7352.97のみ。

Cの9　7424.67, 7432.44, 7435.07。

Cの10　5636.74, 7373.92, 7435.07。

Cの12　5751.89のみ。

Dの1　近畿・中国・四国・九州に計8地点。別に群馬に1地点。

Dの2　4780.64のみ。

Dの3　関東・中部，中国(小豆島を含む)に計12地点。ほか宮城に1地点。

Dの5　四国・九州に計9地点。ほか長野に1地点。

Dの7　千葉・神奈川・静岡にかけて5地点のほか，北海道，宮城・福島，島根，宮崎に各1地点。

Dの11　東北のみ。

Eの1　6452.83, 6479.26, 6480.41, 7501.14。

Eの3　6538.46のみ。

Eの4　6486.07のみ。

Eの6　7239.24のみ。

Eの8　8362.34のみ。

Eの10　7284.16のみ。

Eの12　5672.75のみ。

かくて，この地図の大勢は，以上で言及しなかったAの1，Aの3，Aの6(以上赤のべた符号)，Cの3(赤のぬき符号)，Dの3(橙符号)，Dの6(緑符号)，Dの8，Dの9，Dの10，Dの12，(以上紺符号)によって占められていると言えよう。

分布を概観しよう。

この地図で赤のべた符号を与えたものは，カドないしカンドが，145の質問によって，屋外を意味すると答えた地点をあらわす。たとえばAの10，あるいはAの12などは一見不思議な回答であるが，144の質問に際しては，まだ屋外の意味を思い出していないものと考えればよかろう。

赤のぬき符号を与えたCの2，Cの3，Cの4などは，屋外の意味をつかみかねて，首をかしげたと見るべきであろうか。Cの1は一見不思議であるが，145の質問に接して，よく考えれば南側をさすことが多いとか，144で<家の近く〔の畑〕>と答えたので，145に際してどう答えるべきか迷った，などが含まれよう。

Cの6ないしCの12を空としたのは，144の答えからみて，145の疑問が，否定的に傾いたと見るからである。

橙の符号を与えたものは，赤のぬき符号に準ずると見たものである。Dの2，Dの3，Dの4などは，厳密に考えれば，144の答えがあっても，145では「言わない」とするのがむしろ正しいと言うべきかもしれない。Dの1は，この点まさに不思議であるが，144の答えの分類では「屋外・家の周囲」には含めたものの，実際の答えは，6585.83 <家の外の軒>，7238.90 <軒先>，7323.17 <軒下のこと>などを含んでいる。これらなら，「屋外」ではないとするのは，むしろ当然といえるかもしれない。6469.77 <家の前と後の広場>，6475.07 <外の広い所>，7523.74 <家の前後の空地>なども，「屋外」ではないとしているが，そうかもしれないとは思う。ただし，

5635.65では，144＜家の外＞であり，145＜言わない＞とあり，理屈がつけにくい。

桃の符号を与えたものは，145の回答は無答ではあるが，赤符号に準じてもいいと考えたものである。

以上，赤・橙・桃の符号を与えた地点は，例外はあるが，大まかには，中部地方西半から，近畿・中国，四国東半，福岡地方にかけてまとまっている，といえよう。196図と対比すれば，共通性が認められる。

緑は，カドを，家の入口または屋敷の入口の意味で使う（ただし「屋外」の意味では使わない）と答えた地点を示す。

緑の符号は，これまた大まかではあるが，関東・中部地方東半，出雲地方，四国・九州というように，いわば赤・橙・桃の密集地域をとりかこむように分布していると言えようか。なお，奄美諸島の徳之島が注目される。

紺の符号は，144の回答と比較して，145の答えが「言わない」であってまさにしかるべきと思われる回答に与えた。

紺の分布は，大まかには，緑のさらに外側であると言えようか。東北，九州南部，琉球の島々がその主な地域である。

草の符号は，すでに述べたように全部で4地点に過ぎないが，以上の紺の符号に準ずるものと見てよかろう。

最後に，この地図から読みとれる歴史的解釈についての見通しを述べよう。

もっとも，ここでは，左欄1から10までの意味内容が，相互に関係しているという立場に立つ。また，11の「物洗場，流れ，井戸」の意味は，分布上からも，同音異義語である，という立場に立つ。

まず，紺の線符号で示した「角・隅」の意味がもっとも古いものではなかろうか，と考える。国の両極に見られるからである。「道や町の曲り角」「家・屋敷の角・隅」も，同類としてよかろう。これらを次の新しい意味への変化の芽とみる立場もあろうが，分布上からは，この考えを支持する傾向は認められないようである。おそらく，144の質問に先立って，141の質問の前に「今度は，家のまわりについてのことばなどです」という導入文があり，さらに141以下143までがニワについての質問であったことと，関係があろう。

紺符号に続くのが「入口，門のあたり，戸口」の意味であろうか。緑符号がその中心をなすが，赤符号を与えたものもかなり多い。この類の回答の中には，表記法（カドを門と表記する）の知識を介してのものがいくらか含まれているかもしれないが，分布状態から，大局は実際の使用の地域的傾向を示しているといってよかろう。この類のうち，赤は，緑に対して内側に寄って多く見られると言ってよさそうである。「角・隅」の意味から「入口，門のあたり，戸口」への意味の変化（意味の拡大）は，文献を徴すれば，どうも有史以前のことといってよさそうである。第2の意味は古文献にすでに見られる。この変化（拡大）は，7の「道から家への曲り角」あたりを媒介にしたのか，とも思えるが，7があまりにすくなく，いま断定はできない。もうすこし詳しい調査によって，結論に近づくことができよう。

6の意味から1あるいは3などへの意味変化（意味拡大）が，最後に起こったものと思われる。この意味変化は，195図「ニワを“前庭—仕事場”の意味で使うか」と対比することによって，「家の前の仕事場」をあらわす表現が，ニワからカドに移ったことを意味する，と言えよう。1ないし5あたりまでの意味の相互関係はつかみにくいが，分布上からは，3の意味が中心のように思われる。その密度がもっとも高いからである。この意味の変化（拡大）も，文献と対比すれば，かなり古い時代に起こったもののようである。

なお，もし「角（カド）」と「門（カド）」とが別語である，という立場に立てば，東北（北部），九州（南部）には，元来，「門」の意味のカドは存在しなかった，ということになろう。

以上，周圏論的な解釈によって概観したが，十分な自信があるわけではない。もともとあった「入口，門のあたり，戸口」の意味が，国の両極で平行的に失われた（意味の縮小があった）と考えたり，「家の前，仕事場，干場」の意味も，東北・関東，中部地方東半および九州北部で，平行的に失われた（意味の縮小があり，そこでニワの意味の拡大があった）と考えたりする道がないわけではないからである。

ここでは，どちらかといえばありそうに思われる解釈を中心に述べたわけであるが，一般化していえば，意味変化についての言語地理学を，在来の語形変化についての言語地理学の水準にまで高める研究・理論化が望まれる，ということになる。具体的には，関連意味領域の調査項目を調べる方法の深化とともに，S式質問をめぐっての研究法の開拓が期待される，ということである。

298. ほうほう(梟の鳴き声)—その1

この項目は全地点で調査したものである。

ふくろうの鳴き声は大変複雑なので，これを，その1，その2の2枚の地図にわけて示すことにした。なお，この鳥そのものの名は第5集212図としてすでに発表してある。鳴き声と関係する点が認められるので，参照しなければならない。ただし，この鳴き声の図で使った色や符号は，鳥の名の図の時とは全く独立に選定したために，対比上多少不便ではある。

その1とその2の2枚の地図を分けるにあたっては，これは程度問題であるが，人の普通のことばで解釈できるもの(意味のあるもの)を主体とした鳴き声をその2にまわし，そうでない一般的な擬声語およびそれに比較的近いものをその1に示すことにした。ただし，その原則によるとその1があまりに混雑するので，本来その1にあってしかるべきものを，便宜的にその2にまわした場合がある。その2の凡例，DESI から DEE までがそれである。

その1，その2とも，各地点の鳴き声の表示にあたって，符号をいくつか縦にならべて組み合わせアークじるしを縦に使って示した場合がある。たとえば，DOOKOO は DOO+KOO と分割して DOO の符号と KOO の符号を上下にならべ縦のアークで結んで示した。なお，同じ鳴き声の繰り返えしは繁雑になるので，表示しないことにした。すなわち，DOOKOO と DOOKOODOO と DOOKOODOOKOO は繰り返えしであると認めて，すべて単なる DOO+KOO という表示となる。ただし，DOOKOOKOO は DOO+KOOKOO と判断されるため，前のものとは違ってあらわされる。また，たとえば，DOOKOONORICUKEHOOSEEDOOKOO という鳴き声があれば，その1の図に擬声語 DOO+KOO が記載され，その2の図に意味のある NORICUKE+HOOSEE があらわされる。そして，末尾の DOO+KOO は重複する繰り返しとして省略される。この際同地点の実際の鳴き声はその1とその2とに分割して示されることになるが，その1の鳴き声とその2の鳴き声と，どちらが先であるかはわからないことになる。すなわち，NORICUKEDOOKOOHOOSEE, NORICUKEHOOSEEDOOKOO, DOOKOONORICUKEHOOSEE などの区別は，図からはわからない。実際の回答は『日本言語地図資料』を見るほかはない。

その1を詳しく見ると，全く同じものの併用が表示されていることがあるが，これは，その2の方の違いによるものである。その2の図とつながる完結した鳴き声に，差があるのである。なお，その2だけに示さるべき回答のあった場合は，その1の図にもその旨小ダガー符号によって表示してあるが，その逆の場合の表示はないことにも注意してほしい。その1の併用で，一方にその2送り(小ダガー符号)の表示のあるものがある。これは，その地点で複数の回答があり，その1で扱う範囲のものを含まない回答もあったことを示している。しかし，いずれにせよ，正確な各地点の完結した回答は『日本言語地図資料』に依らなければならない。

なお，回答の注記については，その2の図の説明の最後にまとめて示すことにする。

さて，その1には，上に述べたように擬声語およびそれに比較的近いものが集められている。H～を赤，P～を緑，B～を茶，T～，D～を空，O～，W～，U～を橙，K～，G～を桃，C～を草であらわし，その他のものを紺とした。符号は，色は違っても，同じ類のものは，すべて同じにしてある。たとえば，HOO(赤)，POO(緑)，BOO(茶)，KOO(桃)は同じ符号で示した。ただし，HOOHOO だけは非常に多いために，例外的に小さな符号を使った。このため，POOPOO, BOOBOO, TOOTOO, KOOKOO などと同じ形とはなっていないことに注意してほしい。

その HOOHOO が，地点数も一番多く，標準語形とすべきものであろう。ただし，この形は，奄美・沖縄，九州西南部，高知，岩手・青森にはあまり多くない。もっとも，HOOHOO は多くなくても，HUU(HUU)は高知にあり，HOO や HO は沖縄にあり，奄美に HU-(HU)や HWO(HWO)があることなどから，青森，鹿児島という本土の両端に H～が希薄であるにしても，H～の形が新しいなどということはできないであろう。擬声語である以上，個別発生も考えられるから，分布による先後関係の推定はむずかしい。

H～の類から順を追って注目すべき点だけをあげてみる。

HAOOHAO(O)は新潟中部だけに分布し，計5地点ある。実際の発音は開音〔hɔ:hɔ(:)〕であるが，特立するためにこのように書きあらわしてみた。

HU(HU)は奄美大島が大部分で，他に愛媛，沖縄に各1地点あるが，これらはすべて他の声と結び合っている。HUHUという単独の回答は高知および滋賀に1地点見られるだけである。

HUU(HUU)のうち，HUUは単用8地点，併用6地点であり，他はHUUHUUである。HUUのうち，単用2地点，併用5地点は四国であり，琉球の単用3地点はすべて他の形との結合形である。HUUHUUの，それだけで完結する形は，香川3，徳島9，愛媛10，高知30，山口14，和歌山20などの地点で見られる。分布が，本州四国の西南端側に多いということから，あるいはHOOHOOのひとつ前の時代の姿を示すのかも知れないが，全国的な観点からは，なんともいえない。なお，地図からはわかりにくいが，何かが上についてHUUHUUと最後に鳴く回答がすべて併用であることもいちじるしい傾向である。九州にHUUがなくてHOOがあるのは，新潟のHAO～と通じるものとも考えられるが，沖縄はHUUである。

HE～の語形を持つものは合計4種類あるが，1種ごとに分布する県が違っているので，お互いの関係は希薄である（EHEHEHEは岩手，HEEHEEは福岡，HEESUKEは山形，HEEKEは静岡。なお，HEEKEにはHEEKI 6632.64を含む）。HEEKEについては，なおその2にGENZIがあっておもしろい。

HYOO(HYOO)は全国で5地点に見られるが，分布からは個別発生的である。

HYOOT，HIAANが佐渡北端に1地点ずつあって珍しい。

HOは，HOのような単独のものよりも，～HOと上に何かつく鳴き方が多い。特に岩手の24地点の大部分はDEAHOなどの形である。このDEAなどはその1にあるべくしてその2に移したものである。

HOHOはHOのなかった北日本の北海道・青森に見られる点で多少特色がないこともないが，山形庄内，新潟，長野北部，鳥取のようにHOと重なるところもあり，元来はHOと分けないで考えるべきものであったかも知れない。なお，HOHOHOはHOHOとして扱い，HO＋HOHOやHOHO＋HOとはしなかった。HOHOHOHOもHOHOに入れてある。

HOT(HOT)で示したもののうちHOTは40地点，HOTHOTは16地点である。分布には特別の傾向はないようである。

5790.39(千葉)のHOKUROは，HUKURO(後述)などと語形は似ているが，分布上は関係はなさそうである。

HOI(HOI)は福島の1地点を除いて，中部以西にしか分布しない。そのうち，中部・近畿にその大部分（全部で24地点中18地点）が現われるが，厚い分布を示しているというほどのこともない。それ以外の6地点中3地点は沖縄である。HOIHOIが12地点のほか，HOIHOIHOIが長野に1地点ある。

HON(HON)はほとんどがHONであり，HONHONは，鳥取，鹿児島に各1地点(6413.43, 8351.41)であるが，HONはかならずなにかと複合しており，しかも，すべて複合した鳴き声の後部要素である。三重と鹿児島の各1地点を除けばすべて日本海側であり，特に，山形県の日本海岸の秋田寄りに3地点，新潟（9地点）およびこれに隣接した長野(13地点)，福島県只見地方（4地点）にかなりはっきりした領域が認められる。そのほか鳥取に4地点がある。鳥の名212図では天草にHONHONDORIがあるが，この鳴き声とは分布上結びつかないようである。

HOOは秋田，山梨，滋賀，和歌山，徳島・香川・高知，大分・佐賀を除く全都道府県に分布している。といっても，北海道・青森，愛媛，福岡・長崎・熊本・宮崎・鹿児島はそれぞれ1地点だけであるから，国の南北および四国ではHOOはあまり多くない，ということになる。

HOOHOはHOOとHOとに分けてもよかったが，全部で24地点と比較的多いので，ひとつの鳴き声としてあらわしてみた。大きな勢力は岩手の9地点であり，宮城2地点のうち北のものも含めることができようか。この分布域は岩手の東南部を中心としており，ここにはHOが重なって分布していることに注意したい。さらに，OOHO(OOHO)，OHO(OHO)が分布していることにも注意したい。

HOOHOOについてはすでに述べた。この形の全くない都道府県はない。なお，HO(O)HO(O)(DORI)など，このH～をもつ鳥の名については，212図を対比して見てほしい。

HOOU(U)(HOOU(U))は，全国8か所のうち，愛知の1地点を除いて，すべて福岡に見られる。うち，HOOUは7320.95(福岡)，HOOUUHOOUUは7303.75

(福岡)である。

HOOT(HOOT)のうち，HOOT は4地点(0990.97, 4644.10, 5609.26, 6470.71)，HOOTHOOT は12地点である。この計16地点が，北海道，福島，埼玉・東京・神奈川，新潟，三重，大阪・兵庫，広島・山口・福岡・大分の12道府県に分布しているから，まとまった領域は認められないといってよかろう。HOO や HOOHOO のひとつの変種であろう。

HOKUHOKU と HOOKUHOOKU とは1地点ずつで，ともに宮崎にある。これらは，宮崎に1地点ある HOOKUBOHOOKUBO と関係があろう。さらに分布から見て O(O)KUBO(O)(ひとつは7386.63 で OKUBOO，他は OOKUBO)とも関係があろう。しかし，愛知・静岡の OKUMO，OKUNBO(O)とは直接の関係はなさそうである。鳥の名としての OKUNBO と鳴き声とは関係があり，鳥の名の OKUBODORI と鳴き声の O(O)KUBO(O)とも関係がある。212図と対比すればわかるように，後者では鳥の名の方の地域が広い。HOOKUHOOKU や HOOKUBOHOOKUBO も，鳥の名としても現われ，HO(O)KUBODORI となっている。

HOOO(HOOO)も，HOO，HOOHOO の一変種と考えるべきであろう。HOOO 2地点(5793.63, 6389.98)，HOOOHOOO 11地点，計13地点中，広島9地点，兵庫3地点，千葉1地点である。

HOROHORO(O)は宮城，茨城，群馬に1地点ずつある(うち5770.11(茨城)が HOROHOROO)。このうち，茨城，群馬のものは，埼玉の ORO'ORO と関係があるかも知れない。しかし，兵庫，高知，大分に各1地点の KOROKORO は，分布上，この ORO'ORO と関係なさそうである。

HUKURUU の2地点のうち，2086.03 (八重山竹富島)では212図に示した鳥の名が HUKURU，7356.55 (大分)では HUKURUU であることに注意しておきたい。同じことは3760.93(秋田)の HUKURO，6504.01 (福井)の HUKUROKO，6572.22(大阪)の HUKUROKU についても言え，これらの地点での鳥の名は，鳴き声と密接に関連する。なお，その2の H～の類にも合わせて考えるべきものがある。

HWO などは〔Φo〕などをあらわす。地域的な差はほとんどないようであるが，奄美4地点，山形9地点が目をひく。

緑の P～の類は，各地に比較的狭い分布域を持って現われる。おそらく個別の発生によるものであろう。300図の「雀の鳴き声」の P～の類は，その地点数は多くはないが，東日本にしかない。

PE(E)は宮崎に2地点だけである。

PO(PO)のうち，圧倒的多数は PO であり，POPO は，4744.10 (宮城)，4684.77，5613.48，5622.48 (以上新潟)，6515.70(滋賀)の5地点に過ぎない。PO も POPO も単独形でなく，複合した語形の中間または末尾に現われることが多い。単独形は滋賀の POPO だけである。

POT の地点は PO(PO)と重なることが多い。POTPO などの形として現われることが多いためである。

PON(PON) は佐賀・長崎に各1地点見られ，そのうち長崎のものは PONPON である。鳥の名としての PONPONDORI は，212図では宮崎に見え，この鳴き声とはすぐには結びつかない。しかし，関東や愛知・岐阜両県県境の P～関係の鳥の名は，鳴き声と関係ありそうである。『全国方言辞典』によれば，埼玉，静岡に「ぽんぽんどり」があるようであるが，この調査では現われなかった。

POO は，PO(PO)や POT と分布のほぼ重なるものが多い。

POO(O)POO(O)は，5687.32(埼玉)を除くとすべて POOPOO である。POO と比べると関東で増え，九州で少なくなっており，POO と分布地域が重なるところが少ない。

POOCUKU は群馬に2地点ある。鳥の名として，近くに HOROCUKU，HOOCUKU があり，この～CUKU は，もっと南および東にある MIMIZUKU などの～ZUKU とも関係するが，212図を見ればわかるように，この POOCUKU の2地点では，鳴き声とは関係ない鳥の名が使われている。

POOT (POOT) は東京，愛知，対馬，埼玉・山梨，福井に各1地点で，最初の3地点が POOT である。POOT が複合形であるのに対して，POOTPOOT の方はこれだけで鳴く単独形である。

POSU(T) は山梨・静岡に計3地点あり(山梨の1地点だけが POSU)，互いに関係がありそうである。さらに，伊豆半島中部に見られる BO(O)SU(T)や，神奈川の BOOSUKA とも関係があろうが，岐阜の HOSUT にはやや遠く，また，宮崎・熊本の KO(O)SUT (熊本の1地点だけが KOSUT)，山口に2地点

ある KOOSUKE とは，あまりにも離れており，関係がうすそうに思われる。また，この KO(O)SUT とは関係ありそうな宮崎の KASU(T) (8305.40 が KASU) とも関係づけにくい。しかし，KASU の他の4地点は静岡に分布(うち3地点は伊豆)し，すべてPOSU(T)KASU, BO(O)SU(T)KASU という鳴き声として複合されている点は注意しておきたい。この BO(O)SU(T)KASU や上に述べた BOOSUKA は，212図に鳥の名としても同じ地点に現われている。『全国方言辞典』によれば，静岡県駿東郡に「ぽすけす」がある。宮崎の KASU(T)はこれだけで鳥の名と関係づけられ，KOSUPPODORI, KASUPPE などがこの地方にある。なお，宮崎には MOSUPEE という鳴き声もあることをつけ加えておく(MOSUPEEKASUPEE の形である)。同じ地点で鳥の名は MOSUPE である。

POKO は 6557.77(愛知)，PYO は 5621.43(新潟)，PYOT は 5507.20(石川)，5621.43(新潟)，PIIPII は 3794.55 (岩手) である。孤例または，それに準ずるものである。PIIPII は，300図の「雀の鳴き声」では東京に現われる。

茶の B～は，近畿以西にはあまり多くない。中部地方にもそれほど多くなく，主力は福島西南部と関東地方である。ただ，八重山に2地点ある BOOIBOOI は注目すべきであろう(なお，この BOOIBOOI はそのほか群馬にもある)。ある程度多くあって，しかも一定の領域を指摘できるものは，福島西南部と栃木北部とにまたがる地方の BOO である。この地域の北の方には BOOHON が多く，南の方は BOOHOO が多く，2つに分けられる。HOO や HOOHOO が全国に多いことから，この BOO (全国で22地点)，BOOBOO(全国で12地点) との関係ははっきりとは取り出せないが，POO や POOPOO との関係は，少なくとも，関東の上述の栃木北部を除いた部分ではありそうである。

BUU(BUU)は千葉，岐阜，兵庫に各1地点で，そのうち千葉が BUU である。BUUNBUUN は 5687.60(埼玉)，BO は岩手，山形，栃木，神奈川に各1地点，BOINBOIN は 5676.10(群馬)，BOT は岩手，神奈川に各1地点である。

6460.76(広島)の BOOSOO は，少し北にある HOOSO(O) と関係があろうから，ここではその1に示したが，HOOKO(O) 対 BOOKO に平行させて，その2の中に移すべきであったかも知れない。しかし，「奉公」が複合語の後部分で BOO～ となるのと，HOOSO(O) 対 BOOSOO の関係はやはり違うかも知れない。HOOSO(O) が「干そう」だとすれば複合する場合でも BOOSOO とはならないと思われるからである。

BYOTBYO は 5506.68(石川)にある孤例である。

空で示した T～の類は，T～としての一定の傾向はないようである。ただ，それぞれの語形ごとに一定の分布が見られ，この点は B～の類よりも強固である。といっても，T～は単独で鳴く声を形成することはない。かならず他の形と結び合っている。作図上の操作として抽出された語形であるが，それでも地域性が現われたことは，この析出法に大きな狂いのなかったことを示している。なお，T～は B～と逆に西日本に多い。

TO はそのなかでは地域性の希薄なものである。もっとも，全国8地点中半分が長崎の五島にある。TOT は九州だけに26地点見られるが，鹿児島に大きな集団(18地点)がある。鹿児島では TOTKO や TOTKWO の形として現われている。この TOTKWO は，「とって食おう」の意味であると 8362.81 では注記があった。212図によれば，TOK(K)O(O)(DORI)，TOK(K)WO(DOI)などが，鳴き声よりも強く鹿児島地方に広がっているようである。

TOO(TOO) は 7312.11 (福岡) の TOOTOO を除いて，のこりの31地点すべてが TOO であった。これも，TOOKOI, TOOKOO など～K～の形をあとにつけるものが圧倒的である。香川県に始まって西へ続き福岡北部に至る分布などは，過去のある時代の伝播を示すものと思われる。そのほか鹿児島南部に少し現われる。この鹿児島の南部の TOO は TO と関係があろう。

T～の類は西日本に多いと述べたが，TET から TEDE までは，この傾向に反して，主として日本海岸を北へ分布している。そして主流は山形から東へ向きを変えて宮城で太平洋岸に及んでいる。岩手を中心に，それに接する秋田・青森にも「たんぽぽ」の意味で TEDEPPO などがあり(241図を見よ)，それにぶつかって北上をはばまれたなどとも考えられる(なお『全国方言辞典』の「ててっぽっぽ」の項を見よ)。これらはなお，他の地方にもわずかに認められ，すべて下に P～を含む鳴き声を伴っており，単なる個別発生とは考えにくいものである。伝播があったのであろう。

TET は熊本の南部にまとまって3地点見られる。あ

とは北海道，石川に各1地点ずつである。この熊本のものは，凡例でその次の TETE の 6482.52 (愛媛)とともに上に述べた本流から外れたものである。

本流は，大体京都に近い方から，例外はあるが，TETET(全国で6地点)→DETET (同じく4地点)→TEDET(10地点)→DEDET(5地点)の順に並んでいるようにみえる。ただし，6429.15 (兵庫) の DEDET は，この本流を外れたものといえよう。この類では，別に TETEET が 4762.99 (宮城)，DEDE が 4715.98 (宮城)，TERE が 4711.82(山形)，TEDEE が 4753.52(宮城)，TEDE が 3689.75(秋田)，などにある。

奄美の TU や TIT は，鹿児島の TOT などと関係があるものであろう。鹿児島に TOTKO(O) などがあるのに対して，この地域では TUKOHO などであることからもこの関係は確かめられよう。

空の類では，ほかに DOT および DOO が見られる。前者は鹿児島県西北部に2地点と少ないが，後者は佐賀を中心に一部隣接の長崎をも加えて，大きなまた強固な地域を占めている。前者は TOT と隣接していて関係がありそうであるが，後者は福岡北部の TOO とはちょっと間があいていて関係があるかどうかはっきりしない。後者については，鳥の名 DOOKO(O)(DORI) などが分布している地域と言える。

さらに T～・D～類としては，その2にも空で示したものがあるので注意してほしい。

橙は O～などで始まる語形を示している。

まず OHO (OHO)は，青森・岩手の本州北端にしか現われない。岩手が一番多い。OHO が 28 回，OHO'-OHO は 33 回出現する。OHOO (OHOO) も青森・岩手にあるが，計3地点とあまり多くない。OOHO (OOHO) も岩手に 16 地点，そのほか隠岐に1地点あるだけである。OOHOO (OOHOO) も岩手と青森に各1地点である。このようにこの類は圧倒的に本州北端に固まっていることがわかる。OT も，岩手4地点，そのほか宮崎1地点であり，類似のものと認めることができよう。OHWO(OHWO)も岩手に2地点で，これは OHO-(OHO)の地域の東西両端に現われる。なお，HOOHO のところの説明を見てほしい。212 図を見ればわかるように，鳥の名としての O(O)H(H)O(O)や OHODORI なども同じ地域に分布している。

OHON(OHON)は上の地域とは違って，滋賀の5地点を中心に京都1地点，やや離れて三重1地点，さらに離れて長野1地点となっている。このうち，OHON'-OHON は 5671.00 と 6533.89 とである。これは鳥の名には反映していないものである。

OO(O)(OO(O)) は，OO 岩手1地点，OO'OO 北海道・青森，富山，兵庫，隠岐各1地点，OOO'OOO は千葉1地点である。これらは，それぞれ独立的に発生したものであろう。HOOHOO などの H が脱落してできたものであろうか。OO'OO が富山にあるが，この富山には，なお OIOI, OON(2地点)があり，この地域に O～の類の現われやすい傾向があったのかも知れない。

ON'ON は青森に1地点ある。

UU'UU の3地点中，沖永良部を除いた高知，山口(各1地点)のものは，ともに HUUHUU の中にあって，それとの関係をうかがわせる。

なお，この橙関係では今まで触れたもののほか，WO-OWOO が北海道，UOT が埼玉に各1地点ある。

NOHO(NOHO) や MOHO(MOHO) などは，津軽とこれに接した秋田北東などに強く分布しており極めて特徴的である。MOHO(MOHO) (28 回) が中心をなし，NOHO (NOHO)(6地点) が周辺部にあるので，NOHO(NOHO) の方が古いとも考えられる。NO-HO(NOHO) や NOOHO(岩手1地点)は，また，OHO-(OHO) の周辺部とも見られるので，OHO(OHO) は NOHO(NOHO) の N が落ちた形と見ることができるかも知れない。HOHO とも関係するかも知れないが，地理的にはちょっと離れている。NOHO の方は繰り返し形が少ない(繰り返しは 2771.22 だけ)が，MOHO の方は MOHOMOHO と繰り返す方が 19 回と多い。鳴き声の MOHO(MOHO) の地域は，鳥の名でも MOHO-(DORI)の地域である。なお，擬声語における MO～対 O～については，210 図「牛の鳴き声」にも関係するところがある。

この関係ではなお，MOHON が青森に1地点，MO-HOOMOHOO が青森に3地点ある。MOT は岐阜に1地点あって，これは，本州北端のものと直接の関係はなかろう。MOO(MOO) は MOO が石垣島，MOOMOO は岩手である。この石垣島のものは，宮崎の MOSUPEE とともに，本州北部のものとは関係ないであろう。岩手の MOO の地点では，牛の鳴き声でも MOOMOO であるし，石垣島でも隣の地点では牛の鳴き声は MOOMOO である。

NO(O)SE(E) は新潟2地点，長野1地点で，特に新潟・長野の各地1点は互いに近いので関係があろう。Nではじまるのでここに置いたが，その2でこの地域に分布する HOOS(Y)E(E)などの影響もあるであろう。

次に桃の K～，G～の類に移る。この類は概して九州および琉球に分布している。

KU は鹿児島以南が大部分で，ひとつの大きな地域をなしている(15地点中13地点が鹿児島以南)。これだけの独立語形ではなく，すべて他と複合する。

KURO (8363.51, YOSIKUROYOSIKURO) と KUROSI (8362.34, YOSIKUROSI) とは鹿児島湾を間にはさんでいるが，当然関係があろう。HUKURO とか ORO とか，その他の語形とは，分布上は関係ないようである。

KUU(KUU)は山口，大分，佐賀の計4地点をも含めて，すべて南国的なところであることに注目すべきである。伊豆諸島に見られることもいちじるしい。あるいは，K～，G～の類の古さを示すものかも知れない。K は HUKUROO にも含まれる音であるし，H と K とは古い時代に，案外近いものであったかも知れない。K と H との交替は，琉球，房総，伊豆大島などにあるとされているが，この分布はその地点またはその近くにあるので，関係があろうか。KUU(KUU)のうち，KUUは6地点，KUUKUU は16地点であった。琉球には K-UU はない。

KO(KO) はすべて単独形ではない。KO が45地点で，KOKO は 7311.68, 8331.98, 8342.69 だけである。九州および沖縄が主な分布地であるが，山形にも1地点 KOOKOKOO があり，その他新潟・群馬，山梨，福井，愛知，和歌山，香川などにも1地点ずつ見られる。山口や広島などは九州に続くものと見られないことはない。多く，YOSIKO, TOTKO, DOTKO, KOZU などの構成要素として見られるものである。沖縄などでは，CIKOHO などの要素となっている。なお，その2としてあげる KOKOE や KOKE とも関係がないとはいえないが，あまり地域は近くないようである。

KOT(KOT)は KOTKOT の 7269.96(長崎)，8360.39(鹿児島) (KOTKOT はこれだけで，あとの12地点は KOT)を除いて単独形はない。長崎・熊本・宮崎の計4地点は九州の中央部を東西に分布して，KOT のあとは P～ではじまる語形がくる。他の KOT は K～ではじまる語形がくることが多い。KUT は高知・鹿児島に各1地点で，そのあと K～ではじまる語形がくる。

KOO は九州本島が大きな勢力地域である。KOOZ-O(O)，KOOZU(U)，DOOKOO などの形で広く分布している。九州ではこの KOO が基本形であって，それに他のものが付加して，いろいろの鳴き声が派生したと見ることもできる。HOO と比較して他の語形のつかない単独形のものはなく，すべて複合形の要素である。KOOKOO は地点数も KOO よりも少なく，また多くが単独形である。この点で KOO と違った性格を持っている。KOOZOO の類は「小僧」との語源意識のある地方もあるようである。これらは鳥の名としても強く分布していることは212図で見るとおりである。

KWO は鹿児島だけに11地点あり，KO と同じ性質を持っている。KO の一変種であろう。KWOT(KW-OT) (鹿児島3地点)，KWOO(KWOO) (鹿児島2地点，長崎1地点)もそれぞれ KOT，KOO の一変種と見てよかろう。～W～が九州だけにあらわれているのは注目すべきである。

KOI(KOI)は，KOIKOI が 7501.14，7503.48 (以上和歌山)，6594.19 (三重) とごく近くに分布しているほか，すべて KOI である。KOI は三重の前述の地域に近いものがあるほか，香川・広島・山口とつづいて，先述の TOO の分布に準じ，TOOKOI を主な形として分布している。これはさらに福岡に連なる。この KOI は KOO とともに「来る」の命令形として意識されている地点もあり，その意味では，その2の図的なものである。新潟の KOE 5604.28 はあるいは KOI と同じかも知れない。KOEE 5667.77 は「疲れた」「恐ろしい」「固い」などの意味のコワイとはこの地点では関係なさそうである。KUI が大分に2地点ある。他の地域の O に対して九州の U という例のひとつともなろう。

KON は静岡・長野に1地点ずつある。他の語形との合成となっているが，その形から見て，「来ん」とは考えられない。KOOSUKE は山口に2地点ある。同じ地点や近くには KOO もある。KOROKORO は兵庫，高知，大分に各1地点ある。KURO などとの関係はなさそうである。

K～，G～の類は西南の地域に多いということを述べたが，KI(KI)，KIIKII，GIIGII だけは，主として東北およびその関係地域に多い。KI(KI)は，KIKI が 4741.92(山形)，KIKIKI が 4665.87(新潟) で，あとの2地点(岩手，島根)の KI は単独形ではない。KIIKII

は新潟の粟島と秋田のほか，甑島にある。 KIITKIIT は東北とはやや離れるが，埼玉に１地点ある。

GIIGII は岩手１地点で，KYA，KYAA(KYAA)，GYAGYA，GYAA(GYAA)が東北的であることもこの一般的傾向を反映している。これらは主として岩手に分布している。注記によれば，KYA 以下は，雌の鳴き方というのが多いようである。

以上のものとちょっと違ったものとして，KIRIKIRI が栃木，山口に各地１点，KWIIKWII が沖縄本島に１地点，KE が鹿児島，KEKE が岩手に各１地点，KEUKEU が伊平屋島に１地点ある。

KA は九州南部に全部で11地点見られるが，これはすべて YOSIKA とそれに近い語形の一部となっているものである。YOSI～の部分は都合によって，その２にまわしてある。鳥の名としての YOSIKA(DORI)，YOSIKODORI は，これらの鳴き声の地点によく一致している。KAT は全部で６地点で，愛媛の１地点を除くと九州に見られるものであるが，8303.47（熊本）だけが KA の地域と重なっているだけで，両者の関連は低いであろう。KAA は，３地点中，岐阜の１地点を除くと KA の付近にある。KYA などとは関係はないであろう。KAI は広島に１地点で，あまり以上のものとは関係ないと思われる。

GU(U)(GUU)のうち GU は徳之島だけであるから，これは他の GUUGUU などとは関係ないであろう。GUUGUU などのうち，愛知・岐阜・静岡の計４地点は互いにそう遠く離れてもいないから，地域的な発生で，互いに関係があると見てもよかろう。GURUU-(GURUU)は福岡，石垣島に計３地点で，これは GUUGUU とは関係なかろう。GUROO は石垣島に１地点で，そこに現われる GURUU と関連する。GUUGUU などはその２の図に示した GOROSUKE などの G～の類とも関係があろう。

GO(O)HEEGO(O)HEE は茨城・栃木にそれぞれ１地点で，互いに関係があろう（GOO～と長いのが茨城）。人名と関係づけることができる。語形の似ている GOGEE（福井１地点）は地理的に見て関係なかろう。

GOTGOT，GOOGOO は関東の東部から南部にかけて点在しており，この地方の古い語形であることを想像させる。前者は１地点，後者は７地点である。GOIGOI は滋賀，神奈川に１地点ずつあるが，このうち，神奈川のものは，これらと関係があろう。滋賀のものはあるいは近くの KOI と関係があるかも知れない。GOROGORO は兵庫の西北端に１地点であるが，KOROKORO のうちの兵庫のものとは，少し離れすぎているようである。

GOCUGOCU，GODOGODO はともに秋田に１地点で，相互に関係があろう。

G(E)AA(G(E)AA)のうち，GAA は淡路にあり，GAAGAA は徳島でこれは多少離れている。GEAAGEAA は岩手であるが，この表記はエの開いた母音をあらわすものであろうから，淡路，徳島のものとは関係ないであろう。GYAA(GYAA)を東北的と上に述べたが，GYAA ５地点中２地点，GYAAGYAA 12地点中２地点が東北的な地点でないことを述べておこう。GYAAT も長崎１地点だけで，東北的でない。

草の C～は九州・琉球がほとんどである。特に CI，CIT は奄美・沖縄に限られている。これらは300図に示した雀の鳴き声と比較すべきである。CU は鹿児島，大分に１地点ずつ，CUU(CUU)は CUU が大分２地点，CUUCUU が鳥取１地点であるが，もう１地点大分にある TUU をここに加えた。CII は島根に１地点である。岩手の CYAA は発音上の問題で，KYAA の変種と認めていいであろう。なお，CYOT は熊本に１地点ある。

ZU(U)，ZO(O)は，KO(O)のあとにつづいた語形である場合が圧倒的であり，またほとんどすべて九州に分布する。例外は，5772.84(茨城)の ZUUHOOHOO と，5604.28（新潟）の KOZOKOEKOZOKOE の２地点２例だけであった。後者は「小僧来い」と解せるので，その２にまわすべきものかも知れないが，ZO をここで析出したので，このようになった。以上の２地点は分布も飛び離れているので，九州の ZU(U)，ZO(O)とは別と見るべきであろう。この類の中心勢力の分布は九州中央部から東北方面にかけて強い領域を持っているが，例外的なものがわずかにその他の地方に見られるだけなので，地域発生的な性格のものと考えてよかろう。琉球方面にはこれらが１地点も見られないところから，これはそう古いものとは考えられない。九州に多い鳥の名の KOOZOODORI などは，もちろんこの鳴き声に関係があるが，特に福岡では鳥の名の方が多く分布していて，鳴き声の方が比較的薄くなっている。

MIIMII は対馬を含んだ長崎に見られる。対馬の SIMIISIMII も無縁ではあるまい。MIIMII 以下

NYAU までは猫の鳴き声に似ている。そしてこれらは九州北部にまとまり，鳥の名としての NEKODORI と関係があるかも知れない。鳥の名 MAYA 類も猫に関係あろうから，与論島の MYAUMYAU も関係のあるものかも知れない。YAAYAA の 5586.56（福井）も NEKODORI の地域である。NYA(A)NYA(A) は，NYANYA が隠岐に 1 地点，NYAANYAA が宮城と佐賀に各 1 地点である。NYAANNYAAN は五島に 1 地点である。NYAU も長崎に 1 地点ある。

YO(O)HEE(YOOHEE)は計 4 地点見られ，うち 3 地点は三重中部である。たぶん人名に擬したものであろう。YOGO(YOGO)は千葉に 3 地点で，どちらも強固な狭い地域を持っている。ともに近年の地域的に発生であろうか。YOGO(O)は鳥の名としても千葉の同じところに分布しいるが，YOHEE の方は，鳥の名には反映していない。鳥の名としての YOHEE は兵庫に 1 地点あるが，その地点は，鳴き声の三重以外の 1 地点，兵庫の 6540.16 とは近いながら，同一地点ではない。

なお，その 2 の地図にだけその鳴き声を示した地点（すなわち，その 1 での鳴き声のないところ）は，総計で 191 地点である。目立つのは日本海岸地方と静岡である。この鳥がいない，または鳴き方を知らないという無答が，奈良・京都，鳥取を除く全都道府県で計 335 地点ある。無答の特に多いのは，石川以北の日本海岸からつづいて青森の下北半島までの一帯（佐渡を含む）と，東京を中心とした関東地方，瀬戸内海（中国地方を除く），奄美・沖縄である。概観すると，この無答の地帯とその 2 の地図にだけ鳴き声の現われる地点とは，重なっているようである。これは，その 2 の方が，本当は鳴き声を聞いたことがないにもかかわらず，知識で何と鳴くかを知っていてそれを答える傾向が強いことを示すのかも知れない。

299. ほうほう（梟の鳴き声）—その 2

この地図には，ふくろうの鳴き声のうち比較的擬声的要素が薄くて，ことばで解釈できそうなもの意味のあるものを中心に集めたが，その 1 の地図の説明の冒頭で述べたように，この地図の凡例冒頭の DESI から DEE までは，元来はその 1 にあるべきだと考えたものである。その他，一部にはその 1 の図で類別できないものが，その 2 の図に便宜上のっている。

HOS(Y)E(E)から TEAGO までは，凡例の注 2）でも説明したように，凡例には紺で示したが，図の上ではそれと結びついている語形の属している色を使うこととした。

まず，北海道，琉球にひとつもこの類（ことばで解釈できる意味のある鳴き声）のないことが注目される。北海道にない理由は，このような語形が新しくできにくく，標準語的な鳴き方を使っているためと説明できよう。琉球にないこと（石垣島の SUKU はことばで解釈できない点でその 1 とすべきものであるが，ここに便宜上置いたものである）は，佐渡，隠岐，壱岐，対馬，五島（ここにあるのはその 1 から回ってきたものばかりである），伊豆諸島など外海に浮かぶ島にもこの類のものがないこと，青森，九州南半に少ないことなどとともに，このような，ことばとなった鳴き声が，極端に古いものでないこと，ある時代に発生し伝播したものであることを物語っているようである。また，極端に開発の進んだところ（関東，近畿）にも，その種のものが比較的薄いことは，注目すべきである。

各語形について見ていこう。

高知県東端・足摺岬付近・山中の愛媛との境界という高知の 3 地点は，愛媛・大分とつづいて，DESI（計 7 地点），DEESI（計 3 地点），RESI（計 3 地点）の一連の地帯となっている。これは種子島の KE(E)SI（4 地点中 8393.69 だけが KEESI である）とともに，このいくつかの語形の祖形が，この西海方面の古い言い方であったことを思わせるものである。KO(O)SI（計 10 地点中 7391.44 だけが KOOSI）はこれらと結合している。多くは DESI などの方が前部分となっている。三重では 2 地点が DEESI でありながら，後部分が HO(O)SI となっている。この三重のものまでをも上と関係をつけることは困難であろうが，DESI などが，同じような音の反覆を求め，しかもそれが口腔の奥での発音の子音になっているのは偶然であっても興味深い。これらは「弟子恋ほし」「弟子欲しい」「弟子法師」などと意味をつけられている場合もあるから，このように，その 2 に持ってきた理由がこの部分に関してはないわけではない。

なお，この HO(O)SI は～SI という語形の類似でここに置いたが，色はその 1 の図の H～類に合わせて赤とした。また，このその 2 の図の HOSII など HO(O)～の語形とも関係づけて考えなければならないが，四国か

ら九州にかけては，あまり近くに HO(O)～ がないから，言語表現としての関係はなさそうである。

YOSI（計18地点）なども，HOSI，KOSI などと関係がないことはないであろう。これは宮崎から五島までの九州中央部を東西に分布していて，DE(E)SI，RESI，KE(E)SI などを分断しているから，これらよりも新しいものであろう。YOHI(計2地点)，HIYOSI（1地点），YOSUT（1地点）なども，分布からYOSIの一族と見なしていい。YOSUTはその1のやはり宮崎のKASU(T)，KO(O)SUT ともちろん関係があり，YOSI とも結び合うものであろう。岐阜に2地点ある OSUT はこれらとは関係ないが，その1ではこの少し南に HOSUT があり，それとの関連を考えるべきである。

ここまでに説明しなかったものは，6387.48（山口）の ESI，8323.59(宮崎)の KASI，7284.16(長崎)のYOT，7256.64(長崎)の TORIYO などである。

DAA，DEA(A)，DAE,DEE は，ほとんど岩手に集中している。～EA～は，開いたエ［dɛ］を示すための特殊表記である。それぞれの地点を見ればわかるように，DARASUKO～ や DARASUKE～ などが前につき，その1の～HO などが下につく形が多い。この地域での独自発生の表現であろう。ただ，秋田北部の1地点だけが飛び地となって注目されるが，これと，岩手西南部の1地点をもってこれらの言い方が古いとはいえないように思う。鳥の名とこれらの鳴き声とは関係があるが，鳥の名としての NOROSUKE がこの地域にあることと無関係ではなかろう。なお，現われた地点数は，DAA 1地点，DEA 8地点，DEAA 11地点，DAE 3地点，DEE 1地点である。

以下が，いかにもこの地図にのせてしかるべき表現である。

草は NORI～を主とした NO～ の類である。緑はその他の N～ の類である。NO～ の類が主流であることは，これが島根から秋田までの日本海斜面に広く分布し，その他の N～ 類はその間にわずかに分布しているにすぎないことからもわかる。NO～ の類はごく少数，岩手・宮城の太平洋斜面に進出しているが，この分布は，127図「しもやけ」の YUKI～ 類の分布と似ている。天候，特に冬期の天候に生活の左右される地域と言うことができようか。

NO～ の類の中心は NORICUKE である。NORICIKE（秋田・山形，島根で9地点），NORICUGE（山形1地点），NORICUKU（新潟1地点）も含まれている。この言い方は，北海道，関東，沖縄にはまったく見られず，九州にもわずか1地点見られるだけである。NORICUKE は，いうまでもなく洗濯の「糊付け」であって，この鳥がこのように鳴くと翌日は晴天であるかけ「糊を付けて干せ」と解するところが多い。なお，HOS(Y)E などの説明をも見てほしい。糊を付けて干すという洗濯法の普及史も，あわせて調べる必要が生じてくる。

見出しの NORIZUKE には NORIZUGE を含み，また最後の E は I をも含む。これを分出したのは，NORICUKE の CU の子音が有声化して ZU となったのか，こういう有声化はないが，連濁で NORISUKE の SU が ZU となったのか必ずしもはっきりしないと考えたからである。ただし，多分前者のものがほとんどなのであろう。このことは，他の～ZUKE についても同様であって，その場合も～ZUKE には～ZUGE が含まれ，最後の E が I のものを含む。NORIZUKE は秋田・岩手・山形という，この類の領域の北端に見られる。

3723.21(秋田)の NORISITE は「糊して」か「糊すって」かよくわからない。3702.81（青森）の NORIKATE には「糊買って」との注記があった。

NOROSUKE は動作ののろい者を擬人化した語であろう。この表現は，他の～SUKE との関係も見てみる必要のあるものであるが，鳥の名としての NOROSUKE(HOHO)などは，岩手や秋田などに点々と見られる。この NOROSUKE は，NO～の類では NORICUKE の次に多いものであるが，分布地域は北に片寄り，青森を除く東北5県と新潟にだけ見られる。NORICUKE の場合と違って，この語の意味に左右されてか，HOS(Y)E などにつく率は少し減少している。

NOROZUKE は NO～の類で3番目に多いもので，合計13地点に14回出ている。最後の E が I であるもの，K が G であるものも含む。これは，秋田・岩手・宮城にしか存在しない。

NONOZUKE，NOZUKE は秋田・山形に各1地点だけであり，それぞれ実際は NONOZUGE，NOZUGE である。

NOOZUKE は島根に1地点であるが，これは，NORICUKE を除いた NO～の類がすべて東北・新潟だ

けであることのひとつの例外となっている。

上記以外の NO～の類としては，NORISUKE が秋田・山形・新潟に 6 地点，NORICU が長野に 1 地点，NOCUKE が新潟に 1 地点，NOCCUKE が新潟に 3 地点，NOREZIKE が実際は NOREZIGE で青森に 1 地点，NOROCUKE が秋田・宮城，新潟に 5 地点，NOROSUKO が岩手に 1 地点，NOOSUKE が新潟に 1 地点，NOOCUKE が新潟に 1 地点，NORURUKE が山形に 1 地点それぞれある。

NURICUKE は NO～以外の N～の類で一番多いが，それでも 10 地点にすぎない。最後の～E が～I であるものも含めてある。分布は山形・宮城，兵庫・鳥取で，兵庫・鳥取は西日本の緑の類のただひとつの分布地域となっているが，ここでも緑は草類の周辺に分布するという性格を保っている。

秋田に 3 地点見られる NURIZUKE はすべて NURIZUGE である。その他の NU～は，秋田に 2 地点の NURISITE，宮城に 1 地点の NURUSUKE，岩手に 1 地点の NURECUKE である。

NE～としては，まず，宮城に 2 地点の NERECUKE がある。山形に 3 地点ある NEREZUKE は実はすべて NEREZUGE である。その他は宮城に 1 地点の NERICUKE，山形に 2 地点の NERIZUKE 実は NERIZUGE，山形に 1 地点の NECUKE がある。

その他の N～の類では，岩手に NARASUKE 1 地点，新潟に NIRICUKE 1 地点，宮城に NINIZUKE 実は NINIZUGE 1 地点となっている。

赤の H～の類は，この鳥の名と関係するところが大きいものである。また，その 1 の図の赤の H～とも関係し，その 1 で示すべきかその 2 に載せるべきかの境界線と見られるものもある。

HOROSUKE は HO～の類の中では一番多い。福島県東南部とそれに接する茨城・栃木に大きな分布域を持ち，ほかに，群馬県北部に分布域があるほか，長野，三重，佐賀に 1 地点ずつ見られる。212 図のこの鳥の名の図によると，これらの地点では鳥の名も HOROSUKE (DORI) などであることが示されている。長野の中央部では，鳥の名の方に 3 地点 HOROSUKE(DORI)があるが，鳴き声で HOROSUKE の出たのは，そのうちの 1 地点であった。佐賀のものは，鳴き声と鳥の名が一致している。三重の場合は，鳥の名としては北部に見られるからやや地点は違ってはいるが，関係はあろう。新潟の 1 地点だけは，鳥の名と関係していないようである。

HOOSUKE もこれと大体似ている。三重・滋賀の計 3 地点は互いにそう遠くはないので，関係があろう。そのうち三重の 2 地点は，鳥の名と一致している。ただし，新潟・長野の各 1 地点は，鳥の名の方について近くに関係あるらしいものは見あたらない。

見出しの HORISUKE から HOCCUKE までは，この鳥の名とは関係ないようである。HORISUKE は三重に 1 地点，HORICUKE は 2 地点であり，うち，福島は HORICUKE，広島は HORICUKI であった。HOCCUKE は新潟に 1 地点である。

HOROCUKU の 5 地点中，鳥の名と完全に一致するのは群馬の 1 地点だけであるが，他も近くに鳥の名としての HOROCUKU があるので，いうまでもなく関係があり，またこの 5 地点は互いに近くにあり，ひとつの地域性を持っていると見ていいであろう。この HOROCUKU や，あとで述べる HOOCUKU は，HORO または HOO と鳴く ～CUKU であるという解釈もできる。NORICUKE などの～CUKE も，今は「付ける」という語源意識があるが，実はもとはこの～CUKU から出たのかも知れない。

HOROCUKE は 2 地点で，群馬は HOROCUKE，埼玉のものは HOROCUKI であった。群馬の方は鳥の名と一致する。埼玉の方は上の HOROCUKU と地点が近いので，関係があろう。

千葉の HUKUGUROSUKE は鳥の名と一致している。

H～の類で一番多いのは，HURUCUKU である。三重・奈良・和歌山，広島・山口および四国全県に分布する。大きく見ると東と西とに分断されているようであるが，212 図を参照してみると，この中間の地域にも強く鳥の名としての HURUCUKU が分布していることがわかる。別の言い方をすれば，鳥の名の HURUCUKU の領域の周辺部にそれと重なって鳴き声としての HURUCUKU があることになる。鳴き声がこの一帯に広がって鳥の名が生まれたが，後に別の鳴き声がその領域内に広がったと考えられる。鳴き声の現在の領域で鳥の名が生じ，鳥の名だけが領域を次第にひろげた，とするより，ありうる解釈と思われる。ただし鳥の名がまず存在し，鳴き声もその名に影響されてそのように聞こ

えてくる，といったことは，多少はあったかも知れない。和歌山の HURUCUKO, HUROCUKO はこの HURUCUKU の変種であろう。

埼玉・東京・神奈川に計5地点ある HO(O)CUKO-(O), HOOCUKU は，鳥の名の HOOCUKU などと地域的に一致するか，または近い関係にある。ただし，新潟の HOCUKU は，鳥の名に関係あるらしいものが近くに見あたらない。

桃の GOROKUTO は，鳥取に8地点あるものと，大分・宮崎・熊本にあるものとに二大別できる。GOROKUTO を「五六斗」と考えている地方もあるようである。～KUTO については，後にも述べる。

GOROCCYO(O) は静岡東半を中心に分布していて，強固である。山梨にもこの連なりがあり，ちょっと飛んで長野にも1地点(5674.54)ある。これは212図の鳥の名と一致している。GOROCCI, GOROSICI は，もちろんこの GOROCCYO(O) と関係があり，領域を接して静岡・山梨に見られる。いずれも，地点数は鳴き声の方が少し少ないようである。

GOROSUKE は，静岡西部を中心に東海方面に多く分布するとともに，福島にも多少見られる。東海地方その他で，志摩，知多，伊豆，三浦，房総の各半島の先端部に分布が見られるのは，関東の縁辺部である福島に見られることとともに，関東から中部南部にかけて，かつてはもっと多く分布していたことを示すのかも知れない。なお，GUU(GUU) などその1の図に示した G～ と関係があるものもありそうである。

なお，この図で G～ の類としたものとしては，そのほか，GOISUKE が滋賀に1地点，GOROSUTO が鳥取に1地点，GOROCUKI が岡山に1地点，GOROHUTO が鳥取に1地点，GURUTTO が千葉に1地点などがある。以上のうちの GOROHUTO と GURUTTO については後にも述べる。

空の TERESUKE 以下は，T～，D～で始まるものである。TERESUKE は福島3地点，長野1地点で，関東のまわりという点では GOROSUKE と同様である。これは鳥の名とは関係がないようである。

TERECUKE には，最後の～CUKE の～E が～I であるものも含まれている。秋田の1地点を除いて，島根の出雲地方に集中している。このうち1地点だけが HOOSO につづくのに対して，他は HOOS(Y)E につづく点，興味深い。この点でも固定度が強いといえよう。TERICIKE は出雲に1地点だけであるが，これも同じものと認めていいであろう。

2地点見られる福島の TERESUKO，1地点見られる長野の TERESUKU は，ともに TERESUKE と関係があろうが，長野の方は互いにいささか離れている。以上のものの TERE 部分は動詞「照る」と関係があるかも知れない。

TERECUKU は長野2地点，福岡1地点である。長野県に2地点であるが，互いに離れて見出され，関係があるかどうか不明である。福岡の方は，鳥の名も TERECUKU であるが，長野ではこれを鳥の名とはしていない。鹿児島の TEECIKO 1地点は，これまでのものと語形は似ているが，関係はないのではなかろうか。これは，すでに述べた DESI と関係があるものかも知れない。

島根の TORICUKI は孤例であろうか。福岡の TOROSUKO と TOROSUKE とは，互いに近くもあり，当然関係があろう。TOROSUKE と，岩手に3地点の DOROSUKE とは，関係なさそうである。

DOROCUKE は鳥取4地点，京都1地点であるが，京都のものも山陰に近いところなので，関係があろうかと思われる。後ろに HOOSO(O) がつくものが多いことでも共通点が多い。長野の DOROCUKU とは直接の関係はなかろう。

岩手と佐賀に1地点ずつの DOROSUKO は直接の関係はなかろうが，岩手のものは DARASUKO，佐賀のものは福岡の TOROSUKO と関係があろう。

岩手の DOROZUKI は実際は DOROZUGI であるが，これは分布からすると，DOROCUKE ではなく DOROSUKE の関係のものかと思われる。

BORO 関係は茶で示してある。この類で一番多いのは BOROKITE である。このあとには HOOKO(O) が続くものが圧倒的に多い。主として西日本に分布しており，東日本では千葉県にあるだけである。広島県を中心としているが，三重・奈良，淡路島にもあることは，もと，近畿地方にも幾分か存在したのではないかと思わせる。山口西部，大分東部にも見られるので，以前は瀬戸内海にも，広く分布していたものと思われる。現在も点在している。

BOROKICI は栃木の1地点は別であるが，広島の3地点は BOROKITE の地域の近くであるから，関係あろう。栃木のものは「ぼろ吉」と人名めかしたものでは

ないかと思われる。鳥の名としての BOROKICI が212図にある。これは，鳴き声の BOROKICI と同じ地点ではないが，近いところにある。鳥の名の BOROKITEHOOKOO が大分県にあるが，これは鳴き声と地点が一致している。

BOROKITA も岡山・広島・山口にあり，BOROKITE に近いところに分布している。BOROKICI と同じことがいえよう。BORO 類のうち，ここまでは HOOKOO との結びつきが強固である。

BOROSUKE は岩手，栃木，東京に1地点ずつ見られる。千葉の BOROKITE，栃木の BOROKICI と合わせて，関東にもある程度の BORO 類があったものと思われる。栃木の BOROSUKE は近くに HOROSUKE の地域があり，もちろん関係があろう。

BORUSUKU は，房総半島先端部に見られる。上の BORO～類の変化したものかと思われる。

ZURUTTO は千葉に8地点ある。「ずっと続けて」の意味であるとの注記があった。また，HOOKOO につづくのが7地点である。この言い方の領域の中心となっている千葉県北部には，鳥の名の ZUKU の地域がある。関係があるかも知れない。利根川北岸の茨城県北浦沿いに1地点だけ ZUROTTO があるが，おそらく関係があろう。

ZIROSUKE は伊豆半島先端部にある。ZURUTTO とは関係なさそうで，むしろ近くに3か所ある GOROSUKE と関係があろう。

HOS(Y)E(E) から TEAGO までは，このその2の地図で，鳴き声の後部分以下になることの多いものである。色はそのまえにつく前部分と同じ色を与えることにしたので，符号の色が違っても同じ形のものは，同じ語形を示すことを注意してほしい。

まず，HOS(Y)E(E) は「干せ」からきているであろう。以下 HOZE まではこの類にはいると見てよいものが多い。新潟が12地点でもっとも多く，福井，福島が2地点ずつ，あと秋田，岐阜，兵庫・鳥取に1地点ずつである。例外はあるものの，日本海岸に圧倒的に多いことは，天候がとかく気になる地方だからであろうか。

HOSEN は，なんであろうか。「干せん」だとすると意味がつかみにくい。地点数は少なく，福井・新潟に1地点ずつである。HOSSYO は新潟に1地点，HOISO は島根に3地点である。

HOOS(Y)E(E) は HOS(Y)E(E) よりも多い。擬声語的な色彩を帯びているものかと思われる。地点が多いだけに HOS(Y)E(E) よりも広い範囲にわたって見られる。やはり新潟に20地点と多いが，全体に対するウエイトでは下がっている。あとは，秋田17地点，山形4地点，福島2地点，長野4地点，富山2地点，福井2地点，岐阜13地点，静岡1地点，滋賀6地点，京都4地点，三重2地点，兵庫7地点，鳥取5地点，島根15地点，岡山2地点，広島10地点，山口2地点，愛媛8地点，大分3地点，熊本・宮崎各1地点ということになっている。秋田および山陰に目立つが，ずっと南の方へも領域がひろがっている。中では HOOSE が圧倒的に多い。

同様に，HOOS(Y)EN も HOSEN よりも多い。全部で8地点のうち，6地点が鳥取であって，あとは山口と新潟とである。

HOOSO(O) は以上のものよりも西に中心を移し，島根16地点，鳥取5地点を中心としている。あとは兵庫11地点，京都5地点で，それぞれ日本海岸に分布し上記のものに連なっている。ほかに岡山1地点，広島2地点，新潟1地点，福岡1地点があって，上記のものと関係のあることを示す。ただし，愛媛に3地点あるのはちょっと飛び地となる。しかし，HOOS(Y)E(E) も愛媛に相当あったのでそれと関係があろう。あるいは昔は領域がつづいていたのかとも考えられる。127図「しもやけ(凍傷)」でも，愛媛に日本海岸的な色彩があった。HOOSO と HOOSOO の地点数の内訳は，だいたい同じである。

HAOOSE は新潟に2地点ある。ここでは，「ハオオセ」のように表記してあるが，AOO 部分は開いたオで [hɔ:se] である。HOOSU は鳥取に1地点である。

HWOOS(Y)E(E) が山形に3地点ある。これは，HO～のこの地方の方言音 HWO～ の残存物と見ていいであろう。Yが括弧に入れてあるが具体的にはすべて～SYE～で，～EE～とのびるのは4700.37である。

HOHE(E) は「干せ」などからの変種と考えられる。秋田・青森に4地点ある。HOOHE も同様で，秋田・岩手で3地点である。7図「セナカ(背中)の SE- の音」，8図「アセ(汗)の -SE の音」などの SE の変化を参照するといい。これらの図には SE が SYE となる地方も示されている。

HOSII は「欲しい」と考えられているのであろうか。新潟に1地点だけである。

HOETOは，112図「ものもらい」に出た語形で，ここでは福島に1地点だけあらわれる。この地点は「ものもらい」ではHOITOではないし，また近くにもこれらの語形はない。なお，6384.25（山口）は〔hoéto:〕で同じようであるが，上に何もついていないので，この図では2部分に分割してその1の図にHOI＋TOOで出してある。この方は少し東の島根との県境から東に「ものもらい」のMEBOITOがある。

HOZEは宮崎に1地点だけである。

HOKOOからBOOKOまでは「奉公」類と考えられるものである。HOKOOはその変種で千葉に1地点ある。この類の中ではHOOKOOがもっとも多い。瀬戸内海の特に北岸を中心として岡山3地点，広島13地点，山口10地点，愛媛1地点とあり，西方，大分4地点，宮崎1地点などに及ぶ。HOSE類の南側に分布し，比較的天候を気にしない地方でいわれているようである。東方では千葉の18地点が中心で，あと静岡に6地点，愛知1地点，山梨2地点などである。東西にわかれた分布については，もと1つのつづいたものであったかどうか議論の分かれるところと考えられるが，奈良の1地点，淡路の1地点は連続説のひとつの根拠となろう。

MUDABOOKOOの2地点（静岡，千葉）は，その前にHO(O)KOOというものがついており，その繰り返し表現となっている。「奉公」よりさらに人間のことばに近く，かつヤユしたものとなっている。

HOOKOOS(Y)EEは広島3地点，岡山1地点で，岡山のものが～Y～である。HOKOOSEEは広島2地点で，これら命令形のものに対して，HOKOSYO(O)の静岡5地点，HOKOOSYOOの静岡1地点，HOOKOOSYO(O)の静岡8地点，愛知1地点は，意志またはさそいかけと見ることができる。

HOKOCCYOは上にGOROCCYOがついており，これとゴロを合わせたものであろう。静岡に1地点である。HOOGOは茨城で，おそらくHOOKOと同じと認めるべきものである。BOOKO（広島）は連濁によるものであろう。

KAESE(E)は京都5地点のほか，福島，福井，岡山各1地点と，かなり広い地域に散在している。福島でHOROSUKEが上についているのを別にすれば，KURUTTO, HOROTTO, GOROTTOなどが上についており，ひっくり返す意味の擬態語が上についた感じである。なおここで，～TTO，～KUTOなど，およびそれに類似するものが全国のどこに分布するかを見ると，大体5か所にまとまっていると言うことができる。まず，ZURUTTOを中心としてZUROTTO, GURUTTO, GOROTTOなどのある茨城・千葉の境界地方の東部，つぎに京都中央部を中心としたKURUTTO, HOROTTO, GOROTTOの地帯，それからGOROKUTOを中心としほかにGOROSUTO, HORUKUTO, GOROHUTOなどのある鳥取の中央部から西部の地帯，さらにKOROTTO, GORUTTO, KOROKUTO, GOROKUTOなどの大分・熊本という九州中央付近，およびGOROKUTOの宮崎南端部がこれである。最後の2つは，地域の近接，語形の類似から，相互に何か関係ありそうであるが，その他は個別的なものか，古い連続があったのかどうかはわからない。たとえば，京都は～TTOが多く，鳥取に～KUTOが多いし，この中間には，両者に共通するGORO～は見あたらないのである。

TOOITTE（香川），TOOKITE（京都，香川），TOOSITE（石川，香川）などが，鳴き声の前部分になっているのに対し，TOOSE(E)（三重4地点）はすべて後部分になっている。TOO～の部分は共通であるが，同類のものと認めていいかどうか疑問である。ただし，両者をつなぐようにTOORUが香川と三重に1地点ずつあり，しかも，香川のは前部分，三重のは後部分と分かれているのはおもしろい。三重のTOORUは上がBOROKITEだから「通る」と考えられているのであろう。これに対して，三重のTOOSEは，上がKOMECUKEなどが多いから，通行させろの意味というより，最後までやれ，の意味と考えられているのかも知れない（BOROKITETOORUも通行するの意味かも知れない）。なお三重では「ふるい」をトオシというから，何か関係があるかも知れない。

TONTAN, DANDANはT～の縁でここに置いたが，上のTOOSEなどの類とは関係がうすい。ただしこのTONTANとDANDANの両者は，ともに福岡であるという点で関係があろう。

DOOSURU（滋賀），DOOSITA（三重3地点，愛知，岩手），DOSITAI（三重），DOOSYOO（三重・滋賀，兵庫）は「どうする」を中心としたもので，兵庫，岩手の他は，互いに近くにあらわれる。DOOKAIは熊本で，これは，遠くはなれている。

DEESYOOは埼玉3地点と岩手1地点であるが，

岩手のものは DAESYOO〔dɛːjoː〕と書くべきものをここに入れたものである。DENSYOO は埼玉で，上の DEESYOO とともに，1地域を形成している。

DO(O)SEE は D(O)OSEI を含み，愛知に3地点ある。秋田の DOOSA はどうするの意らしい。岩手の DONKO はよくわからない。

NKO は HURUCUKUNKO の部分であるから，次の NOKO と同じと見ていいであろう。合わせて和歌山に5地点となる。NKO や NOKO を析出したのは，やや適当でなかったかも知れない。

KOKE は「ここへ」らしいが「こける」の KOKE かも知れないものを含む。鹿児島のものは HIKOROKUKOKEKE であるから，「彦六ここへこい」かも知れないが（最後の～KE はその1の図に出ている），大阪のものは～KOROTTOKOKE であるから，ひっくり返る意味のような気もする。KOKOE は三重の KOKOI を含み，その他高知，奈良，滋賀に各1地点，計4地点ある。～KOI と重なることが多いから，これは「ここへ」であろう。

GOSYOO(山梨)，GOOSYUU (宮崎・熊本)は語形が似ている。熊本のものには「五升」という注があった。「五六斗」とも通ずるところがある。熊本以外でも，そう理解されているかも知れない。字音かなづかいでは「升」はショウであるから，九州ではシュウとなるべきものである。

岩手の TEAGO の TEA は，〔tɛ〕を示すもので，すでに示した DEA などと関係があろう。同色とすべきであったと思う。

この HOS(Y)E(E) から TEAGO までのうち，おもな結びつきについて，その地点数をあげてみよう。まず，この図の NORISUKE～ などの類から ZIROSUKE までのうち，合計4地点以上にあらわれたものを左側に縦に並べ，つぎに合計4地点以上あらわれた，HOS(Y)E(E) から TEAGO までの語形を上に左から並べて，その交点に結びつきのあらわれた地点数を示した。上の一番左の -φ はゼロを意味し，左側の語形だけのものである。

	-φ	-HOS(Y)E(E)	-HOOS(Y)E(E)	-HOOS(Y)EN	-HOOSO(O)	-HOOKOO	-HOOKOOSEE	-HOKOSYO(O)	-HOOKOOSYO(O)	-DOOSITA	-KAESE(E)	-その他
NORISUKE-	3		1									2
NORICUKE-	47	13	86	1	36							7
NOC(C)UKE-	1	2	1									
NORIZUKE-	4		1									2
NOROSUKE-	24	1	5									3
NOROCUKE-	3		2									
NOROZUKE-	10		4									
NURISUKE-	4											
NURICUKE-	5		4		1							
HOROSUKE-	30	1									1	2
HOOSUKE-	2									1		2
HOROCUKU-	2											3
HURUCUKU-	52		1		1							8
GOROKUTO-	1	1	6	5								3
GOROTTO-											5	1
GOROCCYO(O)-	4					5		2	4			1
GOROCCI-	3											1
GOROSUKE-	20		1			3		3	6	3		6
TERESUKE-	4											
TERECUKE-			9		1							
DOROCUKE-	1			1	3							
BOROKITE-	11					37	4					4
BOROKICI-	1					3						
BOROKITA-						4						
ZURUTTO-	1					7						

次の OROSUKE 以下は，同類が多くないものである。しかし，色は同類と見られるものにあわせた。雑と見られるものは紺とした。

OROSUKE は HOROSUKE の系統かとも考えられるが，岩手(2地点)，青森という分布から，NOROSUKE の類と考えて色を与えた。

NORISURE は奈良に1地点だけであるが，これ以

下の他のこの類および，前に述べた他の NORI～類の分布を見ると孤立しているとはいえず，近畿北部東部のものと連なると解することができよう。

NORISUR(I)OKE(E)は，NORISURIOKEが京都2地点，三重1地点で，NORISUROKEEが三重1地点(6554.45)である。前者は「糊すりおけ」であろうが，後者は「糊(を)すろうか」と解されていようから，意味上はひとつにはまとまらないものである。NORICUKEOK(K)E(E)は滋賀2地点であるがOKKEEとなるのは，そのうち6523.86である。

NORISUTTEは奈良に1地点である。

GONSICIはG～の類だということで桃とした。千葉に1地点だけである。

TARASUKOからDARAHUKUまでは，T～，D～の類ということで空とした。TARASUKOは岩手に1地点，TOROKKOは福岡に1地点である。TOOSUKEは香川，三重に各1地点であるが，直接の関係はないであろう。DERESUKE(A)は関東から東北にかけて多い。でれでれしている役立たず，のような意味であろう。～KEAは岩手に1地点あり，[-kɛ]の音であることを示す。DERESUKO(岩手1地点)はこれの変種であろう。DENBE(E)は茨城に2地点であるが，ともに上にDERESUKEがついているから，いっそう人名めかしたものであろう。

DEROSUKEは秋田・岩手に1地点ずつで，そのうち岩手の方はDEROZUGIで，DERUSUKU(岩手1地点)もDERUZUGUである。DARASUKEは岩手に8地点，DARASUKOも岩手に14地点で，DARASUKU，DARAHUKUの各岩手1地点とともに一団をなすものである。これらは，凡例のはじめのほうに示したDAA以下DEEまで，さらにその1の図に示した～HOが下につくものが多い。

6482.23のBOROKICIGANAKUはBORO～の地帯に接している。鳴き声の回答として「ボロキチが鳴く」と言う，と答えたものとみえるが，この地点の鳥の名は212図で見る通りHURUCUKUであり，～GANAKUの部分まで鳴き声であるという返事である。7303.29のBOROKICIBOROKOIもこのBOROKICIGANAKUと同様，BORO～地帯の外れにあって，それ故の変種であると考えられる。

YOISSAは奈良に1地点だけである。KONOSUKEは鹿児島の西北端長島(ここでは鳥の名はKONOSUKEDOKKOである)にある。大隅半島に2地点あるKONOCUKU(8372.87はKONOCUKO)，薩摩半島に1地点ずつあるKONOHIKE，KONOCITともちろん関係があろう。

宮崎のKOROKKO，熊本のKOROKUSOは，宮崎・熊本その他にあるGOROKUTOその他と関係があると認めて，桃の色を与えておいた。KOOKKI(熊本1地点)もこれらと関係があるかも知れないが，ここでは桃の色を与えていない。語形の似ているKOOKICIは山口と島根に合計6地点ある。これも人名と解されているのであろう。BORO～の類，NORI～の類，HURUCUKUの類の接触する地帯に分布していることは注目していい。鳥の名のKOOKICIは地点としては鳴き声の隣りにある。

HATOは神奈川にある。同じ符号を使っているが，石垣島のSUKUと関係があることを示すものではない。このSUKUはCUKUと関係があるかも知れない。鳥の名ではCUKUGURUなどの地域であるが，～GURUの方がむしろ鳴き声のようである。AME(熊本1地点)とROOSOO(高知1地点)も，符号の形は同じでも同様関係ないし，HOTTOKASUKE(群馬1地点)とGENZIGENZI(静岡2地点)も同様関係はない。なお，6621.57では鳥の名もGENZIである。その1の地図を見ると少し東の方にHEEKEがある。

岩手に2地点あるBOOZUNOGOGEのうち，3725.12は実際はBOZUKOGOGEである。「坊主の後家」と思われる。BOOZU(T)は群馬・長野各1地点，岐阜2地点，京都1地点，兵庫1地点で，この本州中央部の内陸に連なっている。希薄ではあるが，ひとつの領域をなすといえるかも知れない。他には大分に1地点で，大分では～ZUの子音は[δ]と報告されている。なお，群馬はBOOZUTである。これらは後ろに他のものを伴うことが多く，その場合は～KOIなどがくることが多い。奈良のBONは次にKOKOEがきて，最後にKOIとなるものである。男の子か坊さんか，あるいは盆(に)かわからないが，分布から見るとBOOZUと関係がありそうである。愛媛のBABAも，これらと同じくやや軽侮の意味を持った呼びかけであろう。ここには下にNORICUKEHOOSEがつづき，NORI～類の最南端をなしている。なお，これと徳島SENCUKUMANCUKUとは関係はない。CUKUは他のCUKUと同じかも知れない。「千ツク，万ツク」であろうか。

HANAKUSO 以下 KANAKUSO までは～KUSO 関係のものである。これらは次の KUUKA(A) から KUUNAYO までと結びつくことが多い。この結びつき方は図から容易にわかることなので特に説明しない。

HANAKUSO は福岡に 5 地点あり，KARAKUSO は大分に 7 地点で，うち7355.81 は KARAKUSU である。NMANOKUSO は熊本に 1 地点，MARAKUSO は宮崎に 1 地点で，この 2 つは地域も他のものと少し離れ，また語形も離れている。TAREKUSO は長崎に 3 地点，TOSOKUSO は福岡に 2 地点ある。以上のものすべて 1 語形は 1 県内だけであるのが特徴的である。KARAKO(福岡 1 地点)，KAREKUSUU (大分 1 地点)はこの～KUSO の類かどうかはっきりしないが，地域がつながっており，また「食う」類に接続しているので，ここに置いた。後者は「枯草」の可能性がないわけではないが，このときは～KUSUU～とはならないであろう。また「ひからびたくそ」の意味である可能性もある。KANAKUSO も大分・熊本の境界地帯で 1 地域に固まって 3 地点ある。7334.78 は KARAKUSO であるが，カラクサは道草のこととの注があった。以上のものは，上記の NMANOKUSO と MARAKUSO を除くと，北九州に集中している。新しい地域的な発生であろう。

KUUKA(A)は KUUKA が福岡 5 地点，大分 2 地点，KUUKAA が大分 2 地点(7344.30，7344.45) である。KU(U)TAKA は～U～が福岡 1 地点，～UU～が大分 1 地点。KUWASOO が福岡 1 地点，K(U)WANK(Y)A(A)は，KUWANKA が大分 1 地点(7355.81)，KWANKA が大分・宮崎，長崎 (7248.64) 各 1 地点，KWANKYAA が長崎 2 地点，KUWANKYAA が熊本 1 地点である。意志形の KUWASOO 以外の以上の質問語形に対して命令形は KU(U)E である。これは愛媛 1 地点，大分 2 地点で，愛媛のものは CUBE につづく。CUBE は尻，女陰などの意味であるという。KU(U)E のうち～UU～は大分 1 地点 (7345.43) である。逆に KUUNAYO と心やさしい表現のものは大分に 1 地点ある。

KANECUKYADOOKYAA と KANECUKE とは長崎・佐賀に計 5 地点あり，～KUSO 類を分断している。さらに新しく興ったものであろうか。KANECUKE(鐘突けまたは鉄槳付け)と KAKECUKE は語形の類似から同じ形の符号を与えたが，後者は「駈け付け」かも知れない。鳥の名としての KANECUKEDOOKO-O がこの地方にあるが，ここでは鳥の名の地域とはあまり重ならず，隣接してその外側に鳴き声があらわれているのが注目される。NORICUKE などとの関連で生じたものかとも思えるが，地域的には関連がない。

SOROTTOKOOKA (島根) の SOROTTO～は先に述べた～KUTO，～TTO などと関係があろう。これは＜子どもに対して言うことば＞で「そっと来うか」の意味と現地では解している。

YOGAAKETARA は千葉，静岡に 2 地点ずつであるが，おそらく無関係ではあるまい。SUUCUKURE 以下の「巣」の類と結びつくことが多い。千葉に 1 地点の ASITAOKITTO は「明日起きると」である。これも「巣」に結びつく。大阪に 1 地点ある ASUTENKI はただそれだけの鳴き声で他との結びつきはない。NORI～などがあした天気であることを間接的に知らせているのに対して，直接的表現である。ASITATENKINI は愛媛に 1 地点，ASITANOHIYORIWAEENAA は兵庫に 1 地点，いずれも直接的表現で，これらが西日本にまとまっていることを指摘しておく。千葉に 1 地点ずつある ASITAKITE，ASITAOITE は「巣」と結びつくということで上記の千葉のものと同じである。後者は「明日起きて」のことで，この地域では～K～が脱落する。なお，これらは 282 図「あした」を参照のこと。

SUUCUKURE は千葉，静岡に 2 地点ずつ，SUUCUKURU は千葉に 2 地点，SUUKUUBEE は千葉に 1 地点と，この地方に限定されている。

TOOHUUICCYOOKUITAINA は静岡に 1 地点で，いうまでもなく「豆腐一丁食いたいな」である。

HIKOROKU は「彦六」などの人名のつもりであろう。愛媛と鹿児島に 1 地点ずつあるが，直接の関係はないのではないか。凡例の順に見てきたが，確実に人名をあらわすと思われるものはこれが最後なので，人名的な表現についてここで概括しておこう。まず，～SUKE の形の人名であるが，これは主流が三重を含んだ東海から関東・東北(青森を除く)であることは注目していい。秋田・山形からつづいて新潟もごく北部にはあるが，それより西の日本海側にはないというのも特徴的である。～SUKE は西日本にも点々とあることはあるが，それほど多くはない。人名の～SUKE という接尾辞は東日本に多いものであろうか。少なくとも擬人名となるときは

～SUKE をとることが東日本で多いということはできよう。～ROKU とか～KICI とかは，これに反して東日本にはそれほど見られないものである。これらは西日本的なものであるが，西日本でもこの鳴き声の場合そう多いわけではない。なお，その1の図にも，KOOSUKE (山口2地点)などの人名とも見られるものがある。

愛媛の HIKOROKU の地点は，CUBE，さらに KUE とつづく。CUBE については上に述べた。

KOMECUKE が三重に4地点ある。TOOSE(E) と下につづくが，7577.71 だけは～OKE とつづく。

KOREKUT(T)Eは，～T～が兵庫と滋賀1地点ずつ，～TT～ が滋賀1地点(6544.69)である。すべて下に DOOSYOO，DOOSURU とつづくから，互いに関係があると見た方がいいであろう。

KONCUKYA (熊本1地点) も下に DOOKAI となる。「この月は」の意らしい。CINBONOKASU は伊豆に1地点である。すでに述べた MARAKUSO と意味は似ているが，地点は互いに遠い。NOMANNAKURUKA は福岡に1地点で，これは孤立したものである。「飲まないかくるか」で，まえに述べた「食う」の類とも関係があろうか。

MO(O)TTE は兵庫に4地点で，うち～O～は 6429.65 1地点である。すべて NENKOROSE，NEKKOROSE がつづき，「戻って寝ろ」の意という。その「戻って」がそのままあらわれたのが兵庫に1地点ある MODOTTE である。これは次に NEKKOROSYOO がつづく。この NEKKORO～などは，すべて兵庫だけに見られ，中央部にひとつの強い地域を作っている。

OKANODAINOMAMEGAKUITAI(兵庫)，TASSYADEHATARAKE(千葉)はすべて孤例である。OKANODAI は地名という。

TA(A)RO(O)TA(A)TE(E)TA(A) は千葉に3地点ある。TA(A)RO(O) が「太郎」ならばこれも人名で，東日本で～SUKE でない例外となる。MOROKU は高知に1地点である。次に KOKOE から KOI とつづくので，人名かも知れない。BUUTAROOTATETA (千葉)の BUUTAROO も人名に準ずるものであろう。6639.79 では TATEETA は「叩いた」であると説明があった。

TOCCA'NANBO は秋田に1地点である。「父っつあんいくら(いくつ)」の意か。

静岡に1地点の DOODEMOII は被調査者によれば，昼間の鳴き声とあるから，不真面目なまたは投げやりな返答ではないと思われる。

次に注記のうち参考となると思われるものを地点番号順に，その1，その2，両図まとめて記しておこう。併用で一方が NORI～や～HOSE のときは，その方が翌日天気がいい，という注が多いが，これは省略する。

0840.33 〔HOOO を山で聞いた〕。

1942.03 <年寄りから HOOHOONORICUKEHOOSE と鳴くと言われた>。

2765.66 同席の老女によれば HOO。

3712.89 天気の良い前夜は MOHOMOHONORISITEHOOHE，翌日雨のときは MOHOMOHONURISITEDOOSA。この雨のときの後半は「糊つけてどうする」の意で，DOOSUHAA からきた，という。

3720.58 雄は NOROZUKEHOOSE，雌は GYAGYA。

3724.36 雄は DOROSUKEBOHOBOHO，雌は GYAAGYAA。

3727.81 雄は DARASUKEDEAHOOOHO，雌は KICYAAKYAA。

3735.50 雄は OHO'OHODERESUKEAOHO，雌は GEAAGEAA。

3743.49 雄は OHO'OHONURECUKEHOO，雌は GYAAGYAA。

3750.75 雨の前は KIIKII，よい天気の前は POOPOO。ただし，調査者はこの回答についてちょっと疑っている。

3754.37 豊年のとき OHO'OHOTARASUKOTEAGO，凶年のとき OHO'OHO。

3775.11 雄が DOROSUKEOHO，雌は GYAAGYAA。

3782.98 GYAGYA が雌としている。

3794.55 雌が PIIPII。

3795.33 雄が HOOHOO，雌が GYAA で，鳥の名は，雌は MENBUKURO という。

4644.10 鳩は TETEPPYOPPYO，ホトトギスは HONZANKAKETAKA と鳴くという。

4648.59 NOCUKEHOOHOO の方は夜の鳴き声で，GYAAGYAA は夕方だという。

4659.85 雌は HWOOHWOOなどで，雄は KYAAKYA。

4667.33 HOOHOO で，KIIKII はみみずくとい

う。

4684.77 DEDEPPOPO は昼間鳴く声で，NORICUKEHOSE が夜鳴く声である。

4704.04 雄は NARASUKEHOOHO，雌は GYAAGYAA。

4706.84 図に示した外に第3者の説明〔GOROSUKEBOOHOO〕を付す。

4733.91 雄は HOOHOO，NINIZUKEHOOHOO で，雌は KYAA。

4744.10 一応図では DEDEPPOPO としたが，第3者の説明〔これは山鳩で，ふくろうは HOOHOO である〕が注されている。

5604.28 KOZOKOEKOZOKOE と月夜に鳴くと人が死ぬと信じられている。

5625.32 なお＜ふくろうの幼いときは PIIPII と鳴く＞。

5625.91 なお第3者の付言〔NORICUKEHOOSEHOOHOO〕がある。

5641.94 本当に聞いたことはないが，NORICUKEHOHON と鳴くという話を聞いた，という。

5659.42，5659.46 みみずくの鳴き声のことと思われる，との注がある。

5667.81 滅多にいないというから，他の鳥と聞き誤っているかと思うという注がある。

5675.36 BOOIBOOI で，これが鳴くと降るという。

5676.84 猫の鳴き声と同じだ，と前置きして BOOBOO と答えた。

5686.31 HOOHOHOROCUKEDEESYOO がゴヘードリの鳴き声で，HOTTOHOTTO がフクローの鳴き声という。

5698.30 HYOOHYOO は冬鳴くのだという。

5740.87 同席の被調査者の奥さんによれば HOOHOO。

5741.25 他の人によると HOROSUKEGOOGOO。

5782.94 HOOHOO のほか，俗に ZURUTTOHOOHOO という。

6267.16 この鳴き声から「ふくろう」を SIMII，SIMOEBI という，と注があるが，これらの語形は212図「ふくろう」には出ていない。

6349.80 NORICUKEHOOSOO と鳴く鳥はいるが，それが「ふくろう」かどうかわからない，という答えであった。

6420.34 TERECIKEHOOSE は＜子＞である。

6439.17 HOHOO と鳴くと天気になり，MODOTTENEKKOROSYOO と鳴くと雨になる。学校の先生によると DODEEPOPPO だという。

6444.89 雄が BOROKITEHOOKOO，雌が HOOHOO。

6470.59 「ふくろう」はこう鳴いて稲をおろす時機を示すという。

6471.59 なお（BOROKITEHOOKOO と子どもに話す）とある。

6479.26 なお第3者の付言〔HOTHO〕〔HOOHOO〕がある。

6479.95 〔?HOOHOO〕これも第3者の付言。

6485.82 HURUCUKUHUU と鳴くのは小さい種類，TOOKITETOOKOI と鳴くのは大きい種類で，琴平の山から町なかにねずみをとりにやってくる。

6504.44 NORICUKE のあと HOOSE と鳴けば晴，HOSEN と鳴けば雨。

6506.86 被調査者の妻によれば NORICUKEHOOSEE。

6509.91 HOOHOO がふくろう，NORICUKEHOOSE がみみずくの鳴き声。

6511.85 他の被調査者によれば DEDEPPOODEDEPPO だが，これはこの被調査者は山鳩だという。

6541.27 なお〔HOOHOO〕と第3者が付言した。

6546.73 〔GOROSUKEDOOSITA〕と第3者が付言した。

6571.68 この近くの父鬼（地名）では HOHOONDENSUKEDENSUKE と鳴くという。

6572.04 なお＜KOROTTOKOKEE と鳴くと翌日は雨という＞。

6575.40 〔HOROSUKEHOOIHOOI〕と第3者が付言した。

6582.12 ＜HOOHOO と鳴くという人もいる＞。

6586.27 GOROSUKEKOI と鳴くと漁があるといわれている。

6594.67 HURUCUKUHUUHUUBOROKITETOORU で，子どもが汚い着物を着ていると母親がそれをたしなめて「フルツクニカマワレル」という。

7316.93 なお，同席の中年男子によると TOOCITOOKEE。

7326.41 KOROKORO はこの地方で犬を呼ぶとき

こういうが，この声をふくろうが鳴くとき出すと不吉なことがあるとされている。

7345.47　同席の明治43年生まれの女性によると，KOOZUUKOOZUUBOROKITEHOOKOOだという。

7351.09　なお＜雨の夜ほどKOOZUKOOZUと鳴くというようだが＞という注がある。

7352.61　＜女は，この鳥をHOOHOOと鳴くというようだが＞の注がある。

7359.78　同村の柏ではDESIKOSI。

7373.99　なお，夜明けのKOOZOO，HIKOKOOZOO(よい天気)，宵のKOOZOO，AMAKOOZOO，ということばがある。

7374.15　第3者が[KOROKUTOKOOZOO]と言った。なお，宵のKOOZOO，AMAKOOZOO，昼のKOOZOO，HIKOKOOZOO，ということばがある。

7391.01　ちょうどここへ入ってきた30歳ぐらいの女によるとKOOZUKANECUKIDOOKAIという。(解説者曰く，これがこの地方の人なら，KANE～類が長崎・佐賀からずっと南に飛んできていることになる。)

7416.34　GAAGAAで，これは犬のようだという。犬の鳴き声は古くはGWANGWAN。

7430.15　HUUHUとだけ鳴くのは犬を呼ぶので雨だという。

7513.15　不幸のあったときはこう鳴くという。昼のうちに巣を作ることを忘れたので夜にこういって鳴くという。(解説者曰く，とすると，「巣」と合わせて考えるのは千葉や静岡に限らないことになる。)

8373.43　[GOHOOT GOHOOT]と第3者が付言した。

300. ちゅんちゅん(雀の鳴き声)

この項目は，後期調査にあたって除いたものである。したがって調査してない地点が全国にわたってある。なお，回答のなかったところが計24地点であった。

この図では，凡例の書き方が他のものと違っていることに注意してほしい。CYUCYU*のように，*のついたものは，凡例に示した語形そのものだけが実際に現われたのではなく，それ以外の似た語形をここにまとめたものであることを示す。たとえば，上記のCYUCYU*は，CYU 2地点，CYUCYU 57地点，CYUCYUCYU 7地点，CYUCYUCYUCYU 4地点，CYUCYUCYUCYUCYU 1地点のすべてを代表しているものであり，CYUCYUU*は，CYUCYUU，CYUCYUCYUU，CYUCYUCYUCYUCYUU，CYUCYUUCYUCYUU 各1地点を代表しているものである。

色はCYUN～を空とし，CYU(U)T～を草とし，その他のCYU(U)～を緑とした。CI(I)～は赤，CU(U)～は桃，それ以外のC～を橙とし，Z～を茶とした。その他は紺である。

また，ここでは促音を，少数の例外を除いて，すべて～T～で示しておいた。なお，雀自身の鳥の名としての結果は214図ですでに発表してあるので，その方も参照してほしい。

CYUNCYUNをいちおう共通語形として図名としたが，これは東京にはない語形である。この図では＜併用処理＞をしていない。

以下，見出しの順に見ていくが，各地点の回答の中で雀の鳴き声の表現として定着したものと，定着したものがないなどの理由から臨時的に実際の鳴き声に似た音を答えた場合との区別は，かならずしも十分でなかった。擬声語研究の一般的な問題である。

CYUNCYUN*は近畿・中国に大きな勢力を持っており，あと目立つのは青森・秋田，愛知中東部から静岡西部にかけて，九州中西部などの地域である。この内容はCYUNが5517.90，CYUNCYUNCYUNCYUNが6560.22であり，あとはCYUNCYUNである。

東京はCYUUCYUU*であって，この語形は三重・岐阜・福井以東の中部，関東西半分に分布し，なお四国から九州に広がっている。ただし琉球にはあまり多くないし，北海道南部から東北北部に比較的少ない。

以上の点からするならば，CYUUCYUUの方が古くて，新しいCYUNCYUNに分断されたと見られなくはないが，擬声語だから簡単には断定しがたい。CYUNCYUNが奄美大島や多良間島や千葉や東北地方に見られることも，分布の上から，CYUNCYUNをかなり新しいものとする考えをさまたげる。また，大阪にCYUUCYUUがあって，そこから中国地方を海岸沿いに西の方に延びていっているように見えることは，擬声語といえども伝播することを思わせるが，もしこの見通しが正しければ，CYUUCYUUも比較的新しい，すく

なくとも，最近まで活力のあった表現ということになるであろう。

CYUNCYUN 対 CYUCYU の比較となると撥音が問題になる。日本語として撥音は新しい，したがってCYUNCYUN は新しい，という論法があるかも知れないが，擬声語が音韻史の通則に対して，例外となる場合のあることを，注意する必要がある。

CYUUCYUU* の内訳は，CYUU が計 24 地点，CYUUCYUUCYUU が6627.12, 6632.15, 7386.63, 7659.40, 8332.59, 0265.96, CYUUCYUUCYUU-CYUU が 5752.94, 7420.18, 7659.51 であり，他の圧倒的な部分が CYUUCYUU であった。

この CYUUCYUU は全国で一番多い語形であるが，この語形は鼠の鳴き声をもあらわす場合があろう。鼠の鳴き声についての調査は今回はしなかったが，4663.49 では，CYUUCYUU が雀の鳴き声で，鼠は CIICII だとの注があった。5641.13, 5698.91, 6512.67 では CYUUCYUU で，鼠も同様であるといっている。『色葉字類抄』には雀の鳴き声として「啾啾」があり「しうしう」とある。『名語記』九にも「しうしう」とあるという。これらからすれば，SYUUSYUU があってもよさそうに思えるが，今回の調査では現われなかった。サ行の字をあてた昔の実際の発音が［tsa］などであったとするならば，CYUUCYUU の方が古いということになるかも知れない。

CI～，CU～の形は，国の中央にはあまり多くない。いわゆる出雲方言や東北方言の地に比較的多く見られるのは興味がある。いわゆるズーズー弁と関係があろうか。ここでは，拗音節が問題となるが，日本語におけるこの種の音の成立の問題とも関係してこよう。なお，これらの語形は，琉球にも多少見られる。

CYUT～など，いちょうじるしの，促音の入ったものは，沖縄・九州など西日本に多い。その他では，淡路から香川にかけても多いし，三重から千葉までの太平洋岸にも多い。本州東半分では，山間にも点々と見られる。これらは淡路から香川にかけての領域を除くと，分布からは古い時代の鳴き声を示すのではないかと思われる。

～R～の入った語形は，東北地方特にその太平洋岸に多い。これは琉球にもあるところから，あるいは古いものであるかも知れない。3705.47 ではこれに＜古＞という注記があった。しかし，4714.68 では，CYUUCYUU に対して CIRENCIREN が＜新＞としているから一概にはいえないであろう。この～R～の入ったものは，CIRINCIRIN など鈴の音の擬声語と一致するものが多い。「鈴」というと，鳥の名の「すずめ」にスズという語形が含まれていることが思い出される。鳥の名がもとで鳴き声が CIRINCIRIN と聞こえてくるという考え方と，CIRINCIRIN と鳴くから「すずめ」だ，という考え方が成り立ちうる。

～R～の語形を集めると次のようである。すなわち，CYURUCYURU は 5538.50, 6711.95, 1242.22, CYURUNCYURUN は 3741.16, 4751.42, CYURIN-CYURIN は 3781.49, CYUCYURUCYUCYURU は 0238.55 である。CYUURUCYUURU は 7303.61, CIRICIRI は 4761.57, 5703.68, 1213.76 である。CIRINCIRIN はかなり多くて，東北の太平洋岸，特に岩手を中心に 10 地点見られる。CIRINCYUU は 6641.97（静岡），CIRINCYON は 4696.82（新潟）で，前者は CIRINCIRIN とやや離れている。CIRENCIREN は宮城に 4 地点，CIRONCIRON は 4742.95（宮城），CIRUNCIRUN は4760.02(山形）で，これは CIRINCIRIN と地域が近いから関係深そうである。CIICIROCIICIRO は 5677.28, CINCIRORINCINCIRORIN は 3775.11, CINCIROCINCIRO は 4792.43, CINCIRORIN は 7248.49 である。これらは，分布から見て互いに関係はないであろう。CURINCURIN は岩手を中心とした 6 地点で，CIRINCIRIN の分布と重なる。CURINKOCURINKO の3795.86, CURINCYOCURINCYO の 3764.86 も同様である。その他の～R～の類では，CYORONCYORON が 4731.42, CYORACYORACYOTCYO が 7382.97, CYERENCYEREN が 4752.27, ZYURICYONZYURICYON が 5790.39, ZURUNZURUN が 4743.95 にある。

以上は概略を述べたのであるが，そのほか特殊な語形を，その地点とともに以下あげてみることにしよう。

CYUKUCYUKU は 6536.68, 8325.03, CYUKUCYUKE は 6618.51 で互いに相当離れているから，関係はないと思われる。

CYUCU は 4665.87 である。また，CYUUCYU は 3786.01, 6557.14, 8311.63, 0275.97, CYUUCYUCYU は 5791.23 でそれぞれ別個に CYUUCYUU などから変化したものであろう。CYUUCYUT は 6516.15, CYUUCYUUT は 5688.01, CYUUCYUKU* は

6577.71, 6625.66, 7436.68 で，最後の地点は，実際は CYUUCYUKUCYUUCYUKU である。

CYUTWANCYUUCYUIN は 7320.59 で，音声表記では〔tʃɯ twan tʃɯː tʃɯɪn〕とある。CYUT-WAN……ではなく，CYU-TWAN……である。

CYUNCYUICYUNCYUI は 5628.23, CYUNCUN は 6424.89, CYUNKOCYUNKO は 6378.70 にある。

CYUTCYU* のうち，CYUTCYU は 22 地点で，CYUTCYUCYUTCYU は 11 地点である。CYUTCYUU* は CYUTCYUU が 12 地点，2 回くりかえす CYUTCYUUCYUTCYUU が 3752.53, 1261.80 にある。CYUTCYUT* は CYUT が 2803.22, CYUTCYUT が計 87 地点，CYUTCYUTCYUT が 5688.37, 8320.59, 0247.31 の計 3 地点であった。2076.96 の CYUTCYUCYU, 1167.01 の CYUTCYUCYUTCYUU, 6486.07 の CYUTCYUTCYUCYUU はそれぞれ 1 地点だけであり，CYUTCYUTCYU は，6559.67, 1241.49, 1261.70 で，それぞれ，地域的な変種であろう。

CYUTCYUI は 1241.05, CYUTCIT は 7401.11, CYUTCYUKU は 6656.31, CYUTTUCYUTTU は 6700.48 にある。

CYUUTCYUUT の計 5 地点のうち，7312.11, 7351.09 の 2 地点，および CYUUTCUUTCUUT の 7303.29 については，たとえば〔tʃɯː' tʃɯː'〕などという報告であり，この〔'〕をどう見るか多少問題があろうが，ここでは促音に準ずるものと認めて整理しておく。

CYUUTCYOCYUUTCYO は 5689.34 である。

CICI* のうち，CICICI は 6366.24, 7331.27, 8352.40 で，CICICICI は 3787.50, 5623.27, 5666.18, 6411.66, 7364.34 で，他に CICI である。

CICICICYEA は 3775.83 であるが，～CYEA の実際の音声は〔tʃɛ〕である。

CICII は 4773.15, CICINCICIN は 3791.02, 6622.69, CICITCICIT は 5741.25, 7361.17, CIKUCIKU は 4658.42, 7218.58, 1233.61, CIKUTCIKUT は 7353.51, CICIKUCICICIKUCI は 4659.50 である。

CIBICIBICIBICIBI の 5598.67, CIBINCIBIN の 6445.57, CIBUNCIBUN の 4665.87 は，ともに～B～を持っている点で珍しいが，地点が互いに離れているので関係はなさそうである。～B～を持つものには別に，ZIZYABAZYA が 8331.17 にあるが，これも関係なさそうである。

CIYACIYA の 8341.46 と，CIYAKACIYAKA の 8364.33 は，あるいは関係あるかも知れないが，CIYAKUYA の 6645.37 は，これらと離れているから無関係のものらしい。この～Y～は，CYA～などでなく，CIYA～となっている点で珍しいが，これは拗音の成立史とになにか関係があるものかも知れない。

CIICI* 計 6 地点中，CIICICIICI は 5639.47, 6640.76 で，他は CIICI である。CIICII* のうち CII は 0747.70, 4763.11, 5659.42 で，他の 83 地点は CIICII である。

CIICIIPATCYA は 7376.68 である。ついでながらチイチイパッパという語形は調査では出てこなかった。

CIICIKU*のうち CIICIKU は 5612.22, 6626.46 で，CIICIKUCIICIKU は 6520.94 である。CIICIKUCYAACIICIKUCYAA は 6634.32 である。これは CIICIKU* のうち 6626.46 とは関係があるかも知れない。～CYAA については近くに同じ類はない。CIICIKOCIICIKO は 5731.13 で，孤例としていいであろう。

CIIYOCIIYO は 4783.74 である。

CINCI* は CINCI が 6702.21, CINCICINCI が 6412.48 で，これはそれぞれ独立の発生であろう。この類で多いのは CINCIN で，計 40 地点に見られる。CITCI* のうち，CITCICITCI は 5462.29, 6517.65, 6711.12, 7395.25, 8354.29 で，他の 11 地点は CITCI であるが，そのうち，1156.89 は〔titʧi〕で，第 1 子音がやや違っているが，ここにまとめた。CITCIT* のうち，CITCITCIT は 3725.72 で，他の 17 地点は CITCIT である。CITCITCI の 5654.98, CITCII の 4704.96, 6437.94, 6438.33, 7440.69 は，これらの変種であろう。CITCYU は 2151.11, CITCYUU は 3763.17 である。CIITCIIT は 5678.33, 5686.67 で，ともに埼玉にある。相互に関係があろうが，CIIITCIIIT は 7393.62 (熊本)で，遠く離れている。

CUCU* のうち，CUCU は 3736.58, CUCUCU は 8323.59 で偶然似たものであろう。CUICUI は 4735.37 にある。CUKACUKACUKACUKA は 5677.28 で，これは特色のある語形である。CUUCU は 4763.62 にある。CUUCUU は岩手・宮城などに 16 地点ある。4701.73 の CUUCYUGUCUCUNCYON はこれの変種である。

CUNCUN* は CUNCUNCUNCUN が，3776.51

のほかは CUNCUN が 18 地点である。CU～, CI～の多い東北や山陰に見られる。CUNCUNCUCU 3787.45 は「ふくろうの鳴き声」の図の作り方に準ずれば CUNCUN+CUCU のように分解するところである。

CUTCU* のうち CUTCUCUTCU が 2150.07, CUTCU は 2150.17 である。[CUTCUT* のうち, CUTCUTCUT が 0276.50 で, CUTCUT が 4659.85, 8310.87 である。CUUNCUUN は 7324.24 にある。

CATCYACATCYA は 4704.45(岩手南部)で, CA～の現われるのはこの地点だけであった。CENCEN は 4753.76(宮城)で CE～もこの地点だけに見られる。これら 2 地点は何らかの関係があるかも知れない。後者はすでに述べた CYERENCYEREN とも関係はあろうが, CYENCYEN の 4713.60, 4731.42, 4734.56 とも関係があろう。

CYACYA は 5642.31, CYAACYAACYAA は 6610.00, CYATCYA は 1221.47, CYATCYAA は 1270.29 である。CYATCYAT の 5672.52, 5792.18, 7382.58 のうち, 最初の地点については, 表記は[tʃa'tʃa']であった。あるいは実際の音は CYACYA であるかも知れない。もしそうであれば, 上の CYACYA と CYAACYAACYAA との中間に位置することになる。[']を使う点では 7321.93 の CYATCYATCYACYAT もあいるは CYATCYATCYACYA などである可能性もなくはない。

CYOKOCYOKO は 5537.94, 5539.16 である。CYOKICYOKICYOKICYOKI は 4750.32 で, 語形は似ているが, 分布から見ると互いに関係はなさそうである。CYOOCYOO は 5612.39, CYONCYON は 31 地点に見られる。CINCIN や CUNCUN と重なるところが多い。撥音という点で共通する。CYOTCYO は 6479.95, CYOTCYOT* のうち CYOT は 5507.20, CYOTCYOTCYOT は 7382.97 となっている。CYOTCYOTCYO は 1251.27, 1260.78, 2076.97, CYOTCYOTCYOO は 1211.69 と, 琉球にだけある。6710.55 の CYOTCYUCYOTCYU と 6701.01 の CYETCYET とは, あるいは関係あろうか。

ZIZI* では ZIZI は 5792.62, ZIZIZIZI は 5742.32 で, これらと 5792.02 の ZITCIKO とは関係がありそうである。ZITCIZITCI は 2140.96 にある。ZIAKATAZIAKATA の 8362.34 も, すでに述べた CIYA～と同じく, 拗音節の成立史と関連があるかも知れない。ZIIZII* は ZIIZIIZII が 2150.06 で, あとの 2 地点は ZIIZII である。ZIROSABUZIROSABU の 7422.26 は, 他の～R～や～B～の類とは関係なさそうである。人名のようでおもしろい。ZYUZYUT は 8343.97, ZYUUZYUU は 6603.52, ZYAZYA は 5639.80, ZYONZYON は 3768.50, ZYEZYEZYE は 3747.45 であるが, 最後の 2 つは互いに関係があるかも知れない。

KIIKII は 5679.86, KICYOKICYOKICYO は 4685.28, KIKKARAKIKKADAKA は 3768.50 である。KUCYUKUCYU* は KUCYUKUCYU が 5595.89, KUCYUKUCYUKUCYU が 7386.55 でこの 2 つは互いに関係なさそうである。

KYAKYACYACYA は 5661.34 で, これは CYACYA と近くにあり関係があろう。KWARAKWARA は 1260.87 で, これは鳥の名としての雀(214 図)ではこの地方に KURAA があることと関係がありそうである。山雀・四十雀のカラとも関係があろう。

GICIGICI は 5648.13, GUCYUGUCYU は 4740.93 である。PIPI は 4689.14, PIIPI は 1848.24, PIIPII は 6607.03, PITPIT は 6609.02, PYOTPYOT は 4689.86, PITCYOCYONPITCYOCYON は 3699.55, PETPET は 4724.75 である。これらの P～の類では, 一部には互いに関係するものがあるようである。

IPPICUKEIZYOOCUKAMACURISOOROO「一筆啓上仕り候」は 7406.53 である。これは春の鳴き声で, ひばりによく似ている, という注記がある。他の鳥の鳴き声と似ているという注のあるものは 4734.20 の CUNCUN で,「ほおじろ」と同じという。

なお, 上に述べた以外の注記で主なものを見ると次のようである。

3752.53 で, CYUNCYUN がきげんのいいとき, CYUTCYUUCYUTCYUU がきげんの悪いとき。

4685.72 で, 親雀は CYUUCYUU と鳴き, 子雀は CYONCYON と鳴く。

4750.32 では CYOKICYOKICYOKICYOKI に対して, 飛び立つときに CIRINCIRIN であるという。

5677.28 では, ふだんは CIICIROCIICIRO, 危険を感ずるとき CUKACUKACUKACUKA だという。

7239.29 は CYUUCYUU であるが, 村方では ZYUUZYUU と鳴く, と被調査者がいっている。なお, この

ZYUUZYUU はふつうの鳴き声としては 6603.52 にしかない鳴き方である。

7381.47 は無回答であるが，今の子どもは CYUNCYUN というといっているが……とのことであり，7402.47 では CITCI であるが，今の子どもは CYUUCYUU というようである，という答えであった。

7412.26 では庭雀が CYUUCYUU で，山雀が CICI であると，住むところで区別している。

総　　目　　次

総目次について

▶この総目次は，「目次通覧」と，「五十音順改編目次」に加えて，「調査項目からひく地図番号索引」の三部からなる。

▶「目次通覧」は，第1集から第6集にいたる300面の地図を，排列順にならべたもので，図番・図名・(調査項目番号)の順で示した。

▶「五十音順改編目次」は，300面の地図を，図名から検索できるように排列しなおしたもので，図名・調査項目番号・図番・(所載集番号)の順で示した。

▶この「改編目次」では，実際の図名以外からも検索できるように，多少の工夫をした。たとえば，釣銭の図名はほんとうは「おつり」であるが，「お」の部以外からもひけるよう，「つりせん」の「つ」の部にも掲出した，などである。

▶また，この「改編目次」では，相互に関連する地図を参照できるように，いくらかの工夫をした。「う」の部の「うし」の下には，別に「おうし」「めうし」「こうし」「牛の鳴き声」の図のあることを示し，また，「お」の部の「おうし」の下には，別に「おうま」「おとこ」の図のあること，および，さらに「う」の部の「うし」の項をも参照すべきことを示した，などである。もっとも，関連すると考える地図をどの範囲に限定するかにはさまざまな考え方があり，ここでの試みが，すべての人を満足させるものとは思えない。

▶この『日本言語地図』では，図名として，「和名」とともに「英名」が与えてあるが，今回は，英名からの索引は作らなかった。

▶「調査項目からひく地図番号索引」は，調査時の質問番号(001～285)を基準にして，その調査結果によって作った言語地図の，(所載集番号)・図番を示したものである。

目次通覧…… 130
五十音順改編目次…… 135
調査項目からひく地図番号索引…… 146

目　次　通　覧

——図番・図名・調査項目番号——

第1集

1. カガミ(鏡)の -G- の音(280)
2. カゲ(蔭)の -G- の音(279)
3. カジ(火事)の KA-の音(277)
4. スイカ(西瓜)の-KA の音(281)
5. ガンジツ(元日)の GA-の音(275)
6. ショオガツ(正月)の -GA-の音(274)
7. セナカ(背中)の SE- の音(260)
8. アセ(汗)の -SE の音(259)
9. ゼイキン(税金)のZEI-の音(278)
10. カゼ(風)の -ZE の音(272)
11. ヒガシ(東)の HI- の音(273)
12. ヒゲ(鬚)の HI- の音(258)
13. ヒガシ(東)の -SI の音(273)
14. シチガツ(七月)の SI- の音(276)
15. カジ(火事)の -ZI の音(277)
16. シチガツ(七月)の -TI- の音(276)
17. おおきい(大きい)(158)
18. おおきい(大きい)—オオキイ類の詳細図(158)
19. おおきい(大きい)—デカイ・イカイ類の詳細図(158)
20. ふとい(太い)(160)
21. あらい(粗い)(162)
22. さいさい(小さい)(159)
23. ちいさい(小さい)—チイサイ類の詳細図(159)
24. ほそい(細い)(161)
25. こまかい(細かい)(163)
26. しかくい(四角い)(283)
27. きいろい(黄色い)(017)
28. あかい(赤い)(018)
29. アカイを"明かるい"の意味で使うか(019)
30. まぶしい(眩しい)—前部分(115)
31. まぶしい(眩しい)—後部分(115)
32. くすぐったい(擽ったい)—前部分(070)
33. くすぐったい(擽ったい)—後部分(070)
34. きなくさい(きな臭い)—前部分(040)
35. きなくさい(きな臭い)—後部分(040)
36. こげくさい(焦げ臭い)(041)
37. あまい(甘い)(052)
38. ＜塩味が＞うすい(051)
39. しおからい(鹹い)(049)
40. からい(辛い)(050)
41. すっぱい(酸っぱい)(053)
42. おそろしい(恐ろしい)(237)
43. コワイを"恐ろしい"の意味で使うか(206)
44. コワイを"疲れた"の意味で使うか(204)
45. いい＜天気だ＞(270)
46. ＜いい天気＞だ(270)
47. ＜虹が＞きれいだ(250)
48. きれいに＜掃除する＞(249)
49. いくつ(個数)(016)
50. いくら(値段)(015)

第2集

51. すわる(坐る)(072)
52. あぐら(胡座)をかく(071)
53. いる(居る)(268)
54. かたあしとび(片足跳び)をする—前部分(087)
55. かたあしとび(片足跳び)をする—後部分(087)

56. つくる(作る)(023)
57. たく(炊く)(148)
58. にる(煮る)(149)
59. センタクスルを“裁縫する”の意味で使うか(171)
60. ハソンスルを“修繕する”の意味で使うか(212)
61. ナオスを“片付ける・しまう”の意味で使うか(026)
62. すてる(捨てる)(235)
63. ステルを“紛失する”の意味で使うか(202)
64. おんぶする(幼児を負う)(261)
65. しょう(包を背負う)(262)
66. かつぐ(材木を担ぐ)(264)
67. かつぐ(天平棒を担ぐ)(265)
68. かつぐ(二人で担ぐ)(266)
69. かぞえる(数える)(093)
70. かす(貸す)(100)
71. かりる(借りる)(099)
72. カッテクルを“買ってくる”の意味で使うか,“借りてくる”の意味で使うか(101)
73. やる(遣る)(095)
74. くれる(呉れる)(096)
75. アズケルを“あてがう”の意味で使うか(097)
76. もらう(貰う)(094)
77. びっくりする(驚く)(236)
78. オドロクを“驚く”の意味で使うか(030)
79. オドロクを“目覚める”の意味で使うか(028)
80. あざ(痣)になる(059)
81. くすぐる(擽る)—前部分(234)
82. くすぐる(擽る)—後部分(234)
83. きゅう(灸)をすえる—前部分(022)
84. きゅう(灸)をすえる—後部分(022)
85. におい(匂)をかぐ(嗅ぐ)—前部分(042)
86. におい(匂)をかぐ(嗅ぐ)—後部分(042)
87. せき(咳)をする—前部分(055)
88. せき(咳)をする—後部分(055)
89. いびき(鼾)をかく—前部分(054)
90. いびき(鼾)をかく—後部分(054)
91. うそ(嘘言)をつく—前部分(021)
92. うそ(嘘言)をつく—後部分(021)
93. クサルを“濡れる”の意味で使うか(172)
94. オチルを“下車する”の意味で使うか(201)
95. <雷が>おちる(落ちる)(123)
96. こおる(水が凍る)(127)
97. こおる(手拭が凍る)(128)
98. 助詞「が」—「雷が落ちる」における(123)
99. 助詞「を」—「いびきをかく」(第89図)における(054)
100. 助詞「を」—「あぐらをかく」(第52図)における(071)

第3集

101. あたま(頭)(031)
102. つむじ(旋毛)(032)
103. はげあたま(禿げ頭)(033)
104. はげる(禿げる)(231)
105. ふけ(雲脂)(075)
106. かお(顔)(057)
107. ほほ(頬)(056)
108. あご(顎)—とがった部分(232)
109. あご(顎)—全体(232)
110. め(目)(034)
111. まゆげ(眉毛)(035)
112. ものもらい(麦粒腫)(036)
113. はな(鼻)(037)

114. みみ(耳)(043)
115. くち(口)(044)
116. くちびる(唇)(047)
117. した(舌)(048)
118. つば(唾)(046)
119. よだれ(涎)(045)
120. ベロの意味—第116・117・118・119図の総合図(047, 048, 046, 045)
121. おやゆび(親指)(063)
122. ひとさしゆび(人差し指)(064)
123. なかゆび(中指)(065)
124. くすりゆび(薬指)(066)
125. こゆび(小指)(067)
126. めび(指)—第121・122・123・124・125図の総合図(063, 064, 065, 066, 067)
127. しもやけ(凍傷)(068)
128. くるぶし(踝)(233)
129. かかと(踵)(069)
130. みずおち(鳩尾)(073)
131. あか(垢)(074)
132. あざ(痣)(058)
133. ほくろ(黒子)—小さいもの(060)
134. ほくろ(黒子)—大きいもの(061)
135. 「あざ」(132図)と「ほくろ」(133・134図)との総合図(058, 060, 061)
136. おとこ(男)(080, 081)
137. おんな(女)(081, 080)
138. おんな(女)—卑称(081, 080)
139. ひまご(曾孫)(240)
140. やしゃご(玄孫)(241)
141. おじいさん(祖父)(242)
142. ひいおじいさん(曾祖父)(243)
143. たこ(凧)(082)
144. たけうま(竹馬)(083)
145. おてだま(お手玉)(085)
146. おてだまあそび(お手玉遊び)(084)
147. おにごっこ(鬼ごっこ)(088)
148. かくれんぼ(隠れん坊)(089)
149. かたぐるま(肩車)—一般的な名称(086)
150. かたぐるま(肩車)—特殊な名称(086)

第4集

151. おかね(貨幣)(090)
152. おつり(釣銭)(091)
153. いと(糸)(166)
154. 「いと」(153・155・156・157図)と「いど」(197図)との総合図(166, 167, 168, 169, 147)
155. きぬいと(絹糸)(167)
156. もめんいと(木綿糸)(168)
157. はたいと(機糸)(169)
158. わた(綿)(164)
159. まわた(真綿)(165)
160. せんたく(洗濯)(251)
161. せともの(陶磁器)(157)
162. すりばち(擂鉢)(155)
163. すりこぎ(擂粉木)(156)
164. まないた(俎板)(154)
165. こめびつ(米櫃)—一般的な名称(177)
166. こめびつ(米櫃)—特殊な名称(177)
167. こめ(米)(173)
168. うるち(粳米)(174)
169. もちごめ(糯米)(175)
170. はんまい(飯米)(176)
171. もみがら(籾殻)(178)
172. ぬか(糠)(179)
173. 「もみがら」(171図)と「ぬか」(172図)との総合図(178, 179)
174. じゃがいも(馬鈴薯)—一般的な名称(186)
175. じゃがいも(馬鈴薯)—特殊な名称(186)
176. さつまいも(甘藷)(188)

177. さといも(里芋)—その1(187)
178. さといも(里芋)—その2(187)
179. イモの意味(189)
180. かぼちゃ(南瓜)(191)
181. なす(茄子)(282)
182. とうもろこし(玉蜀黍)(190)
183. とうがらし(蕃椒)(252)
184. 「とうもろこし」(182図)と「とうがらし」(183図)との総合図(190, 252)
185. た(水田)—一区画(180, 181)
186. た(水田)—集合(180, 181)
187. あぜ(畦畔)(182)
188. はたけ(畑)(183)
189. とりおどし(鳥威)(184)
190. かかし(案山子)(185)
191. いえ(家屋)(244)
192. ふすま(襖障子)(248)
193. にわ(庭園)(247)
194. ニワを“土間”の意味で使うか(142)
195. ニワを“前庭—仕事場”の意味で使うか(143)
196. カドを“前庭—仕事場”の意味で使うか(146)
197. いど(井戸)(147)
198. もり(森)(138)
199. はやし(林)(136)
200. ハヤシ・ヤマの意味(平地林か傾斜地林か)(137)

第5集

201. うま(馬)(213)
202. おうま(牡馬)(214)
203. めうま(牝馬)(215)
204. こうま(子馬)(216)
205. たてがみ(鬣)(217)
206. うし(牛)(218)
207. おうし(牡牛)(219)
208. めうし(牝牛)(220)
209. こうし(子牛)(221)
210. もうもう(牛の鳴き声)(222)
211. もぐら(土竜・鼴鼠)(223)
212. ふくろう(梟)(224)
213. せきれい(鶺鴒)(226)
214. すずめ(雀)(228)
215. とさか(鶏冠)(230)
216. さかな(魚)(254, 255, 256)
217. うろこ(鱗)(076)
218. かえる(蛙)(008)
219. ひきがえる(蟇・蟾蜍)—その1(009)
220. ひきがえる(蟇・蟾蜍)—その2(009)
221. おたまじゃくし(蝌蚪)(007)
222. おたまじゃくし(蝌蚪)—カエル類の詳細図(007)
223. おたまじゃくし(蝌蚪)—ヒキ・ワクドなどの類の詳細図(007)
224. とかげ(蜥蜴)(012)
225. かなへび(金蛇)(013)
226. へび(蛇)(010)
227. へび(蛇)—ヘビ類の音声詳細図(010)
228. まむし(蝮)(011)
229. かまきり(蟷螂)—一般的な名称(001)
230. かまきり(蟷螂)—特殊な名称(001)
231. とんぼ(蜻蛉)(284)
232. はえ(蠅)(257)
233. くも(蜘蛛)(002)
234. くものす(蜘蛛の巣)(004)
235. くものいと(蜘蛛の糸)(003)
236. かたつむり(蝸牛)—その1(005)
237. かたつむり(蝸牛)—その2(005)
238. かたつむり(蝸牛)—その3(005)
239. なめくじ(蛞蝓)(006)
240. すみれ(菫)(192)
241. たんぽぽ(蒲公英)(193)

242. どくだみ(蕺菜)(196)
243. すぎな(杉菜・問荊)(195)
244. つくし(土筆)(194)
245. きのこ(茸・蕈)(079)
246. コケの意味—第105・131・217・245図の総合図(075, 074, 076, 079)
247. まつかさ(松毬)(197)
248. たけ(竹)(198)
249. とげ(裂片)—指にささる木や竹の細片(199)
250. とげ(刺・棘)—いばら・さんしょうなどのとげ(200)

第6集

251. たいよう(太陽)(114)
252. つき(月)(116)
253. あめ(雨)(117)
254. つゆ(梅雨)(118)
255. ゆうだち(夕立雨)(119)
256. かみなり(雷)(120)
257. 敬称語尾(さん・さまなど)—第251(太陽), 252(月), 256(雷)図の総合図(114, 116, 120)
258. いなずま(稲妻・電光)(122)
259. にじ(虹)(124)
260. ゆき(雪)(125)
261. こおり(氷)(126)
262. つらら(氷柱)(129)
263. じしん(地震)(135)
264. つむじかぜ(旋風)(130)
265. けむり(煙)(271)
266. ゆげ(蒸気—湯の場合)(152)
267. ゆげ(蒸気—飯の場合)(153)
268. におい(芳香)(038)
269. におい(悪臭)(039)
270. はい(灰)(150, 151)
271. ほこり(埃)(133)
272. ごみ(目にはいるもの—塵)(131)
273. ごみ(掃除の対象—塵芥)(132)
274. ごみ(川のごみ—塵芥)(134)
275. さきおととい(一昨昨日)(105)
276. おととい(一昨日)(104)
277. おとといのばん(一昨晩)(107)
278. きのう(昨日)(103)
279. さくばん(昨晩)(106)
280. きょう(今日)(102)
281. こんばん(今晩)(112)
282. あした(明日)(108)
283. あしたのばん(明晩)(113)
284. あさって(明後日)(109)
285. しあさって(明明後日)(110)
286. やのあさって(明明明後日)(111)
287. なのか(七日)(238)
288. ここのか(九日)(239)
289. 「おおきい」(第17図)と「ふとい」(第20図)と「あらい」(第21図)との総合図(158, 160, 162)
290. 「ちいさい」(第22図)と「ほそい」(第24図)と「こまかい」(第25図)との総合図(159, 161, 163)
291. おいしい(美味しい)(253)
292. ケチダを“不思議だ, 不都合だ”などの意味で使うか(208, 209)
293. いくつ(何歳)(014)
294. かつぐ(片方の肩で包を担ぐ)(263)
295. かつぐ(担ぐ)—第66, 67, 68図の総合図(264, 265, 266)
296. かぞえる(お金を数える)(092)
297. カドの意味(144, 145)
298. ほうほう(梟の鳴き声)—その1(225)
299. ほうほう(梟の鳴き声)—その2(225)
300. ちゅんちゅん(雀の鳴き声)(229)

五十音順改編目次

——図名・調査項目番号・図番(集)——

あか(垢)(074) …… 131(Ⅲ)
→コケの意味
あかい(赤い)(018) …… 28(Ⅰ)
アカイを"明かるい"の意味で使うか
(019) …… 29(Ⅰ)
あかるい(明かるい)
アカイを"明かるい"の意味で使うか
(019) …… 29(Ⅰ)
あぐら(胡坐)をかく(071) …… 52(Ⅱ)
助詞「を」—「あぐらをかく」(第52図)
における(071) …… 100(Ⅱ)
あご(顎)—とがった部分(232) …… 108(Ⅲ)
あご(顎)—全体(232) …… 109(Ⅲ)
あざ(痣)(058) …… 132(Ⅲ)
あざ(痣)になる(059) …… 80(Ⅱ)
ほくろ(黒子)—小さいもの(060) …… 133(Ⅲ)
ほくろ(黒子)—大きいもの(061) …… 134(Ⅲ)
「あざ」(132図)と「ほくろ」(133・
134図)との総合図(058, 060, 061) …… 135(Ⅲ)
あさって(明後日)(109) …… 284(Ⅵ)
しあさって(明明後日)(110) …… 285(Ⅵ)
やのあさって(明明明後日)(111) …… 286(Ⅵ)
「あざ」(132図)と「ほくろ」(133・134
図)との総合図(058, 060, 061)…… 135(Ⅲ)
あざ(痣)になる(059) …… 80(Ⅱ)
あした(明日)(108) …… 282(Ⅵ)
あしたのばん(明晩)(113) …… 283(Ⅵ)
あしたのばん(明晩)(113) …… 283(Ⅵ)
あした(明日)(108) …… 282(Ⅵ)
→こんばん
あす(明日)→あした
アズケルを"あてがう"の意味で使うか
(097) …… 75(Ⅱ)
あすのばん(明晩)→あしたのばん
アセ(汗)の-SEの音(259) …… 8(Ⅰ)
→シェ・ジェの音
あぜ(畦畔)(182) …… 187(Ⅳ)
あたま(頭)(031) …… 101(Ⅲ)
あてがう
アズケルを"あてがう"の意味で使う
か(097) …… 75(Ⅱ)
あまい(甘い)(052) …… 37(Ⅰ)
<塩味が>うすい(051) …… 38(Ⅰ)
おいしい(美味しい)(253) …… 291(Ⅵ)
あめ(雨)(117) …… 253(Ⅵ)
つゆ(梅雨)(118) …… 254(Ⅵ)
ゆうだち(夕立雨)(119) …… 255(Ⅵ)
あらい(粗い)(162) …… 21(Ⅰ)
→「おおきい」と「ふとい」と「あらい」
との総合図
いい<天気だ>(270) …… 45(Ⅰ)
<いい天気>だ(270) …… 46(Ⅰ)
→指定の助動詞
いえ(家屋)(244) …… 191(Ⅳ)
いくつ(個数)(016) …… 49(Ⅰ)
いくつ(何歳)(014) …… 293(Ⅵ)
いくら(値段)(015) …… 50(Ⅰ)
いっさくじつ(一昨日)→おととい
いっさくばん(一昨晩)→おとといのば
ん
いと(糸)(166) …… 153(Ⅳ)
→「いと」と「いど」の総合図
いど(井戸)(147) …… 197(Ⅳ)
→「いと」と「いど」の総合図
「いと」(153・155・156・157図)と「い
ど」(197図)との総合図(166, 167,
168, 169, 147)…… 154(Ⅳ)
いと(糸)(166) …… 153(Ⅳ)

きぬいと(絹糸)(167) …… 155(Ⅳ)
もめんいと(木綿糸)(168) …… 156(Ⅳ)
はたいと(機糸)(169) …… 157(Ⅳ)
いど(井戸)(147) …… 197(Ⅳ)
いなずま(稲妻・電光)(122) …… 258(Ⅵ)
かみなり(雷)(120) …… 256(Ⅵ)
いびき(鼾)をかく—前部分(054) …… 89(Ⅱ)
助詞「を」—「いびきをかく」(第89図)
における(054) …… 99(Ⅱ)
いびき(鼾)をかく—後部分(054) …… 90(Ⅱ)
イモの意味(J89) …… 179(Ⅳ)
じゃがいも(馬鈴薯)—一般的な名称
(186) …… 174(Ⅳ)
じゃがいも(馬鈴薯)—特殊な名称
(186) …… 175(Ⅳ)
さつまいも(甘藷)(188) …… 176(Ⅳ)
さといも(里芋)—その1(187) …… 177(Ⅳ)
さといも(里芋)—その2(187) …… 178(Ⅳ)
いる(居る)(268) …… 53(Ⅱ)
うし(牛)(218) …… 206(Ⅴ)
おうし(牡牛)(219) …… 207(Ⅴ)
めうし(牝牛)(220) …… 208(Ⅴ)
こうし(子牛)(221) …… 209(Ⅴ)
もうもう(牛の鳴き声)(222) …… 210(Ⅴ)
<塩味が>うすい(051) …… 38(Ⅰ)
あまい(甘い)(052) …… 37(Ⅰ)
うそ(嘘言)をつく—前部分(021) …… 91(Ⅱ)
うそ(嘘言)をつく—後部分(021) …… 92(Ⅱ)
うち(家屋)
いえ(家屋)(244) …… 191(Ⅳ)
うま(馬)(213) …… 201(Ⅴ)
おうま(牡馬)(214) …… 202(Ⅴ)
めうま(牝馬)(215) …… 203(Ⅴ)
こうま(子馬)(216) …… 204(Ⅴ)
うまい(美味)
→あまい
うるち(粳米)(174) …… 168(Ⅳ)
→こめ
うろこ(鱗)(076) …… 217(Ⅴ)
→コケの意味
おいしい(美味しい)(253) …… 291(Ⅵ)
→あまい
おうし(牡牛)(219) …… 207(Ⅴ)
おうま(牡馬)(214) …… 202(Ⅴ)
おとこ(男)(080, 081) …… 136(Ⅲ)
→うし
おうま(牡馬)(214) …… 202(Ⅴ)
おうし(牡牛)(219) …… 207(Ⅴ)
おとこ(男)(080, 081) …… 136(Ⅲ)
→うま
おおきい(大きい)(158) …… 17(Ⅰ)
→「おおきい」と「ふとい」と「あらい」
との総合図……
おおきい(大きい)—オオキイ類の詳細
図(158) …… 18(Ⅰ)
おおきい(大きい)—デカイ・イカイ類
の詳細図(158) …… 19(Ⅰ)
「おおきい」(第17図)と「ふとい」(第
20図)と「あらい」(第21図)との総合
図(158, 160, 162) …… 289(Ⅵ)
おおきい(大きい)(158) …… 17(Ⅰ)
ふとい(太い)(160) …… 20(Ⅰ)
あらい(粗い)(162) …… 21(Ⅰ)
おかね(貨幣)(090) …… 151(Ⅳ)
おじいさん(祖父)(242) …… 141(Ⅲ)
ひいおじいさん(曾祖父)(243) …… 142(Ⅲ)
おそろしい(恐ろしい)(237) …… 42(Ⅰ)
コワイを“恐ろしい”の意味で使う
か(206) …… 43(Ⅰ)
コワイを“疲れた”の意味で使うか
(204) …… 44(Ⅰ)
おたまじゃくし(蝌蚪)(007) …… 221(Ⅴ)
おたまじゃくし(蝌蚪)—カエル類の詳
細図(007) …… 222(Ⅴ)
おたまじゃくし(蝌蚪)—ヒキ・ワクド
などの類の詳細図(007) …… 223(Ⅴ)
→かえる

＜雷が＞おちる(落ちる)(123) …… 95(II)
助詞「が」—「雷がおちる」における(123) …… 98(II)
オチルを“下車する”の意味で使うか(201) …… 94(II)
おつり(釣銭)(091) …… 152(IV)
おてだま(お手玉)(085) …… 145(III)
おてだまあそび(お手玉遊び)(084) …… 146(III)
おとこ(男)(080, 081)…… 136(III)
おととい(一昨日)(104) …… 276(VI)
さきおととい(一昨昨日)(105) …… 275(VI)
おとといのばん(一昨晩)(107) …… 277(VI)
おとといのばん(一昨晩)(107) …… 277(VI)
さくばん(昨晩)(106) …… 279(VI)
きのう(昨日)(103) …… 278(VI)
→おととい，こんばん
オドロクを“驚く”の意味で使うか(030) …… 78(II)
びっくりする(驚く)(236) …… 77(II)
オドロクを“目覚める”の意味で使うか(028) …… 79(II)
おにごっこ(鬼ごっこ)(088) …… 147(III)
おやゆび(親指)(063) …… 121(III)
→ゆびの総合図
おんな(女)(081, 080)…… 137(III)
おんな(女)—卑称(081, 080)…… 138(III)
おんぶする(幼児を負う)(261) …… 64(II)
→かつぐ
助詞「が」—「雷が落ちる」における(123) …… 98(II)
かえる(蛙)(008) …… 218(V)
ひきがえる(蟇・蟾蜍)—その1(009) …… 219(V)
ひきがえる(蟇・蟾蜍)—その2(009) …… 220(V)
おたまじゃくし(蝌蚪)(007) …… 221(V)
おたまじゃくし(蝌蚪)—カエル類の詳細図(007) …… 222(V)
おたまじゃくし(蝌蚪)—ヒキ・ワクドなどの類の詳細図(007) …… 223(V)
かお(顔)(057) …… 106(III)
かかし(案山子)(185) …… 190(IV)
とりおどし(鳥威)(184) …… 189(IV)
かかと(踵)(069) …… 129(III)
カガミ(鏡)の-G-の音(280) …… 1(I)
→ガ行の子音
かぐ(嗅ぐ)
におい(匂)をかぐ(嗅ぐ)—後部分(042) …… 86(II)
かくれんぼ(隠れん坊)(089) …… 148(III)
カゲ(蔭)の-G-の音(279) …… 2(I)
→ガ行の子音
カジ(火事)のKA-の音(277)…… 3(I)
→クヮ・グヮの音
カジ(火事)の-ZIの音(277) …… 15(I)
→シの音・ジの音・チの音
かす(貸す)(100) …… 70(II)
かりる(借りる)(099) …… 71(II)
カゼ(風)の-ZEの音(272)…… 10(I)
→シェ・ジェの音
かぞえる(数える)(093) …… 69(II)
かぞえる(お金を数える)(092) …… 296(VI)
かたあしとび(片足跳び)をする—前部分(087) ……54(II)
かたあしとび(片足跳び)をする—後部分(087) …… 55(II)
かたぐるま(肩車)—一般的な名称(086) …… 149(III)
かたぐるま(肩車)—特殊な名称(086) …… 150(III)
かたづける(片付ける)→なおす
かたつむり(蝸牛)—その1(005) …… 236(V)
かたつむり(蝸牛)—その2(005) …… 237(V)
かたつむり(蝸牛)—その3(005) …… 238(V)
なめくじ(蛞蝓)(006) …… 239(V)
かつぐ(材木を担ぐ)(264) …… 66(II)
かつぐ(天秤棒を担ぐ)(265) …… 67(II)
かつぐ(二人で担ぐ)(266) …… 68(II)
かつぐ(片方の肩で包を担ぐ)(263) …… 294(VI)

おんぶする(幼児を負う)(261) …… 64(II)
しょう(包を背負う)(262) …… 65(II)
かつぐ(担ぐ)—第66, 67, 68図の総合図(264, 265, 266) …… 295(VI)
カッテクルを"買ってくる"の意味で使うか, "借りてくる"の意味で使うか(101) …… 72(II)
かりる(借りる)(099) …… 71(II)
カドの意味(144, 145)…… 297(VI)
カドを"前庭—仕事場"の意味で使うか(146) …… 196(IV)
ニワを"前庭—仕事場"の意味で使うか(143) …… 195(IV)
かなへび(金蛇)(013) …… 225(V)
とかげ(蜥蜴)(012) …… 224(V)
かね(貨幣)
おかね(貨幣)(090) …… 151(IV)
かぼちゃ(南瓜)(191) …… 180(IV)
がま(蟇・蝦蟇)→かえる
かまきり(蟷螂)—一般的な名称(001) …… 229(V)
かまきり(蟷螂)—特殊な名称(001) …… 230(V)
かみなり(雷)(120) …… 256(VI)
いなずま(稲妻・電光)(122) …… 258(VI)
ゆうだち(夕立雨)(119) …… 255(VI)
敬称語尾(さん・さまなど) —第251(太陽), 252(月), 256(雷)図の総合図(144, 116, 120) …… 257(VI)
<雷が>おちる(落ちる)(123) …… 95(II)
助詞「が」—「雷が落ちる」における(123) …… 98(II)
オチルを"下車する"の意味で使うか(201) …… 94(II)
からい(辛い)(050) …… 40(I)
しおからい(鹹い)(049) …… 39(I)
からかみ
ふすま(襖障子)(248) …… 192(IV)
かりてくる(借りてくる)→かりる
かりる(借りる)(099) …… 71(II)
かす(貸す)(100) …… 70(II)
カッテクルを"買ってくる"の意味で使うか, "借りてくる"の意味で使うか(101) …… 72(II)
ガンジツ(元日)のGA-の音(275)…… 5(I)
→クヮ・グヮの音
かんしょ(甘藷)→イモの意味
かんじょうする(勘定する)
かぞえる(数える)(093) …… 69(II)
かぞえる(お金を数える)(092) …… 296(VI)
きいろい(黄色い)(017) …… 27(I)
きなくさい(きな臭い)—前部分(040) …… 34(I)
こげくさい(焦げ臭い)(041) …… 36(I)
きなくさい(きな臭い)—後部分(040) …… 35(I)
こげくさい(焦げ臭い)(041) …… 36(I)
きぬいと(絹糸)(167) …… 155(IV)
→「いと」と「いど」の総合図
きのう(昨日)(103) …… 278(VI)
さくばん(昨晩)(106) …… 279(VI)
おととのばん(一昨晩)(107) …… 277(VI)
きのこ(茸・蕈)(079) …… 245(V)
→コケの意味
きゅう(灸)をすえる—前部分(022) …… 83(II)
きゅう(灸)をすえる—後部分(022) …… 84(II)
きょう(今日)(102) …… 280(VI)
こんばん(今晩)(112) …… 281(VI)
<虹が>きれいだ(250) …… 47(I)
きれいに<掃除する>(249)…… 48(I)
→指定の助詞
きれいに<掃除する>(249)…… 48(I)
<虹が>きれいだ(250)…… 47(I)
クサルを"濡れる"の意味で使うか(172)…… 93(II)
くすぐったい(擽ったい)—前部分(070)…… 32(I)
くすぐったい(擽ったい)—後部分(070)…… 33(I)
くすぐる(擽る)—前部分(234)…… 81(II)
くすぐる(擽る)—後部分(234)…… 82(II)
くすりゆび(薬指)(066)…… 124(III)
→ゆびの総合図

くち(口)(044)…… 115(Ⅲ)
くちびる(唇)(047)…… 116(Ⅲ)
→ベロの意味
くも(蜘蛛)(002)…… 233(Ⅴ)
くものいと(蜘蛛の糸)(003)…… 235(Ⅴ)
くものす(蜘蛛の巣)(004)…… 234(Ⅴ)
くるぶし(踝)(233)…… 128(Ⅲ)
くれる(呉れる)(096)…… 74(Ⅱ)
→やる
クヮ・グヮの音
カジ(火事)の KA-の音(277) …… 3(Ⅰ)
スイカ(西瓜)の-KA の音(281) …… 4(Ⅰ)
ガンジツ(元日)の GA-の音(275) …… 5(Ⅰ)
ショオガツ(正月)の-GA-の音
(274)…… 6(Ⅰ)
敬称語尾(さん・さまなど)—第251(太陽), 252(月), 256(雷)図の総合図
(114, 116, 120)…… 257(Ⅵ)
げしゃする(下車する)→オチルを“下車する”の意味で使うか
ケチダを“不思議だ, 不都合だ”などの意味で使うか(208, 209)…… 292(Ⅵ)
けむり(煙)(271)…… 265(Ⅵ)
けんけん→かたあしとび(片足跳び)をする
げんそん(玄孫)→やしゃご
こうし(子牛)(221)…… 209(Ⅴ)
こうま(子馬)(216)…… 204(Ⅴ)
→うし
こうま(子馬)(216)…… 204(Ⅴ)
こうし(子牛)(221)…… 209(Ⅴ)
→うま
こおり(氷)(126) …… 261(Ⅵ)
つらら(氷柱)(129) …… 262(Ⅵ)
こおる(水が凍る)(127) …… 96(Ⅱ)
こおる(手拭が凍る)(128) …… 97(Ⅱ)
こげくさい(焦げ臭い)(041) …… 36(Ⅰ)
きなくさい(きな臭い)—前部分
(040) …… 34(Ⅰ)
きなくさい(きな臭い)—後部分
(040) …… 35(Ⅰ)
コケの意味—第105・131・217・245図の総合図(075, 074, 076, 079)…… 246(Ⅴ)
ふけ(雲脂)(075) …… 105(Ⅲ)
あか(垢)(074) …… 131(Ⅲ)
うろこ(鱗)(076) …… 217(Ⅴ)
きのこ(茸・蕈)(079) …… 245(Ⅴ)
ここのか(九日)(239) …… 288(Ⅵ)
なのか(七日)(238) …… 287(Ⅵ)
こしらえる(拵える)
つくる(作る)(023) …… 56(Ⅱ)
こまかい(細かい)(163) …… 25(Ⅰ)
→「ちいさい」と「ほそい」と「こまかい」との総合図
ごみ(目にはいるもの—塵)(131) …… 272(Ⅵ)
ほこり(埃)(133) …… 271(Ⅵ)
ごみ(掃除の対象—塵芥)(132) …… 273(Ⅵ)
ごみ(川のごみ—塵芥)(134) …… 274(Ⅵ)
こめ(米)(173) …… 167(Ⅳ)
うるち(粳米)(174) …… 168(Ⅳ)
もちごめ(糯米)(175) …… 169(Ⅳ)
はんまい(飯米)(176) …… 170(Ⅳ)
こめびつ(米櫃)—一般的な名称(177) …… 165(Ⅳ)
こめびつ(米櫃)—特殊な名称(177) …… 166(Ⅳ)
こゆび(小指)(067) …… 125(Ⅲ)
→ゆびの総合図
コワイを“恐ろしい”の意味で使うか
(206) …… 43(Ⅰ)
→おそろしい
コワイを“疲れた”の意味で使うか
(204) …… 44(Ⅰ)
→おそろしい
こんばん(今晩)(112) …… 281(Ⅵ)
おととのばん(一昨晩)(107) …… 277(Ⅵ)
さくばん(昨晩)(106) …… 279(Ⅵ)
あしたのばん(明晩)(113) …… 283(Ⅵ)
こんや(今夜)→こんばん

さいほうする(裁縫する)→センタクスルを"裁縫する"の意味で使うか
さかな(魚)(254, 255, 256) …… 216(V)
さきおととい(一昨昨日)(105) …… 275(VI)
→おととい
さくじつ(昨日)→きのう
さくばん(昨晩)(106) …… 279(VI)
おとといのばん(一昨晩)(107) …… 277(VI)
きのう(昨日)(103) …… 278(VI)
→こんばん
さつまいも(甘藷)(188) …… 176(IV)
→イモの意味
さといも(里芋)—その1(187) …… 177(IV)
さといも(里芋)—その2(187) …… 178(IV)
→イモの意味
さん・さま
敬称語尾(さん・さまなど)—第251(太陽), 252(月), 256(雷)図の総合図(114, 116, 120) …… 257(VI)
しあさって(明明後日)(110) …… 285(VI)
→あさって
シェ・ジェの音
セナカ(背中)のSE-の音(260) …… 7(I)
アセ(汗)の-SEの音(259) …… 8(I)
ゼイキン(税金)のZEI-の音(278)…… 9(I)
カゼ(風)の-ZEの音(272) …… 10(I)
<塩味が>うすい(051) …… 38(I)
あまい(甘い)(052) …… 37(I)
しおからい(鹹い)(049) …… 39(I)
からい(辛い)(050) …… 40(I)
しかくい(四角い)(283) …… 26(I)
じしん(地震)(135) …… 263(VI)
した(舌)(048) …… 117(III)
→ベロの意味
シチガツ(七月)の SI-の音(276) …… 14(I)
→シの音・ジの音・チの音
シチガツ(七月)の-TI-の音(276) …… 16(I)
→シの音・ジの音・チの音
指定の助動詞
<いい天気>だ(270) …… 46(I)
<虹が>きれいだ(250) …… 47(I)
シの音・ジの音・チの音
ヒガシ(東)の-SI の音(273) …… 13(I)
シチガツ(七月)の SI-の音(276) …… 14(I)
カジ(火事)の-ZI の音(277) …… 15(I)
シチガツ(七月)の-TI-の音(276) …… 16(I)
→ヒの音
しまう→なおす
しもやけ(凍傷)(068) …… 127(III)
じゃがいも(馬鈴薯)—一般的な名称(186) …… 174(IV)
じゃがいも(馬鈴薯)—特殊な名称(186) …… 175(IV)
→イモの意味
しゅうぜんする(修繕する)→なおす
しょう(包を背負う)(262) …… 65(II)
→かつぐ
じょうき(蒸気)→ゆげ
ショオガツ(正月) の-GA-の音(274) …… 6(I)
→クヮ・グヮ の音
助詞「が」—「雷が落ちる」における(123) …… 98(II)
助詞「を」—「いびきをかく」(第89図)における(054) …… 99(II)
助詞「を」—「あぐらをかく」(第52図)における(071) …… 100(III)
すい(酸い)
すっぱい(酸っぱい)(053) …… 41(I)
スイカ(西瓜)の-KA の音(281)…… 4(I)
→クヮ・グヮ の音
すいでん(水田)→た
すぎな(杉菜・問荊)(195) …… 243(V)
つくし(土筆)(194) …… 244(V)
すずめ(雀)(228) …… 214(V)
ちゅんちゅん(雀の鳴き声)(229) …… 300(VI)
すっぱい(酸っぱい)(053) …… 41(I)
すてる(捨てる)(235) …… 62(II)
ステルを"紛失する"の意味で使うか(202) …… 63(II)
すみれ(菫)(192) …… 240(V)

すりこぎ(擂粉木)(156) …… 163(Ⅳ)
すりばち(擂鉢)(155) …… 162(Ⅳ)
すわる(坐る)(072) …… 51(Ⅱ)
ゼイキン(税金)のZEI-の音(278)…… 9(Ⅰ)
→シェ・ジェの音
せいざする(正坐する)
すわる(坐る)(072) …… 51(Ⅱ)
せきれい(鶺鴒)(226) …… 213(Ⅴ)
せき(咳)をする—前部分(055) …… 87(Ⅱ)
せき(咳)をする—後部分(055) …… 88(Ⅱ)
せともの(陶磁器)(157) …… 161(Ⅳ)
セナカ(背中)のSE-の音(260)…… 7(Ⅰ)
→シェ・ジェの音
ぜに(銭)
おかね(貨幣)(090) …… 151(Ⅳ)
せんたく(洗濯)(251) …… 160(Ⅳ)
センタクスルを“裁縫する”の意味で
使うか(171) …… 59(Ⅱ)
せんたく(洗濯)(251) …… 160(Ⅳ)
せんぷう(旋風)→つむじかぜ
せんもう(旋毛)
つむじ(旋毛)(032) …… 102(Ⅲ)
そうそふ(曾祖父)→ひいおじいさん
そうそん(曾孫)→ひまご
そふ(祖父)→おじいさん
た(水田)—区画(180, 181)…… 185(Ⅳ)
た(水田)—集合(180, 181)…… 186(Ⅳ)
<いい天気>だ(270) …… 46(Ⅰ)
→指定の助動詞
たいよう(太陽)(114) …… 251(Ⅵ)
敬称語尾(さん・さまなど)—第251
(太陽), 252(月), 256(雷)図の総合
図(114, 116, 120) …… 257(Ⅵ)
たく(炊く)(148) …… 57(Ⅱ)
にる(煮る)(149) …… 58(Ⅱ)
たけ(竹)(198) …… 248(Ⅴ)
たけうま(竹馬)(083) …… 144(Ⅲ)
たこ(凧)(082) …… 143(Ⅲ)
たてがみ(鬣)(217) …… 205(Ⅴ)
断定の助動詞→指定の助動詞
たんぽぽ(蒲公英)(193) …… 241(Ⅴ)
ちいさい(小さい)(159) …… 22(Ⅰ)
→「ちいさい」と「ほそい」と「こまかい」との総合図
ちいさい(小さい)—チイサイ類の詳細図(159) …… 23(Ⅰ)
「ちいさい」(第22図)と「ほそい」(第24図)と「こまかい」(第25図)との総合図(159, 161, 163) …… 290(Ⅵ)
ちいさい(小さい)(159) …… 22(Ⅰ)
ほそい(細い)(161) …… 24(Ⅰ)
こまかい(細かい)(163) …… 25(Ⅰ)
チの音→シの音・ジの音・チの音
ちゅんちゅん(雀の鳴き声)(229) …… 300(Ⅵ)
すずめ(雀)(228) …… 214(Ⅴ)
ちり(塵)→ごみ
つかれた(疲れた)→おそろしい
つき(月)(116) …… 252(Ⅵ)
敬称語尾(さん・さまなど)—第251
(太陽), 252(月), 256(雷)図の総合
図(114, 116, 120) …… 257(Ⅵ)
つくし(土筆)(194) …… 244(Ⅴ)
すぎな(杉菜・問荊)(195) …… 243(Ⅴ)
つくる(作る)(023) …… 56(Ⅱ)
つば(唾)(046) …… 118(Ⅲ)
→ベロの意味
つむじ(旋毛)(032) …… 102(Ⅲ)
つむじかぜ(旋風)(130) …… 264(Ⅵ)
カゼ(風)の-ZEの音(272) …… 10(Ⅰ)
つゆ(梅雨)(118) …… 254(Ⅵ)
→あめ
つらら(氷柱)(129) …… 262(Ⅵ)
こおり(氷)(126) …… 261(Ⅵ)
つりせん(釣銭)
おつり(釣銭)(091) …… 152(Ⅳ)
ていえん(庭園)→にわ
でんでんむし→かたつむり

とうがらし(蕃椒)(252) …… 183(Ⅳ)
→「とうもろこし」と「とうがらし」との総合図
とうじき(陶磁器)
せともの(陶磁器)(157) …… 161(Ⅳ)
とうもろこし(玉蜀黍)(190) …… 182(Ⅳ)
→「とうもろこし」と「とうがらし」との総合図
「とうもろこし」(182図) と「とうがらし」(183図)との総合図(190, 252)…… 184(Ⅳ)
とうもろこし(玉蜀黍)(190) …… 182(Ⅳ)
とうがらし(蕃椒)(252) …… 183(Ⅳ)
とかげ(蜥蜴)(012) …… 224(Ⅴ)
かなへび(金蛇)(013) …… 225(Ⅴ)
どくだみ(蕺菜)(196) …… 242(Ⅴ)
とげ(裂片)—指にささる木や竹の細片(199) …… 249(Ⅴ)
とげ(刺・棘)—いばら・さんしょうなどのとげ(200) …… 250(Ⅴ)
とさか(鶏冠)(230) …… 215(Ⅴ)
どま(土間)
ニワを“土間,,の意味で使うか(142)…… 194(Ⅳ)
→にわ
とりおどし(鳥威)(184) …… 189(Ⅳ)
かかし(案山子)(185) …… 190(Ⅳ)
とんぼ(蜻蛉)(284) …… 231(Ⅴ)
なおす
ハソンスルを“修繕する”の意味で使うか(212) …… 60(Ⅱ)
ナオスを“片付ける・しまう”の意味で使うか(026) …… 61(Ⅱ)
なかゆび(中指)(065) …… 123(Ⅲ)
→ゆびの総合図
なす(茄子)(282) …… 181(Ⅳ)
なのか(七日)(238) …… 287(Ⅵ)
ここのか(九日)(239) …… 288(Ⅵ)
なめくじ(蛞蝓)(006) …… 239(Ⅴ)
→かたつむり
なんさい(何歳)→いくつ
におい(芳香)(038) …… 268(Ⅵ)
におい(悪臭)(039) …… 269(Ⅵ)
におい(匂)をかぐ(嗅ぐ)—前部分(042) …… 85(Ⅱ)
におい(匂)をかぐ(嗅ぐ)—後部分(042) …… 86(Ⅱ)
にじ(虹)(124) …… 259(Ⅵ)
<虹が>きれいだ(250) …… 47(Ⅰ)
きれいに<掃除する>(249) …… 48(Ⅰ)
→指定の助動詞
にる(煮る)(149) …… 58(Ⅱ)
たく(炊く)(148) …… 57(Ⅱ)
にわ(庭園)(247) …… 193(Ⅳ)
ニワを“前庭—仕事場”の意味で使うか(143) …… 195(Ⅳ)
ニワを“土間”の意味で使うか(142) …… 194(Ⅳ)
ニワを“土間”の意味で使うか(142) …… 194(Ⅳ)
→にわ
ニワを“前庭—仕事場”の意味で使うか(143) …… 195(Ⅳ)
カドを“前庭—仕事場”の意味で使うか(146) …… 196(Ⅳ)
→にわ
ぬか(糠)(179) …… 172(Ⅳ)
→「もみがら」と「ぬか」との総合図
ぬれる(濡れる)
クサルを“濡れる”の意味で使うか(172) …… 93(Ⅱ)
はい(灰)(150, 151)…… 270(Ⅵ)
はえ(蠅)(257) …… 232(Ⅴ)
ばいう(梅雨)→あめ
はえ(蠅)(257) …… 232(Ⅴ)
はい(灰)(150, 151)…… 270(Ⅵ)
はげあたま(禿げ頭)(033) …… 103(Ⅲ)
あたま(頭)(031) …… 101(Ⅲ)
はげる(禿げる)(231) …… 104(Ⅲ)
はげる(禿げる)(231) …… 104(Ⅲ)

はげあたま(禿げ頭)(033) …… 103(Ⅲ)
ハソンスルを"修繕する"の意味で使うか(212) …… 60(Ⅱ)
ナオスを"片付ける・しまう"の意味で使うか(026) …… 61(Ⅱ)
はたいと(機糸)(169) …… 157(Ⅳ)
→「いと」と「いど」との総合図
はたけ(畑)(183) …… 188(Ⅳ)
はな(鼻)(037) …… 113(Ⅲ)
はやし(林)(136) …… 199(Ⅳ)
ハヤシ・ヤマの意味(平地林か,傾斜地林か)(137)…… 200(Ⅳ)
はやし(林)(136) …… 199(Ⅳ)
もり(森)(138) …… 198(Ⅳ)
ばれいしょ(馬鈴薯)→イモの意味
ばん(晩)→こんばん
はんまい(飯米)(176) …… 170(Ⅳ)
→こめ
ひいおじいさん(曾祖父)(243) …… 142(Ⅲ)
おじいさん(祖父)(242) …… 141(Ⅲ)
ひまご(曾孫)(240) …… 139(Ⅲ)
ヒガシ(東)の -SI の音(273) …… 13(Ⅰ)
→シの音・ジの音・チの音
ヒガシ(東)の HI- の音(273)…… 11(Ⅰ)
→ヒの音
ひきがえる(蟇・蟾蜍)—その1(009) …… 219(Ⅴ)
ひきがえる(蟇・蟾蜍)—その2(009) …… 220(Ⅴ)
→かえる
ヒゲ(鬚)の HI- の音(258)…… 12(Ⅰ)
→ヒの音
びっくりする(驚く)(236) …… 77(Ⅱ)
オドロクを"驚く"の意味で使うか(030) …… 78(Ⅱ)
オドロクを"目覚める"の意味で使うか(028) …… 79(Ⅱ)
ひとさしゆび(人差し指)(064) …… 122(Ⅲ)
→ゆびの総合図
ヒの音
ヒガシ(東)の HI- の音(273)…… 11(Ⅰ)
ヒゲ(鬚)の HI-の音(258) …… 12(Ⅰ)
→シの音
ひまご(曾孫)(240) …… 139(Ⅲ)
ひいおじいさん(曾祖父)(243) …… 142(Ⅲ)
やしゃご(玄孫)(241) …… 140(Ⅲ)
ふくろう(梟)(224) …… 212(Ⅴ)
ほうほう(梟の鳴き声)—その1(225) …… 298(Ⅵ)
ほうほう(梟の鳴き声)—その2(225) …… 299(Ⅵ)
ふけ(雲脂)(075) …… 105(Ⅲ)
→コケの意味
ふしぎだ(不思議だ)
ケチダを"不思議だ,不都合だ"などの意味で使うか(208, 209)…… 292(Ⅵ)
ふすま(襖障子)(248) …… 192(Ⅳ)
ふつごうだ(不都合だ)
ケチダを"不思議だ,不都合だ"などの意味で使うか(208, 209)…… 292(Ⅵ)
ふとい(太い)(160) …… 20(Ⅰ)
→「おおきい」と「ふとい」と「あらい」との総合図
ふんしつする(紛失する)
ステルを"紛失する"の意味で使うか(202) …… 63(Ⅱ)
すてる(捨てる)(235) …… 62(Ⅱ)
へび(蛇)—ヘビ類の音声詳細図(010) …… 227(Ⅴ)
ベロの意味—第116・117・118・119図の総合図(047, 048, 046, 045)…… 120(Ⅲ)
くちびる(唇)(047) …… 116(Ⅲ)
した(舌)(048) …… 117(Ⅲ)
つば(唾)(046) …… 118(Ⅲ)
よだれ(涎)(045) …… 119(Ⅲ)
ほうほう(梟の鳴き声)—その1(225) …… 298(Ⅵ)
ほうほう(梟の鳴き声)—その2(225) …… 299(Ⅵ)
ふくろう(梟)(224) …… 212(Ⅴ)
ほくろ(黒子)—小さいもの(060) …… 133(Ⅲ)
ほくろ(黒子)—大きいもの(061) …… 134(Ⅲ)

ほこり(埃)(133) …… 271(Ⅵ)
→ごみ
ほそい(細い)(161) …… 24(Ⅰ)
→「ちいさい」と「ほそい」と「こまかい」との総合図
ほほ(頬)(056) …… 107(Ⅲ)
まえにわ(前庭)→ニワを“前庭—仕事場”の意味で使うか
まつかさ(松毬)(197) …… 247(Ⅴ)
まないた(俎板)(154) …… 164(Ⅳ)
まぶしい(眩しい)—前部分(115) …… 30(Ⅰ)
まぶしい(眩しい)—後部分(115) …… 31(Ⅰ)
まむし(蝮)(011) …… 228(Ⅴ)
へび(蛇)—ヘビ類の音声詳細図(010) …… 227(Ⅴ)
まゆげ(眉毛)(035) …… 111(Ⅲ)
まわた(真綿)(165) …… 159(Ⅳ)
わた(綿)(164) …… 158(Ⅳ)
みずおち(鳩尾)(073) …… 130(Ⅲ)
みみ(耳)(043) …… 114(Ⅲ)
みょうごにち(明後日)→あさって
みょうにち(明日)→あした
みょうばん(明晩)→あしたのばん
め(目)(034) …… 110(Ⅲ)
めうし(牝牛)(220) …… 208(Ⅴ)
めうま(牝馬)(215) …… 203(Ⅴ)
おんな(女)(081, 080)…… 137(Ⅲ)
おんな(女)—卑称(081, 080)…… 138(Ⅲ)
→うし
めうま(牝馬)(215) …… 203(Ⅴ)
めうし(牝牛)(220) …… 208(Ⅴ)
おんな(女)(081, 080)…… 137(Ⅲ)
おんな(女)—卑称(081, 080)…… 138(Ⅲ)
→うま
めざめる(目覚める)→びっくりする
もうもう(牛の鳴き声)(222) …… 210(Ⅴ)
→うし
もぐら(土竜・鼹鼠)(223) …… 211(Ⅴ)
もちごめ(糯米)(175) …… 169(Ⅳ)
→こめ
ものもらい(麦粒腫)(036) …… 112(Ⅲ)
もみがら(籾殻)(178) …… 171(Ⅳ)
「もみがら」(171図)と「ぬか」(172図)との総合図(178, 179)…… 173(Ⅳ)
もみがら(籾殻)(178) …… 171(Ⅳ)
ぬか(糠)(179) …… 172(Ⅳ)
もめんいと(木綿糸)(168) …… 156(Ⅳ)
→「いと」と「いど」との総合図
もらう(貰う)(094) …… 76(Ⅱ)
→やる
もり(森)(138) …… 198(Ⅳ)
→ハヤシ・ヤマの意味
やきもの(焼物)
せともの(陶磁器)(157) …… 161(Ⅳ)
やしゃご(玄孫)(241) …… 140(Ⅲ)
ひまご(曾孫)(240) …… 139(Ⅲ)
やのあさって(明明明後日)(111) …… 286(Ⅵ)
→あさって
やる(遣る)(095) …… 73(Ⅱ)
くれる(呉れる)(096) …… 74(Ⅱ)
もらう(貰う)(094) …… 76(Ⅱ)
ゆうだち(夕立雨)(119) …… 255(Ⅵ)
かみなり(雷)(120) …… 256(Ⅵ)
→あめ
ゆうべ(昨晩)→さくばん
ゆき(雪)(125) …… 260(Ⅵ)
ゆげ(蒸気—湯の場合)(152) …… 266(Ⅵ)
ゆげ(蒸気—飯の場合)(153) …… 267(Ⅵ)
ゆび(指)—第121・122・123・124・125図の総合図(063, 064, 065, 066, 067) …… 126(Ⅲ)
おやゆび(親指)(063) …… 121(Ⅲ)
ひとさしゆび(人差し指)(064) …… 122(Ⅲ)
なかゆび(中指)(065) …… 123(Ⅲ)
くすりゆび(薬指)(066) …… 124(Ⅲ)
こゆび(小指)(067) …… 125(Ⅲ)

よだれ(涎)(045) …… 119(Ⅲ)
→ベロの意味
わた(綿)(164) …… 158(Ⅳ)
まわた(真綿)(165) …… 159(Ⅳ)
助詞「を」
助詞「を」—「いびきをかく」(第89図)
における(054) …… 99(Ⅱ)
助詞「を」—「あぐらをかく」(第52図)
における(071) …… 100(Ⅱ)

調査項目からひく地図番号索引

——調査項目番号・(集)・図番——

001…(V)229, (V)230
002…… (V)233
003…… (V)235
004…… (V)234
005…(V)236, (V)237
(V)238
006…… (V)239
007…(V)221, (V)222
(V)223
008…… (V)218
009…(V)219, (V)220
010…(V)226, (V)227
011…… (V)228
012…… (V)224
013…… (V)225
014…… (VI)293
015……(I)50
016……(I)49
017……(I)27
018……(I)28
019……(I)29
020……／
021……(II)91, (II)92
022……(II)83, (II)84
023……(II)56
024……／
025……／
026……(II)61
027……／
028……(II)79
029……／
030……(II)78
031…… (III)101
032…… (III)102
033…… (III)103
034…… (III)110
035…… (III)111
036…… (III)112
037…… (III)113
038…… (VI)268
039…… (VI)269
040……(I)34, (I)35
041……(I)36
042……(II)85, (II)86
043…… (III)114
044…… (III)115
045…(III)119, (III)120
046…(III)118, (III)120
047…(III)116, (III)120
048…(III)117, (III)120
049……(I)39
050……(I)40
051……(I)38
052……(I)37
053……(I)41
054……(II)89, (II)90
(II)99
055……(II)87, (II)88
056…… (III)107
057…… (III)106
058…(III)132, (III)135
059……(II)80
060…(III)133, (III)135
061…(III)134, (III)135
062……／
063…(III)121, (III)126
064…(III)122, (III)126
065…(III)123, (III)126
066…(III)124, (III)126
067…(III)125, (III)126
068…… (III)127
069…… (III)129
070……(I)32, (I)33
071… (II)52, (II)100
072……(II)51
073…… (III)130
074…(III)131, (V)246
075…(III)105, (V)246
076…(V)217, (V)246
077……／
078……／
079…(V)245, (V)246
080…… (III)136
081…(III)137, (III)138
082…… (III)143
083…… (III)144
084…… (III)146
085…… (III)145
086…(III)149, (III)150
087……(II)54, (II)55
088…… (III)147
089…… (III)148
090…… (IV)151
091…… (IV)152
092…… (VI)296
093……(II)69
094……(II)76
095……(II)73
096……(II)74
097……(II)75
098……／
099……(II)71
100……(II)70
101……(II)72
102…… (VI)280
103…… (VI)278
104…… (VI)276
105…… (VI)275
106…… (VI)279
107…… (VI)277
108…… (VI)282
109…… (VI)284
110…… (VI)285
111…… (VI)286
112…… (VI)281
113…… (VI)283
114…(VI)251, (VI)257
115……(I)30, (I)31
116…(VI)252, (VI)257
117…… (VI)253
118…… (VI)254
119…… (VI)255
120…(VI)256, (VI)257
121……／
122…… (VI)258
123……(II)95, (II)98
124…… (VI)259
125…… (VI)260
126…… (VI)261
127……(II)96
128……(II)97
129…… (VI)262
130…… (VI)264
131…… (VI)272
132…… (VI)273
133…… (VI)271
134…… (VI)274
135…… (VI)263
136…… (IV)199
137…… (IV)200
138…… (IV)198
139……／
140……／
141……／
142…… (IV)194
143…… (IV)195
144…… (VI)297
145…… (VI)297
146…… (IV)196
147…(IV)154, (IV)197
148……(II)57
149……(II)58
150…… (VI)270
151…… (VI)270
152…… (VI)266
153…… (VI)267

154…… (Ⅳ)164
155…… (Ⅳ)162
156…… (Ⅳ)163
157…… (Ⅳ)161
158……(Ⅰ)17, (Ⅰ)18
(Ⅰ)19, (Ⅵ)289
159……(Ⅰ)22, (Ⅰ)23
(Ⅵ)290
160… (Ⅰ)20, (Ⅵ)289
161… (Ⅰ)24, (Ⅵ)290
162… (Ⅰ)21, (Ⅵ)289
163… (Ⅰ)25, (Ⅵ)290
164…… (Ⅳ)158
165…… (Ⅳ)159
166…(Ⅳ)153, (Ⅳ)154
167…(Ⅳ)154, (Ⅳ)155
168…(Ⅳ)154, (Ⅳ)156
169…(Ⅳ)154, (Ⅳ)157
170……／
171……(Ⅱ)59
172……(Ⅱ)93
173…… (Ⅳ)167
174…… (Ⅳ)168
175…… (Ⅳ)169
176…… (Ⅳ)170
177…(Ⅳ)165, (Ⅳ)166
178…(Ⅳ)171, (Ⅳ)173
179…(Ⅳ)172, (Ⅳ)173
180…(Ⅳ)185, (Ⅳ)186
181…(Ⅳ)185, (Ⅳ)186
182…… (Ⅳ)187
183…… (Ⅳ)188
184…… (Ⅳ)189
185…… (Ⅳ)190
186…(Ⅳ)174, (Ⅳ)175
187…(Ⅳ)177, (Ⅳ)178
188…… (Ⅳ)176
189…… (Ⅳ)179
190…(Ⅳ)182, (Ⅳ)184
191…… (Ⅳ)180
192…… (Ⅴ)240
193…… (Ⅴ)241
194…… (Ⅴ)244
195…… (Ⅴ)243
196…… (Ⅴ)242
197…… (Ⅴ)247
198…… (Ⅴ)248
199…… (Ⅴ)249
200…… (Ⅴ)250
201……(Ⅱ)94
202……(Ⅱ)63
203……／
204……(Ⅰ)44
205……／
206……(Ⅰ)43
207……／
208…… (Ⅵ)292
209…… (Ⅵ)292
210……／
211……／
212……(Ⅱ)60
213…… (Ⅴ)201
214…… (Ⅴ)202
215…… (Ⅴ)203
216…… (Ⅴ)204
217…… (Ⅴ)205
218…… (Ⅴ)206
219…… (Ⅴ)207
220…… (Ⅴ)208
221…… (Ⅴ)209
222…… (Ⅴ)210
223…… (Ⅴ)211
224…… (Ⅴ)212
225…(Ⅵ)298, (Ⅵ)299
226…… (Ⅴ)213
227……／
228…… (Ⅴ)214
229…… (Ⅵ)300
230…… (Ⅴ)215
231…… (Ⅲ)104
232…(Ⅲ)108, (Ⅲ)109
233…… (Ⅲ)128
234……(Ⅱ)81, (Ⅱ)82
235……(Ⅱ)62
236……(Ⅱ)77
237……(Ⅰ)42
238…… (Ⅵ)287
239…… (Ⅵ)288
240…… (Ⅲ)139
241…… (Ⅲ)140
242…… (Ⅲ)141
243…… (Ⅲ)142
244…… (Ⅳ)191
245……／
246……／
247…… (Ⅳ)193
248…… (Ⅳ)192
249……(Ⅰ)48
250……(Ⅰ)47
251…… (Ⅳ)160
252…(Ⅳ)183, (Ⅳ)184
253…… (Ⅵ)291
254…… (Ⅴ)216
255…… (Ⅴ)216
256…… (Ⅴ)216
257…… (Ⅴ)232
258……(Ⅰ)12
259…… (Ⅰ)8
260…… (Ⅰ)7
261……(Ⅱ)64
262……(Ⅱ)65
263…… (Ⅵ)294
264… (Ⅱ)66, (Ⅵ)295
265… (Ⅱ)67, (Ⅵ)295
266… (Ⅱ)68, (Ⅵ)295
267……／
268……(Ⅱ)53
269……／
270……(Ⅰ)45, (Ⅰ)46
271…… (Ⅵ)265
272……(Ⅰ)10
273……(Ⅰ)11, (Ⅰ)13
274…… (Ⅰ)6
275…… (Ⅰ)5
276……(Ⅰ)14, (Ⅰ)16
277…… (Ⅰ)3, (Ⅰ)15
278…… (Ⅰ)9
279…… (Ⅰ)2
280…… (Ⅰ)1
281…… (Ⅰ)4
282…… (Ⅳ)181
283……(Ⅰ)26
284…… (Ⅴ)231
285……／

以上，地図集（番号）・図番の欄に／のあるものは，調査は実施したが，その結果を地図にしなかったものである。25項目あるから，全285項目のうち，地図になったものは260項目であるとも言える。

25項目に関する回答は，直接地図にしなかったが，しかし，そのほとんどは，300面の地図作成にあたって参考にされている。すでに，各図の説明で述べた通りである。

日本言語地図⑥別冊

昭和49年3月©

国立国語研究所

東京都北区西が丘3—9—14

電話：(03) 900—3111(代)

Introduction
to
The Linguistic Atlas of Japan

— Interpretation of the Maps —

Vol. 6

with Comprehensive Table of Contents
of Vols. 1 ~ 6

The National Language Research Institute
TOKYO
1 9 7 4